

上牧久渡古墳群発掘調査報告書

平成27年3月

上牧町教育委員会



上牧久渡3号墳 画文帶環狀乳神獸鏡（120%拡大）



上牧久渡2号墳空中写真（南東より）



上牧久渡2号墳石室全景（南より）

序 文

奈良盆地の西部、馬見丘陵のほぼ中央部に位置する上牧町は、いわゆる片岡の地として古代大和における重要な文化圏を形づくってきました。

すでに町名が示すように、ゆるやかな丘陵中に立地する「上牧」は放牧に好適な地でありました。ここは当時の宮廷人達の逍遥の地とも言われ、しばし、その歩みを止めたと言われるほどの眺めのすばらしいところを含んでいます。

この地に所在する上牧久渡古墳群の付近は古代の葛下・広瀬郡にあたり、この地域には飛鳥・奈良時代の皇室の所領が広がり陵墓も存在したことは古代の木簡や文献で知られているところであり、また、上牧町観音山から「上牧銅鐸」の出土した地でもあります。

上牧町教育委員会では平成23年度に上牧久渡古墳群の試掘・確認調査を行い、平成24年度からは国庫補助事業として、3カ年の計画で確認調査を行ってきました。

それらの調査を通して、画文帯神獣鏡を出土した古墳時代初頭の3号墳から飛鳥時代の2号墳までかなり長期にわたる特色ある古墳が築かれた例のない古墳群であることが明らかとなりました。ここにその調査報告書を刊行することとなりました。

今後は、国指定史跡を目指し、将来は古墳公園として整備し、地域のコミュニティ活動の場として活用し、学校教育での教材としても活用すること等を通して、郷土意識の向上、地域コミュニティの高まりなどを期していきたいと思っています。

この発掘調査におきましては、地権者の多大なる御協力を頂きました。そして発掘調査の遂行、並びに報告書作成に際しては文化庁・奈良県教育委員会 奈良県立橿原考古学研究所・久渡古墳群調査指導委員会の御指導を賜りました。本書の刊行にあたり関係者の皆様方に深く感謝申し上げます。

平成27年3月31日

上牧町教育委員会

教育長 浅井 正 溢

例 言

1. 本書は奈良県北^{きたかつら}葛^ぎ城^{ぐん}郡^{かん}上^{まき}牧^{ちょう}町^く大字^{かん}上^{まき}牧^く字^く久^ど渡^ど83番1に所在する上^{かん}牧^{まき}久^く渡^ど古墳群の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、平成23年度に宅地開発にともなう第1次の範囲確認調査の結果を受け、平成24年度より平成26年度に国庫補助による町内遺跡発掘調査等事業として第2次～第5次調査まで行った。
3. 現地調査は上牧町教育委員会が行い、第2・3次調査の遂行に当たっては、奈良県立橿原考古学研究所の協力を得た。
4. 現地調査の期間・調査面積は下記のとおりである。

平成23年度	事前踏査	平成23年5月30・31日、7月8日
	第1次調査	平成23年11月7日～平成24年3月21日・(346㎡)
平成24年度	第2次調査	平成24年5月28日～8月11日・(399㎡)
	第3次調査	平成24年12月17日～平成25年3月18日・(126㎡)
平成25年度	第4次調査	平成25年8月21日～平成26年3月27日・(90㎡)
平成26年度	第5次調査	平成26年5月19日～10月14日・(103㎡)
5. 調査体制は下記のとおりである。(職名は調査時)

上牧町教育委員会	教育長	浅井 正溢
	教育部長	竹島 正智
社会教育課	課長	吉川 淳
	課長補佐	磯部 敬一(平成23・24年度)
	係長	柳原 由英(平成23・24年度)
		真柴 淳彦(平成25・26年度)
	主査	岡本 悠子
	技師	石橋 忠治(調査担当)
	発掘調査指導員	関川 尚功(調査担当・平成25・26年度)
調査協力機関	奈良県教育委員会	文化財保存課
	課長	小槻 勝俊
	主幹	酒元 健司
	主幹・課長補佐	豊岡 卓之(平成23～25年度)
	課長補佐	入倉 徳裕(平成26年度)
	調整員	岡林 孝作
	主査	鈴木 裕明(平成23・24年度)
	主査	小池加津江(平成23年度)
	主査	光石 鳴己(平成25・26年度)
奈良県立橿原考古学研究所		
	所長	菅谷 文則
	副所長	西藤 清秀(平成23～25年度)
	調査部長	宮原 晋一

調査課長	木下 亘（平成23～25年度）
	今尾 文昭（平成26年度）
総括研究員	須藤 好直（踏査・平成23年度）
総括研究員	入倉 徳裕（踏査・平成23年度）
総括研究員	米川 仁一（踏査・平成23年度）
総括研究員	卜部 行弘（踏査・平成23年度）
総括研究員	水野 敏典（調査担当・平成24年度）
主任研究員	大西 貴夫（踏査・平成23年度）
主任研究員	奥山 誠義（保存科学）
主任技師	持田 大輔（調査担当・平成24年度）
主任技師	前田 俊雄（調査担当・平成24年度）
技師	杉山 拓己（調査担当・平成24年度）
技師	絹島 歩（調査担当・平成24年度）
技師	柳田 明進（保存科学）
嘱託	岡見 知紀（調査担当・平成24年度）
特別指導研究員	奥田 尚（石材・土器の同定）

調査指導委員会（平成25・26年度）

委員長	白石太一郎（大阪府立近つ飛鳥博物館館長）
委員	塚口 義信（堺女子短期大学名誉学長）
委員	西藤 清秀（奈良県立橿原考古学研究所副所長） （同 技術アドバイザー）
委員	浅井 正澄（上牧町教育委員会教育長）
オブザーバー	榎宜田佳男（文化庁記念物課主任文化財調査官）
	林 正憲（文化庁記念物課文化財調査官）
	小槻 勝俊（奈良県教育委員会文化財保存課課長）
	豊岡 卓之（奈良県教育委員会文化財保存課主幹）
	入倉 徳裕（奈良県教育委員会文化財保存課課長補佐）
	岡林 孝作（奈良県教育委員会文化財保存課調整員）

6. 調査の遂行及び報告書の作成にあたっては下記の参加を得て実施した。

(株)安西工業 (株)アコード (株)アクセス アートフォト右文 元興寺文化財研究所

7. 現地調査および報告書作成においては下記の機関・方々より御協力と助言を頂いた。

(株)ウエダ 上田定央 松里園自治会 東京国立博物館 大阪府立近つ飛鳥博物館 静岡市立
登呂博物館 香芝市二上山博物館 斑鳩町文化財活用センター

青木勘時 東 潮 赤塚次郎 石野博信 泉森 皎 井上義光 上野祥史 大脇 潔
岡島永昌 小栗明彦 河上邦彦 河野正訓 木許 守 木場幸弘 小林健二 佐藤良二
笹澤 浩 下大迫幹洋 下垣仁志 白神典之 鈴 千夏 田中徳朗 土橋理子 鶴 真美
寺澤 薫 中司照世 橋本輝彦 平田政彦 廣田和穂 直井雅尚 日野 宏 萩原儀征
古谷 毅 前野さゆり 松田真一 三木 弘 森下章司 森本 徹 山内紀嗣 山下隆次
吉村公男 和田 萃 和田晴吾

8. 本書の編集は関川が行った。

目 次

第Ⅰ章 調査の経緯と経過（石橋忠治・関川尚功）	1
第1節 調査に至る経緯	
第2節 調査の経過	
第Ⅱ章 位置と環境（関川）	5
第1節 地理的環境	
第2節 歴史的環境	
第3節 上牧久渡古墳群周辺の地形と遺跡分布	
第4節 上牧久渡古墳群の試掘・確認調査と古墳の分布	
第Ⅲ章 古墳の調査	21
第1節 上牧久渡1号墳（関川・石橋）	
第2節 上牧久渡2号墳（関川）	
第3節 上牧久渡3号墳（水野敏典・石橋）	
第4節 上牧久渡4号墳（水野・石橋）	
第5節 上牧久渡5号墳（持田大輔・石橋）	
第Ⅳ章 自然科学的分析	89
第1節 上牧久渡古墳群出土石材・土器の同定（奥田 尚）	
第2節 上牧久渡古墳群出土金属製品・玉類の理化学的分析（奥山誠義・柳田明進）	
第Ⅴ章 上牧久渡古墳群をめぐる諸問題	101
第1節 上牧久渡古墳群の調査結果の語るもの（白石太一郎）	
第2節 文献史学からみた上牧久渡古墳群（塚口義信）	
第3節 上牧久渡3号墳出土の画文帯神獸鏡について（樋口隆康）	
第Ⅵ章 総括（関川）	117

挿 図 目 次

図1 馬見丘陵の地質図（1/5万）
図2 上牧久渡古墳群周辺の遺跡分布（1/4万）
図3 上牧久渡古墳群周辺地籍図
図4 上牧久渡古墳群周辺の遺跡と古墳（1/3000）
図5 第1トレンチ溝断面図（1/50）
図6 上牧久渡古墳群試掘・確認調査（第1次）位置図（1/500）
図7 上牧久渡古墳群地形図（1/800）
図8 上牧久渡古墳群調査区位置図（1/800）
図9 1号墳調査位置図（1/600）
図10 1号墳第1トレンチ中央平面図（1/50）
図11 1号墳第1トレンチ中央北壁断面図（1/80）
図12 1号墳第1トレンチ東下層遺物出土状況（1/40）
図13 1号墳第1トレンチ通路状遺構断面図（1/30）
図14 1号墳第1トレンチ西下層土器（6）出土状況（1/3）
図15 1号墳第3トレンチ（1/50）

- 図16 1号墳第4トレンチ (1/50)
- 図17 1号墳第2・5トレンチ断面図 (1/60)
- 図18 1号墳墳丘表土土器出土状況 (1/15)
- 図19 1号墳出土遺物 (1) (2/3・1/3・1/5)
- 図20 1号墳出土遺物 (2) (1/6)
- 図21 2号墳調査位置図 (1/500)
- 図22 2号墳墳丘東西断面図 (1/100)
- 図23 2号墳墳丘南北断面図 (1/120)
- 図24 2号墳石室全体図 (1/60)
- 図25 2号墳玄室全体図 (1/25)
- 図26 2号墳玄室実測図 (1/25)
- 図27 2号墳石室天井石 (1/25)
- 図28 2号墳石室断面図 (1/60)
- 図29 2号墳石室内床面付近遺物出土状況 (1/30)
- 図30 2号墳羨道部床面下層遺物出土状況 (1/20)
- 図31 2号墳床断面図 (1/20)
- 図32 2号墳排水溝 (1/25)
- 図33 2号墳墳丘内石棺 (1/25)
- 図34 2号墳出土鉄製品・玉類 (4/5)
- 図35 2号墳出土土器 (1) (1/3)
- 図36 2号墳出土土器 (2) (1/3)
- 図37 2号墳出土平瓦 (1) (1/3)
- 図38 2号墳出土平瓦 (2) (1/3)
- 図39 2号墳出土石器 (2/3)
- 図40 2号墳出土加工凝灰岩 (1/5)
- 図41 3号墳埋葬施設位置図 (1/300)
- 図42 3・4号墳墳丘断面図 (1/120)
- 図43 3号墳第1埋葬施設 (1/40)
- 図44 3号墳第1埋葬施設遺物出土状況・断面図 (1/20)
- 図45 3号墳第2埋葬施設 (1/40)
- 図46 3号墳第3埋葬施設 (1/40)
- 図47 画文帯環状乳神獣鏡 鏡背面・断面 三次元計測画像 (1/1)
- 図48 画文帯環状乳神獣鏡 鏡面 三次元計測画像・断面写真 (1/1)
- 図49 3号墳出土鉄製品 (1/2)
- 図50 3号墳棺内・周辺出土土器 (1/3)
- 図51 4号墳埋葬施設位置図 (1/300)
- 図52 4号墳墳丘断面図 (1/120)
- 図53 4号墳第3トレンチ周溝 (1/100)
- 図54 4号墳埋葬施設 (1/40)
- 図55 4号墳埋葬施設遺物出土状況 (1/20)
- 図56 4号墳出土玉類 (1/1)
- 図57 4号墳採集石器 (2/3)
- 図58 4号墳出土土器 (1/3)

- 図59 5号墳埋葬施設位置図 (1/300)
図60 5号墳埋葬施設断面図 (1/100)
図61 5号墳墳丘断面図 (1/100)
図62 5号墳第3・6・8トレンチ断面図 (1/40)
図63 5号墳第4トレンチ銅鏡片出土状況 (1/50)
図64 5号墳第1埋葬施設 (1/40)
図65 5号墳第2埋葬施設 (1/40)
図66 5号墳出土鏡三次元計測画像・復元図 (1/1)
図67 5号墳出土鉄製品 (4/5)
図68 5号墳出土土器 (1/3)
図69 画文帯神獸鏡外区で確認された赤色付着物
図70 画文帯神獸鏡の破断面 (外区)
図71 鏡破断面のデジタルマイクロ스코プ観察像
図72 破断面の蛍光X線分析箇所
図73 Aの蛍光X線スペクトル
図74 Bの蛍光X線スペクトル
図75 Cの蛍光X線スペクトル
図76 赤色付着物の蛍光X線スペクトル
図77 資料1・上の蛍光X線スペクトル
図78 資料1・下の蛍光X線スペクトル
図79 資料5の蛍光X線スペクトル
図80 資料9の蛍光X線スペクトル
図81 琥珀のIRスペクトル
図82 葛城北部における古墳の分布
図83 新山古墳と佐味田宝塚古墳
図84 葛城地方における大型古墳の編年
図85 敏達天皇系の王族関係図
図86 古代天皇関係系図
図87 近畿中部の初期古墳
図88 上牧久渡3号墳と初期古墳の経路

写真目次

- 写真1 3・4号墳出土遺物の一般公開
写真2 2号墳現地説明会
写真3 上牧銅鐸 (静岡天満宮所有)
写真4 観音山銅鐸出土地 (中央) と3号墳 (右下方)
写真5 第1トレンチ全景 (南より)
写真6 第3トレンチ全景 (南西より)
写真7 上牧久渡古墳群全景 (南より・1982) 奈良県立橿原考古学研究所提供
写真8 第1トレンチ東下層遺物出土状況 (西より)
写真9 第1トレンチ東下層石鏃 (12) 出土状況
写真10 第5トレンチ全景 (北西より)

写真11 墳丘表土土器出土状況（東より）
写真12 調査前の状況（北西より）
写真13 樹根付着の凝灰岩層（北西より）
写真14 北トレンチ土層断面（北西より）
写真15 西トレンチ土層断面（南西より）
写真16 第1埋葬施設断面（北東より）
写真17 第3埋葬施設断面（北東より）
写真18 西王母
写真19 東王父
写真20 第1埋葬施設北壁断面（南より）
写真21 第2埋葬施設南壁断面（北より）
写真22 2号墳出土石材拡大写真
写真23 琥珀製棗玉の小片
写真24 写真23の部分拡大
写真25 同型の画文帯環状乳神獣鏡

表 目 次

表1 上牧久渡古墳群調査年度
表2 上牧久渡古墳群関連出版物
表3 4号墳出土玉類計測表
表4 画文帯神獣鏡の破断面の蛍光X分析
表5 鉄製品における銅（Cu）および鉛（Pb）、水銀（Hg）の有無
表6 殯関係記事一覧表
表7 上牧久渡古墳群と馬見古墳群の対比
表8 上牧久渡2号墳と周辺古墳の石室規模

図 版 目 次

巻頭図版 上牧久渡3号墳画文帯環状乳神獣鏡
上牧久渡2号墳空中写真（南東より） 上牧久渡2号墳石室全景（南より）
図版1 古墳群周辺空中写真（上空より・1948）
図版2 1号墳全景（北東より） 1号墳全景（南より）
図版3 1号墳全景（北より） 1号墳全景（上空より・右上が北）
図版4 1号墳第1トレンチ立坑南・通路検出状況（北東より） 1号墳第1トレンチ立坑南検出状況（南より）
図版5 1号墳第1トレンチ立坑北検出状況（北より）
1号墳第1トレンチ墳丘下土器出土状況（西より）
図版6 1号墳第3トレンチ全景（東より） 1号墳第3トレンチ遺物出土状況（北東より）
図版7 1号墳第4トレンチ全景（南西より）
1号墳第4トレンチ6号墳周溝遺物出土状況（南西より）
図版8 2号墳全景（南東より） 2号墳全景（上空より）
図版9 2号墳埋葬施設全景（南より） 2号墳埋葬施設全景（上空より）

- 図版10 2号墳調査前全景（北東より） 2号墳調査前全景（北西より）
- 図版11 2号墳背面周溝（西より） 2号墳背面周溝（南東より）
- 図版12 2号墳石室全景（南より） 2号墳石室全景（北東より）
- 図版13 2号墳玄室全景（南より） 2号墳羨道床面（東より）
- 図版14 2号墳玄室北西角（南より） 2号墳玄室北東角（南より）
- 図版15 天井石出土状況（南西より） 右奥壁基底石の状況（南西より）
右奥壁基底石の基礎（東より）
- 図版16 2号墳羨道床面南端遺物出土状況（南より） 2号墳羨道床面下（南東より）
- 図版17 2号墳排水溝全景（南より） 2号墳墳丘内石棺（南東より）
- 図版18 3・4号墳全景（上空より・北が上）
- 図版19 3・4号墳全景（北東より） 3・4号墳全景（北より）
- 図版20 3・4号墳全景（北より） 3・4号墳全景（西より）
- 図版21 3・4号墳全景（東より） 3・4号墳埋葬施設全景（上空より・北は右）
- 図版22 3・4号墳埋葬施設全景（南より） 3・4号墳埋葬施設全景（南東より）
- 図版23 3号墳第1・第3埋葬施設全景（北より）
3号墳第1・第3埋葬施設全景（北西より）
- 図版24 3号墳第1・第3埋葬施設全景（西より）
3号墳第1埋葬施設棺内遺物出土状況（西より）
- 図版25 3号墳埋葬施設内遺物出土状況（北より）
鉄槍出土状況（東より）鉄鏃7～9出土状況（東より）
- 図版26 4号墳埋葬施設全景（北東より） 4号墳埋葬施設全景（北西より）
- 図版27 4号墳棺内遺物出土状況（北東より）
4号墳白玉1（左）・2（右）出土状況（左が北）
- 図版28 5号墳全景（西より） 5号墳全景（東より）
- 図版29 5号墳第1埋葬施設全景（北東より） 5号墳第1埋葬施設全景（北より）
- 図版30 5号墳第2埋葬施設全景（南より） 5号墳第2埋葬施設内遺物出土状況（南西より）
- 図版31 5号墳第4トレンチ周溝（北東より）
5号墳第4トレンチ周溝内鏡片出土状況（東より）
- 図版32 3号墳出土画文帯環状乳神獸鏡（1）（約1/1）
- 図版33 3号墳出土画文帯環状乳神獸鏡（2）（約1/1）
- 図版34 伯牙 黄帝
- 図版35 西王母 東王父
- 図版36 3号墳出土鉄製品（約1/2）
- 図版37 3号墳棺内・周辺出土土器（約1/2）
- 図版38 3・5号墳出土金属器X線写真（縮尺不同）
- 図版39 1号墳出土遺物（約1/3・1/5・1/6）
- 図版40 2号墳出土遺物（1）（約1/1・1/2・1/3）
- 図版41 2号墳出土遺物（2）（約1/3・1/6）
- 図版42 2号墳出土遺物（3）（約1/3）
- 図版43 2号墳出土遺物（4）（約1/3）
- 図版44 2号墳出土遺物（5）（約2/3・1/5）
- 図版45 4・5号墳出土遺物 4号墳（約1/1・1/3・2/3） 5号墳（約1/1・4/5）
- 図版46 5号墳出土遺物（約1/3・1/2.5）

第Ⅰ章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

平成23年5月24日、上牧町大字上牧字久渡83番1、4372における宅地開発計画が上牧町教育委員会に提示された。この開発対象地の丘陵上には、周知の埋蔵文化財包蔵地「久渡古墳」（上牧久渡1号墳）が存在している。このため5月31日に上牧町教育委員会・奈良県教育委員会文化財保存課・奈良県立橿原考古学研究所が現地を踏査した結果、さらに丘陵南側において新規の終末期古墳である上牧久渡2号墳が存在することを確認した。

開発予定地においては、このような重要な古墳が存在することから、さらに踏査が必要と認められたが、この予定地は樹木の繁茂が著しく、全面的な踏査が困難であった。このため、6月に橿原考古学研究所によって航空レーザー測量調査を実施し、この測量図をもとに7月8日に橿原考古学研究所により再踏査が行われた。その結果、さらに複数の古墳状隆起が確認できた。（橿研2012b）

このような踏査の結果を受け、7月～10月に奈良県教育委員会・上牧町教育委員会・(株)ウエダの三者で開発に関する話し合いを行った。その結果、丘陵南側については上牧久渡1・2号墳が存在するため、事業者の理解を得て保存地区とすることが決定した。一方、丘陵の北側については、複数の平坦地が見られる稜線上を中心に、事業者負担による試掘・確認調査を行なうこととした。

第2節 調査の経過

（1）第1次調査

試掘・確認調査として行った第1次調査は上牧町教育委員会が担当した。調査地の伐採作業後、平成23年11月7日から調査を開始した。トレンチは総計5本設定した。尾根の中央主軸において第1トレンチを南北に設け、尾根の東方向へ第3～5トレンチ、西に向けて第2トレンチを設定した。調査方法は時間的に余裕がないため、第5トレンチ以外は重機による表土掘削を行うこととした（図6）。

この調査の結果、12月9日に第1トレンチ北側において3号墳の埋葬施設が確認された。1月12日に同じく第1トレンチ北で須恵器が出土し、4号墳埋葬施設の存在が明らかになった。

また、これらトレンチ掘削の過程において、不注意から表土掘削時において、これら古墳の埋葬施設を毀損していたことを県文化財保存課より指摘を受けるとともに、1月18日には3号墳の第1トレンチの掘削排土中より画文帯環状乳神獣鏡1面と鉄槍片、土器片が出土していることが判明した。また、同時に4号墳埋葬施設が検出され、第2トレンチにおいても5号墳の埋葬施設が確認された。このような結果を受け、これ以上、現体制での調査の続行は困難と判断し、1月19日より調査を一時的に中断することとした。さらに、2月15日に行われた話し合いにおいて、事業者側より丘陵北側部分の開発については凍結する意向が示された。このため、事業者負担による調査の再開・継続は事実上不可能となった。

この事態を受けて、上牧町教育委員会では、文化庁並びに県文化財保存課と協議の上、今後は試掘・確認調査の際に失われた遺構・遺物に関する情報を可能な限り復元的に収集するため、久

渡3～5号墳の再調査を奈良県立橿原考古学研究所の協力を受けて行うこととした。調査は事業者の時間的猶予の了解も得て、平成24年度の国庫補助事業による範囲確認調査として実施することになった。3月1日より調査を再開し、墳丘測量と記録作成を行い、当面の遺構保護を施した上で3月21日に第1次調査を終了した。

（2）第2次調査

平成24年度より3カ年の計画で国庫補助事業による確認調査を実施することになった。第2次調査は、第1次調査時において失われた久渡3・4号墳の墳丘、埋葬施設等に関する情報を復元的に収集し、原位置を失って出土した銅鏡・鉄製品などの遺構における帰属を可能な限り確認すること等を目的に、奈良県立橿原考古学研究所1名の協力を得て5月28日から開始した。

調査は3・4号墳においては、新たに第6～8トレンチを設定し、埋葬施設と墳丘の確認を行った。7月4日までに3号墳において第1～3埋葬施設を検出した。この第1埋葬施設より鉄鏃と鉄槍・甕形土器が出土した。これにより、画文帯環状乳神獸鏡もおそらくこの埋葬施設に伴うものと推定された。第2埋葬施設は保存のため、平面検出にとどめた。第3埋葬施設は木棺を確認したが副葬品は見られなかった。

6月12日には文化庁近江俊秀文化財調査官の現地視察を得、今後の調査について指示を受けた。4号墳では埋葬施設を1基検出し、その規模を確認した。7月10日に棺上から古墳時代後期の須恵器が出土し、4号墳の時期が判明した。7月11日には埋葬施設より滑石製白玉が2点出土し、その後さらに3点出土したが、ほかに顕著な副葬品は見られなかった。

7月26日には3号墳の墳丘について、各トレンチの断面観察により、墳丘裾の範囲が判明した。3号墳は、4号墳の築造によって変容を受けているが、1辺約15mの方墳または前方後方墳の可能性があるものと思われた。また、調査と並行して3・4号墳の掘削排土のふり掛け作業を行い、鉄槍または鉄剣の破片や土器片を回収した。

7月26日に空中写真撮影、8月1日には3・4号墳の調査成果に関する記者発表を行なった。また、8月5日に上牧町文化センターにおいて3・4号墳の出土遺物と調査の写真パネルの展示も行った。この時に3号墳出土の画文帯神獸鏡も初めて一般公開をし、上牧町内外より640人の参集者を得た。その後、調査の記録作成と埋戻し作業を行い8月11日に終了した。

（3）第3次調査

第3次調査は、第1次調査時のトレンチによって失われた5号墳の墳丘、埋葬施設等に関する情報を復元的に収集し、原位置を失って発見された鉄製品・須恵器・礫等の遺構における帰属を可能な限り確認すること等を目的に、奈良県立橿原考古学研究所の協力を得て、平成24年12月17日から平成25年3月18日の期間で実施した。

調査は、12月17日から1月21日まで第1次調査時排土のふり掛けを行った。この結果、銅鏡片、須恵器及び多数の礫を回収した。その後、平成25年1月22日からは31日までは5号墳の一部伐採を行った。2月4日からは奈良県立橿原考古学研究所より調査員5名の派遣を得て発掘調査に入った。1次調査第2トレンチの壁面清掃及び記録作業後、埋葬施設範囲確認のため、1次調査第2トレンチの南北沿いに北拡張区・南拡張区を、また墳丘確認のため第1～10トレンチを新たに設定し、調査を実施した。

2月21日からは3月13日まで埋葬施設の調査及び記録を行い、3月14日から16日まで埋め戻し、18日には道具の撤収作業を行い、調査を終了した。なお、次年度調査を行う準備のため、1月29日と3月11日から13日にかけて2号墳の伐採及び雑木の集積を行った。

（４）第４次調査

２号墳は、平成23（2011）年５月に行った上牧町教育委員会・奈良県教育委員会・橿原考古学研究所による踏査で初めて確認された古墳である。墳丘背後に大規模な周溝をもつ古墳群の中ではきわめて特徴的な古墳であるが、墳頂部はかなりの攪乱を受けており、その内容が明らかではなかった。このため、調査の目的はトレンチ調査により攪乱墳内及び墳丘の調査を行い、埋葬施設・墳丘の構造と古墳の築造時期を確認することとし、平成25年７月５日に開催した本年度第１回の調査指導委員会で承認を得た。

平成25年８月21日より墳丘とその周囲の樹木伐採作業を開始し、作業終了後の８月29日に２号墳の慰霊祭を実施した。その後３Ｄ測量の準備とその作業を行った後、10月11日より掘削作業を開始した。墳丘中央部には南北約12m、東西約5.5mの南に開く大規模な攪乱墳が存在するため、まず幅２mのトレンチを南北に設定し、埋葬施設の構造と遺存状況を確認することとした。

現状では２号墳埋葬施設が石室に類するものであることは予想されたが、どのような構造となるものかは全く明らかではなかった。また、調査前の墳丘攪乱墳内南端には大きな倒木があり、その樹根に多量の安山岩・凝灰岩片と土器片が付着している状態であった。

掘削作業に入ってからしばらくの間は、攪乱墳より大量の安山岩・凝灰岩片が須恵器片などと共に出土した。10月17日には攪乱土中より琥珀製棗玉が出土し、副葬品が遺存していることが判明したが、埋葬施設の構造については手がかりがみられなかった。

11月１日には天井石と思われる大型の石材が転落した状況で出土し、これにより埋葬施設が横穴式石室であり、これまで出土した多量の安山岩片は後世に石室が破壊され、石材が破碎されたことに起因することが明らかになった。このため、石室の遺存状態と規模を確認するため、さらに東西にトレンチを広げ、攪乱墳内の掘り下げを進めた。その過程で奥壁と玄室側壁の基底石が一部遺存していたことが判明した。また、すでに検出されていた凝灰岩層の広がりには奥壁まで達し、全面に広がることが確認された。このため、本来は石室内の床全面において凝灰岩の碎石などをもって敷詰められていたという例のないものであることが判明した。12月６日には文化庁林正憲文化財調査官の視察を得、調査方法について指示を受けた。

平成26年２月７日には第２回調査指導委員会を開催し、これまでの調査結果の報告を行い、調査終了に向けての作業方法について承認を得た。２月12日には報道発表を行い、２月15・16日に現地説明会を予定した。しかし奈良県では24年ぶりの大雪のため、２月15日の地元説明会は中止し、２月16日の一般説明会のみを実施した。参加者は県内外から610名の参加を得た。当日は説明会と共に、隣接の松里園公民館において、今回の出土品と合わせ、これまでの上牧久渡古墳群出土土器の公開とパネル展示を行った。

現地説明会終了後、これまで明らかではなかった墳丘築成状態と石室墓壇の確認のため、断ち割り作業を行ったところ、東トレンチにおいて小型の箱式石棺と思われる遺構の一部を検出した。北・西トレンチにおいては、明瞭な墓壇が確認できず、墳丘のほとんどが盛土により築成されていたことが明らかになった。３月に入り記録作成作業を行い、3月中旬より埋戻し作業を開始し、石室床面の凝灰岩層は不織布で保護して埋戻した。３月27日にはすべての作業を終了した。

（５）第５次調査

上牧久渡古墳群確認調査の最終年度として、１号墳の調査を実施した。古墳群の中でも最大の墳丘規模をもち、また丘陵上の最高所に位置している。このため、古墳群の中では最も早くその存在が知られていた古墳である。しかし、古墳の内容と共に、特にその築造時期については墳丘

裾より須恵器片が採集されていたのみで、全く手がかりがない状態であった。このため、確認調査を実施したものである。最終年度でしかも報告書作成も伴っているため、調査区の設定は最低限にとどめることとした。

平成26年5月19日より墳丘とその周辺の樹木伐採作業を開始し、5月23日にはほぼ終了した。6月9日には本年度第1回の調査指導委員会を開催し、1号墳の調査実施計画について承認を得た。6月10日には3D測量を行い、6月12日には慰霊祭を実施したが、雨天のため、大字上牧の智照神社において行った。6月23日に墳丘の地区設定を行い、掘削作業を開始した。

1号墳はこれまでの踏査によって前方後円墳の可能性が考えられてきた。そこで調査区は前方後円墳として主軸に沿って3か所の調査区を設定し、北東・南東にそれぞれ1か所、計5か所のトレンチを設けた。6月25日には第2トレンチの調査を終え、墳丘北裾を確認した。6月27日には文化庁において調査状況の現状と調査日程の報告を行い、今後の事業全体の進行について指示を受けた。

第1トレンチにおいては7月24日には墳頂の攪乱層が立坑状のきわめて深い大規模な近代の遺構であることが明らかになり、埋葬施設の確認は困難になった。また2号墳箱式石棺の調査も並行して進め、7月28日には石棺の平面形がほぼ明らかになった。

8月8日には第2回調査指導委員会を開催し、調査状況を報告し、今後の調査方針について了承を得た。8月13日には空中写真の撮影を行い、8月19日には上牧町長と町会議員の視察を得た。その後、墳丘の断ち割り調査を開始し、墳丘の築成状況を確認した。9月に入り、墳丘下において古墳築造以前の遺物包含層を確認し、遺物の検出と検討を行った。

その後、9月8日には画文帯神獣鏡出土地点の確認に樋口隆康先生が古墳群を視察された。9月中旬より埋戻しと古墳墳丘の養生作業を行ったが、その過程で1号墳墳頂北東下方の表土中において多量の須恵器大甕片が集積されていることが知られた。そこでこの部分の調査を行ったのち、埋戻しと墳丘養生を完了、10月14日に現場より撤収し、すべての作業を終了した。

古墳群の名称については、これまで試掘調査開始以来、小字名の久渡より「久渡古墳群」と称してきた。しかし、近在に北葛城郡王寺町久度の地名が存在し、混同を避けるため、大字上牧の地名を冠し、本書以降は古墳群の正式名称を「上牧久渡古墳群」とする。



写真1 3・4号墳出土遺物の一般公開



写真2 2号墳現地説明会

第Ⅱ章 位置と環境

第1節 地理的環境

上牧久渡古墳群の所在する奈良県北葛城郡上牧町は奈良盆地の西、馬見丘陵の中西部に位置する。明治22（1889）年の市町村制の公布により、葛下郡上牧村・中筋出作方・下牧村が合併し、上牧村となり、昭和47（1972）年に町制を実施し、現在の上牧町が成立した。人口は約23000人である。上牧の名は古代の牧にちなむものという。

上牧町の町域はほとんどが馬見丘陵で占められる。この丘陵は大和川に向けて北流する西の葛下川、東の高田川に挟まれ、南北約8.0km、東西約3.5kmに広がる南北に長い低丘陵である。行政区域の範囲は、北は王寺・河合町、西は上牧町、東は広陵町、南は香芝・大和高田市にわたる。上牧町の町域は馬見丘陵全体面積のほぼ三分の一を占めている。馬見丘陵は、さらにその内部を北流する西部の滝川と東部の佐味田川により分断され、南北に長い西・中・東の3つの支丘に分かれる。その中で最も長狭な支丘は東丘陵で、面積が最も広いのは中丘陵である。上牧久渡古墳群の所在する西丘陵は南北約4.6kmと最も短く、また面積も狭い。

馬見丘陵の標高は65～80mほどと低く、最高所は西丘陵北西端で、標高90mに及ぶところがある。この丘陵では土壌が軟質のところが多く、滝川や佐味田川に注ぐ小規模な支流によって浸食作用がかなり進み、無数の谷地形が発達し、かなり複雑な地形を呈している。そして、この谷地形を利用して多数の溜池が形成されている。この溜池密度の高さは全国屈指で、1km²で奈良盆地7個に対し、平均74個、稠密域では180個に及ぶ。その数はかつて1577個あり、これらの多くは幕末から明治にかけて築かれたようである（堀内1957）。

奈良盆地内においては、このような地形が広域にわたるところは他の地域には見られず、数多い溜池の存在と共に独特の景観をなしている。かつては丘陵部のほとんどの地域が山林や畑となっていた。この丘陵は地形的・地質的に大規模開発が容易であり、また面積も広い。このため、主要鉄道駅にも近い丘陵北部の西大和ニュータウンや丘陵南部の真美ヶ丘ニュータウンなど、奈良県でも最大規模の宅地開発が昭和40年代より始まり、かつての景観はかなり失われた。また、採土による形質変更がなされたところも多い。

馬見丘陵は、更新世には北部の矢田丘陵と連続する丘陵であったが、その後、大和川断層により、分離・独立したもので、丘陵を形成している地層は大阪層群下部の「馬見累層」と呼ばれる洪積世から第三紀の海成層である。土質は主に砂・粘土より成り、礫も含むところがある。地層はそれらが互層になるところや、砂層が発達するところなど、さまざまであるが、基本的に軟質の土壌である。この地層にはほとんど石は含まれず、古くから馬見丘陵が「豆山三里小石なし」といわれる所以である。

馬見丘陵は県内でも唯一、大型象の化石を産出するところで、これまで河合町と上牧町において7地点が「馬見丘陵化石出土地」（榎考研1985）とされている。その出土地は丘陵北部の河合町高塚台・上牧町桜ヶ丘付近に5地点が集中している。また他の2地点はここから南南東約1kmの河合町佐味田と南西約2km離れた上牧町米山台である。これらの出土化石は主に約130～140万年前に生息していたとされるシガ象・シカマフシ象と約200万年前のスギヤマ象の門歯、落角などで、いずれも奈良県の天然記念物に指定されている。

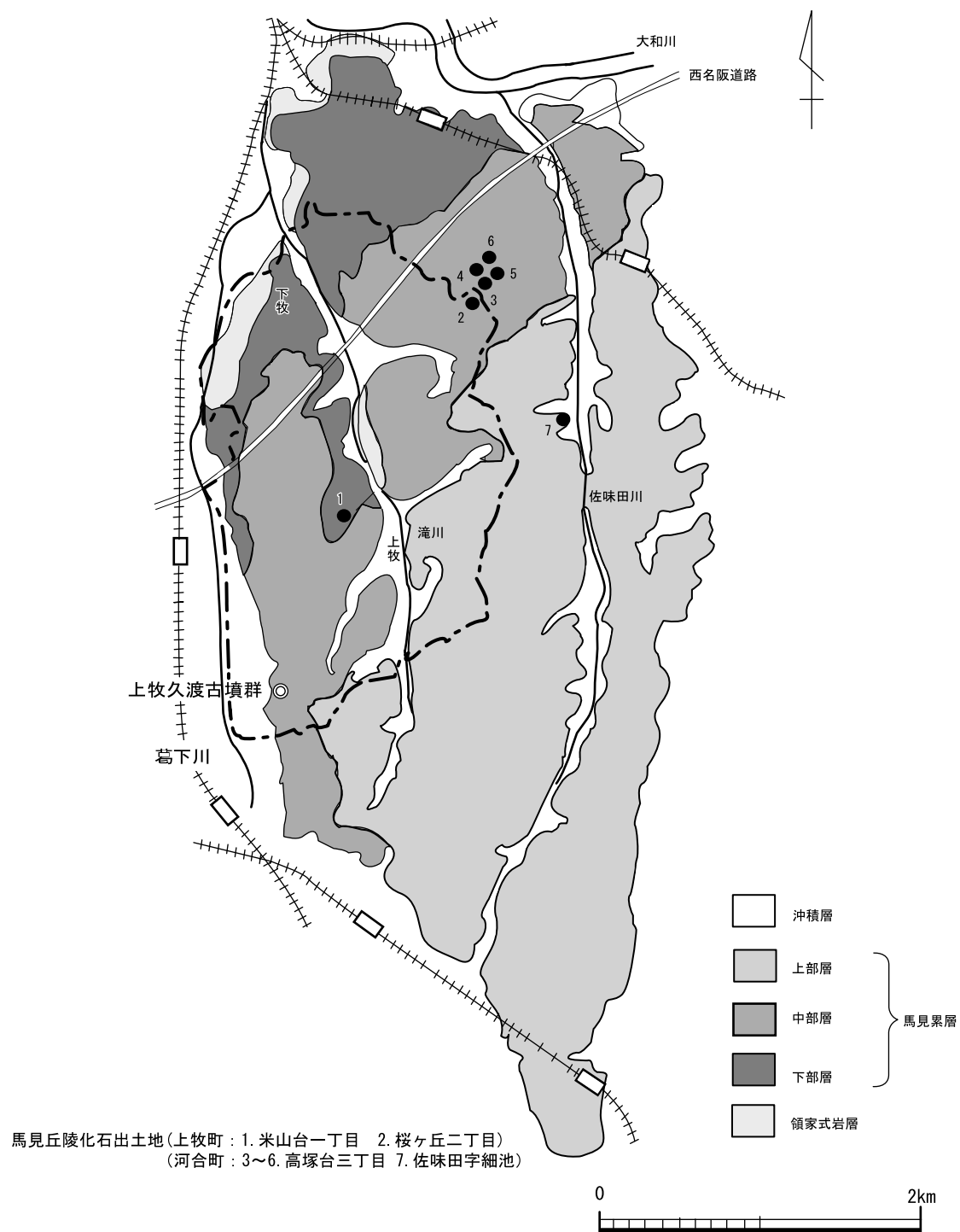


図1 馬見丘陵の地質図 (1/5万 『上牧町史』1976を一部改変)

第2節 歴史的環境

(1) 旧石器・縄文時代

馬見丘陵は石器原材料産出地の二上山に近く、丘陵とその周辺には旧石器時代の石器出土地が点在する。この中でも馬見二ノ谷遺跡（檀考研2006 a）は西丘陵北部に所在する主要な旧石器時代遺跡である。調査では六千点に及ぶ多量の石器を出土し、ナイフ形石器文化終末期の遺跡とされ、この周辺において石器製作が行われていたものとされる。このほか旧石器の出土地は丘陵北部域では、久度南遺跡、箸尾遺跡、フジ山遺跡などがあり、丘陵南西部付近では石田遺跡、鈴山遺跡、池田遺跡などがある。

縄文時代には草創期の代表的な遺跡として勢野東遺跡（三郷町2014）がある。この遺跡では約二万点近い石製遺物が出土し、尖頭器を製作した西日本でも数少ない石器製作址である。縄文時代の遺跡については顕著な遺跡はまだ明らかではないが、箸尾遺跡（檀考研2006 b）では中期から晩期の土器が出土し、晩期の遺構が検出されている。丘陵南西部の香芝市域では狐井遺跡、下田東遺跡などで土器の出土を見ている。

(2) 弥生時代

上牧久渡古墳群北側の丘陵は上牧銅鐸が出土した「観音山銅鐸出土地」である（梅原1927）。現在、静岡天満宮所蔵となっているこの銅鐸を収めた箱の箱書（明治12（1879）年認）には「・・大和国葛下郡上牧村字観音山よ里発見するもの也、時文化初年と云ふ・・」とある。ここに記された字名により、この丘陵がかつては観音山と呼ばれ、ここで江戸時代の文化年間（1804～1818）の初年に銅鐸が出土したものとされる。なお、梅原末治氏の報告では、昭和初期にこの銅鐸の所有者が、文化初年に前代が譲り受けたもの、とされるので、銅鐸の出土は文化初年以前のようなのである。

この銅鐸は高さ29.3cmで外縁紐1式の4区袈裟襷文銅鐸で、弥生時代中期の製作と考えられている。この銅鐸と同範関係にあるのは鳥根県加茂岩倉遺跡出土の加茂岩倉17号銅鐸である。馬見丘陵・葛下川流域における唯一の銅鐸出土地として重要である。

馬見丘陵内部の滝川・佐味田川流域の丘陵部においては今のところ弥生遺跡はほとんど知られ



写真3 上牧銅鐸（静岡天満宮所有）



写真4 観音山銅鐸出土地（中央）と3号墳（右下方）

ていない。わずかに穴闇遺跡（樫考研1986）で弥生前期の土器が出土しているが、遺構は明らかではない。一方、丘陵西側の葛下川流域においては、下田遺跡など複数の弥生土器の散布地が広がっている。遺跡内容はまだ不明であるが、上牧銅鐸出土地とも近接した弥生遺跡群であり、相互の関係が推定できよう。

弥生時代の高地性集落としては大和川南岸の丘陵上に位置する後期の舟戸・西岡遺跡（樫考研1998b）がある。竪穴式住居址が発掘されており、その立地から大和川を媒介として河内方面との関連性がうかがえる遺跡である。

また、黒石10号墓（樫考研1982b）は弥生時代後期後半頃の方形の墳丘墓で周溝との間に陸橋を有する。埋葬施設として2基の木棺が検出されている。新山古墳にも近く、馬見古墳群中にあり、盆地内では数少ない、また最も古い墳丘墓として注意される。

（3）古墳時代

古墳時代に入ると、馬見丘陵では馬見古墳群の形成が始まる。この古墳群は主に馬見東丘陵を中心に分布し、中丘陵では大型古墳は少なく、上牧久渡古墳群の所在する西丘陵では古墳分布が最も少ない。馬見古墳群においては、古墳の広がり南北約7.5kmにわたるため、北・中央・南の3群に分けることが一般的である。また古墳群を代表する大型前方後円墳は、4基の墳丘長200m級の古墳で、これを中心に東丘陵東辺に沿って南北に展開する。

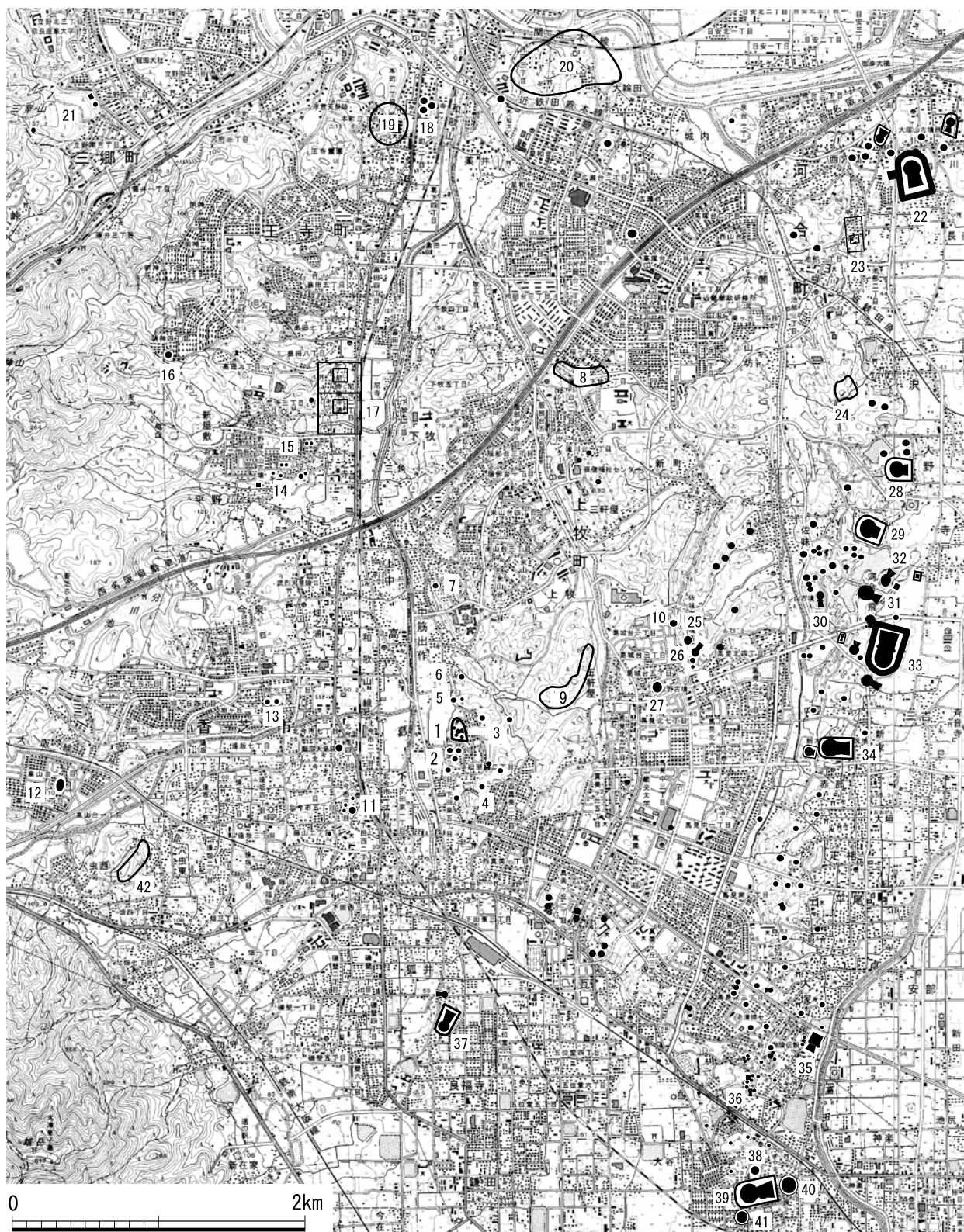
馬見古墳群において最も早く古墳が出現するのは南群である。ここでは前期中葉の前方後方墳で豊富な副葬品で著名な新山古墳（梅原1921）が最も早く出現する。弥生墳丘墓の黒石10号墓とも近接する位置にあり、34面の鏡や多くの石製品・武器類・玉類のほか、中国晋代の帯金具が出土したことで知られる。埋葬施設はおそらく竪穴式石室下部に築かれた組合式石棺と思われ、前期古墳の石棺としては最も古い事例の一つである。

新山古墳の出現は馬見古墳群形成の始まりを示すものである。大型古墳群出現の時期としては大和・柳本古墳群に次ぐ古さをもっており、大和では佐紀古墳群の成立に先行するものである。また副葬品の内容もそれらの古墳群の内容に比肩するものである。このことは馬見古墳群の造営主体の性格にもかかわってこよう。

前期後半には同じく新山古墳に近い南群において引き続き古墳が営造される。前方後方墳の黒石5号墳、帆立貝式の城山1号墳、前方後円墳のモエサシ3号墳や土山古墳があり、長谷山古墳も前期まで遡る可能性がある。このように、新山古墳の周辺と西方には、前期古墳が点在しており、新山古墳の立地は単独的ではない。

また馬見丘陵の最南端には周濠を有し、墳長200mを超える大型古墳である築山古墳（徳田1998）が位置する。宮内庁の調査により鱗付円筒埴輪が出土し、前期古墳であることが明らかになった。埴輪の中には中期に多い壺形埴輪もみられるので、前期でも末葉の時期といえよう。築山古墳は築山古墳より先行する馬見古墳群最大の前期古墳として重要である。

馬見丘陵の内部では前期後半に佐味田宝塚古墳（梅原1921）が出現する。貝吹山古墳・同2号墳と共に古墳群を形成している。馬見丘陵の中央部というかなり閉鎖的な位置にあり、他の古墳と立地状況が大きく異なっていることは注意される。佐味田宝塚古墳においても36面もの鏡や、銅鏃・巴形銅器・石製品など数多くの遺物が副葬され、新山古墳と共通するところがある。また城山2号墳では中国北朝系の札甲が出土したことが特異である。新山古墳の帯金具と共に、中国系の遺物を出土することで、他の前期大型古墳群との比較において馬見古墳群の性格を示すものとされる（樫考研1974）。



1. 上牧久渡古墳群 2. 松里園古墳群 3. チチブ古墳群 4. ケシキ山古墳群 5. 観音山銅鐸出土地 6. 浄安寺裏山古墳
 7. 宮ノ谷古墳 8. 下牧瓦窯跡 9. 大谷瓦散布地 10. 高塚古墳 11. 北今市古墳群 12. 高山石切場遺跡
 13. 上中ヨロリ1・2号墳 14. 平野古墳群 15. 平野窯跡群 16. 畠田古墳 17. 尼寺廃寺 18. 達磨寺古墳群
 19. 片岡王寺 20. 舟戸・西岡遺跡 21. 三室山古墳群 22. 大塚山古墳 23. 長林寺 24. 馬見二ノ谷遺跡 25. 貝吹山古墳
 26. 佐味田宝塚古墳 27. 牧野古墳 28. 池上古墳 29. 乙女山古墳 30. ナガレ山古墳 31. 倉塚古墳 32. 一本松古墳
 33. 巢山古墳 34. 新木山古墳 35. 新山古墳 36. 黒石10号墓 37. 狐井城山古墳 38. かん山古墳 39. 築山古墳
 40. コンピラ山古墳 41. 茶臼山古墳 42. 威奈大村墓

図2 上牧久渡古墳群周辺の遺跡分布 (1/4万)

また中央群においても前期古墳が出現し、別所下（雨山）古墳、ナガレ山北3号墳があるが、いずれも円墳であり、前期古墳としては先の2つの群と比較しても最も小規模である。しかし、中期に入ると、馬見古墳群では南群から中央群に古墳造営の中心が移動するが、これらの古墳の出現はその端緒となるものと理解できよう。

中期の前半においては中央群の大型古墳である巢山古墳（広陵町2005）、新木山古墳が出現する。このほかに周濠を有し、方形墳をとまなう一本松古墳（橿考研2012a）やナガレ山（橿考研1976）・倉塚古墳などの墳長100mを越える前方後円墳や、さらに乙女山古墳（河合町1988）や池上古墳（橿考研1992）などこれに次ぐ規模の古墳の造営も行われ、中央群が最も拡大をみる。この中には帆立貝式・円墳が含まれ、また埴輪棺も知られるなど、墳丘の規模・形態に多様な差異がみられる。これらに古墳の階層差が現れるとみる見解が多い。

また、この時期、南群においては、大型古墳や前方後円墳は見られない。しかし、コンピラ山古墳（大和高田市1991）、かん山古墳（大和高田市2003）などのように築山古墳に随伴する大型円墳が存在することは注目されよう。また、丘陵やや南の池田遺跡においては、主に中期後半から後期にかけての古墳群が検出されている（大和高田市2001）。

古墳時代中期後半からは、東丘陵北端の大和川近辺に河合町の大塚山古墳を中心とする大塚山古墳群（伊達1959）が出現し、後期初めの城山古墳まで続く。馬見古墳群北群とされる古墳群である。これと対比される馬見中央・南群の古墳群とは時期・位置関係はかなり異にしており、大和川付近に進出した古墳群とみられ、その立地は島ノ山古墳と同じく比較されることが多い。

古墳時代後期になると、馬見丘陵では古墳群としての古墳形成はなされないが、いくつかの後期古墳が存在する。前方後円墳では安倍山1号墳や帆立貝式の於古墳がある（橿考研1974）。

馬見丘陵南端に近い重要な古墳として、狐井城山古墳がある。周濠と外堤をめぐらせる6世紀前半では有数の大型古墳である。また内容は不明だが近接して狐井稲荷山古墳があり、古墳群を形成している。新山・築山古墳などと共に河内へのルート上に位置する大型古墳としての性格がうかがえよう。

上牧町に関わる古墳として、上牧久渡古墳群南の尾根上には後期の松里園古墳群（橿考研1983a）が所在する。小規模な古墳群であるが、家形石棺を有する古墳がみられる。

このほか『大和古墳墓取調書』（野淵1893）に上牧村唯一の古墳として記載された高塚（陣ノ山）古墳（上牧町1977・河合町1990）がある。馬見中丘陵の河合町との境界近くに所在する。墳形はやや明瞭ではないが、径約25mの円墳とされている。墳頂に径約5mの南に開く攪乱墳が残るため、横穴式石室墳の可能性を持つ。

次に『奈良県史跡勝地調査会報告』（奈良県1925）に記載されて宮ノ谷古墳（上牧町1977）は、上牧久渡古墳群の北方に位置し、径約20mの円墳とされるが、現在は公営住宅の敷地となっており、存在は明らかではない。

このほか浄安寺裏山古墳は、大正8（1919）年頃、西国三十三所観音霊場碑の建立で朱や遺物が出土し再埋葬したと伝えるが、現状は地形の改変が著しく、古墳の存在は明確ではない。弁天堂の建設時にも石棺出土の伝聞があるが確認できない。ケシキ山古墳群・チチブ古墳群については、その内容は明確ではない。古墳の分布もかなり散在的である。回り山古墳群については、その多くは古墳状隆起とされる。このように、上牧町内においては、松里園古墳群・上牧久渡古墳群付近が古墳の集中地域といえよう。

馬見丘陵とその周辺の横穴式石室墳については、まず牧野古墳（広陵町1987）がある。この古

墳は上牧久渡古墳群の東方約1.3kmに所在する6世紀末葉から7世紀初め頃に築かれた盆地西部では最大級の大型横穴式石室墳で、T字形に配列された刳拔・組合式の石棺2基を有し、馬具・武器・玉類・須恵器など多量の副葬品が出土し、特に馬具に特色がある。古墳の築造時期や、その内容から延喜式記載の押坂彦人大兄皇子の「成相墓」と想定されることが多い。

また、畠田古墳（王寺町・榎考研1998）は、葛下川左岸、明神山山塊の東麓に立地する。周辺には古墳は存在せず、輝石安山岩の石材を使用した横穴式石室墳で周溝を有し、羨門から墳丘裾周囲に外護列石をめぐらせている。6世紀末～7世紀初頭の時期とされる。

同時期の横穴式石室墳としては、このほか岩才池古墳群は2基の古墳が知られ、そのうち岩才池北古墳（榎考研1998a）は無袖の横穴式石室墳である。また達磨寺古墳群（王寺町・榎考研2000）では3基の横穴式石室墳が知られ、1号墳では組合式石棺が確認された。今泉古墳（香芝町1976）も横穴式石室墳で、畠田古墳と共に単独的な立地である。馬見丘陵・葛下川流域北半の横穴式石室墳は飛鳥時代にもつながる後期でも新しい時期の古墳が多い。

北今市1・2号墳（榎考研2006c）は馬見丘陵南西に位置する家形石棺を有する後期の古墳である。1号墳は径25mの円墳で横穴式石室内に2基の家形石棺があり、環頭大刀・馬具が副葬されていた。2号墳は1辺18mの方形墳で家形石棺2基が直葬されている。

生産遺跡としては、須恵器の生産を行った古墳時代後期の平野窯跡（榎考研1983b）がある。6世紀の終わりころの須恵器窯であるが、奈良盆地においては古墳時代の須恵器窯の出現はかなり遅く、この平野窯が時期的に最も古い。このほか高山石切場遺跡（香芝市博1996）は古墳時代の組合式家形石棺製作址の可能性が高い遺跡である。

また、天皇陵の治定地として、上牧久渡古墳群の東方に「顕宗天皇傍丘磐坏丘南陵」（延喜式）、北東に「武烈天皇傍丘磐坏丘北陵」（延喜式）がある。いずれも古代の葛下郡片岡の地域に築かれた天皇陵として重要であるが、それに該当する古墳には狐井城山古墳など諸説がある。なお、現在治定されている顕宗陵は円墳か前方後円墳か明らかではなく、武烈陵は古墳であるかは明確ではないという。

（2）飛鳥・奈良時代

飛鳥時代の主要な古墳群としては、平野古墳群がある。切石の凝灰岩を使用した横口式石槨の平野塚穴山古墳（榎考研1977）は漆棺を有する奈良盆地西部の代表的な飛鳥時代の古墳である。また平野1・2号墳（香芝市2005）は横穴式石室墳で、特に2号墳は7世紀中葉の大型古墳で、土製の棺台を有し、河内の終末期古墳との関連性をうかがわせる。また、上中ヨロリ1・2号墳（香芝市1986）も葛下川の対岸に位置する。南に開口する横穴式石室墳が東西に2基ならぶもので、この地域では数少ない双墳と思われる。2号墳からは精巧な馬具が出土している。その築造時期は7世紀頃といえよう。

このような双墳は、やや北方であるが、大和川北岸の三室山1・2号墳（三郷町1978）がある。この古墳は東斜面に築かれた南北に2基並列する方形墳で、それぞれの墳丘において東に開口する横穴式石室2基を有する。背後にはコの字形に周溝がめぐる。立地的に東面するという、やや特異な双室の双墳である。また、上中ヨロリ1・2号墳の北方で、土器と共に飛鳥時代の銀装大刀が出土している（香芝市1997）。ここにも飛鳥時代の石室墳が所在していたようである。

馬見丘陵においては、牧野古墳以降、顕著な古墳は見られないが、飛鳥時代の小規模古墳はいくつか知られている。佐味田石塚1・2号墳は小石室であるが、1号墳の石室床には飛鳥時代の平瓦が敷き詰められていたことが特徴である。このほか飛鳥・奈良時代の木棺墓もみられる。ま

た城山2号墳（榎考研1974）の周溝でも飛鳥時代の「瓦様土製品」と須恵器が出土している。

奈良時代火葬墓として顕著な遺跡は、葛下川左岸地域では銘を有する国宝の金銅製骨蔵器で知られる威奈大村墓、鉄板を出土した高山火葬墓（香芝市1996）などがある。これらの存在は大和から河内に通ずる逢坂・穴虫峠方面との関係が考えられよう。

馬見丘陵周辺では、北半部に古代寺院の存在が知られている。馬見丘陵周辺の古代寺院として、尼寺廃寺（香芝市2003）は葛下川流域地域の古代寺院で、東面する法隆寺式伽藍配置をもつ。また大型の塔心礎より出土した鎮壇具は例の少ないものである。また片岡王寺（榎考研2013）も飛鳥時代前半の建立にかかるこの地域を代表する古代寺院で、四天王寺式の伽藍配置であるが、主要伽藍の遺構はすでに失われている。

西安寺（久度寺）（保井1932）は丘陵の北端、大和川に面した位置にあり、パルメットの華麗な軒丸瓦の出土で知られる。塔跡の調査が行なわれている。長林寺（河合町1990）では発掘調査が行われ、伽藍配置が判明している。出土瓦銘よりこの寺院が「長倉寺」と呼称されていたことが明らかになった。

また、実態は明確ではないが寺戸廃寺（白石1978）がある。この付近は飛鳥・奈良時代の瓦が散布しており、この時期の遺跡として寺戸遺跡（広陵町1975）がある。この遺跡はかなり広範囲にわたっており、おそらく古代広瀬郡の中心的な郷にあたる可能性がある。

寺戸廃寺はおそらく「正倉院文書」にみられるこの郷とかかわりのある「廣瀬寺」に相当する可能性が考えられている。このように馬見丘陵の北部周辺では寺院が点在するが、南部地域においては今のところ古代寺院の存在は明らかではない。

このほか、飛鳥時代の生産遺跡としては上牧町内に下牧瓦窯（網干1962）がある。出土瓦より、平城京の長屋王にかかわる邸宅の出土瓦と同範であることが知られ、木簡で知られる王家の領地が周辺に広がっていたことを裏付けるものとされる（上牧町・榎考研2005）。また、平野瓦窯跡（榎考研1983b）は尼寺廃寺と関わりのある瓦窯と考えられる。

また、大谷瓦散布地においては、踏査により榎原考古学研究所と上牧町教育委員会による踏査で、小字「北畑」の丘陵南斜面の畑地において、明日香村・川原寺出土瓦と同様の重弧文軒平瓦・平瓦のほか須恵器も採集されている（前田ほか2013）。遺跡の性格は未だ明確ではないが、後の踏査で微量ではあるが、窯滓片が確認されている。また、小字「北畑」の西隣の「神田」においては小泉俊夫氏によって格子目叩きをもつ瓦片が採集されている（上牧町1977）。さらに、小字「神田」における墓地造成の事前発掘調査により、瓦・須恵器片が出土しており、その結果、付近に瓦窯などが存在した可能性が指摘されている（榎考研2010）。この遺跡の性格として瓦窯の可能性も考えられる。

大和国広瀬郡において川原寺の瓦窯が存在することは、正倉院文書の記載により知られ、すでに網干善教氏によって指摘されている（網干1962）。このためこれまで注意されてきたところであるが、今回の踏査結果により、大谷瓦散布地がその一つに相当する可能性が高まったといえよう。また、大谷瓦散布地採集瓦と近似する瓦は下田東遺跡（香芝市2011）でもかなりの出土をみており、その関連性が注目されよう。大谷瓦散布地は飛鳥時代の馬見丘陵を考える上で重要な遺跡である。

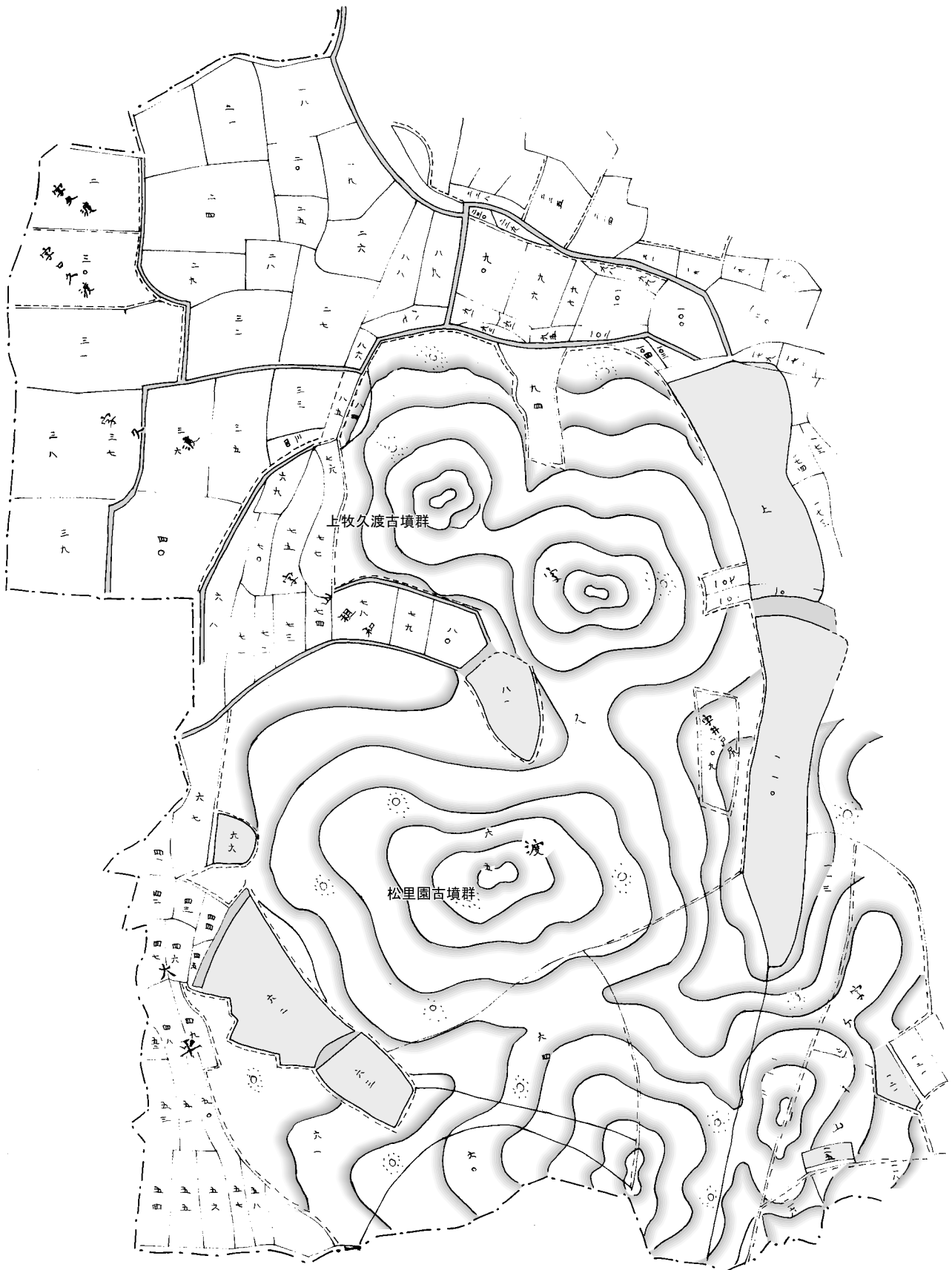


図3 上牧久渡古墳群周辺地籍図（上牧町1889）

第3節 上牧久渡古墳群周辺の地形と遺跡分布

(1) 周辺の地形

馬見丘陵は小丘陵が樹枝状に発達し、複雑に入り組んでいる。上牧久渡古墳群の所在する久渡山の南東約400mの地点は、馬見西丘陵西側の独立的な丘陵の高所で、その標高は82.1mである。ここから北西に延びる丘陵は先端で南北に並ぶ3つの尾根に分かれる。古墳群はその中で最も北の尾根が緩やかに下降したその先端部に位置する。

丘陵から派生する尾根は起伏しながら葛下川流域の平地部に向けて下降しているが、古墳群の東約100mの地点にも標高72.9mの隆起がかつては存在した。また、3つの尾根のうち、中の位置の尾根は上牧久渡古墳群の南にあたり、松里園古墳群が存在する。松里園古墳群南の尾根は昭和戦前期に計画された松里園団地があり、この付近では最も早く開発が始められたため、宅地化が進んでおり、現在は丘陵部は残っていない。

上牧久渡古墳群の北、「上牧銅鐸」出土地の尾根は、別の丘陵から派生し、古墳群との尾根の間は奥深い谷となっている。そこは現在、久渡山の西に残る二ッ池（上池・下池）という長さ350mの細い溜池となっている。また、2号墳の南前面には、松里園古墳群の尾根との間に谷地形が入り込んでおり、その奥にはかつて「山田池」が存在した。

(2) 古墳群周辺の遺跡と古墳

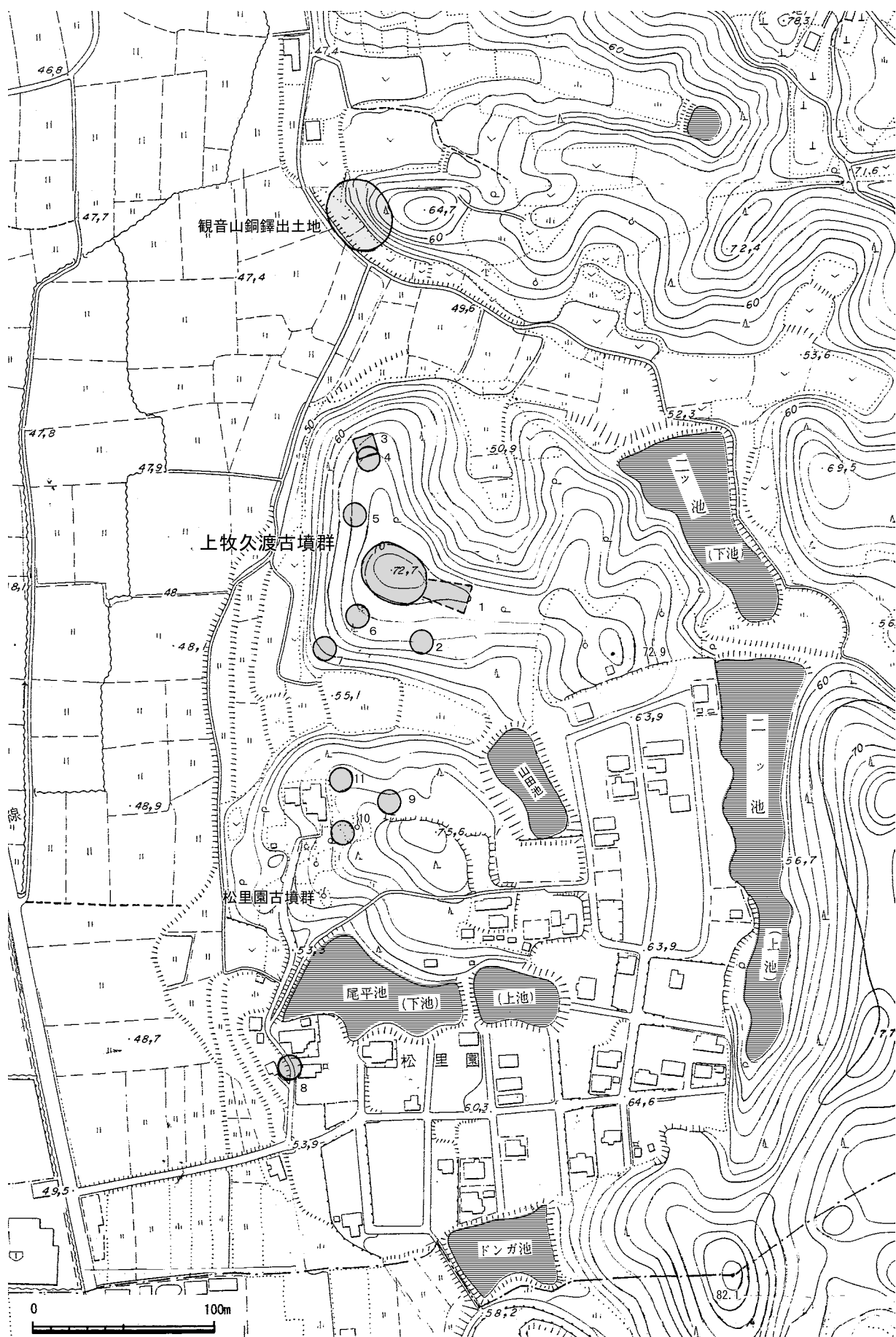
上牧久渡古墳群はこのような尾根の先端にあり、尾根は東側から続いている。古墳群東側の尾根はすでに開発で失われているが、ここにも隆起があり、標高72.9mと、1号墳とほぼ同じ高さをもっていた。開発前の2500分の一地形図には1号墳と相対する形で、ほぼ同形の前方後円形のコンターのめぐりがみられる。前方部のような尾根の高まりが北西に向いているのが注意されるが、古墳の存在については現在では明らかにすることはできない。

観音山銅鐸出土地 また久渡山の北の尾根はかつて「観音山」と呼ばれ、ここから「上牧銅鐸」が出土したことが知られる。『奈良県遺跡地図』による推定出土地点の範囲と上牧久渡古墳群の相互の距離はわずかに百数十mに過ぎない。江戸時代の正確な出土地点と出土状況の詳細はもちろん明らかではないが、古墳群と谷を挟んで相対する形となり、きわめて至近の位置関係にある。

松里園古墳群 久渡山の南の谷をはさんだ尾根上には松里園古墳群が存在する。古墳群と最も近接する古墳群である。松里園古墳群ではこれまで4基の古墳が知られ、このうち松里園1・2号墳は家形石棺を有する。1号墳は昭和29（1954）年に組合式家形石棺がみつき、存在が明らかになった。2号墳は昭和57年に調査が行われた。（榎考研1983a）報告によれば、破壊された家形石棺の底部と円筒埴輪片が出土した。円筒埴輪については、埴輪棺の可能性が考えられている。円筒埴輪は今のところ上牧町内の他の遺跡・古墳では出土していない。また上牧町内のみならず、馬見丘陵の西縁部でも、今のところ唯一の出土例となる。

松里園古墳群では家形石棺を有する古墳は2基とされるが、またこれらの古墳以外にも石棺出土地が伝聞として知られており、本来の古墳の数はさらに多かったようである。小規模な古墳群であるが、石棺を保有する古墳が多いことは特徴的である。

また、松里園古墳群からは、開壘時に出土したとされる須恵器が多く伝えられている。これらは6世紀前半～中頃を中心とし、その中には皮袋形土器も含まれている。



1. 1号墳 2. 2号墳 3. 3号墳 4. 4号墳 5. 5号墳 6. 6号墳 7. 7号墳
8. 松里園1号墳 9. 松里園2号墳 10. 松里園3号墳 11. 松里園4号墳

図4 上牧久渡古墳群周辺の遺跡と古墳 (1/3,000)

第4節 上牧久渡古墳群の試掘・確認調査と古墳の分布

(1) 調査区の設定

上牧久渡古墳群の位置する「久渡山」は馬見東丘陵の南西端に位置する標高72.7mの半独立丘陵で葛下川流域に面している。丘陵は東より延びてくるが、この部分は宅地開発により、すでに削平されている。古墳の位置する尾根の先端部分は南北約170m、東西約130mである。古墳群の所在する丘陵は、東から延びてくる尾根の先端が、L状に北に向かって屈曲する。尾根の最高所は屈曲部上の1号墳が所在するところである。ここから北と南西方向に尾根筋が走っている。試掘・確認調査（第1次）において、尾根最高所より北側へ調査区を5か所設けた。

(2) 試掘・確認調査の結果

第1トレンチ 調査区は長さ60m・幅2m・面積120㎡。調査区北端では、踏査においては墳丘が確認できなかったが、ここで3・4号墳の埋葬施設を検出した。また、3・4号墳と1号墳の間の第1地点では、踏査において不整形な古墳状隆起を認めた。調査では頂部の南で幅約4.0m、深さ約20cmの東西に延びる溝状の落ちを検出したが、古墳の周溝という確証は得られなかった（図5）。このトレンチからは甕の口縁部・底部片（図50-15・21）が出土した。

このように調査ではこの地点が明確に古墳の存在は明らかにはできなかったが、土器の出土もあり、その可能性を残すものである。なお、調査区南端は1号墳北裾にかかる。

第2トレンチ 調査区は長さ19m・幅3m・面積57㎡。張出状の小さな尾根上での木棺と思われる埋葬施設を2基確認した。また尾根頂部寄りでは調査では周溝とみられる落ち込みを検出し、これを5号墳とした。埋葬施設では刀子片（図67-2）が出土した。また、周辺の調査では古墳時代前期頃かと思われる土師器の破片が出土している（図版46下段）。

第3トレンチ 調査区は長さ52m・幅2m・面積104㎡。トレンチ東端では、踏査において直径約10mの古墳状隆起が報告されている。表土の掘削を行ったが、それ以下の調査は実施しなかった。

第4トレンチ 調査区は第1地点南東斜面に設定した。長さ11m・幅3m・面積は33㎡。表土下20～30cmで地山に至る。調査においては、遺構・遺物は検出できなかった。

第5トレンチ 調査区は長さ16m・幅2m・面積32㎡。ここでは墳丘裾とは確認できなかった。深さ約40cmで地山に達する。流土中より須恵器片、サヌカイト片が出土している。

また、踏査により1号墳から南西に延びる尾根上で古墳状隆起が確認され、6号墳とした。ここ6号墳の墳頂には、南に開く攪乱墳の跡が残っていた。また、さらに尾根の先端にはやや不整形であるが古墳状隆起が認められたため、これを7号墳とした。

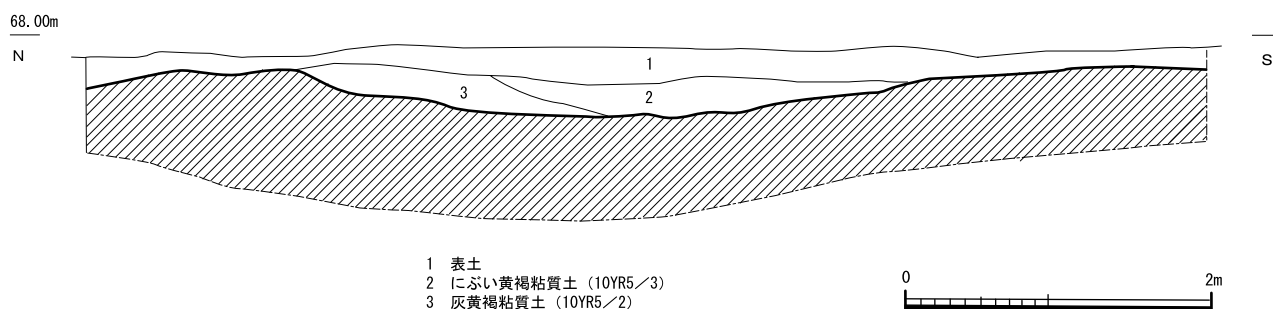


図5 第1トレンチ溝断面図 (1/50)

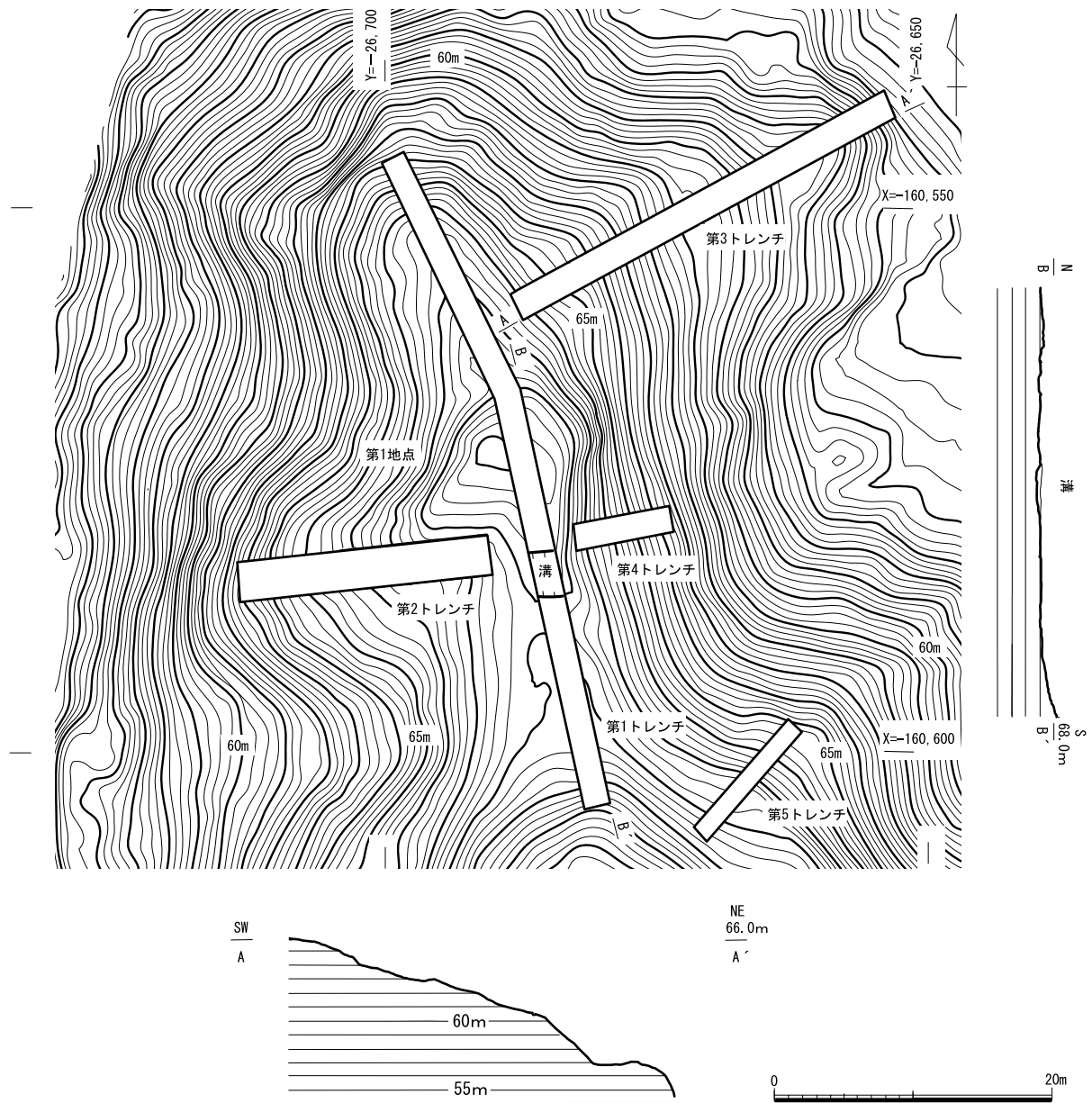


図6 上牧久渡古墳群試掘・確認調査（第1次）位置図（1/500）



写真5 第1トレンチ全景（南より）



写真6 第3トレンチ全景（南西より）

表1 上牧久渡古墳群調査年度

年 度	調査次数	古墳名	墳 形	規 模	埋葬施設	時 期
平成23年度	第1次調査	3～5号墳				
平成24年度	第2次調査	3号墳	方墳	一辺約15m	3基	古墳時代前期
		4号墳	円墳	径約18m	1基	古墳時代後期
	第3次調査	5号墳	円墳	径約18m	2基	古墳時代後期
平成25年度	第4次調査	2号墳	円墳	径約16m	2基	飛鳥時代
平成26年度	第5次調査	1号墳	前方後円墳	全長約60m		古墳時代前期？
未調査の古墳		6号墳	円墳	径約16m		飛鳥時代
		7号墳	円墳	径約18m		

表2 上牧久渡古墳群関連出版物

発行年	発行機関	資 料 名
平成24年3月31日	奈良県立橿原考古学研究所	「久渡古墳群踏査報告」『奈良県遺跡調査概報』2011年第1分冊
平成24年8月5日	上牧町教育委員会	『久渡古墳群から出土した画文環状乳帯神獣鏡』
平成25年7月13日	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	「久渡3・4号墳」『大和を掘る』31
平成26年2月16日	上牧町教育委員会	『久渡2号墳発掘調査現地説明会資料』
平成26年4月26日	大阪府立近つ飛鳥博物館	『ヤマト王権と葛城氏』
平成26年7月19日	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	「久渡2号墳」『大和を掘る』32
平成27年3月7日	上牧町教育委員会	『上牧久渡古墳群出土品展示会資料』
平成27年3月7日	奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会	「上牧久渡古墳群の調査」同年報－平成26年度－
平成27年3月31日	上牧町教育委員会	本 書



写真7 上牧久渡古墳群全景（南より・1982） 奈良県立橿原考古学研究所提供

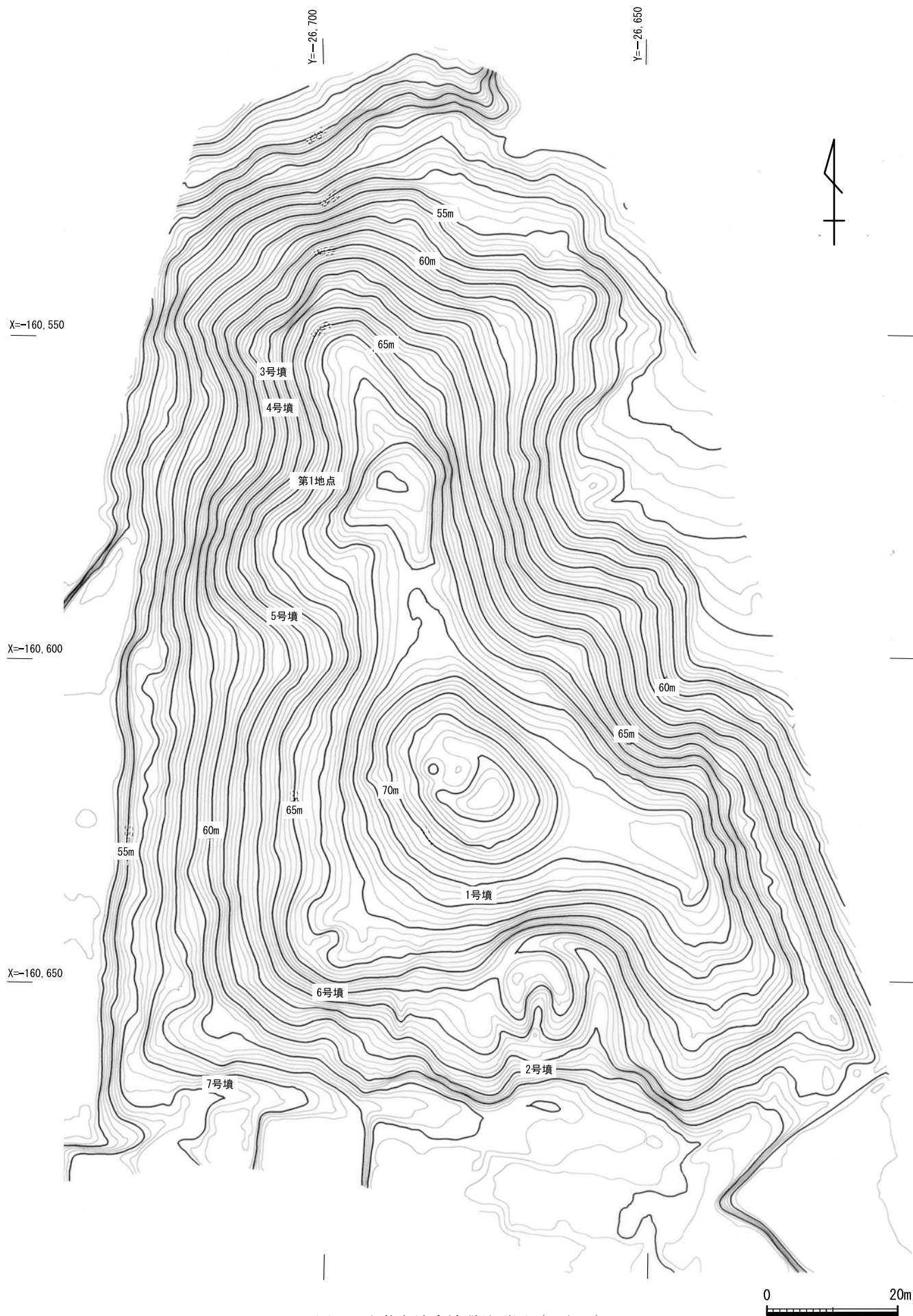


图7 上牧久渡古墳群地形図 (1/800)

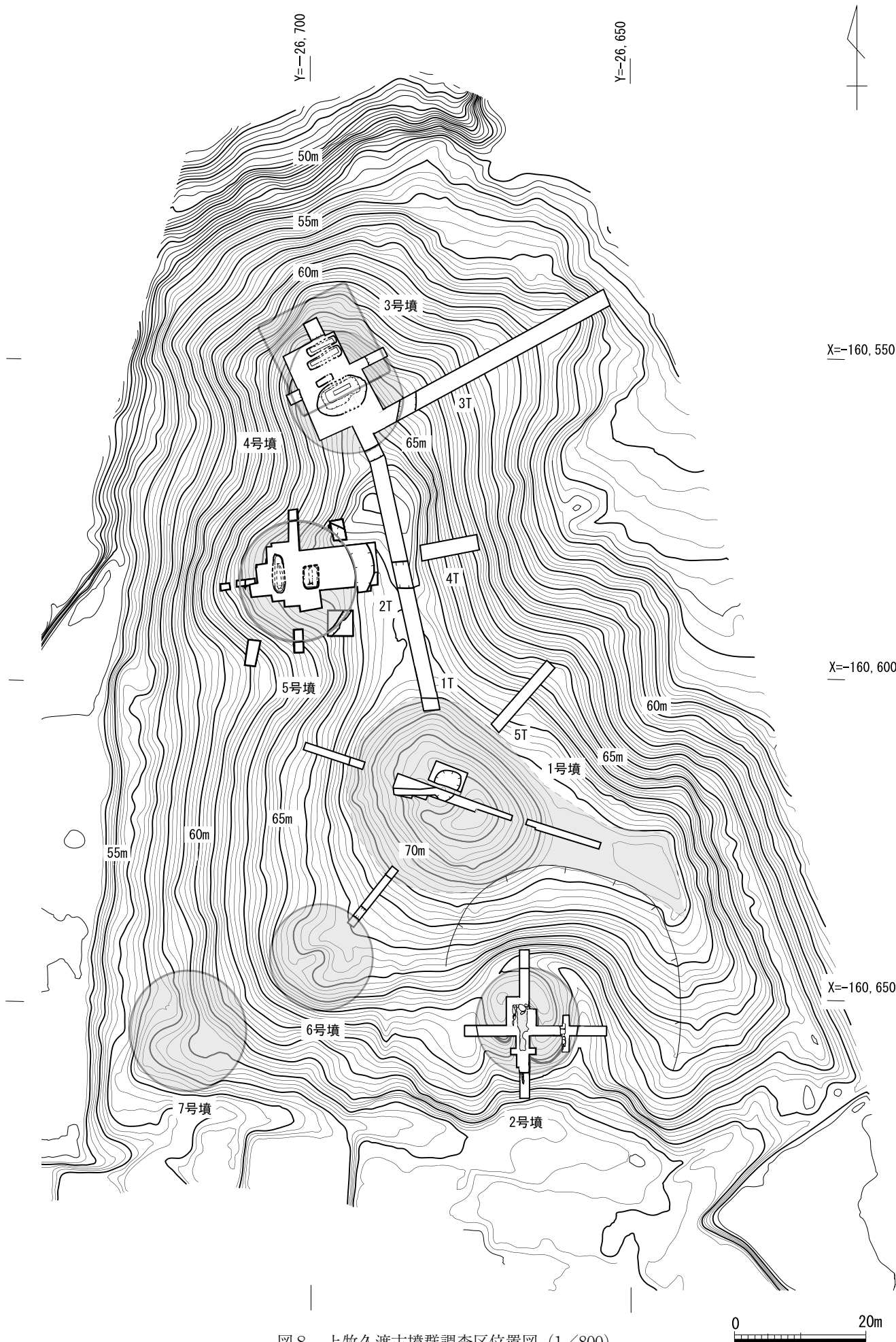


图8 上牧久渡古墳群調査区位置図 (1/800)

第Ⅲ章 古墳の調査

第1節 上牧久渡1号墳

(1) 立地

上牧久渡1号墳は、古墳群の中で最も早く認識されていた古墳である。これまで『上牧町史』とそれに基づいた『奈良県遺跡地図』では径20mの円墳とされてきた。その後、平成23年の踏査により前方後円墳の可能性が高くなったと報告され、その全長は約60mとされる。

1号墳は丘陵部ほぼ中央の最高所に位置している。墳丘の頂部の標高は72.7mで、ここから北方、南西、南東の3方向に尾根が延びる。南東には前方部となる尾根が続くが、先端は開発によりすでに失われている。北方の尾根先端には3・4号墳、南西の尾根上には6・7号墳が位置する。また、南斜面には2号墳があり、その周溝北端は1号墳墳丘裾付近にまで及んでいる。

(2) 墳丘

1号墳墳丘頂部南東の尾根は、古墳の前方部側にあたり、その頂部はかなり不自然な平坦面となっている。おそらく人為による削平が考えられるが、調査ではここで飛鳥時代頃の須恵器片がかなり出土している。このため、削平の契機は2号墳の造営時であった可能性が高い。また旧地形図との比較によると、前方部と推定される尾根の先端は、住宅開発にともなう掘削によってすでに失われていることが判明した。

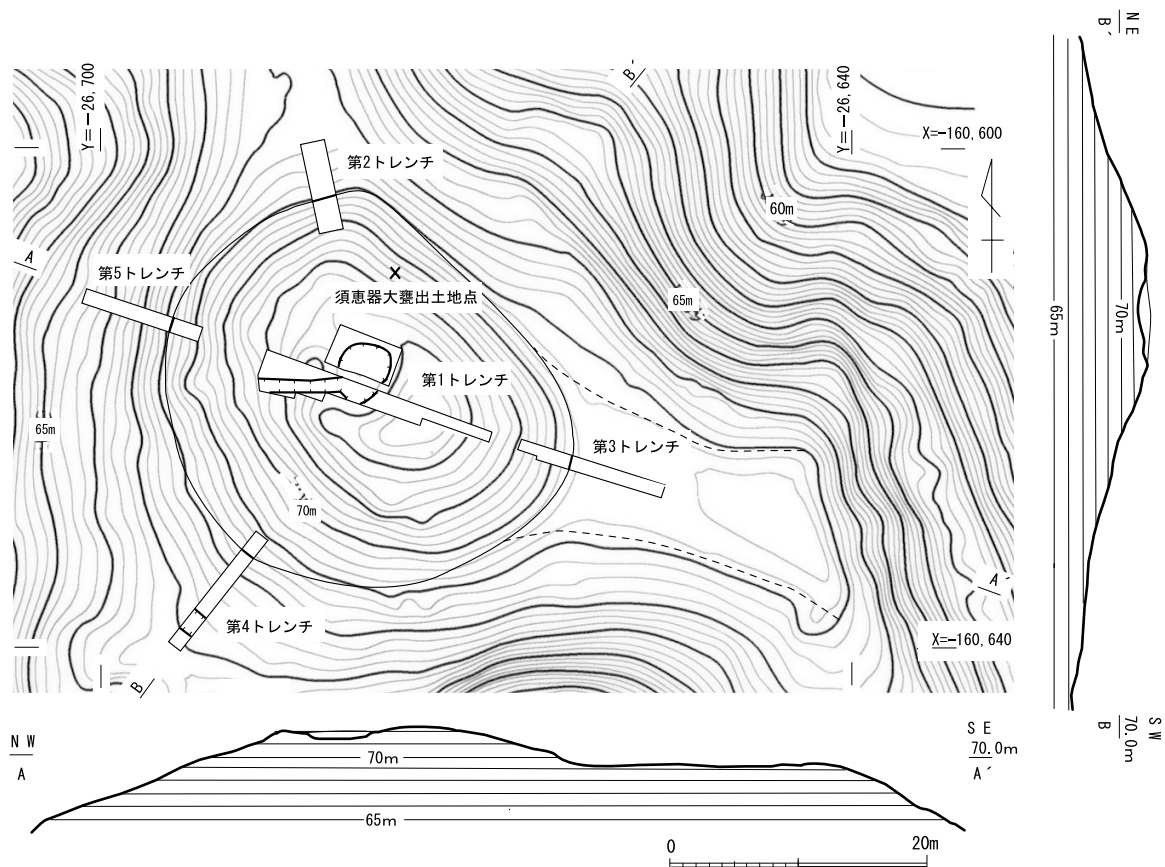


図9 1号墳調査位置図 (1/600)

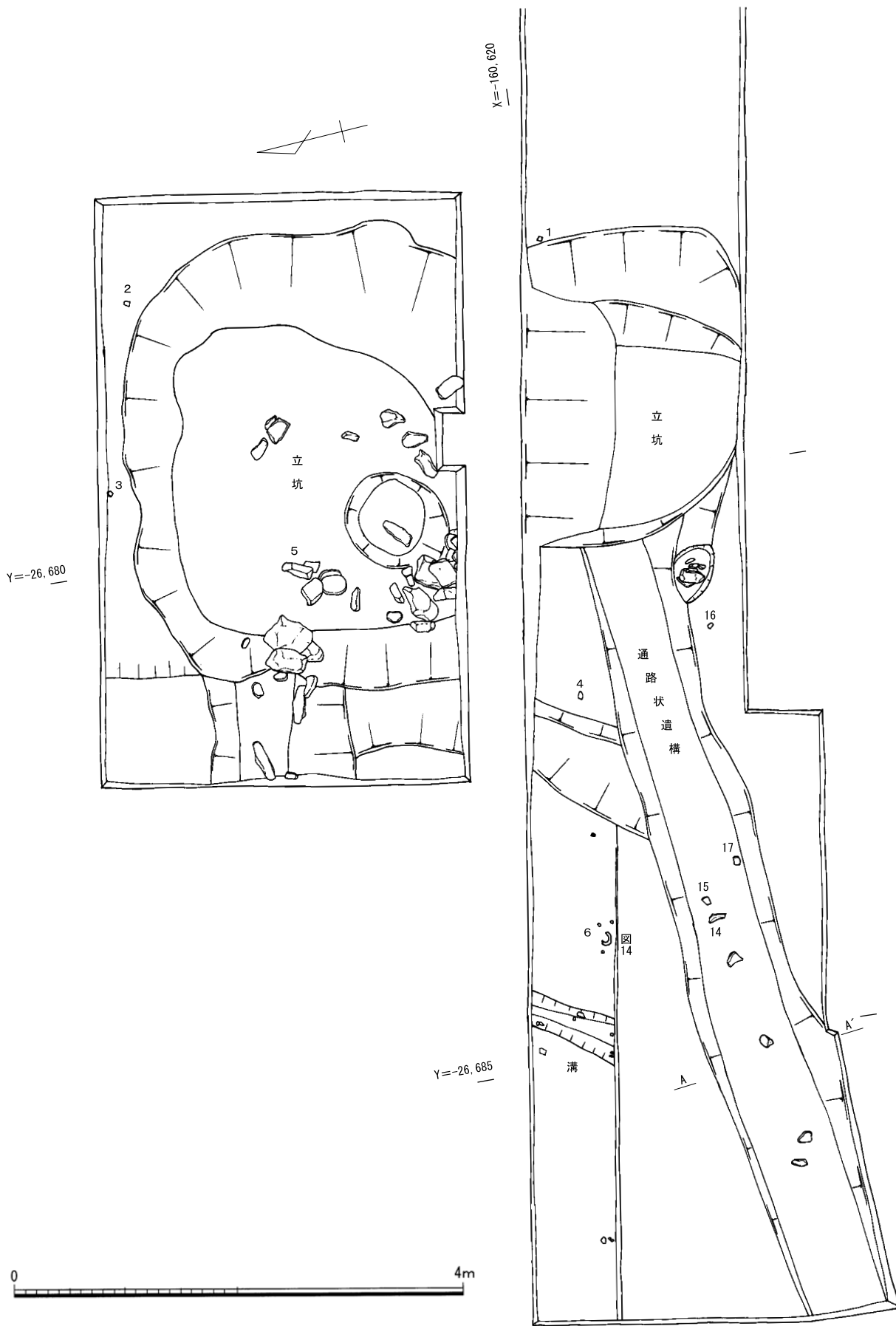


図10 1号墳第1トレンチ中央平面図 (1/50)

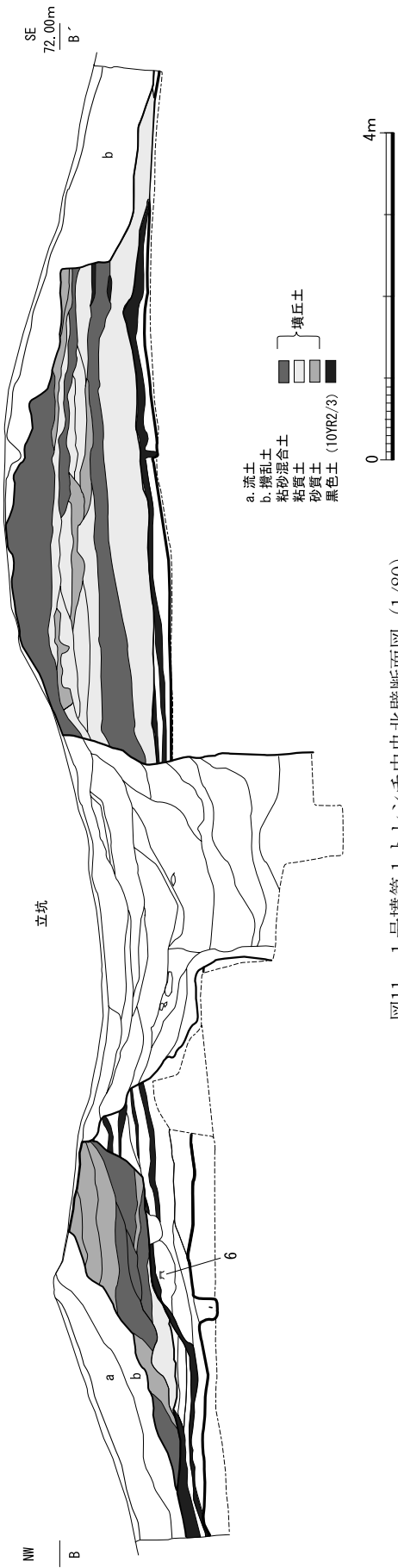


図11 1号墳第1トレンチ中央北壁断面図 (1/80)

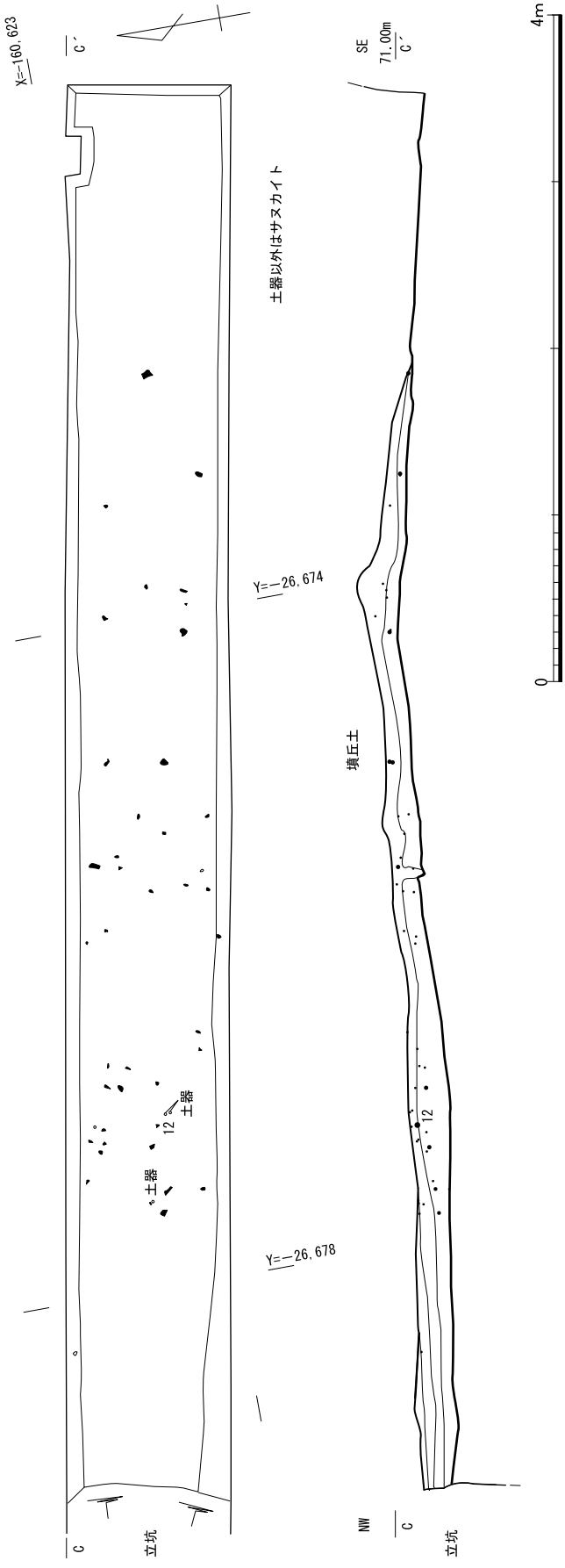


図12 1号墳第1トレンチ東下層遺物出土状況 (1/40)

以上のような改変により、前方部としての確認ができなかった。また、形態的には北側くびれ部がはっきりしないなどの点はあるが、前方後円墳としての可能性は残る。

今回、新たに行った測量によれば、円丘部の現状形態は主軸を北西－南東に向ける長径約33m、短径約28mの楕円形に近い形状を呈している。北東側がやや急傾斜で裾が直線的であるのに対し、南西側は緩傾斜で裾広がりとなっている。楕円形としても、やや不整形で、部分的には隅丸の長方形ともいえる。墳丘の範囲については、尾根に面した北側と南東側はほぼ明瞭であるが、西から南東、南にかけて墳丘裾は明確ではない。また、墳頂部に径約7.5m、深さ約1mの大きな陥没が見られた。

(3) 調査の結果

調査区の設定 トレンチは5個所に設けた。まず、前方後円墳の可能性があるので、その主軸に沿って北西より第5・1・3トレンチを、間隔を空けて設けた。北の尾根に向けては墳丘裾を確認するために第2トレンチを、また北西の尾根の下方に向けて6号墳との間の状況を確認するために第4トレンチを設定し、調査の状況に応じて拡張を行った。

第1トレンチ（面積36㎡） 墳丘上の攪乱墳を中心に設けたトレンチである。攪乱墳の状況を確認し、埋葬施設の有無や古墳の築造時期を把握する目的で設定した。トレンチ中央部においては、近代頃の掘削による長径約6.2mの楕円形の立坑と、それにつながる幅約1m、深さ1.5mの南西に延びる細い通路と思われる溝が検出された。この立坑は地表下3.5m以上に達するものである。また立坑・溝中には搬入された川砂の層があり、立坑上面の攪乱土中には安山岩・凝灰岩片のほか、須恵器・土師器片などが含まれていた。

この遺構は、その掘削時期の新しさより、おそらく近代にかかる防空施設などに関連する遺構と思われる。攪乱土中の石材・遺物について石材の同定をされた奥田尚氏は、これらは立坑埋め立て時に周辺より持ち運ばれたものではないかとされ、1号墳に伴う可能性はないと思われる。

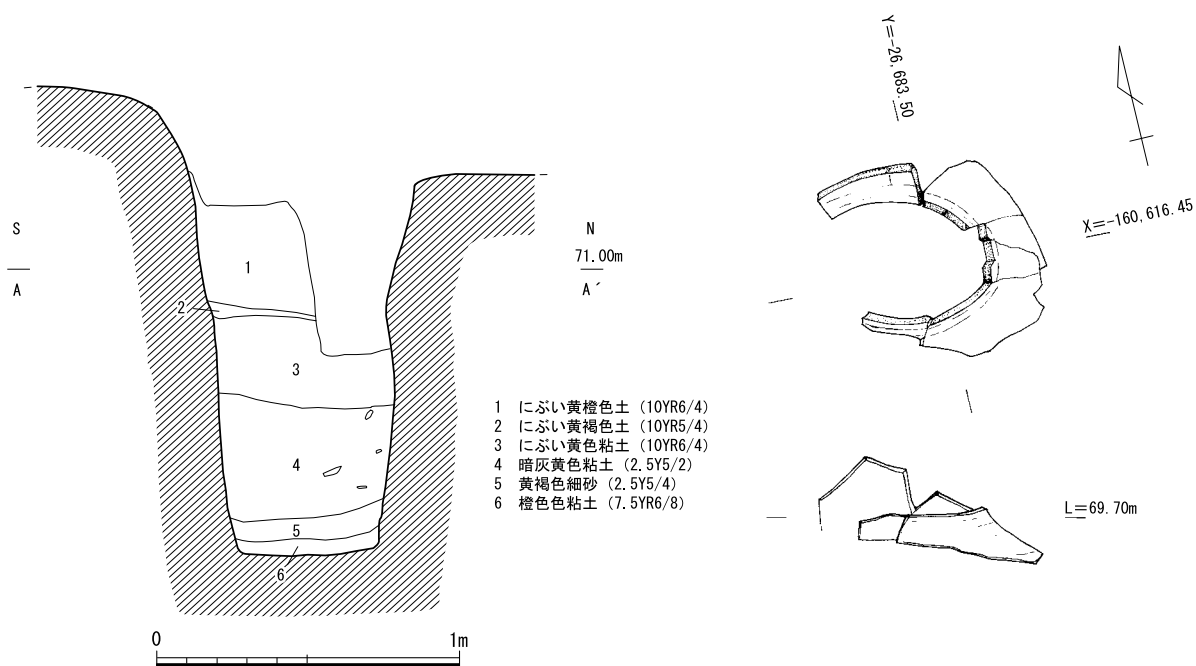


図13 1号墳第1トレンチ通路状遺構断面図 (1/30)

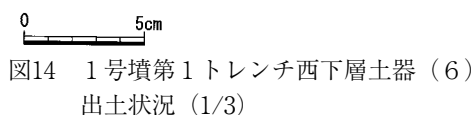


図14 1号墳第1トレンチ西下層土器(6)出土状況 (1/3)

墳丘中央部の立坑周囲の断面観察とトレンチ調査において埋葬施設にかかわる遺構の検出を行ったが、墳丘土及び旧地表・地山面においては墓壙などの遺構は確認できなかった。埋葬施設は立坑の掘削によりすべて失われたものと思われる。このため、埋葬施設はこの墳頂部の直径約6 mの範囲内に収まる規模であったと思われる。

墳丘築成土は、立坑部分をはさんだ東西のトレンチで確認した。墳丘下の大阪層群の地山上には古墳築造以前の遺物包含層があり、この上に黒色土が存在する。この黒色土は墳丘下ほぼ全面に広がっており、遺物も含み古墳築造時の旧地表と思われる。

トレンチ西においては、この黒色土は中央部に向けて段をもって高くなり、その上にさらに粘質土をはさんで3枚見られる。これらの黒色土は南東に向けてやや上昇する。複数枚みられる理由は不明だが、粘質土と密着しており、築成土ではなく旧地表の一部と思われる。これらの土層を整形した後に墳丘土が積まれている。この築成土は地山である大阪層群中の粘質土と砂質土を使用し、またこれらの混合土をほぼ水平に積むが、整然とした互層積みではない。各層の厚さは20cm前後である。

トレンチ東でも同様に粘質土、砂質土とその混合土を積んでいる。トレンチ西とは異なり、旧地表が平坦なため、ほぼ互層積みに近い水平堆積である。上層は混合土、下層は粘質土で築成されている。中層においては粘質土を主体に砂質土を交えており、ここでは10数cmほどの厚さで積まれている。

墳丘下の調査 墳丘の断ち割り調査において、旧表土面及びその直下の大阪層群が土壌化した粘質土中より土器細片とサヌカイト製石鏃（図19-12）や剥片が散在的に多数出土した。土器片は極小のものが多く、時期の判明するものは、わずかにトレンチ西で出土した庄内期かと思われる中型壺の上半部のみである（図19-6）。また、この包含層と以下の地山はほぼ同質に近く、この粘質土層中では明確な遺構は検出されなかったが、トレンチ西幅32cm、深さ20cmの溝状の遺構が検出された。

このように、1号墳築造前には弥生・庄内期の遺跡が存在したとみられる。

第2 トレンチ（面積16㎡） 墳丘の北には第1次調査のトレンチ端が1号墳墳丘に及んでいた。このため、このトレンチの北端を再発掘し、さらに墳丘寄りに約0.8m延長して長さ8 m、

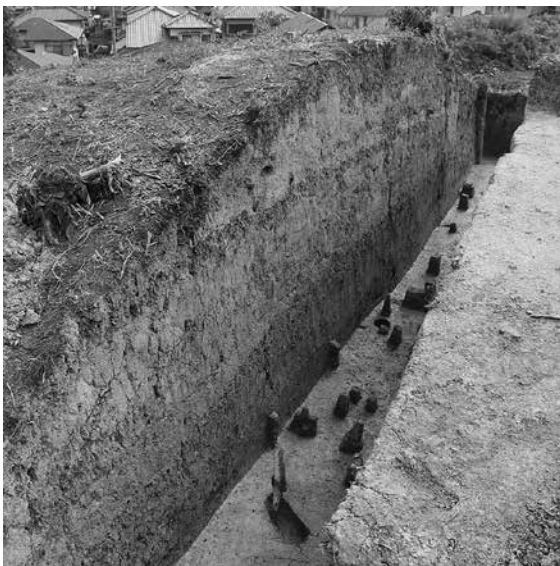


写真8 第1トレンチ東下層遺物出土状況（西より）



写真9 第1トレンチ東下層石鏃(12)出土状況

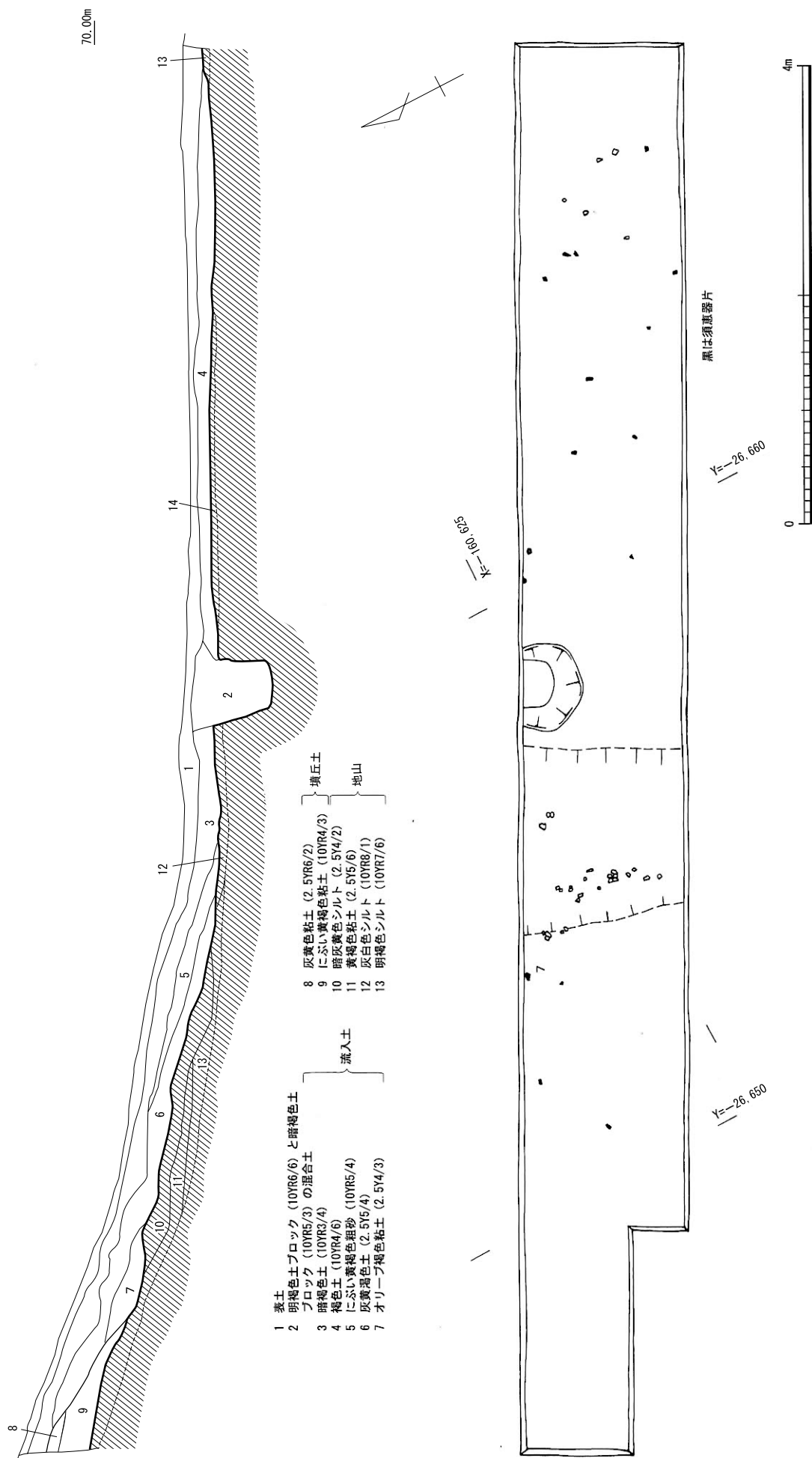


図15 1号墳第3トレンチ (1/50)

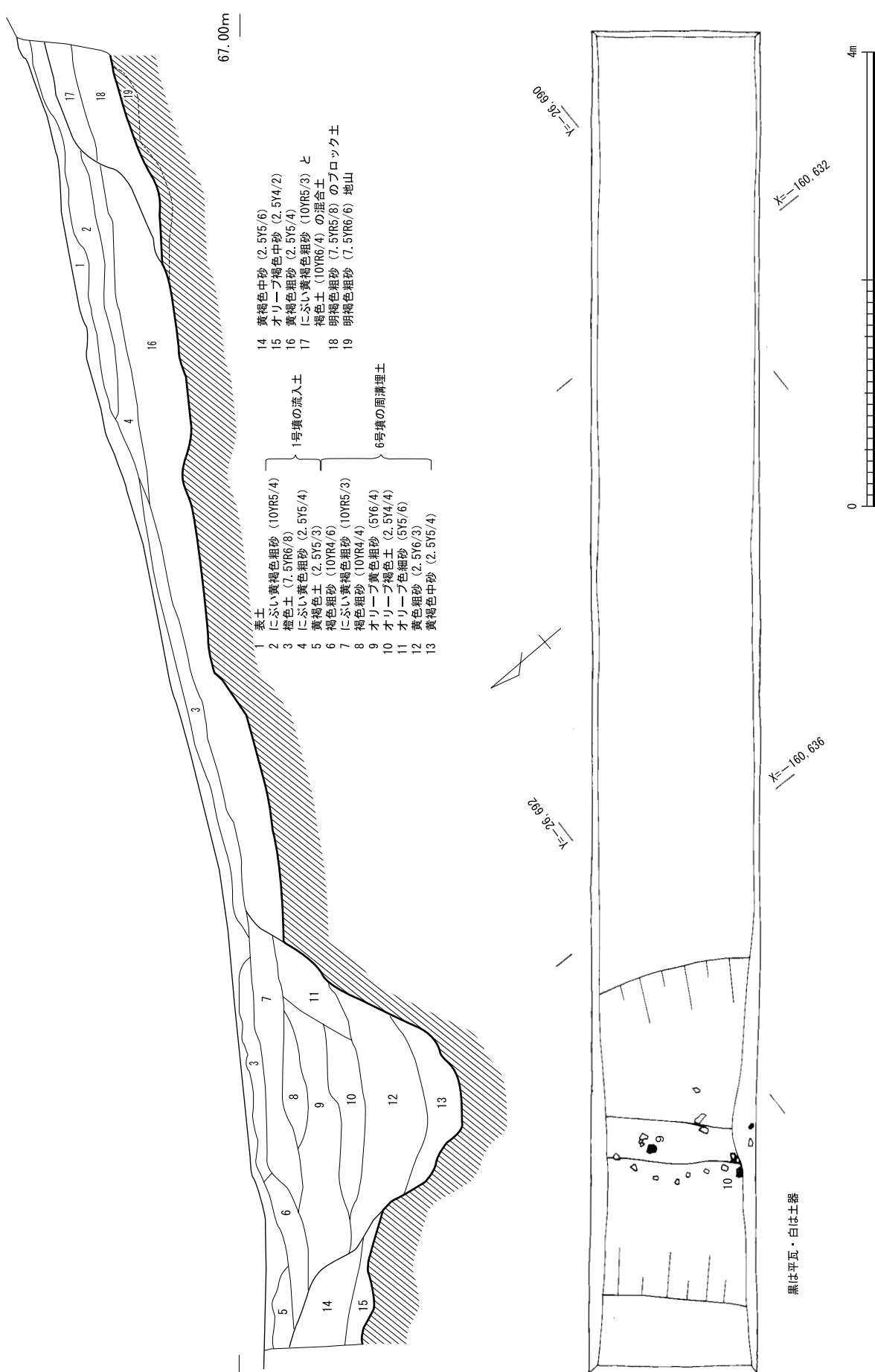


図16 1号墳第4トレンチ (1/50)

幅2mのトレンチを設定した。

この調査区では表土が薄く、北端では表土下約数cm、中央部において約20cmで灰白色粗砂の堅い地山に至る。墳頂部の地山とはかなり異なっている。調査区南端より北へ約80cmにわたって茶褐色土が混じる褐色粘土層がみられた。混合土のため、この土はおそらく墳丘盛土の一部と思われる。

墳丘裾は明確ではないが、調査区南端より北へ約3mのところ、わずかではあるが地山の変化点が認められる。墳丘土と思われる褐色粘土層はここまで及ばないが、流失したものと思われる、この付近を墳丘北端と推定しておきたい。遺物は出土しなかった。

第3トレンチ（面積18㎡） 墳頂南東部の後円部裾から前方部にかけて長さ12m、幅1.5mで設定した。平坦地においては、堆積はほとんどなく、厚さ約20cmで表土・褐色土層が均一に広がり、以下は地山に至る。この褐色土中には飛鳥時代頃の須恵器片、瓦器片、近世土器片が含まれており、この平坦面は自然の尾根の形状ではなく、その形成は人為によるものと思われる。

平坦面と西の傾斜面との変換点付近はやや浅い溝状の落ち込みとなっている。その内部の堆積土には土師器の破片が集中して出土した。しかし細片で遺存状態が不良のため、所属時期は明らかではない。しかし、その近くで飛鳥時代頃の甕の把手（図19-8）が出土しており、おそらくこの時期のものと思われる。

トレンチ西端の墳丘東斜面においては、西端より約1.2mの個所で明黄褐色のブロック土を含む黄褐色粘質土が、薄い炭化物層を挟んで地山上で検出された。この層はおそらく墳丘土であ

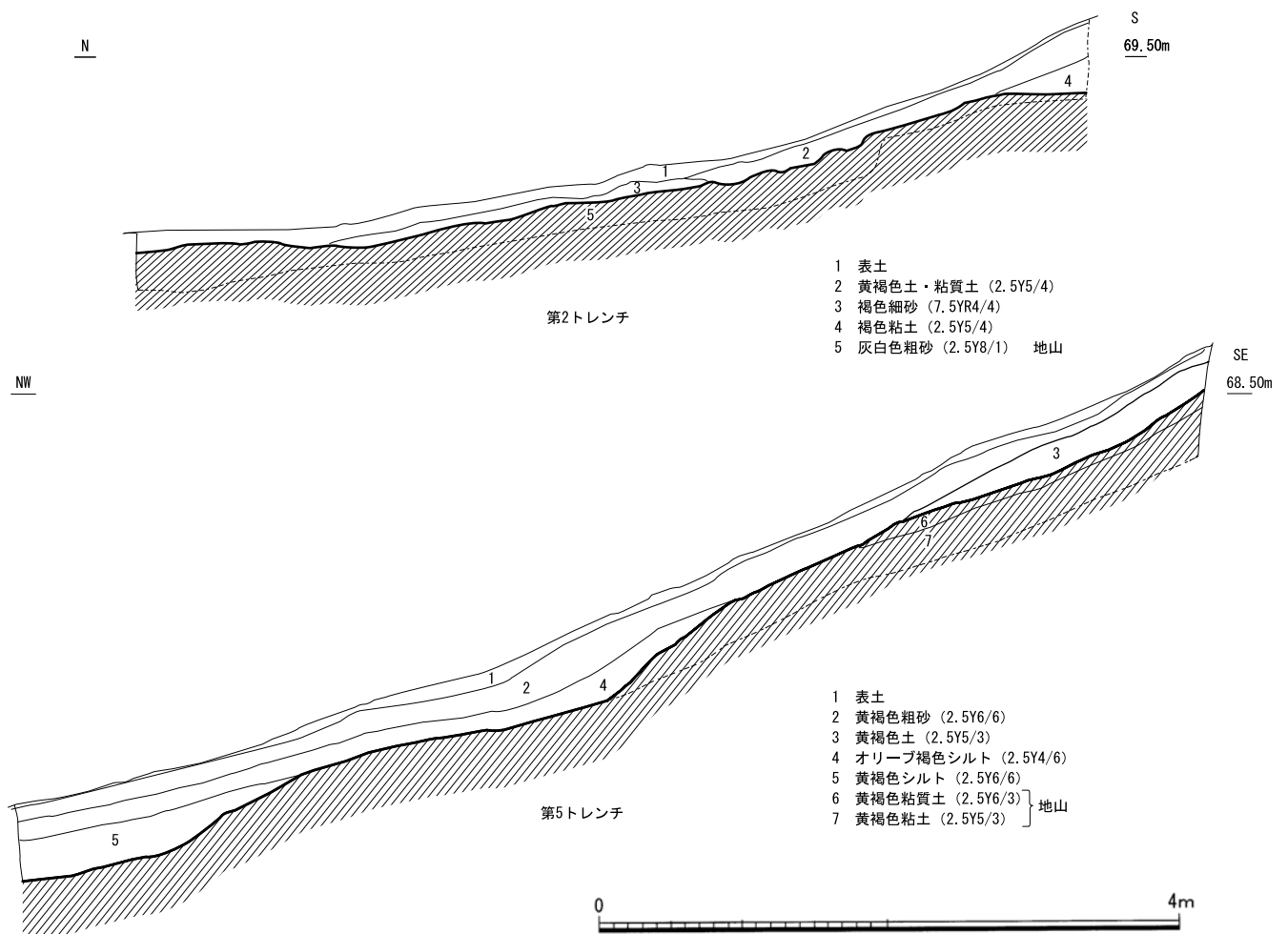


図17 1号墳第2・5トレンチ断面図 (1/60)

り、墳丘裾は傾斜変換点付近でよいと思われる。この付近の流土中からは須恵器壺片（図19-7）が出土している。

第4トレンチ（面積18㎡） 1号墳の墳丘裾と、その南西に位置する6号墳との間の状況を確認するために設定した長さ12m、幅1.5mの調査区である。ここは緩傾斜地で、外見では墳丘裾は明瞭ではない。トレンチ北東端より約2mの所で地山上に明褐色粗砂などの層があり、おそらく墳丘土と思われる。また、ここは地山がわずかに上昇するところでもあり、おそらくこの付近が墳丘の裾と思われる。

調査区南西端において6号墳の周溝を検出した。1号墳墳丘と思われる明褐色粗砂層の上には流土と思われる黄褐色粗砂層が堆積しているが、周溝はこの層より掘り込まれている。周溝の規模は上幅約3.5m、深さ約1.8mで底部の平坦面は幅約50cmである。溝の断面形は浅いV字形を呈している。この周溝は6号墳の背後の尾根筋を切って半円形にめぐっているものと思われる。

周溝内には黄褐色系の粗砂が充満していた。この中で平瓦片1点（図19-9）と土師器甕片が集中して出土したのは中層にあたる厚さ約60cmの黄色粗砂層のみである。最下層の黄褐色中砂層（厚さ約30cm）や上層（厚さ90cm）では遺物の出土は全く認められなかった。また周溝埋没後の橙色土層からは平瓦片（図19-10）が1点出土している。

第5トレンチ（15㎡） 1号墳の北西裾に設定した長さ10m、幅1.5mの調査区である。

トレンチ北東端より北西約2.5mまで粗砂を含む黄褐色土層が広がり、おそらく墳丘土と思われる。表土下の粗砂層からは、須恵器片や凝灰岩・輝石安山岩片がみられた。トレンチ下方では地山上にシルトの流土が堆積し、ここから須恵器片やサヌカイト片が出土している。

トレンチ内においては地山傾斜面には大きな変化はなく、古墳の裾は明らかではないが、墳丘土と思われる黄褐色土層の及ぶ範囲が墳丘の範囲と推定したい。

墳頂斜面の須恵器大甕片 墳頂の北東斜面で表土中より、多数の須恵器大甕片（図20）がまとめて出土した。これらは表土の腐植土中に含まれ、部分的に露出していたようである。この須恵器片には粘土が付着していることから、おそらくかなり新しい時期に出土し、ここに置かれたものと思われる。この甕はかなりの大型品であり、もし、この古墳に伴うものであれば、壺棺として埋置されたものである可能性がある。



写真10 第5トレンチ全景（北西より）



写真11 墳丘表土土器出土状況（東より）



図18 1号墳墳丘表土土器出土状況 (1/15)

(4) 出土遺物

1) 土器・瓦 (図19・20)

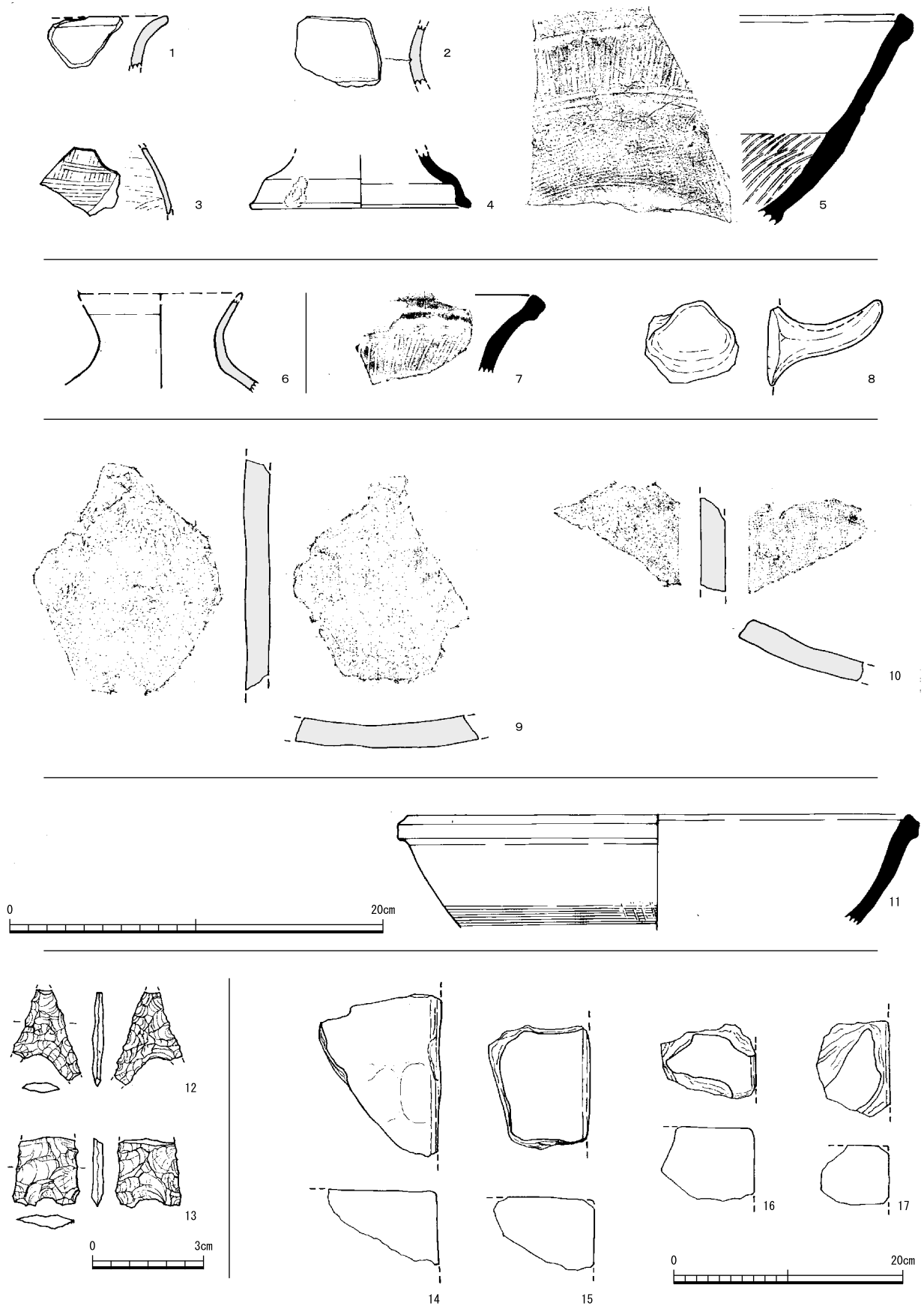
土師器・須恵器 攪乱墳内、墳丘下などより庄内式前後の土器や土師器が出土した。また攪乱墳内、墳丘斜面、各トレンチの流土中などより古墳時代から飛鳥時代にかけての須恵器が断片的に出土した。

攪乱土中より土器細片が出土した。1は破片であるが、口縁部が外反する壺である。2も壺の頸部、3は布留式甕の体部片である。外面にはハケ目残り、内面には横位のヘラケズリが顕著である。

須恵器については、4は台付壺の脚部。5は器台の受部破片である。外面に波状のヘラ描き内面下部に同心円文叩き目が残る。18は推定高90cmほどの大型の甕である。体部中央は失われている。口縁部外面を櫛歯刺突文、櫛描波状文などで飾る。底部の外面には、径約13cmの焼成圧痕が5箇所残る。

墳丘下より出土した土器細片は多いが、形態が知られるのは中型壺6のみであった。この壺はかなり摩耗しているが、口縁部はやや直線気味に外傾しているのが形態的な特徴である。

平瓦 第4トレンチ内で検出された6号墳の周溝内(9)と表層(10)より別個体の平瓦が出土した。共に凸面部はナデが加えられ、無文である。凹面は布目を縦のナデにより、擦り消されている。10には分割破面に調整を加える。焼成は灰色で堅い。これまで2号墳の調査で出土した平瓦とほぼ同じ特徴をもつ。



1～5.第1トレンチ攪乱土 6.1号墳下包含層 7・8.第3トレンチ 9・10.第4トレンチ 11.墳丘採集
12.1号墳下包含層 13.墳丘表採集 14～17.第1トレンチ攪乱土

図19 1号墳出土遺物（1）（石器2/3・土器・平瓦1/3・凝灰岩1/5）

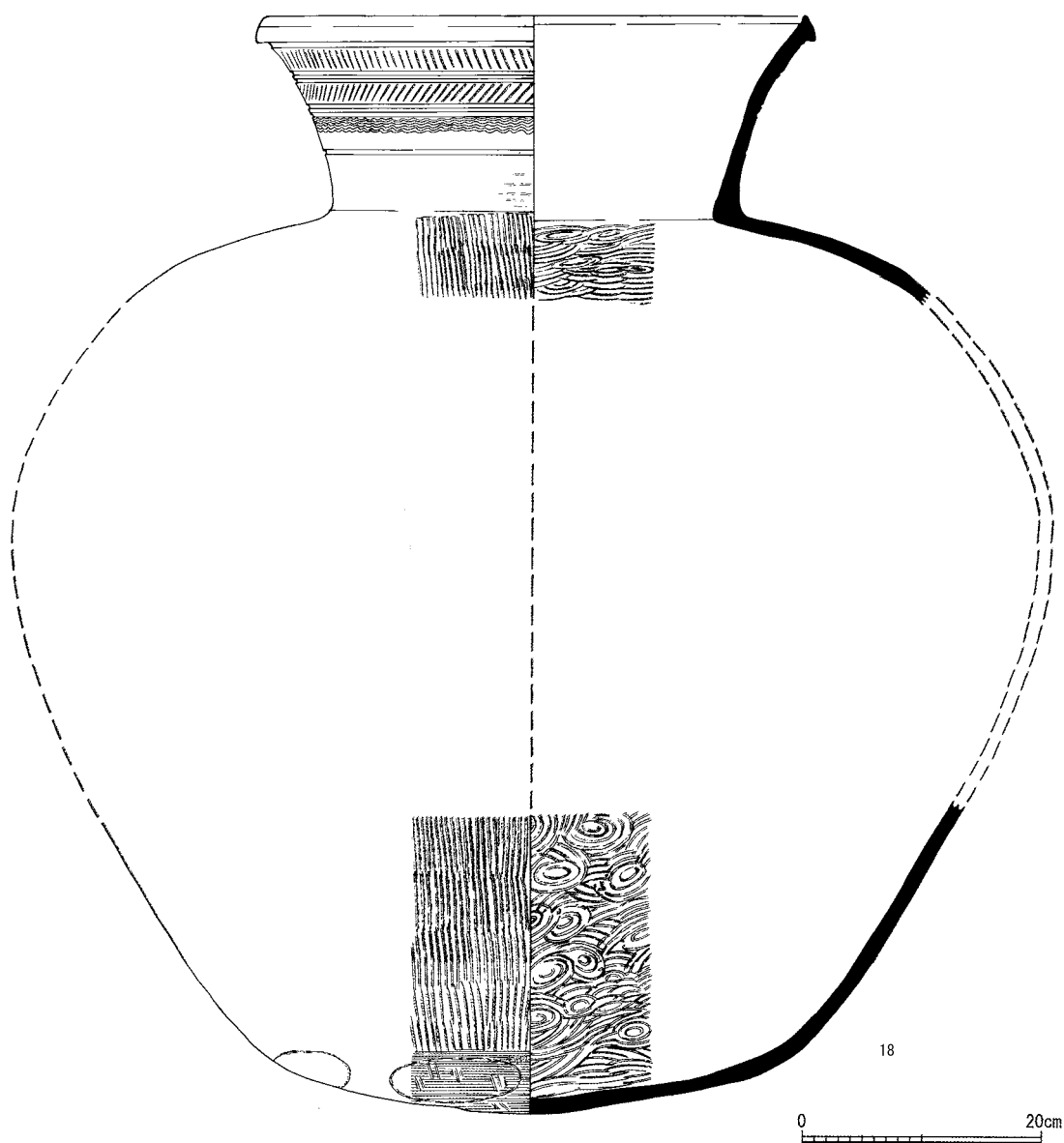


図20 1号墳出土遺物（2）（1/6）

2) 石製品

石鏃 12・13はサヌカイト製の凹基無茎石鏃。12は現存長2.50cm、現存幅1.79cm、厚さ0.38g、重量0.97g。13は現存長1.82cm、幅1.63cm、厚さ0.31cm、重量1.18g。

墳丘下よりサヌカイト製の石鏃・剥片が出土している。墳丘や各トレンチでもこれらが出土しているが、いずれも墳丘下の遺跡にともなうものであろう。また攪乱墳内より凝灰岩・安山岩片が出土したが所属時期が不明である。

石製品 攪乱墳内より、凝灰岩片が出土したが、その中には14～17のように加工面を持つものが含まれていた。

(5) 小結

墳丘 1号墳の墳形について前方後円墳の可能性をもつが、前方部先端付近はすでに開発による掘削で消失している。また前方部の平坦面も不自然な本来の形状ではなく、2号墳造営時に改変を受け、平坦化している可能性が高い。

1号墳の円丘部の墳形は正円を成さず、楕円形を呈し、部分的に隅丸方形のところもある。長径約33m、短径約28mである。立坑の掘削や開壘などの影響も考えられようが、後世の改変が墳丘下方部にも及んだ形跡は見られない。1号墳の立地は三方に分かれる尾根の頂部にあたり、墳丘の築造が旧地形をかなり残すものであったことに起因する可能性もあろう。

埋葬施設の存在 墳丘頂部で近代に掘削された立坑は直径6m以上に及び、これによる損壊のため、調査範囲内では埋葬施設の痕跡を確認することができなかった。墳丘封土が存在するので、本来的には墳頂中央部には埋葬施設が存在したものと考えられる。

古墳の築造時期 1号墳の築造時期については、攪乱土中より古墳副葬にかかわる遺物がみられず、また出土土器が各時期にわたっているため、明確にすることはできなかった。

攪乱土中には須恵器片・土師器片、庄内式前後土器かと思われる土器片が出土した。須恵器片については、6・7世紀にわたるものが多い。このほか1点ではあるが、古墳時代前期の布留式土器の甕体部片も出土している。

なお、後述するように、古墳築造以前に弥生から庄内期頃の遺跡が存在しており、これらの遺物も墳丘土中に含まれているものと思われ、古墳の築造時期については、出土遺物からは確定することはむずかしい。

1号墳の位置は古墳群の所在する丘陵の最高所にあり、古墳立地としては最良の場所にある。しかも墳丘規模は古墳群の中では最も大きい。また墳丘が正円を成さず、楕円形ということも特色と言える。墳丘などからは須恵器片も出土してはいるが、少なくともこのような立地や墳形・墳丘規模からは古墳時代後期の古墳とは考えがたいと思われる。

そこで、須恵器以外の出土土器をみると、1点ではあるが布留式甕片も含め、古墳時代前期から弥生・庄内期頃の土器が主体である。このような出土土器の内容と下層遺跡の時期も考慮すれば、1号墳の時期は3号墳とも近い古墳時代前期頃の可能性を考えておきたい。

1号墳下層遺構・遺物の検出 第1トレンチの墳丘下、旧地表とその直下の遺物包含層より、多くの土器細片、サヌカイト製石鏃・剥片が出土した。また溝かと思われる遺構も検出した。出土土器が細片でなかつ、遺存状態がきわめて悪いため、その時期についてははっきりしない。わずかに形態が知られる壺形土器は口縁部が大きく外反せず、やや直に延びるため、おそらく庄内期に含まれるものと思われる。

石器の存在を含め、おそらく弥生から庄内期にかけての遺跡が存在したことは明らかであろう。遺跡は小規模であると思われるが、馬見丘陵においてはこの時期の遺跡はこれまで知られていない。またこの遺跡の眼下にあたる葛下川付近との比高差は約24mあり、葛下川流域の地域でも数少ない高地性の遺跡と思われる。

6号墳の築造時期 1号墳第4トレンチの調査で6号墳の周溝内中層より平瓦片と土師器が出土した。この平瓦はこれまで2号墳で出土した平瓦と同一の特徴を持ち、土師器もおそらく飛鳥時代に属するものである。これらの遺物が6号墳周溝掘削直後ではなく、堆積がやや進んだ中層で集中していること、2号墳とほぼ同じ時期の遺物であることは注意されよう。

このため、この2基の古墳はいずれも飛鳥時代の古墳ということになるだろう。

第2節 上牧久渡2号墳

(1) 立地

上牧久渡2号墳は古墳群が所在する丘陵南斜面のほぼ中央に位置している。古墳群中の他の古墳が丘陵の尾根筋上に位置することと対照的で、明らかに飛鳥時代の古墳立地の特徴を示している。丘陵の最高所には1号墳が立地するが、その南に2号墳の周溝北端が接するような、近接した位置関係にある。

古墳の東側には尾根が南方に延び、周溝の東側は谷地形を利用しているようである。古墳は西の尾根のやや斜面地に位置しているようである。このため古墳はやや西の丘陵に寄せられた立地となっている。古墳前面の谷地形はすでに埋立が行われ、現在は宅地化している。かつての谷地形の標高は55.1mでここから現墳丘頂（標高64.5m）までの比高差は約9.5mで、谷側からは墳丘を見上げるような状態にある。

(2) 墳丘

墳丘の現状 墳丘規模は墳径約16m、高さ約3mの円墳である。墳丘は南斜面にあり、東西の尾根に挟まれる形にある形にあるが、やや西寄せの状態となっているため、墳丘東側がかなり広い。墳丘周囲は周溝と共に遺存状態はかなり良好である。しかし、墳頂には南北約12m、東西約

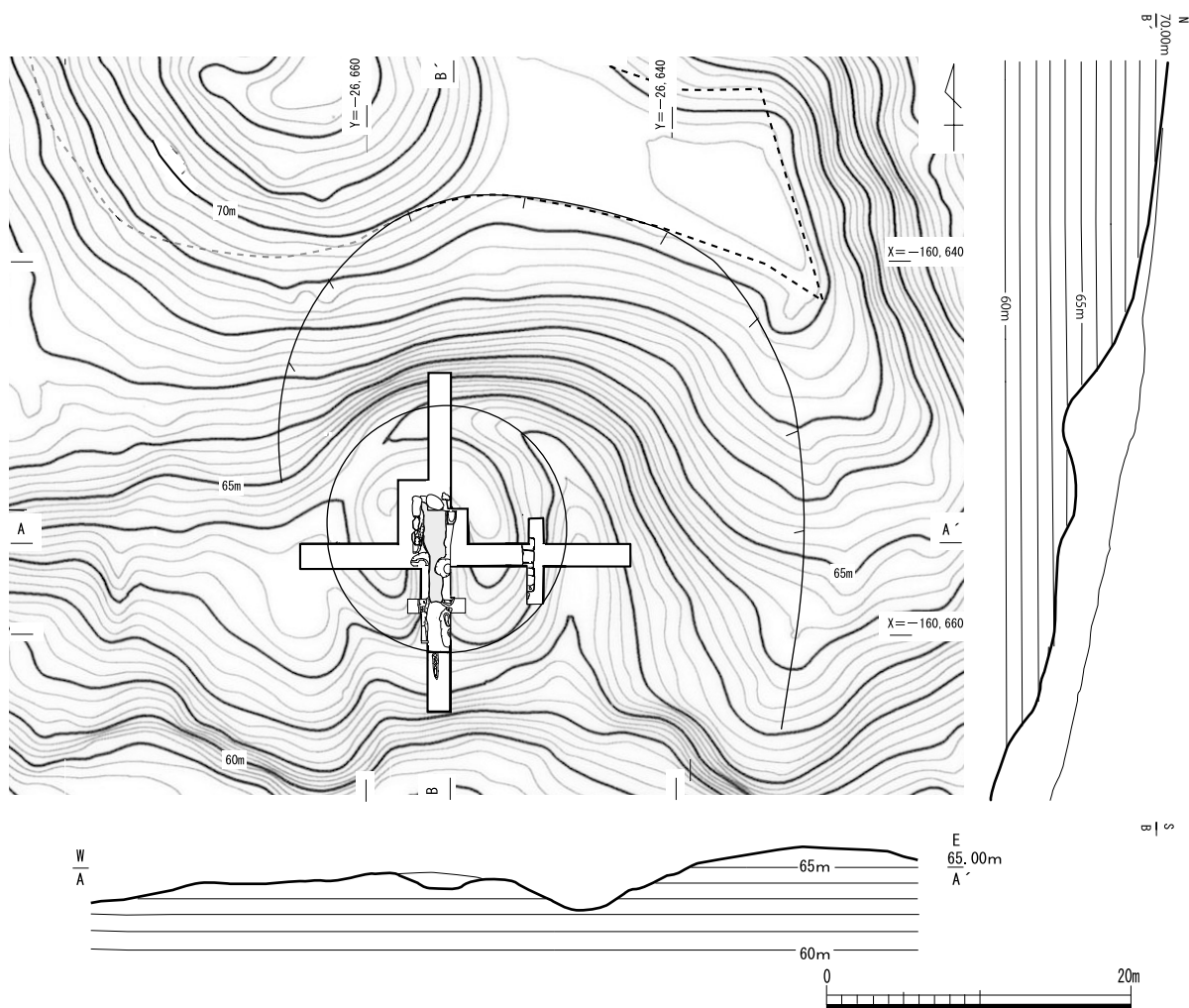


図21 2号墳調査位置図 (1/500)

5.5mに及ぶ大きな陥没がみられた。これは通常の規模より大きく、後世にかなり大規模な攪乱を受けていたことが知られた。攪乱墳は南側に開いているため、2号墳の埋葬施設はおそらく石室であろうと想定された。

墳丘の陥没部分南側においては倒木があり、その樹根には須恵器・土師器の土器類のほか、多くの凝灰岩・安山岩の破片が含まれていた。ここで清掃を行ったところ、凝灰岩片が層をなして付着していたことが認められた（写真13）。

この凝灰岩層には大小の塊石からかなり細破片までがみられ、この中には面を持つものや工具による加工痕跡を持つものが含まれていた。このような石材の存在は、これまでにみられたような、凝灰岩製の家形石棺が破碎された状況とは異なっているため、調査以前にはその性格が明らかではなかった。

その後、このような凝灰岩片は、石室床面に敷かれたものであることが明らかになったが、この倒木により石室羨道部分に遺存していた凝灰岩層や遺物の多くが攪乱を受ける結果となった。

調査の結果では墳丘径はほとんど変わらないが北・東・西の周溝はかなり流入土が堆積しており、また攪乱墳により陥没した墳頂の高さを勘案すれば、墳丘東裾の周溝底からの本来の墳丘高は4mを超えられる。

周溝 2号墳の墳丘背後には大規模な周溝がめぐるのが特徴的である。この周溝は尾根と墳丘を分離するという通常の掘割とは異なり、墳丘をはるかに超える高さをもち、周壁ともいえるような、古墳を視覚的に際立たせるような効果をもっている。これは南斜面に位置するという立地条件と共に、調査以前よりこの古墳が飛鳥時代に築かれたものという想定がなされていた理由である。周溝は東西幅が約35mに及び、西側が幅約5mで狭いのに対し、東側が幅約13mである。東側がかなり広く、均等にめぐってはいない。また現状の周溝底における高さも東側が西側より低く、その比高差は約1.5mである。墳丘東側の周溝は、築造前の谷地形部分にあたり、東側の尾根斜面を周溝の東側の壁として利用していると言えよう。

このように周溝において左右の違いがみられるのは西側の周溝の掘削が不十分であったことであろうが、このような不均等な背面周溝は例がない。そして墳丘自体は尾根の南斜面の中でもやや南西斜面に立地しているといえよう。

墳丘南北の築成状況 古墳背後では丘陵部を掘削して大規模な周溝を築き、また広い周溝の斜面を形成している。その掘削部分の比高差は約7.5mに及び、形成された斜面の斜距離も約13mに達している。2号墳の造営事業において、この周溝部の掘削はかなりの比重を占めたものと思われる。墳丘の築成にはこのような周溝の造成にともなって生じた大量の掘削土が築成土の主体



写真12 調査前の状況（北西より）



写真13 樹根付着の凝灰岩層（北西より）

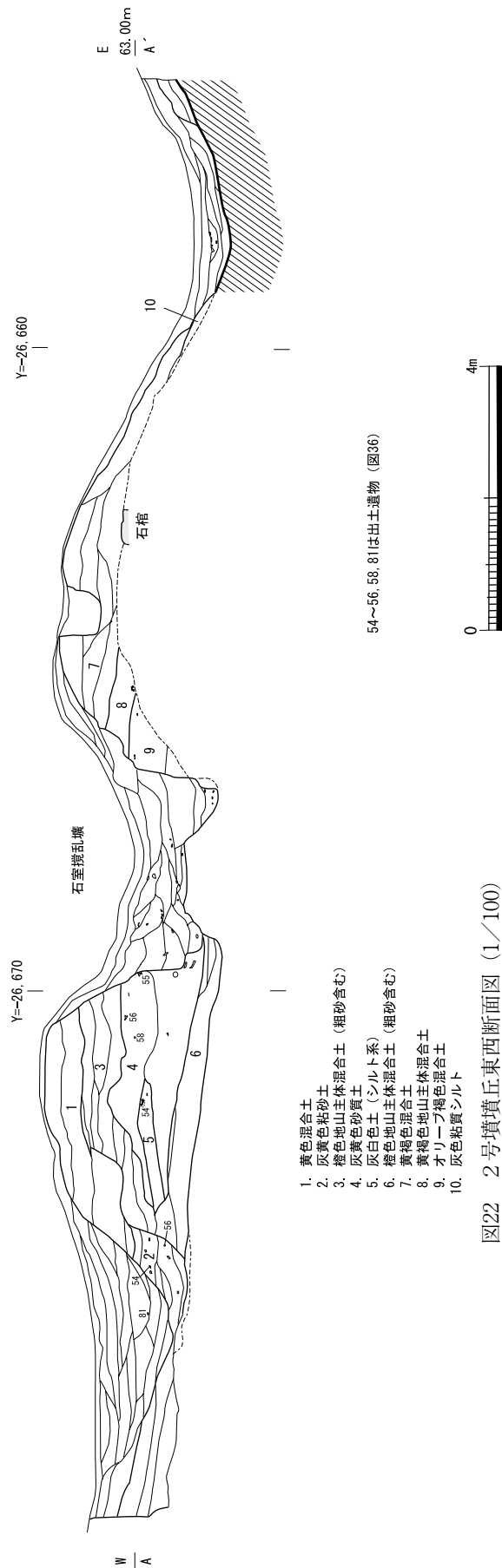


図22 2号墳墳丘東西断面図 (1/100)

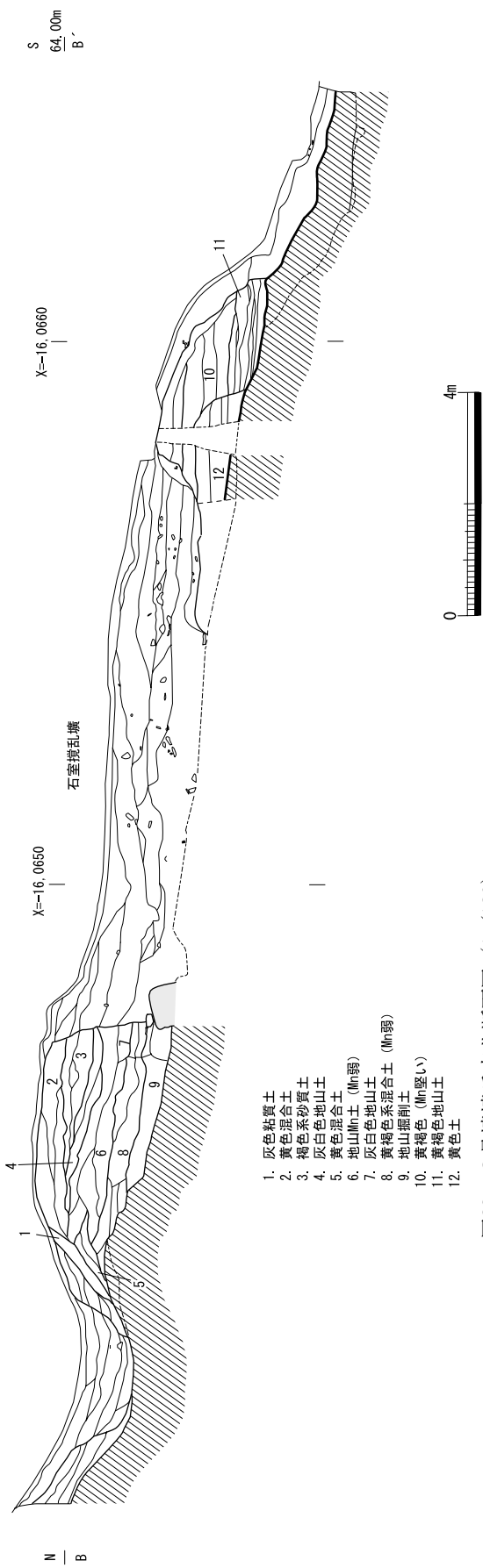


図23 2号墳墳丘南北断面図 (1/120)

をなしている。

周溝部の調査では岩盤に近い地山が検出されたが、南側に向かってやや下降している。この岩盤系の地山は下方には続かず、古墳の墳丘下で途切れているようである。したがって墳丘の中心部が位置するところは旧地形の丘陵部ではなく、谷地形部分であると思われる。2号墳の埋葬施設は横穴式石室であるにもかかわらず、このような場所を選んでいることはやや異例であるといえよう。

墳丘北側においては、墳丘土は純粋な地山掘削土、黄褐色系の混合土や灰白色地山土、褐色系砂質土を置き、最上層には黄色土系の混合土を積んでいる。このような混合土として地山に含まれる黄色土系の土は、古墳付近の地山にはなく、周辺部から運ばれたものであろう。これらの築成土は地山の傾斜に並行し、やや南に下降している。ここでは横穴式石室の掘方は確認されず、石室構築と共に墳丘が築成されたものと思われる。

墳丘南側においては、地山は尾根筋にみられる岩盤系の土ではなく、やや堅い灰黄色土でおそらく谷部分の堆積土と思われる。ここへ石室側より黄色系の焼土や炭化物を少量含むやや軟質な土を置き、そこへ黄褐色の地山掘削土を積み、さらにやや堅い黄褐色土の順で内側より築成している。これらはいずれも水平に積まれているのが、北側の築成土と異なる。このように、古墳羨道部南側は前庭部として盛土で形成している。墳丘径は約16mであるが、墳丘南端の築成土の範囲は南にさらに約2m広がっている。

墳丘東西の築成状況 墳丘西側の断ち割りでは岩盤系の地山は検出されなかった。おそらく尾根の中央部にはあたっていないようである。また周溝は大幅に掘削した状況はうかがえない。西側の墳丘土は褐色系の旧地表土上に地山主体の砂質系混合土を交互に積み、その上に黄色系の混合土で築成している。これらの築成土より須恵器が出土している（図36-54～58）。この中には2号墳の時期よりやや古い須恵器がみられる。

墳丘東側では墳丘土内中ほどで箱式石棺が検出された。このため、墳丘の断ち割りはこの部分で止めた。下部の状況は不明であるが、地山主体土と混合土を交互に積んで築成しているようである。



写真14 北トレンチ土層断面（北西より）



写真15 西トレンチ土層断面（南西より）

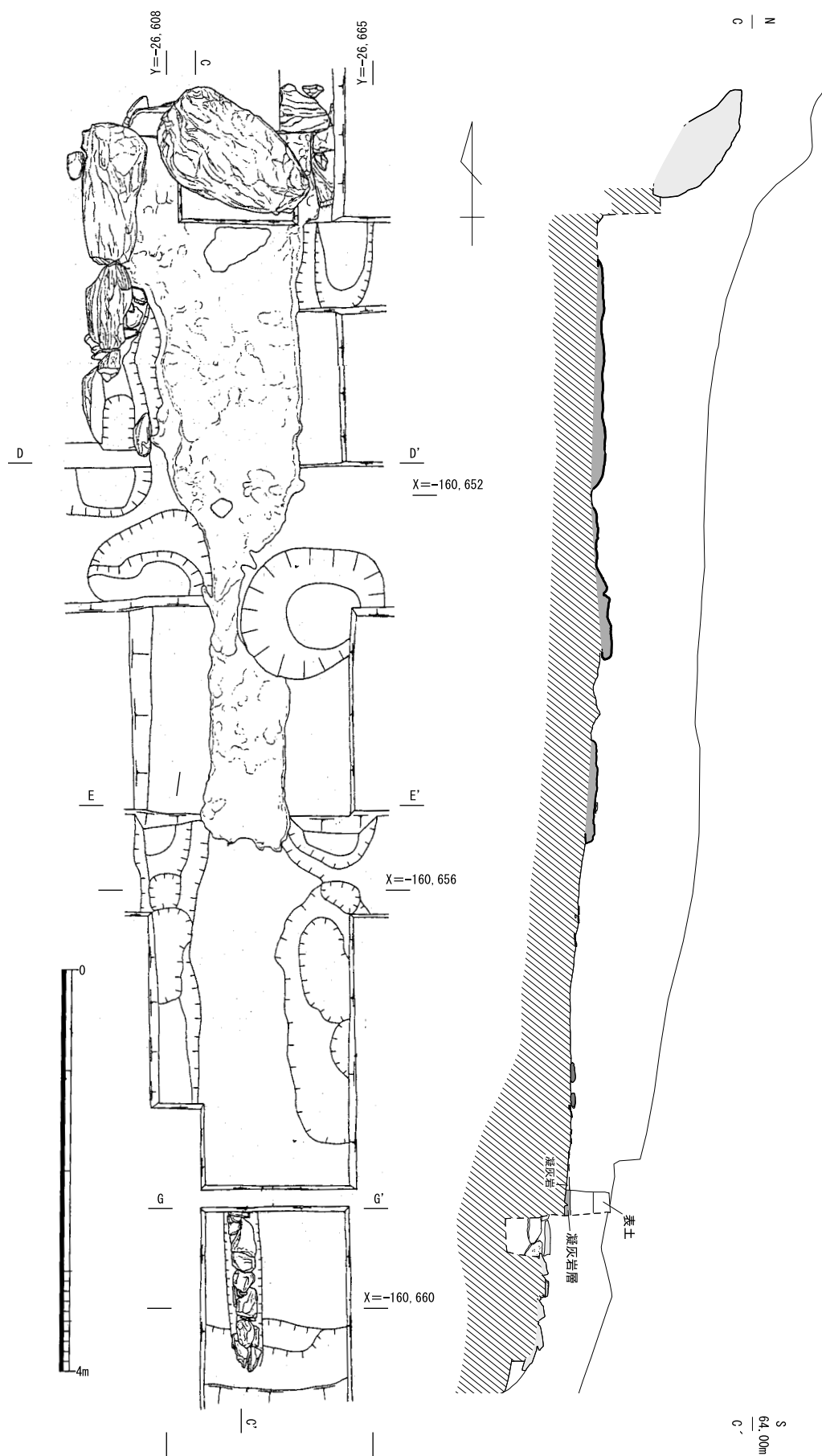


图24 2号墳石室全体图 (1/60)

(3) 埋葬施設

1) 横穴式石室

南に開口する両袖式の横穴式石室で、すべて輝石安山岩の自然石を用いて構築されている。石室の中心軸は墳丘中心軸より約1m西側に寄っており、石室は墳丘と共に西寄せの位置にある。石室床面附近からは多くの中世土器片が出土しているため、石室はおそらく中世に開口され、再利用されたようである。

その後の近世の状況は不明だが、近代に入り、石材採取の目的で石室は大規模な破壊を受け、石材が破砕されて搬出され、今日のような状況になったものと思われる。

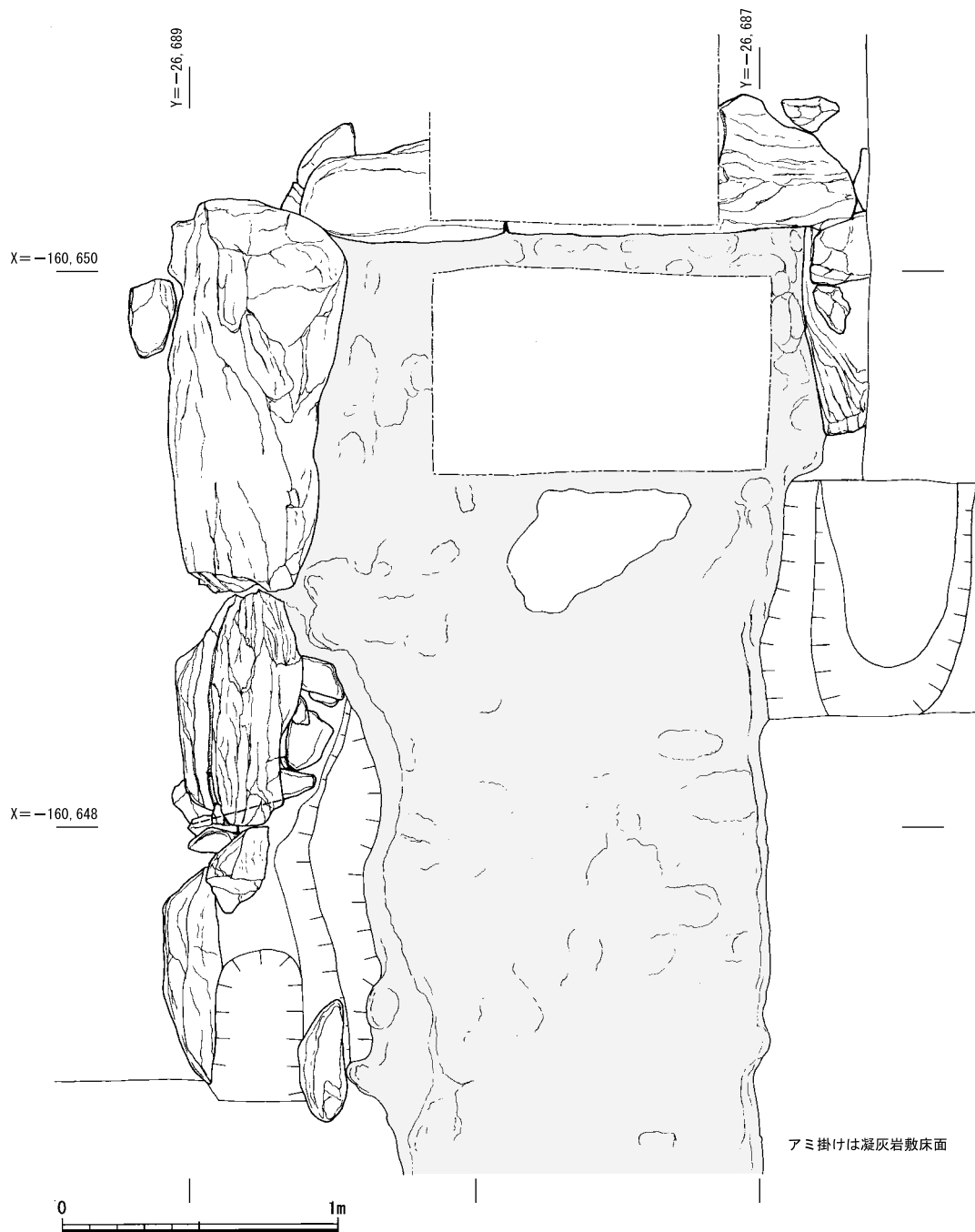


図25 2号墳玄室全体図 (1/25)

石室の遺存状況 近代の石材採取のため、石室はかなり損壊を受けており、確認できた石室石材は多くはない。調査中には転落・移動した天井石と思われる大型の石材1個が出土した。そして玄室北半では、奥壁2個、右側壁3個、左側壁1個の基底石が原位置を保って遺存していた。この基底石の中で、右側壁の3石はいずれも頂部が全面的あるいは部分的に破砕されており、その本来の高さは不明である。基底石で完全に原形をとどめているのは、奥壁の2石と左側壁の1

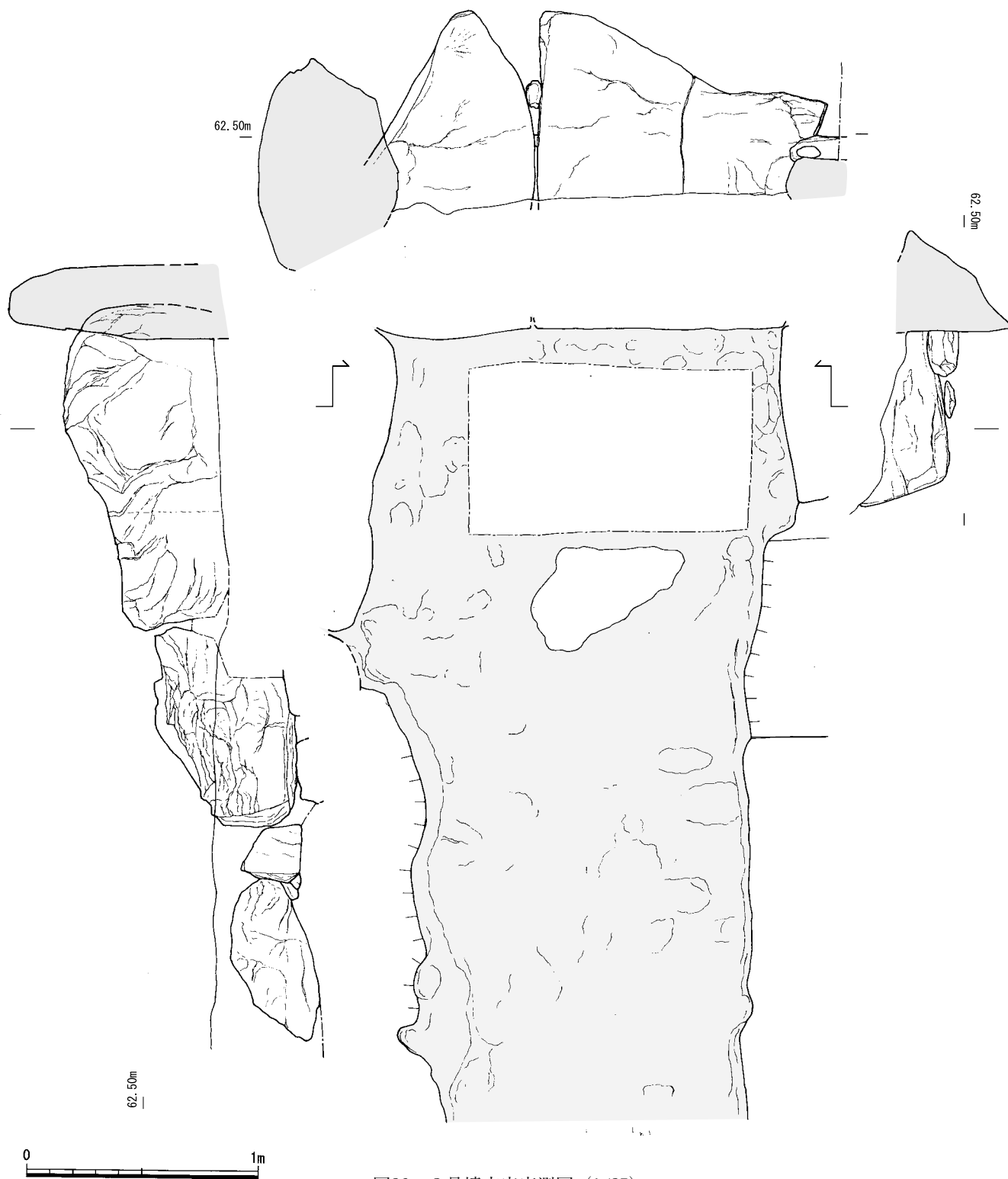


図26 2号墳玄室実測図 (1/25)

石のみである。

天井石と思われる石材は、奥壁付近において床面より数十cmほどの高さで石室内中央に向け、傾斜した状態で検出された。おそらく玄室に使用された天井石の1つと思われる。断面がレンズ状を呈する扁平な石材である。かなり大型で、搬出が困難であったため、残されたようである。この石材の規模は全長1.72m、幅1.4m、厚さ約0.5mである。この天井石の存在により、石室内上部の幅が推定できよう。

基底石はいずれも掘方内に据え置かれているが、石材の大きさに応じて掘方の深さは異なっている。また右側壁の北より2個目の基底石には、安定化を図るため、底に石材を添えている状況がうかがえた（図版15下）。奥壁の基底石は2石で、西の奥壁は床面からの高さは約90cmであるが、その厚さは33cmと薄く、板石状の石材を立てて使用している。また側壁の基底石は深く据えられ、右側壁南端の基底石は深さ約45cmが床面下になる。

石室形態と規模 石室の平面形は、抜き取り穴の状況や床面の凝灰岩層の平面形が羽子板状を呈することから両袖式と思われる。石室基底石はかなり大きく掘り抜かれているため、基底石の本来の正確な位置は判別できないところが多かった。特に玄門部分の左袖石はかなり大きな石材を立てていたようで、抜き取り穴の深さは床面下約80cmに及んでいる。その平面規模は南西方向にやや長く延びる長径約1.6mに及ぶもので、袖石は石室内へ倒して抜かれたものであろう。

石室規模を石材抜き取り穴の位置より推定すると玄室の長さは約4.0m、幅は約1.9m、羨道長は約5m、同幅約1.2mで、石室の全長は約9mと思われる。

玄室幅と天井石の長さを比較すると、石室側壁には若干の持ち送りがみられたようである。石室内の高さは、同様の石材を使用した王寺町・畠田古墳の石室を参考にすると高さは2m以上と推定される。

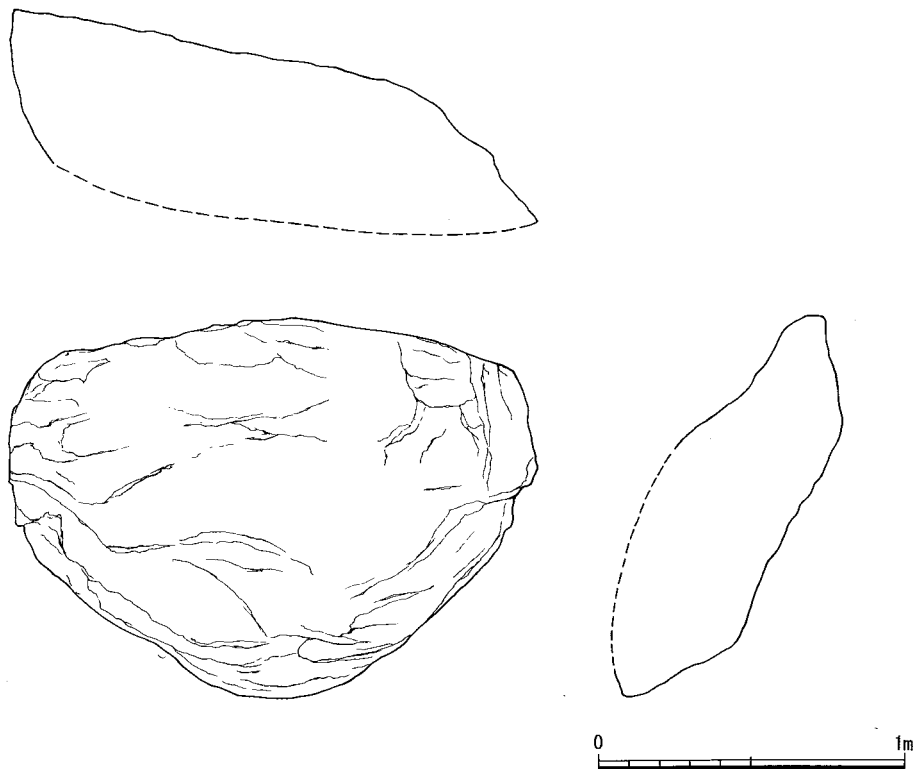


図27 2号墳石室天井石（1/25）

石室攪乱の状況 石室内は中世の開口によって棺・副葬品が失われたと思われるが、石室自体には大きな変化はなかったと思われる。しかし、近代に入って石材採取の目的で石室が破壊された。その状況は、攪乱墳内に残されたおびただしい数の輝石安山岩片からうかがえる。この石片の数は調査分だけでも1万8千点を超え、重量も1.4トンに及んだ。石室内には未調査の部分も多いので、本来のその破片数はさらに多くなろう。そして搬出された石材の量もかなりの量に上るとと思われる。

この石材は花崗岩系の石材と異なり、かなり硬質で破面は鋭い。調査ではこの大量の石片を除くことが主な作業となったが、このような破片の遺存は石室内で石材が加工され、適当な材が搬出され、その不要な破片が残されたものであろう。特に玄室袖石が抜き取られた跡に大量の石材が投棄された状況がうかがえる（図29）。

また残された玄室右側壁の石材もすべてがその上部が打ち欠かれており、その破壊の程度を知ることができる。特に右側壁北端の基底石上端を発掘中に、多くの炭化物が出土し、この石材を火で熱して打ち割ったことがうかがえた。

床面の状況 石室床面石室の構築後、整地土が置かれ、その上に多量の凝灰岩の碎片を玄室・羨道を含めた石室内全面に敷き詰めて形成している。その長さは現状では奥壁より7.2mである。南端は倒木によりその根に付着したため、凝灰岩層が遊離することとなった。このため、南端の状況は明らかではないが、石室内羨道部全面に及んでいたのであろう。その長さはおそらく9m近くに達するようである。

床面に使用された凝灰岩層の厚さは現状で約20cmほどであるが、表層面には古墳の副葬品や中世土器が多く含まれているように、かなり荒れており、本来の凝灰岩層はさらに厚かったと思われる。この凝灰岩層には長さが20cmを超えるものほどのものから細片までさまざまな大きさの石片のほか粉末化した碎粉も相当量含まれている。石片の中には面を有する破片や、鑿痕がみられるものも含まれている。

床面の形成にあたっては、大きめの石材を敷いて細片・屑石で埋めている状況がうかがえた。表層はおそらく凝灰岩の碎粉で覆われ、床面はかなり平滑であったと思われる。

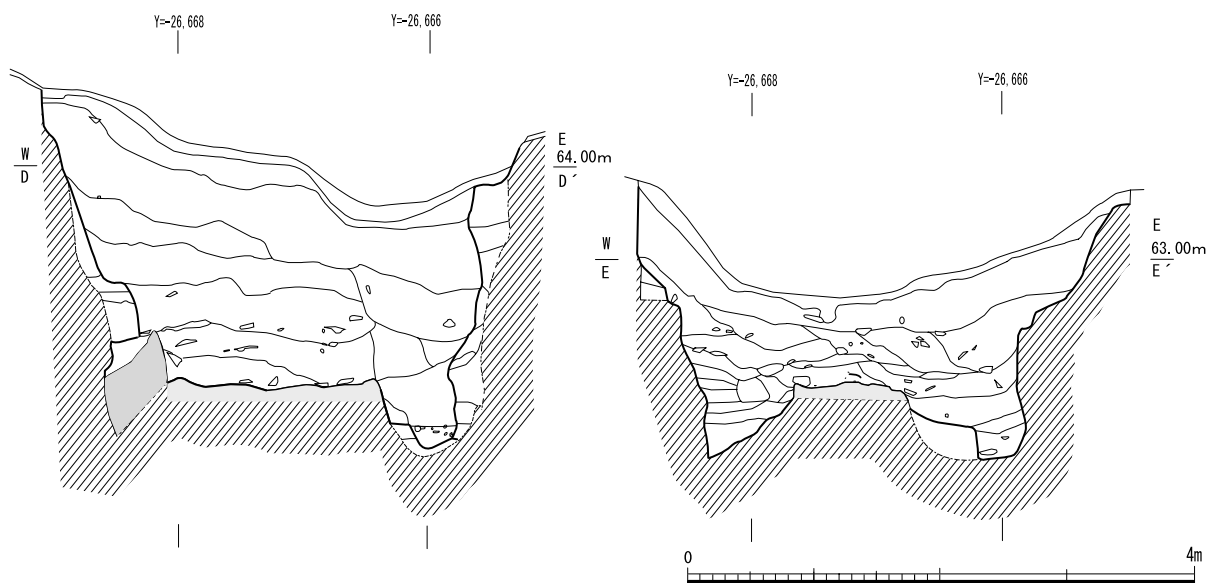


図28 2号墳石室断面図（1/60）

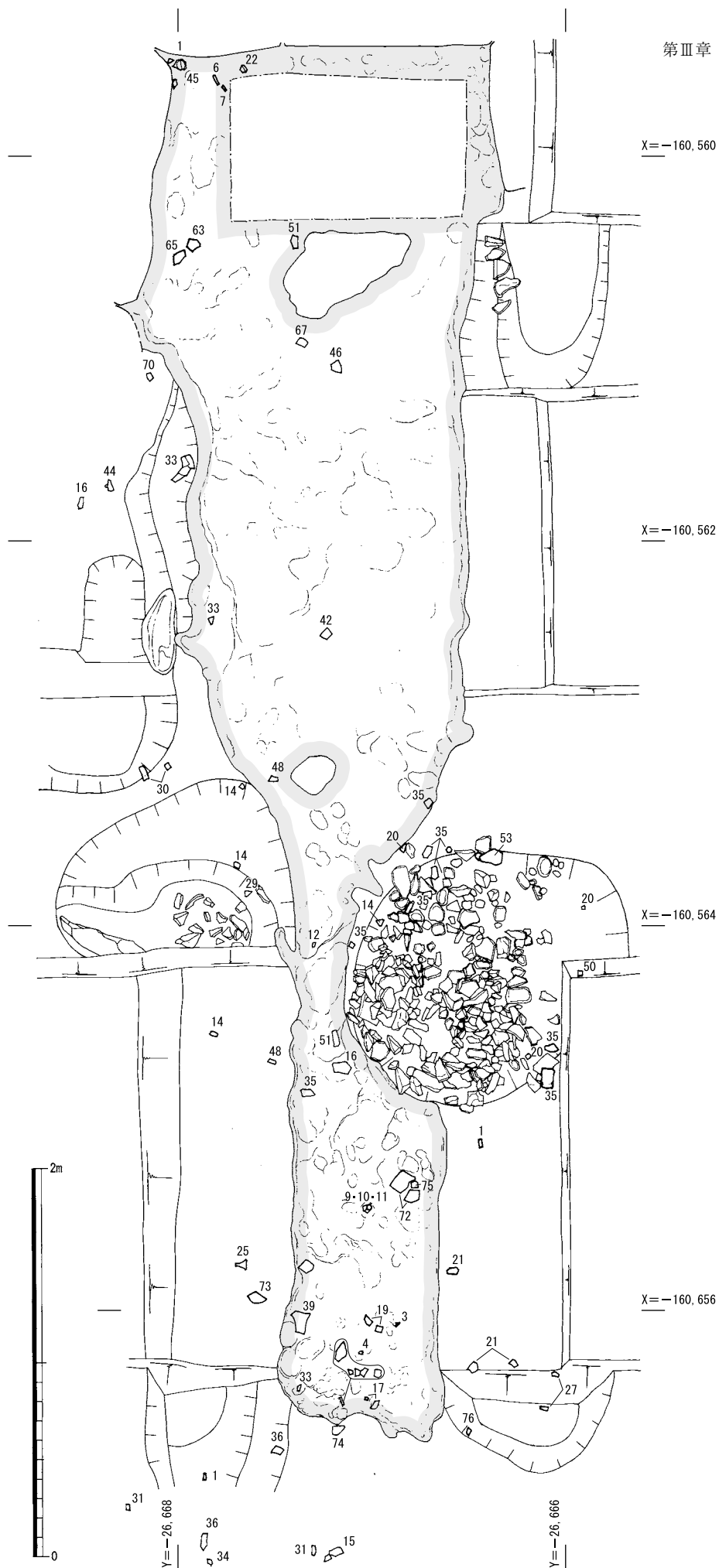


図29 2号墳石室内床面付近遺物出土状況 (1/30)

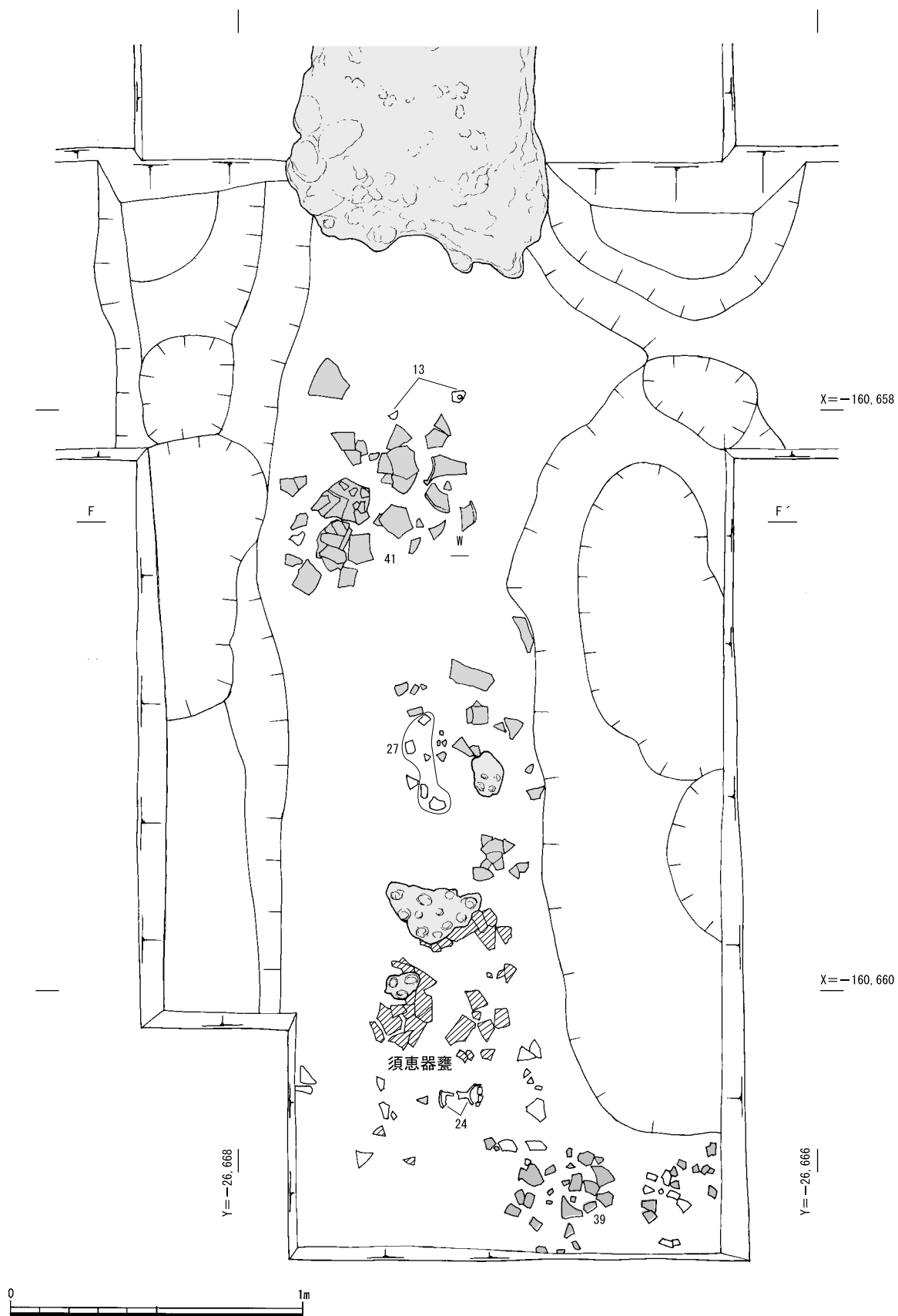


図30 2号墳羨道部床面下層遺物出土状況 (1/20)

遺物出土状況 石室内の出土遺物は攪乱のため、床面下以外の遺物は原位置を保っているものはない。石室内遺物は攪乱墳内を別にすると、石室床面附近と羨道床面下にみられる。床面上の遺物は飛鳥時代の土器・鉄器、中世土器が細片となって混在して出土したが、凝灰岩表層に含まれているものも多かった。

副葬品については、琥珀棗玉（12）は攪乱土上層出土品であるため、本来の位置はわからないが玄門付近で出土している。鉄釘（8）も攪乱土中の出土で位置は明確ではない。刀装具（2）は攪乱土の精査で見出した。

凝灰岩層床面上で出土した古墳の副葬品遺物は、当初の出土位置に近い可能性もあるので、それらについて述べておきたい。鉄製品は、鉄鏃（6・7）が玄室奥壁西付近で出土している。茎（4）・刀装具（3）・不明鉄製品（9～11）は羨道南付近で集中して出土している。大刀（1）もその脇で床面より離れて出土した。飛鳥時代の土器では、土師器杯（42）が抜き取り穴ではあるが土師器蓋（44）に近接して玄室内西付近より出土している。須恵器類は羨道付近からの出土が多い。高杯（35）は袖石抜き取り穴付近、高杯（34）、甕（40）、杯類もここから羨道南にかけてみられる。平瓦は玄室から羨道までかなり散在的に出土している。中世土器は瓦器片が多く玄室内に散在していた。比較的大破片の瓦器碗（45）は玄室北西隅で出土した。

2号墳出土遺物の中で、わずかに原位置を保っていたと思われるのは羨道床下の遺物である。調査前には羨道南付近で倒木のため、床面の凝灰岩層が樹根に付着して浮き上がっていた。ここでは凝灰岩層と共に輝石安山岩の石塊が1個付着していたが、この石が羨道部のどの位置にあたるのかは明らかにできなかった。この石塊は長さ40cm、幅28cm、高さ20cmで重量は27kgある。

その後の調査で、この凝灰岩層の下付近より、多くの須恵器片が出土した。これらは攪乱を受けていないことと、レベル的にみても凝灰岩層の下面より数～10cmほど低いため（図31）、おそらく羨道部の床面敷設以前に置かれた須恵器とみてよいと思われる。これらの破片上に部分的に凝灰岩を多く含む土が乗っている（図30）。

これらの須恵器の甕は39・41を含め3個体はあり、意図的に打ち割った状況がうかがえる。

杯蓋（13）、高杯（24）も含まれる。甕（41）の破片中に上層の高杯（34）の破片が1点見られた。

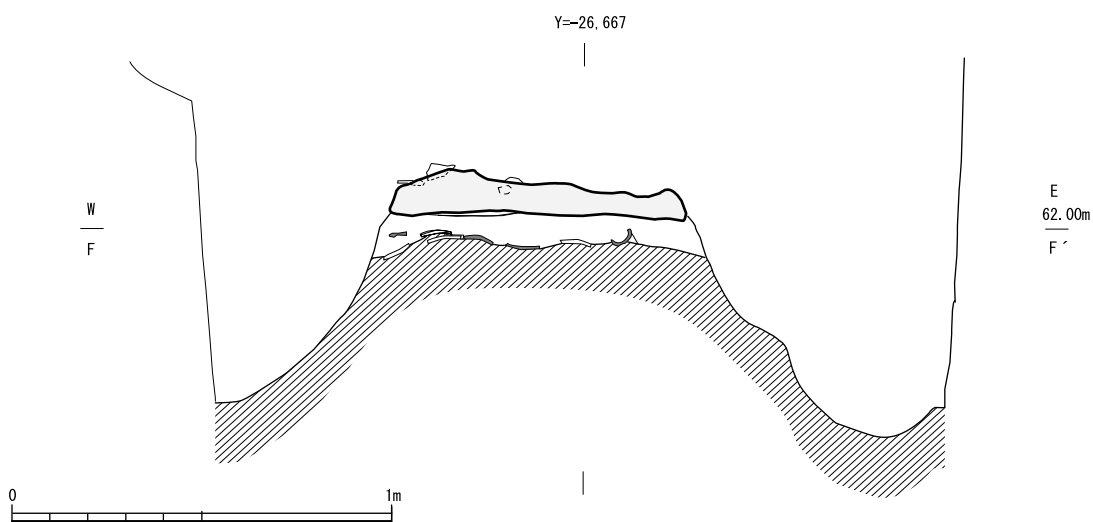


図31 2号墳床断面図（1/20）

排水溝 南トレンチの北端で石室床面下約20cmより、石組みの排水溝が長さ1.6m分検出された。その南端は奥壁より12.5mの位置にある。排水溝は盛土上に掘削された掘方内に構築されている。両側石と蓋石からなり、底石は見られない構造である。蓋石は7枚、西側石は4個が確認された。内部の排水空間は幅約10cm、高さ約12cmである。石材はすべて輝石安山岩で蓋石は南側より設置を行っていることがうかがえる。排水溝南端部分には蓋石はなく、側石を合わせて収束し、ここで終わる。

なお、排水溝が玄室内でどのように巡るのかは明らかではない。

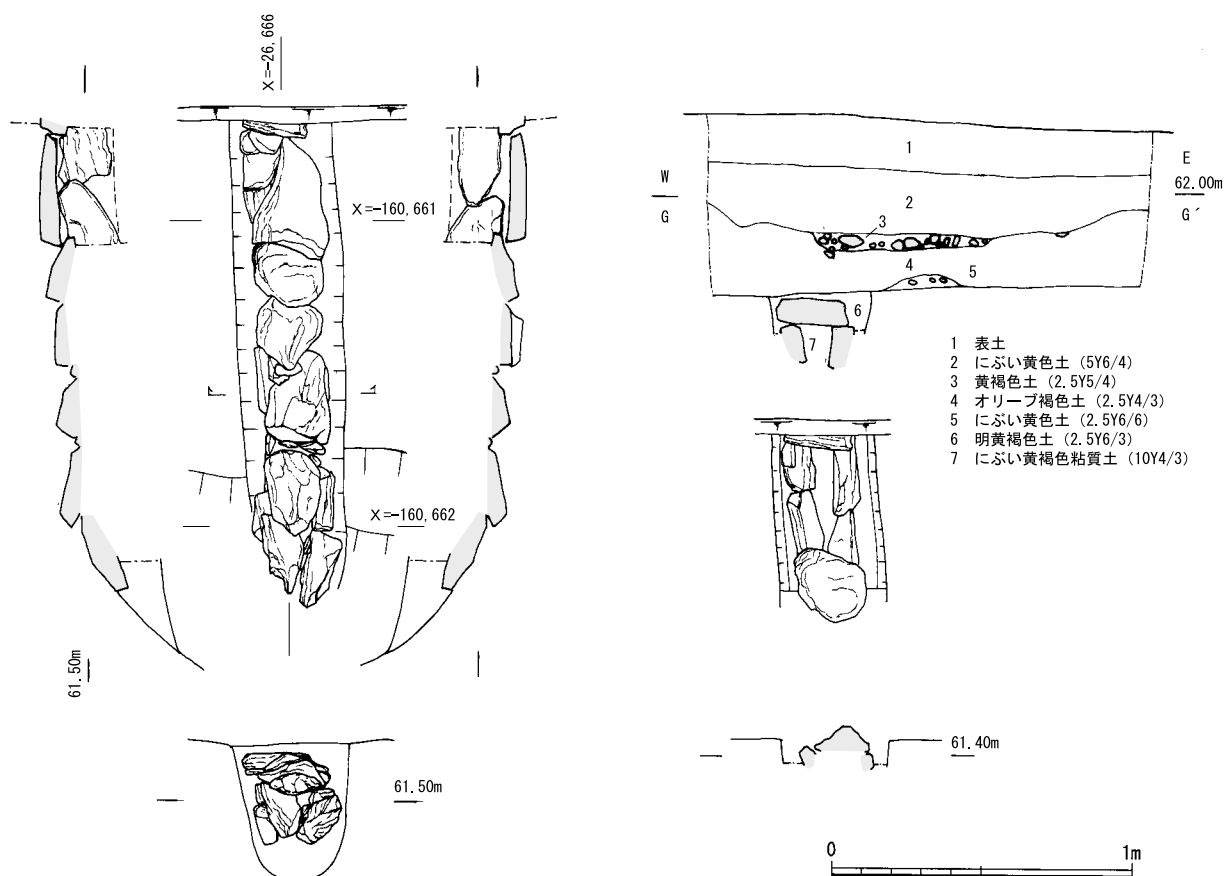


図32 2号墳排水溝 (1/25)

2) 箱式石棺

第4次調査の東トレンチの掘り下げ中に、石室中軸線の東約5.4m、深さ約80cmの墳丘斜面において、南北に並ぶ凝灰岩の板石3枚が確認された。その後、第5次調査において、その性格を明らかにするため、南北に蓋石東半にかかるトレンチを設定した。

その結果、南北1.88m、幅約50cmの蓋石5枚よりなる、箱式石棺であることが明らかになった。蓋石は密着して置かれているが、南から2・3枚目の隙間を凝灰岩片と平瓦片で覆っている。石棺の周囲には凝灰岩片がみられた。

北側3枚の蓋の形態は横長の長方形で、その大きさにはやや違いが見られる。長辺は52～44cmで厚さは約10cmである。蓋は平坦に加工されており、表面には刃幅約5.5cmのチョウナ痕が残る。各蓋石の側面角には幅3～4cmほどの面取りが斜めに施され、石棺の蓋として意識された加工が行われている。土層の断面観察によれば、明瞭な掘方は確認できなかったため、墳丘築成途中で構築されたものと思われる。攪乱を受けた形跡はなく、未掘の石棺であろう。

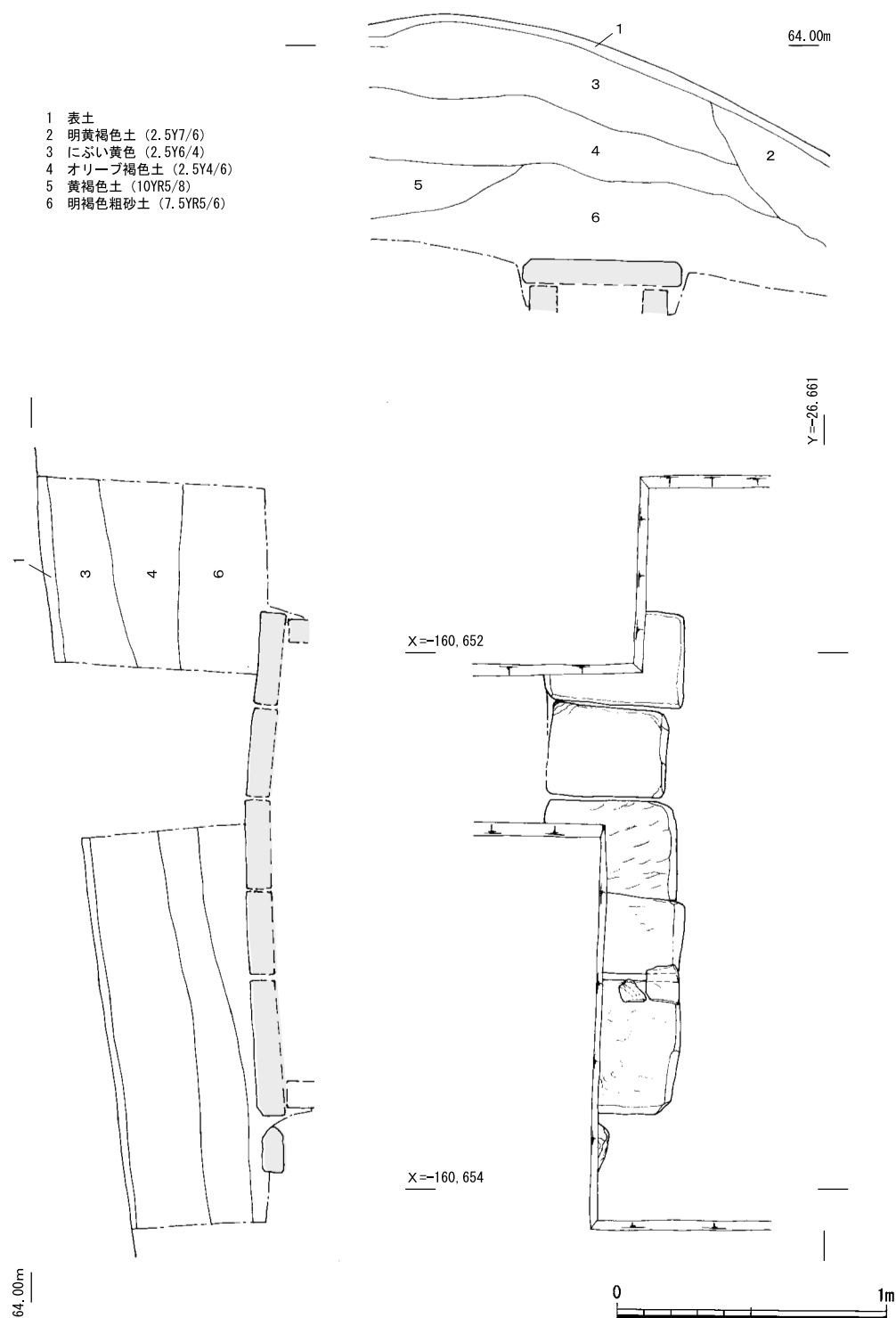


図33 2号墳墳丘内石棺 (1/25)

(4) 出土遺物

1) 玉類 (図34-12)

琥珀製棗玉が1点出土している。縦割れをした4分の1ほどの破片で、孔の部分は欠失しているが、ほぼその形状が判明する。器表はやや風化している。復元長は約3.7cm、復元径は約2.2cmである。

2) 鉄製品 (図34-1~11)

鉄製品は大刀1、刀装具(責金具)2、茎片2、鉄鏃片2、鉄釘片1、不明鉄製品3の計11点である。いずれも破片となって石室内外より出土した。大刀(1)は刀身の破片で鋒、茎を欠く。現存長12.0cm、刃幅2.3cm、背幅0.5cm。両面に鞘の木質が残る。刀装具(2・3)は大刀の責金具である。2は長さ3.5cm、幅2.1cmの卵形の責金具。断面は半円形で、内面には木質がわずかに遺存している。3は大刀の外装部で鉄地銀被せの上に責金具の一部が付く。内面の周囲には木質が厚さ数ミリほど残る。この責金具は2よりやや小型のようである。4・5は大刀類の茎部の破片と思われ、4には木質が残る。これらは断片のため、それぞれの接合関係は不明である。

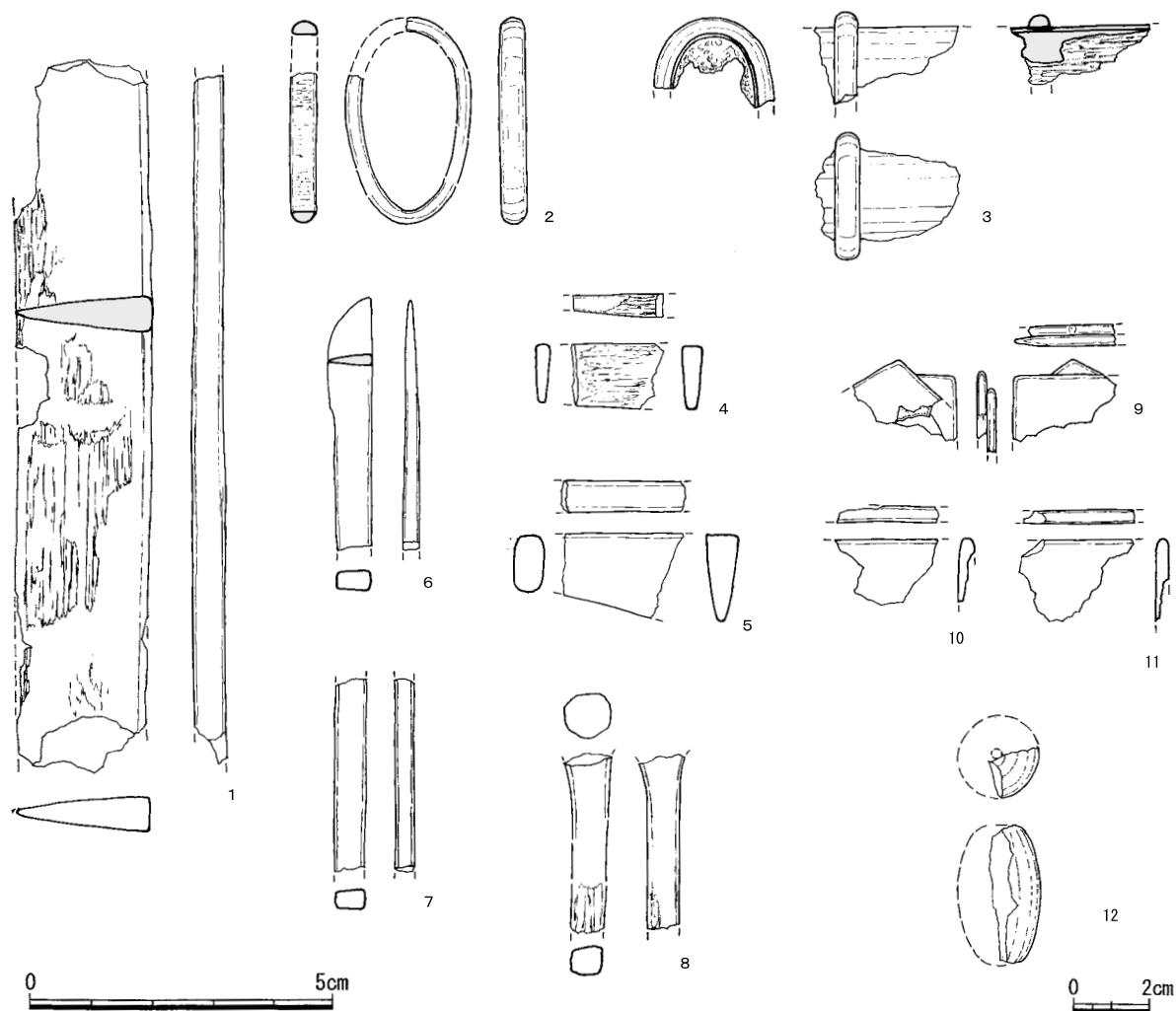


図34 2号墳出土鉄製品・玉類 (4/5)

6・7は長頸鏃の破片である。至近の位置で出土しており、同一個体であろう。刃部は片刃で返りの存在は明確ではない。6の現存長4.2cm、刃部の長さ1.8cm、幅0.7cm、頸部の幅0.5cm、厚さ0.3cm。8は頭部付近が円形、身部断面が方形のため、鉄釘片と思われる。身部には木質が残る。8の現存長3.0cm、身部幅0.5cm。不明鉄製品（9～11）は厚さ1.5mmほどの薄い鉄片で同一個体と思われる。9は2片が銹着しているようである。

3) 土器（図35・36）

須恵器 2号墳では最も多量に出土した遺物である。主に石室内出土品（13～41）についてのべる。杯については、杯G蓋（13）は破片であるが、1点みられる。小型でやや扁平なつまみと、蓋内面には短いがやや立ち上がる返りをもつ。杯H蓋（14～16）は口径10～12cmで、器高も低い。天井部の調整はヘラ切りである。杯H身（17～21）は小型で口縁部には短い立ち上がりが付く。口縁部の径や立ち上がりにおいては、古相の17から新相の21まで差が見られる。底部外面の調整においては、回転ヘラケズリを加えるのは20のみで、それ以外はすべてヘラ切りによる。杯身の受部中間点の径は21の9.0cmから17の11.2cmまでにわたる。

墳丘出土の杯身54は石室内出土杯に比較し、やや口径が大きい。表採の61は平底の杯身で体部は外傾して端面には内傾面をもち、外面には回転ヘラケズリを加える。北トレンチ出土の60は蓋で時期が7世紀後半と2号墳の時期より新しい。

高杯には小型無蓋高杯（22・24～26）と低脚無蓋高杯（23）、大型の無蓋高杯（34・35）の3種がある。小型高杯は杯部の形態に小差がある。これらの脚部は24・25にみられるように透かしはなく、筒部中央外面に2条の凹線が巡る。24は土器の胎土は黄灰色で、おそらく東海地方の産と思われる。低脚高杯（23）は裾広がりの脚部にはほぼ垂直に立ち上がる内湾ぎみの杯部を有する。なお、墳丘土中の低脚高杯（55）は杯Hの蓋を杯部に使用したものである。

大型無蓋高杯35は杯底部に透かしの切り込み痕があり、透かしを持つ脚部が付いていたことは明らかである。34も35と杯部径が近く、底部外面のケズリ放ちの状況が近似する。また形態は共に鉢形であるが、かなり浅く、底部付近もやや広がり気味である。この両者は形態に違いがあるが、34もおそらく同じ無蓋高杯の可能性があろう。この時期の器種としては類例は少ない。

33は大型の蓋であるが、口径からみてあるいは無蓋高杯とした34か35とセットになる可能性もある。器高は低く、体部が斜めに広がり、端部が内湾する。形態的につまみを有するものであろう。天井部にはヘラケズリの後、カキ目が施される。30は小型の鉢で口縁部は立ち上がり、肩部に一条の凹線を有する。体部器壁はやや厚く、底部外面の静止ヘラケズリが特徴的である。また胎土にはかなりの砂粒を含む。墳丘土内出土の鉢（56）と形態・技法が酷似しており、これらは他と産地が異なる可能性があろう。31は端面が折り返されているため、壺などの口縁部と思われる。成形がやや不十分で製作はあまり良好ではない。36～38は台付長頸壺の口頸部。37は形態が直口的である。墳丘土出土の57・58は台付直口壺であろう。29は小型の甕で体部に孔をもつ。かなりの小型品であるが、製作は良い。

39～41は甕。39は外反する口縁部をもつ軟質焼成の甕である。40は口縁・体部片は多いが全形はうかがえない。口縁部は大きく外反し、端面はわずかに立ち上がり、外面を櫛歯刺突文や凹線で飾る。焼成はかなり硬質である。41は口縁部が短く外反し、端部に面を有するのみである。体部外面はタタキののち、ほぼ全面にカキ目を加える。底部付近の破面は古く、甕の使用時には打ち欠かれて底部はなかったと思われる。27・32は台付壺脚部であろう。28は口縁・脚部か器種も不明な小型品である。

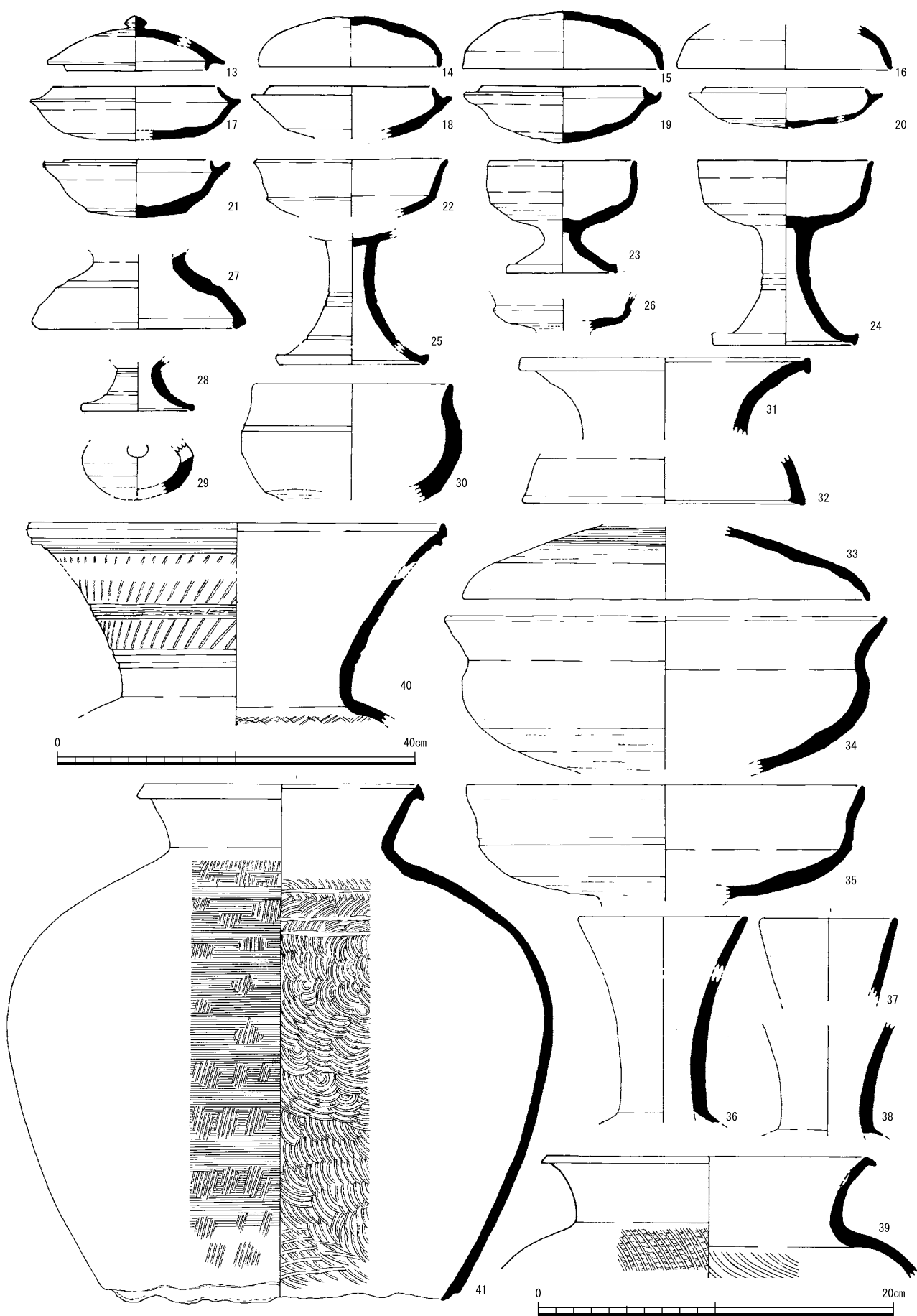
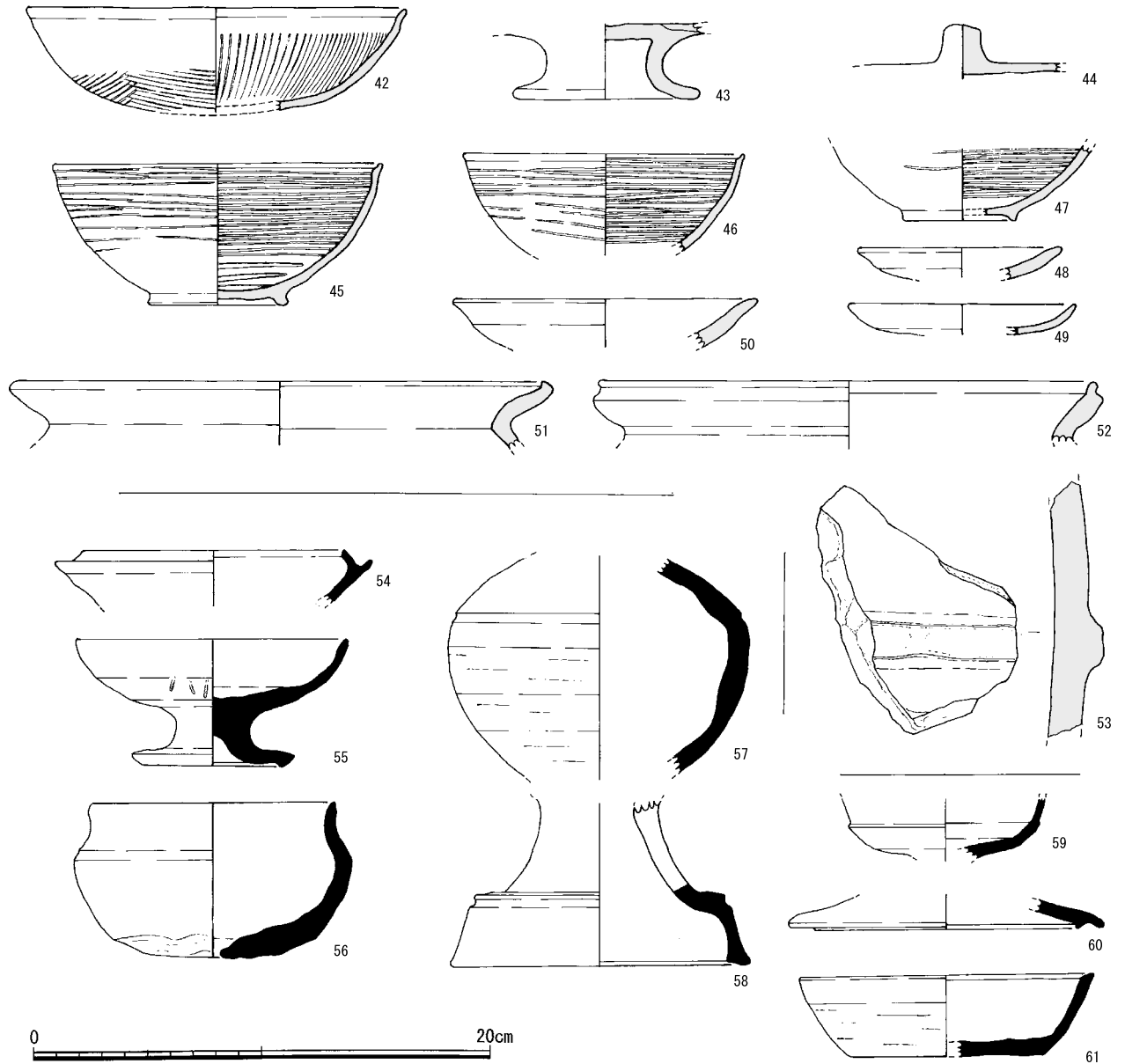


图35 2号墳出土土器 (1) (1/3)



42～52. 石室内 54～58. 西トレンチ墳丘土 59. 東トレンチ 60. 北トレンチ 61. 採集

図36 2号墳出土土器(2) (1/3)

トレンチ墳丘土内出土須恵器には石室内出土品より時期的に古いものがある。

土師器 飛鳥時代の土師器は42～44である。42が杯Cで浅い体部に口縁端部が短く外傾し端部内面にはゆるい面をもつ。内面には放射状の、底部外面には連弧の暗文が残る。43は盤・皿などの脚部で大きく反り、端面は丸い。44は蓋の天井部片で柱状の短いつまみが付く。これらの土師器はいずれも精製土器である。中世の土師器は48～52である。土釜(51・52)は短く外反する口縁部である。土師器小皿(35～36)は口縁部に横ナデを加えたのみのものである。

瓦器 (45～47) 内面のミガキは密で外面はやや粗である。32の見込みの暗文はジグザグ文である。

4. 平瓦・埴輪類(図36-53, 図37・38)

平瓦 総計27点が出土している。この中には平瓦と見なすにはかなり薄いものがあるが、断面形がわずかにカーブするため、これらには埴輪は含まれず、すべて平瓦であるとした。

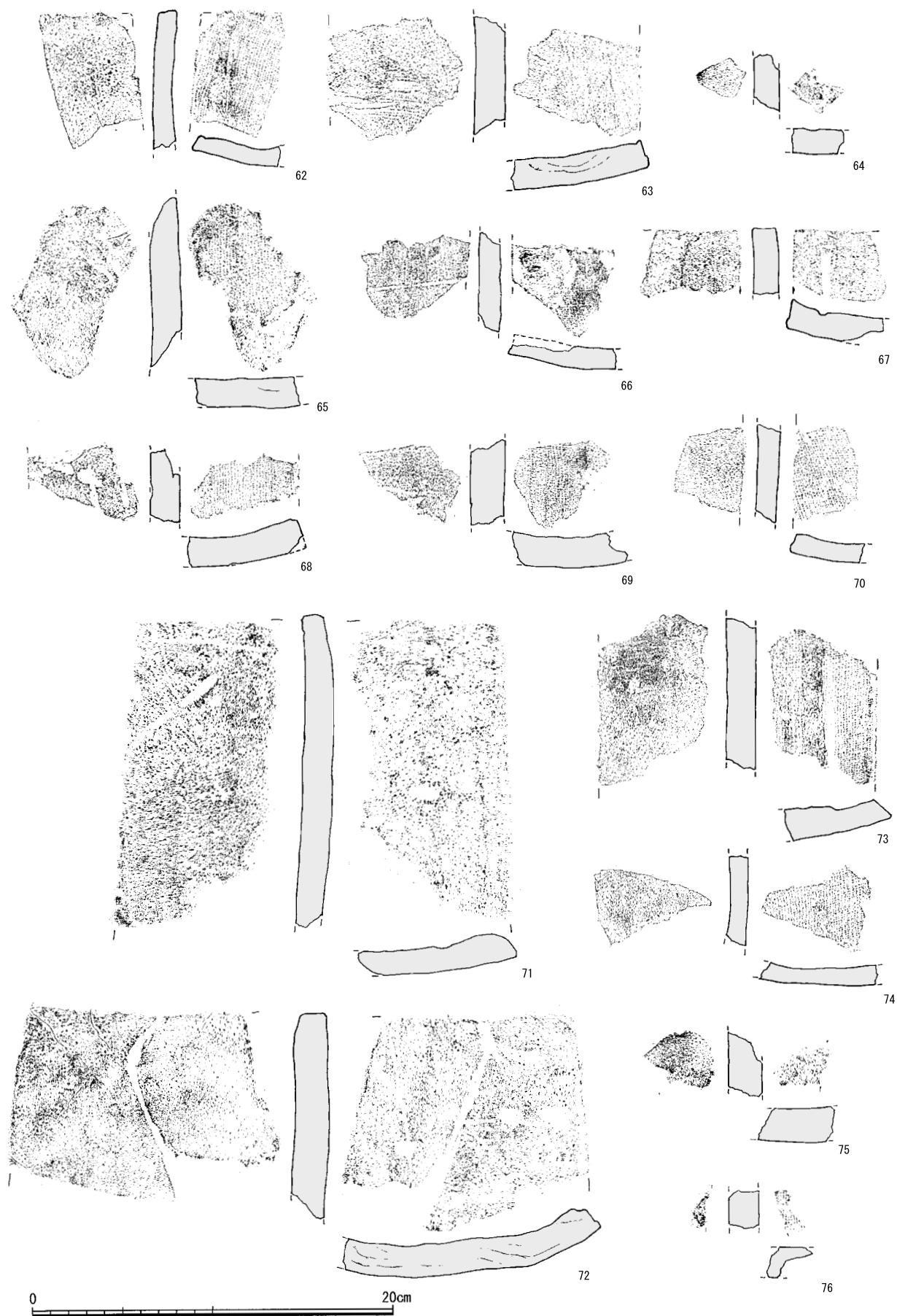


图37 2号墳出土平瓦 (1) (1/3) 石室内

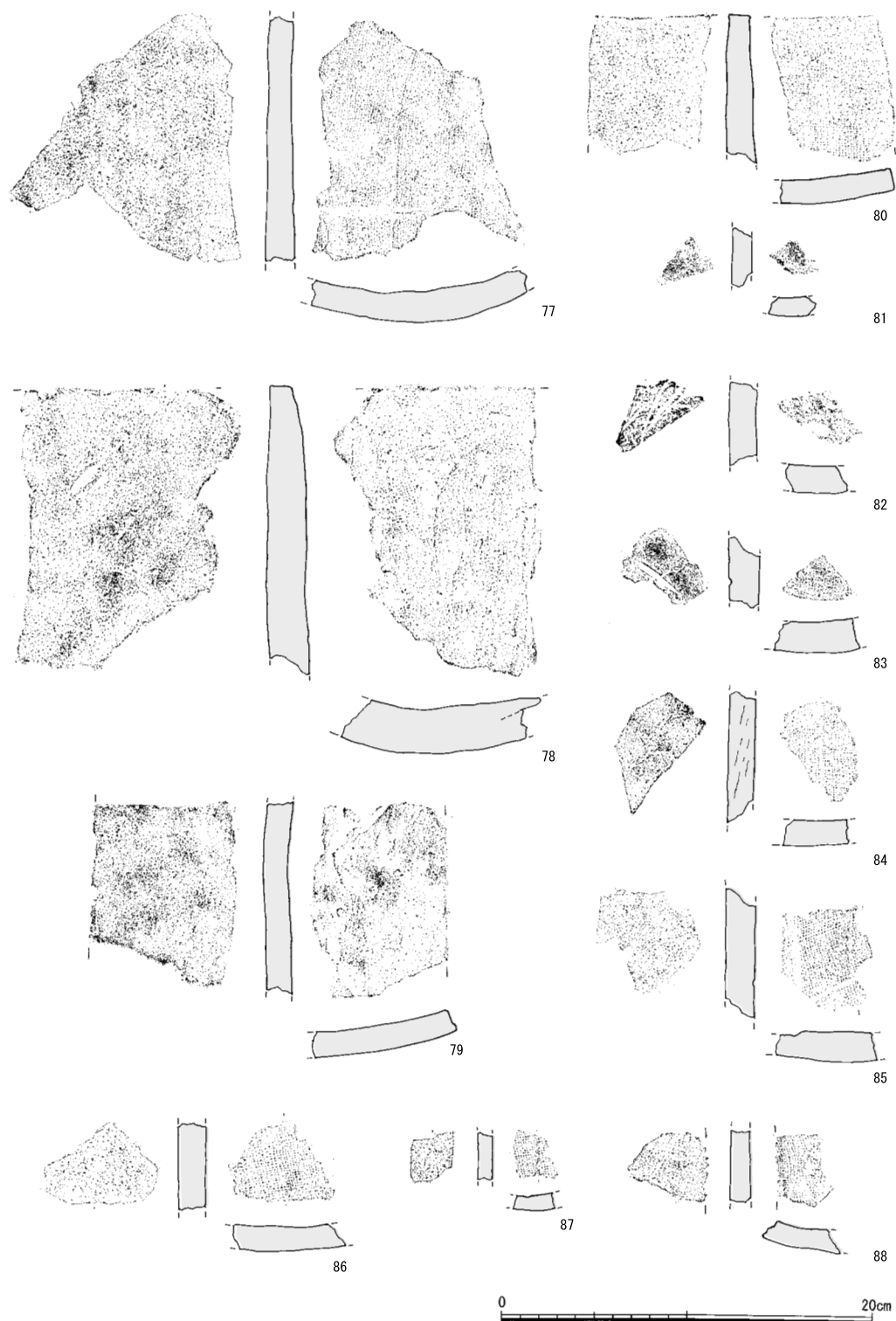


図38 2号墳出土平瓦 (2) (1/3) 石室外

出土位置の内訳は石室攪乱墳内・床面12点、西トレンチ9点、北トレンチ2点、南トレンチ4点である。このほか第2埋葬施設である箱式石棺の蓋石の隙間に置かれたものが1点あるが、これを除くと床面より出土したものと同様、攪乱を受けており、いずれも原位置を保っているものではない。平瓦のほとんどは、小破片で全体形状をうかがえるものはない。大破片の多くは西トレンチより出土している。

これらのうち、狭端部の角が残るものは62・67・71・72・80の5点で、いずれも平面形は台形と思われる。最長の破片は71で長さは17.0cm。厚さは78の2.4cmから87の0.8cmまでかなり差がある。

凸面の調整は、確認できるものはすべて細かい縦・一部横方向のナデが加えられ、タタキ痕跡を残すものはない。凹面には布痕を有し、板柢接合部分の盛り上がりやナデによって平滑にするものは62・63・69・73・74・77・78・84・85と多く、丁寧な製作といえる。

側端面が整形されているものは62・68・71・73の4点であるが、側端面に桶巻造りの分割破面を残すものは63・66・67・70・72・79・88の7点と多い。切り込みには深浅がある。78は粘土板の合わせ目の痕跡を残す。焼成は硬質のものから軟質のもの、色調も青灰色から灰褐色などとさまざまである。

これらの平瓦には同一個体と思われるものはみられず、厚さや胎土・色調においてかなり多様であるといえる。

埴輪・埴輪棺 埴輪小片と思われるもの1点、埴輪棺片と思われるもの1点(53)が攪乱墳内より出土している。埴輪は小片のため図示しないが、断面の芯が黒色で、おそらく有黒斑の埴輪と考えられ、古墳時代中期頃のものと思われる。53は幅2.3cmの小片で基部の幅2.5cmのかなり太い突帯を有する。また体部がわずかにカーブをもつため、おそらく埴輪棺の破片の可能性もあろう。

5. 石器・石製品

サヌカイト製削器1点(89)、同火打石片1点(92)、同剥片11点の13点である。いずれも攪乱墳内より出土した。

石器 サヌカイト製削器は完形品で、自然面を残す横長剥片の長辺に沿って剥離を加え、刃部が作り出されている。長さ8.86cm、幅3.53cm、厚さ0.91cm、重量24.0g。

6. 石材

攪乱墳内より、大量の破碎された輝石安山岩片が出土した。調査分だけでもその総数は18303個、重量は1401kgであった。また床面の凝灰岩層が掘削等により攪乱され、これによって出土した凝灰岩片は総数1570個、重量125kgであった。

凝灰岩石材 床面の凝灰岩層中に含まれているものである。出土した最大の石材は長さ24.0cm、幅17.0cm、厚さ10cmの石塊で、小さなものは長さ2～3cmまでさまざまである。これらの多くは塊石であるが、大・中の破片の中には節理面で剥離して平坦面を残すものもみられる。

100は長さ15.5cm、幅11.0cm、厚さ8.0cmのブロック状の石材で、斜めに加工された面をもつ。節理面で剥離・分割された板状の石材には(101～103)があり、その厚さは4.5～6.5cmである。

(101)は長さ19cm、幅12.5cmで縁辺に分割時の幅1.5cmの鑿跡が残されている。(104・105)は2面の加工平坦面を残す石材片で、その角度は鈍角である。(106・107)は繰り込み状の平坦面を有する石材片である。

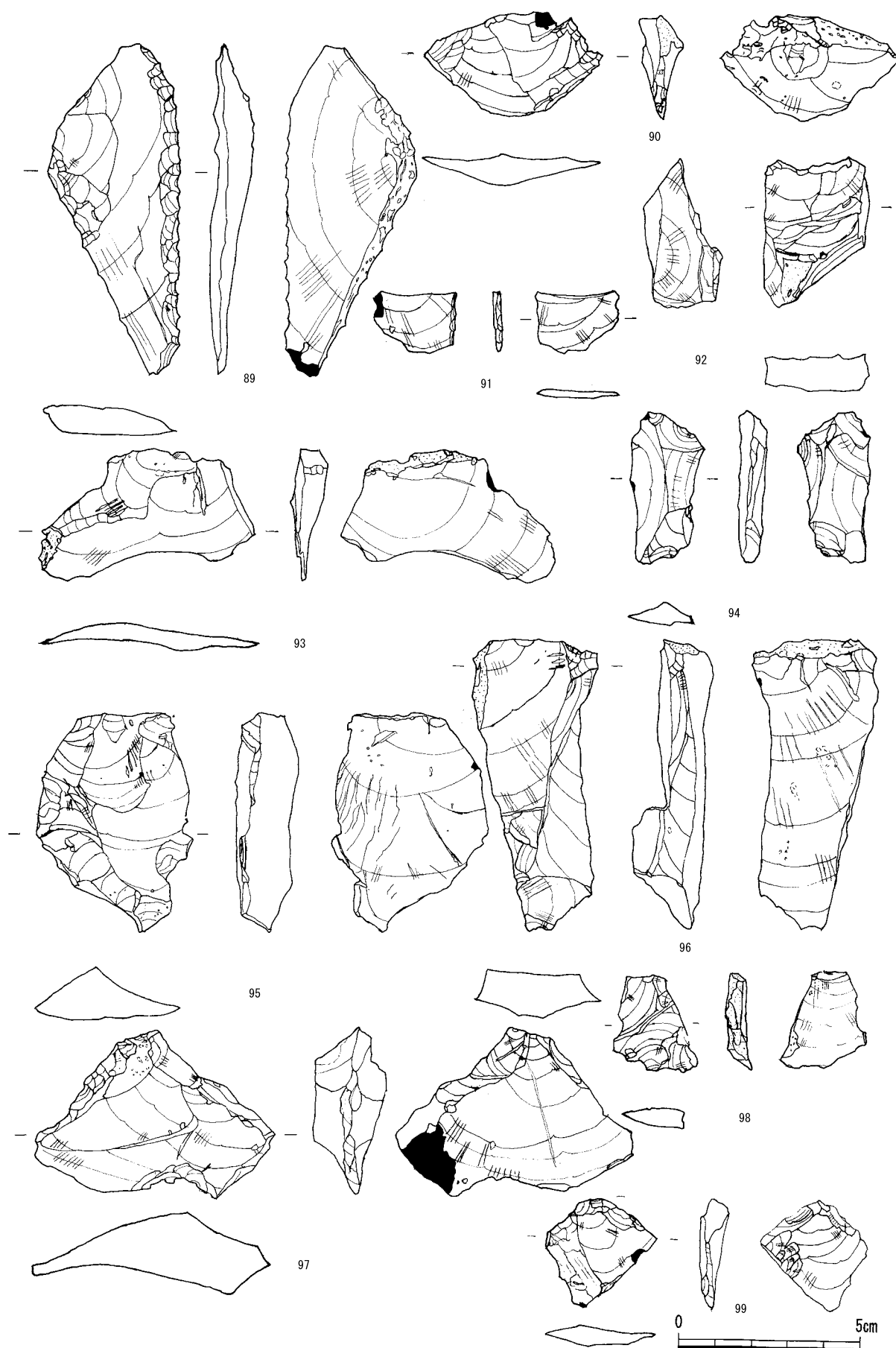


図39 2号墳出土石器 (2/3)

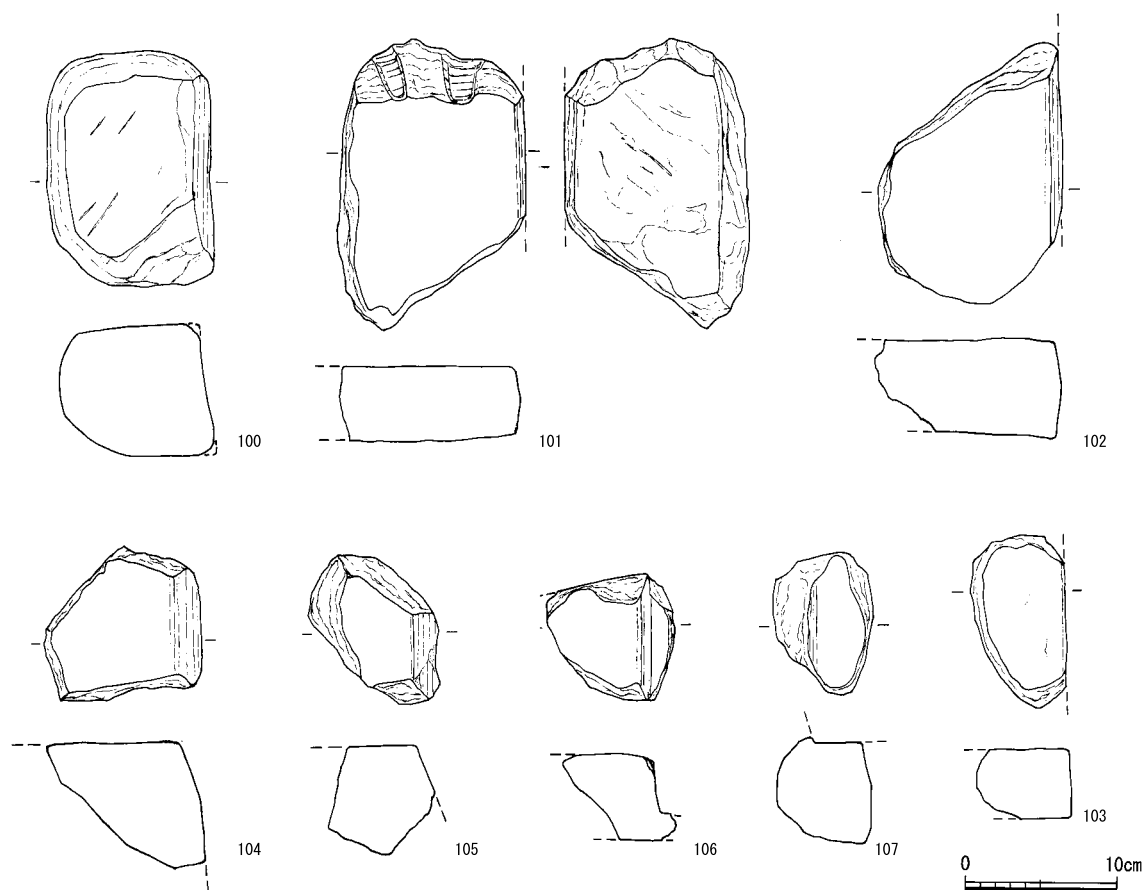


図40 2号墳出土加工凝灰岩 (1/5)

(4) 小結

2号墳は平成23年度の踏査によって確認された古墳であるが、奈良県において飛鳥時代の主要古墳が新しく見いだされることは近年ではあまり例がないと言えよう。調査の結果、この古墳は飛鳥時代に築造された横穴式石室を埋葬施設とする径約16mの円墳であることが明らかとなった。墳丘背後には大規模な周溝がめぐる。

調査前において、墳丘の中心軸を決めたところ、その後に検出された横穴式石室の中心軸は、墳丘中心軸より約1m西にずれていたことが判明した。当初、この原因は、墳丘が東向きの傾斜面に位置し、周溝の東西で約1.5m比高差があり山寄せとなるため、石室は中央ではなく、山側に寄ったものと思われた。2石室並列とするには、ややそのスペースは不足すると思われたからである。

その後、墳丘東側において石棺が検出された。このような石室中心主軸のずれは、当初よりこの石棺の配置を確保するため、東側をやや広くしたことも考えられよう。

2号墳からは石室内から出土した多くの須恵器がある。この中で杯Hは最終段階の型式も含まれている。また低脚高杯もみられる。これらの須恵器より2号墳の築造時期は7世紀の中頃と思われる。また出土平瓦は凸面擦り消しのみであり、これは飛鳥時代の前半期に多いとされる。

2号墳の周辺には同時期の古墳はみられず、東約1.4kmに位置する広陵町・牧野古墳と共に単独に位置することが特色である。しかも飛鳥時代特有の大きな周溝が背後にめぐっていることは、この古墳の存在をかなり際立たせている。

横穴式石室は北西約4kmの王寺町・明神山付近より産出する輝石安山岩の自然石を用いるが、この石材を使用した横穴式石室墳は6世紀末頃の王寺町・畠田古墳に見られる。また時期的に近

と思われる香芝市・上中ヨロリ1・2号墳はこの付近の輝石安山岩を使用しているようである。周辺の牧野古墳と同時期の平野2号墳などは花崗岩系の石材を用いており、2号墳の石室はやや特異といえよう。そのため、石室の構築にあたり、この明神山産の輝石安山岩を使用した理由がどこにあるかが問題となる。

石室床面の凝灰岩碎片敷 石室床一面に凝灰岩碎片を厚く敷いていることは、今のところ例をみることができない。このような検出状況は一見、古墳において後世に凝灰岩製の石棺が破壊・粉碎された状態と類似している。馬見丘陵の古墳においては、松里園2号墳では家形石棺の底石がごとごとく碎片となっていたといい、黒石13号墳では横穴式石室内で「人頭大に破碎した凝灰岩片が石室内全面に散乱していた」という。

しかし、2号墳石室床での状況は明らかに敷き詰められており、このような事例は今のところ知られない。これに近似する例としては、香芝市・平野2号墳では棺台部分に凝灰岩碎片を使用している。また高取町・カンジョ古墳では玄室側石の基底に沿う溝状の窪みに石が敷かれ、「・・・凝灰岩を粉状にしたもので石が固定されていた。」という。これらは凝灰岩の碎片などを部分的に使用したもので、2号墳の石室床で全面使用とは異なるものである。また同時期の兵庫県芦屋市・旭塚古墳では竜山石の破碎礫を敷いており、例のない敷石という共通性がある。このような赤褐色の石室石材と共に灰白色の凝灰岩敷床面によって、石室内はかなり荘厳化されたという効果も考えられよう。

また、床面の凝灰岩は大小の破片、碎片が使用されているが、この中に、鑿痕や平坦面に加工された石材片が含まれていた。この凝灰岩は、葛下川をはさんだ古墳群の西方約3kmに位置する香芝市・高山石切場遺跡付近の石材に類似するとされ、石切場の碎石類を使用しているとみられる。

副葬品 副葬品については石室が古くから開口していたため、僅少であったが、特徴的な遺物が出土している。琥珀製棗玉は飛鳥地域の主要古墳でも出土するものであり、特に銀被せの大刀が含まれていることは出土傾向としては注目されるものである。また副葬品に鉄鏃が含まれていることは、例が少なく、被葬者はおそらく壮年の男性と推定される材料になるのではないかとと思われる。

出土平瓦 2号墳からは石室内及び周溝内より27点の平瓦片が出土した。しかしいずれも小片でしかも、接合できるものはなかった。これらは攪乱墳や周溝より散在的に出土しているため、2号墳における用途については明らかではない。平瓦の多くは凸面が一様に擦り消し加えられているという点では共通するが、それぞれは別個体で、各破片は厚さや色調においても多様である。

飛鳥時代の古墳から同時期の平瓦が出土する例はわずかではあるがみられる。これらは主に用途が明らかな古墳と、用途不明の瓦片が少量出土する古墳とがある。前者の例としては、河合町・佐味田石塚1号墳（榎考研1989）と明日香村・真弓テラノマエ古墳（西光2012）がある。佐味田石塚古墳の埋葬施設は竪穴式小石室であるが、石室床面には平瓦が敷かれており、真弓テラノマエ古墳では石室床・棺台に平瓦が使用されていた。使用平瓦の量はいずれも多い。大和においては、このような事例は少ない。

これに対して、平瓦がわずかに出土する例は多くが1点ほどである。後に流入した可能性が多いものには時期的に異なる広陵町・牧野古墳と墳丘周囲から出土した葛城市・鳥谷口古墳である。

しかし、香芝市・平野2号墳は中世遺物と混じっているとはいえ、葛城市・三ツ塚10・11号墳（榎考研2002）と共に石室内において出土している。これらの平瓦についても用途などは不明で、出土状態が不確かなものも含まれる。2号墳出土平瓦はその中でも最も多くの出土量である。しかし、これら平瓦を使用・出土する古墳が真弓テラノマエ古墳を除くと、2号墳を含め、いずれも奈良盆地西部に分布するという傾向が認められよう。

なお、上牧久渡古墳群の東約500mには大谷瓦散布地（前田他2013）が所在するが、この採集瓦と佐味田石塚1号墳石室床面に敷かれた平瓦との比較も行ったが、異なるものであった。2号墳出土平瓦の生産地は今のところ明らかではない。

箱式石棺 墳丘東側で検出された箱式石棺は蓋石5枚で覆われた小規模なものであるが、蓋の端面には面取りが施され、家形石棺を意識しているものと言える。石棺の主軸は横穴式石室と同じ南北方向で、おそらく小型の箱式石棺と見られる。飛鳥時代の主要古墳の中でこのような事例はまだ明らかではなく、稀少な例といえよう。

2号墳の埋葬施設は横穴式石室であるので、通常ならばこのような棺は横穴式石室内に合葬か追葬が行われるはずであろう。また小規模な棺であれば、墳丘の周囲に配される例もあり、墳丘内において埋葬施設が別置されたことは特異な事例と言えよう。その位置関係から当初より計画的に埋葬された可能性が高い。

石室内出土の中世土器 また、石室内からはかなりの瓦器・土釜・小皿片が出土した。瓦器の時期は鎌倉初期ころで、2号墳はこの時期に開口されたといえよう。また、近世の小皿も含まれているがわずかである。かなりの期間石室は開口していたようである。

飛鳥時代の古墳の中世における開掘は、近隣では香芝市・平野2号墳、また明日香村・高松塚古墳など、その事例は多い。2号墳も中世の同様な機運のもとで行われたものであろう。

その後は近代に至るまで開口していたと思われるが、なぜか明治・大正の古墳分布調査では知られることはなかった。そして近代に至り、大規模な採石のため石室の多くは損壊を受けたものといえよう。

2号墳の特性 2号墳が所在する馬見丘陵は、石材が産出せず、基本的に大型の横穴式石室が築かれる条件にはないところである。これまでは広陵町・牧野古墳が知られているのみであった。したがって、馬見丘陵においてこのような大型横穴式石室墳が築かれるということについては、かなり特別な事情が考えられる。

また、2号墳の築かれた時期は、出土した須恵器・平瓦より、7世紀中葉であることは明らかで、すでに切石の石室墳が出現している時期に相当する。それにもかかわらず、石室に硬質かつ重い輝石安山岩の自然石が採用されていることも、特異であるといえよう。このほか、床面に凝灰岩層を敷き詰め、石室内の荘厳化をはかっていることや、平瓦の出土も特色の一つである。

この一方で、2号墳には大規模な背面周溝があり、副葬品にも琥珀製玉・銀装大刀を含むなど飛鳥地域の主要古墳と共通する内容もみられる。このように2号墳は飛鳥時代の古墳のもつ多様性を示しており、そこに飛鳥地域との関係を持ちながらも、地域的な特性を有しているという特性がうかがえよう。

第3節 上牧久渡3号墳

(1) 立地

3号墳は、古墳群が所在する丘陵の北側に突出する尾根の先端に位置する。丘陵全体の最高所ではないが、丘陵先端にあたり、二上山東側と葛下川周辺の平坦地を一望できる丘陵の中でも好立地である。現状の丘陵北端は幅10mに渡って、円弧を描くように大きく抉れて崖となっているが、古墳築造時にはもう少し北側に延びる丘陵であったと想定できる。

第1次調査では、第1トレンチにおいて3・4号墳を確認したものの、3号墳において画文帯環状乳神獣鏡と複数の鉄器の出土を伴う埋葬施設の毀損が明らかとなり、調査は中止となった。

第2次調査は、墳丘規模と墳形を確認するために調査区を設定し直し、第1次調査で出土した銅鏡や鉄器類がどの埋葬施設に伴うかを検討し、埋葬施設の構造解明と築造時期を明らかにすることを目的として行った。

(2) 墳丘

3号墳の墳形は、後述する4号墳の築造時に大きく改変されており、現在の地形からは墳形を読み取ることができない。埋葬施設の検出は、ほぼ表土直下に地山を検出しており、3号墳に伴う盛り土は確認できなかった。第2次調査では、第1次調査の調査区が埋葬施設周辺に限定したものであったため、墳丘を面的に確認するために第1次調査第1・3トレンチを拡張して、14m×10.5mの長方形を基調とした調査区を設定し、墳形の確認を目的に新たに第6～8トレンチを設定した。

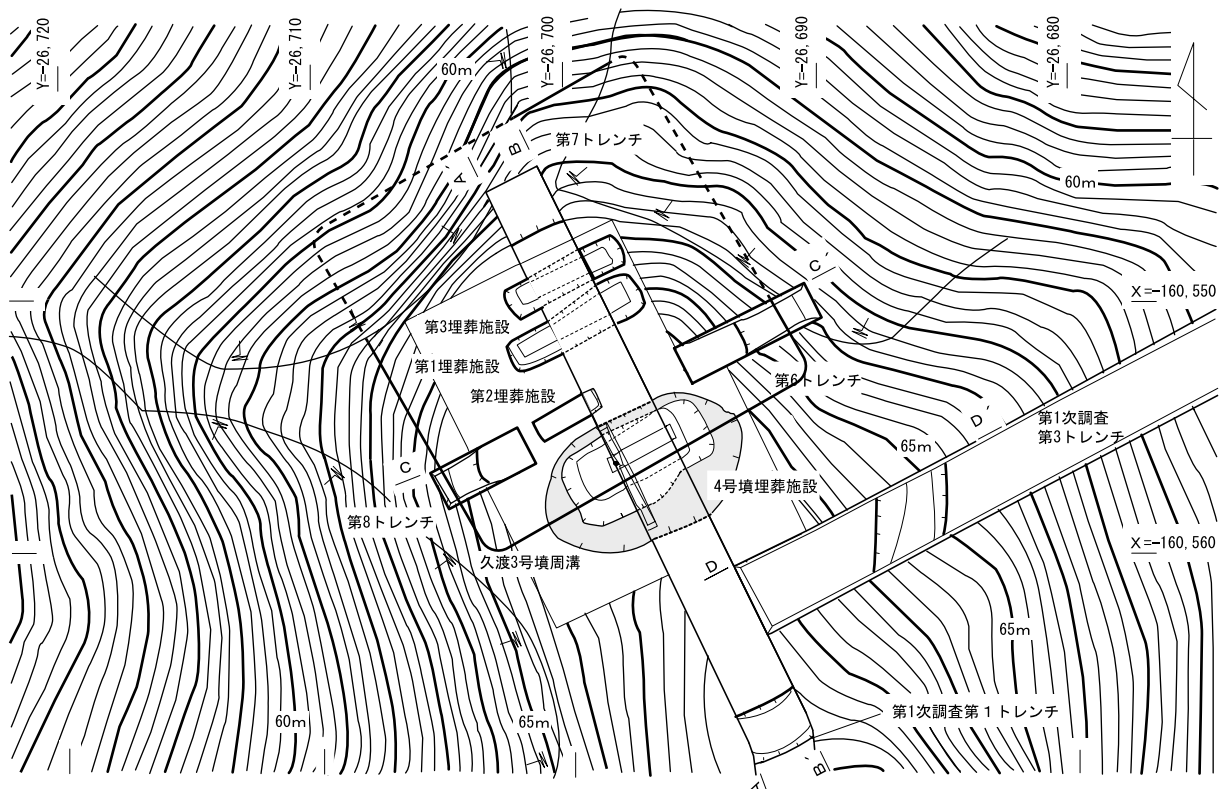


図41 3号墳埋葬施設位置図 (1/300)



その結果、調査区の南側に、丘陵尾根方向に直交する直線的な溝を確認した。その検出長は、第1トレンチを挟んで8.4mである。溝の両端は4号墳築造の際に削られているが、溝の下端を墳丘西側、第1トレンチ両壁面と墳丘東側で確認することでほぼ一直線に掘削されているとわかる。検出した溝の覆土は遺構保存のために掘削をやめて、墳丘を断ち割る形となっている第1トレンチ土層断面を精査することで調査を進めた。溝は、丘陵尾根に対して直行する位置に、最大幅5.6m、深さ約0.8mで、断面形は浅いU字形で、南側の立ち上がりが緩くなっており、3号墳の南側を区画する周溝状の溝とみられる。覆土は、暗褐色の砂質土層を中心としており、自然堆積での埋没が想定される。土層精査において覆土中から土器等は出土しなかった。検出した溝覆土の中央は、4号墳の埋葬施設によって壊されており、3号墳が4号墳に対して先行することを確認できる。墳丘の東西については、4号墳築造時に掘削を伴う地形の改変が行われており、なおかつ一部丘陵が崩れているために3号墳の痕跡は明確ではない。現況の丘陵の東西幅は狭く、復元的に見積もって墳丘の東西幅は15m前後とみられる。墳丘北側についても、4号墳による改変を受け、それより北側丘陵は丘陵先端が大きく崩れていて明確な墳端を確認できない。墳丘南を区画する溝と後述する第1埋葬施設の位置と周辺地形との検討から墳丘の復元を試みるならば、一辺約15m規模の方形を基調とした墳丘をもつとみられ、一辺約15mの方墳ないしは北側に小さい前方部をもつ全長約20m前後の前方後方墳となる可能性がある。3号墳に伴うとみられる土師器の壺片は、第3トレンチの一部を北側に拡張した際に表土直下から出土している（図50-15、21）。

（3）埋葬施設

a) 埋葬施設の位置と概況

埋葬施設は3基あり、厚さ約20cmのほぼ表土直下で検出できた。周辺の地山は黄褐色の砂質土と薄い灰白色粘土層が南に緩く傾いた互層となっており、これに掘り込む形で、並行する3つの埋葬施設を墳丘の中央付近に検出した。南から順番に第2、第1、第3埋葬施設と呼称する。第1次調査第1トレンチは第1、3埋葬施設の中央部分と第2埋葬施設の東端を毀損していた。

第2次調査は、まず第1次調査で採取した銅鏡や鉄器の出土痕跡を求めてトレンチ東西壁等の土壌に対して、ポータブル蛍光エックス線装置を用いた水銀朱や鉛等の検出を試みたが、確認できなかった。並行して第1トレンチ東西壁面の土層を精査したところ、東側壁面でも木棺直葬の痕跡を確認できたため、調査区を設定して面的な検出を行ったのち、毀損の大きい第1、第3埋葬施設の調査を行った。



写真16 第1埋葬施設断面（北東より）



写真17 第3埋葬施設断面（北東より）

b) 第1埋葬施設

墳丘のほぼ中央に位置する。第1次調査では、第1トレンチにより墓壇のほぼ中央を、幅2.4mで深さ約1mの規模で、墓壇底よりも深く掘削して墳丘を断ち割っていた。また、埋葬施設の西側の調査が進められており、その際に鉄槍片1点と鉄鏃3点が出土していた。

第2次調査では、第1トレンチ東西壁面の土層を精査し、両壁面で落ち込みを確認したため、トレンチ東側についても面的に遺構検出を行った。しかし、墓壇を含めて第1トレンチによって東西に完全に分断されており、東西の遺構が同一のものであるかについては、掘り下げの過程も含めて慎重に検討を重ねた。その結果、平面的な位置が整合すること、木棺痕跡の底面の標高が木棺痕跡の東西両端と第1トレンチ東西壁面の4箇所において、やや東が高くなりながら、ほぼ一直線となることから同一遺構と判断した。

復元すると墓壇は、平面形が現況で長軸5.2m、短軸1.8mの隅丸長方形で、丘陵尾根筋に対して直行する方向、やや北に傾く東西に主軸（N-59-E°）をもつ。墓壇の深さは約0.5mで、長側に緩い段をもつ二段墓壇であり、その中に木棺直葬の痕跡を確認した。後述する4号墳築造時に上面を大きく削られており、二段墓壇の一段目は浅くなっており、築造当初の平面形は、もう一回り大きかったものとみられる。墓壇の底は第1トレンチ西側では幅約0.9mで、そこに薄く砂質土を入れてから、底板が平らで幅約0.7mの木棺を設置したとみられる。木棺の周囲に粘土や礫は使用していない。土層断面の観察と平面検出から、木棺の形状は箱形であり、組み合わせ式とみられる。木棺平面形は、墓壇埋土が砂質土で検出が難しかったため、木棺設置面から高さ5～10cmまで掘り下げながら検出した。東側の墓壇は、4号墳造営時に上面を削られており、特に遺存状況は良くない。木棺の規模は、長軸4.4m、東小口幅0.6m、西小口幅0.48mで、木棺の設置

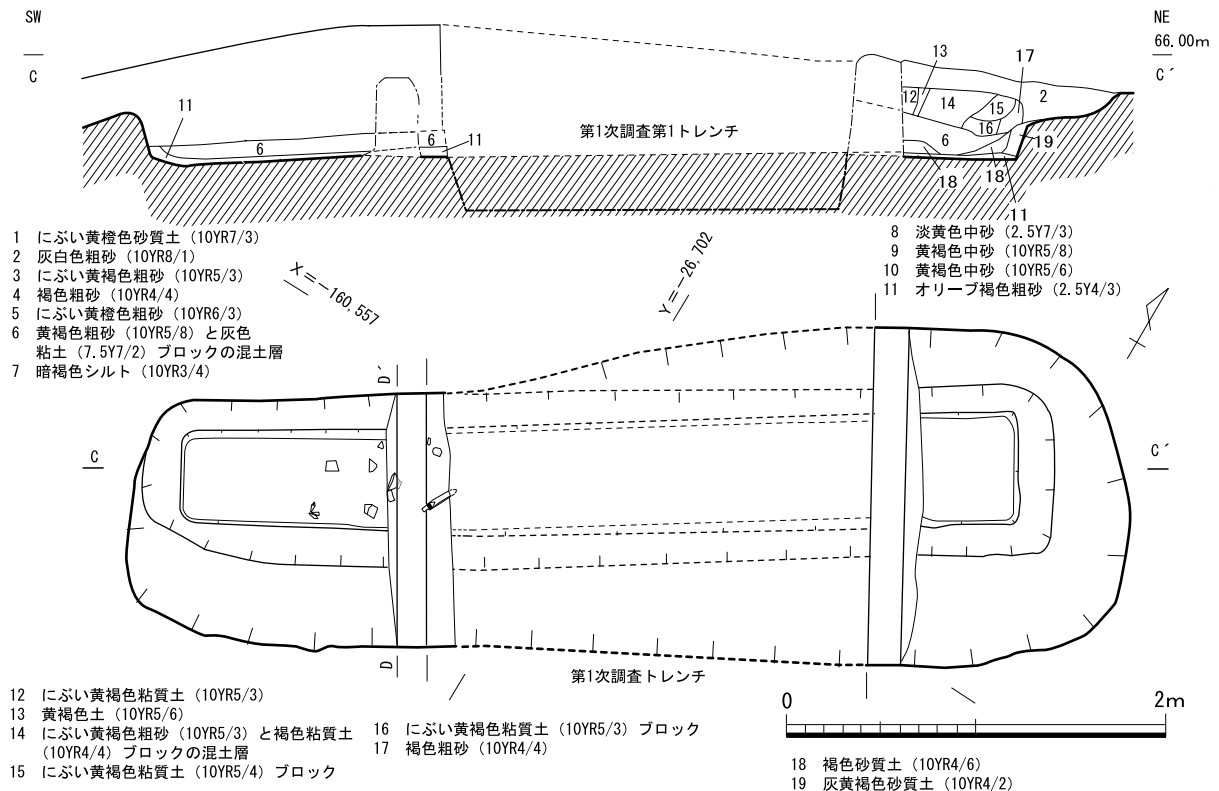


図43 3号墳第1埋葬施設 (1/40)

面は東側がやや高く標高65.32mで、西側が標高65.25mである。小口幅がやや広い東側が埋葬頭位とみられる。木棺小口の形状は、掘り下げ過程で側面に突出する形態の可能性を何度か検討したが、断定するには至らなかった。

遺物出土状況

第1次調査では、第1トレンチ西側において鉄槍1点は茎部が折れた状態で、鉄鏃3点は鏃身から茎部まではほぼ完形で木棺南側よりに、標高65.54m前後で出土しており、取り上げていた。

第2次調査では、第1次調査で木棺設置面付近まで掘削が到達していなかったため、これを引き継いで掘り下げを継続したところ、下層から叩き目をもつ甕片等6点が出土した（図50-11）。この土器片は、第1トレンチ沿いの土層観察用のアゼ中からも出土しており、同一個体とみられる。叩き目をもつ甕片を中心とする。第1次調査で出土した鉄器類は、約30cm、木棺の設置面から浮いて出土したことになる。第2次調査で出土した土器片は、木棺痕跡内で上下約19cm幅での出土しており、第1次調査でも同一個体とみられる叩き目痕をもつ甕片が出土している。この出土状況は、鉄器類を棺上もしくは二段墓壇の一段目肩付近に、叩き目痕をもつ甕は木棺蓋上に副葬したものが、木棺の腐朽とともに落下した結果とみられる。

第1トレンチ東側で検出した墓壇も掘り下げを行ったが、土器片が1点出土したのみで、鉄器等は出土しなかった。墓壇内の土は篩にかけて精査したが、玉類や鉄釘等は出土していない。

銅鏡の他にも第1トレンチの排土中からは、鉄槍片、鉄鏃などが出土していたが、後述する遺物の項でも触れるように、銅鏡と鉄器の一部に水銀朱の付着が認められ、また銅や鉛成分の付着が確認できた。付近で出土した銅鏡が画文帯環状乳神獸鏡の一面であることから、断定は困難で

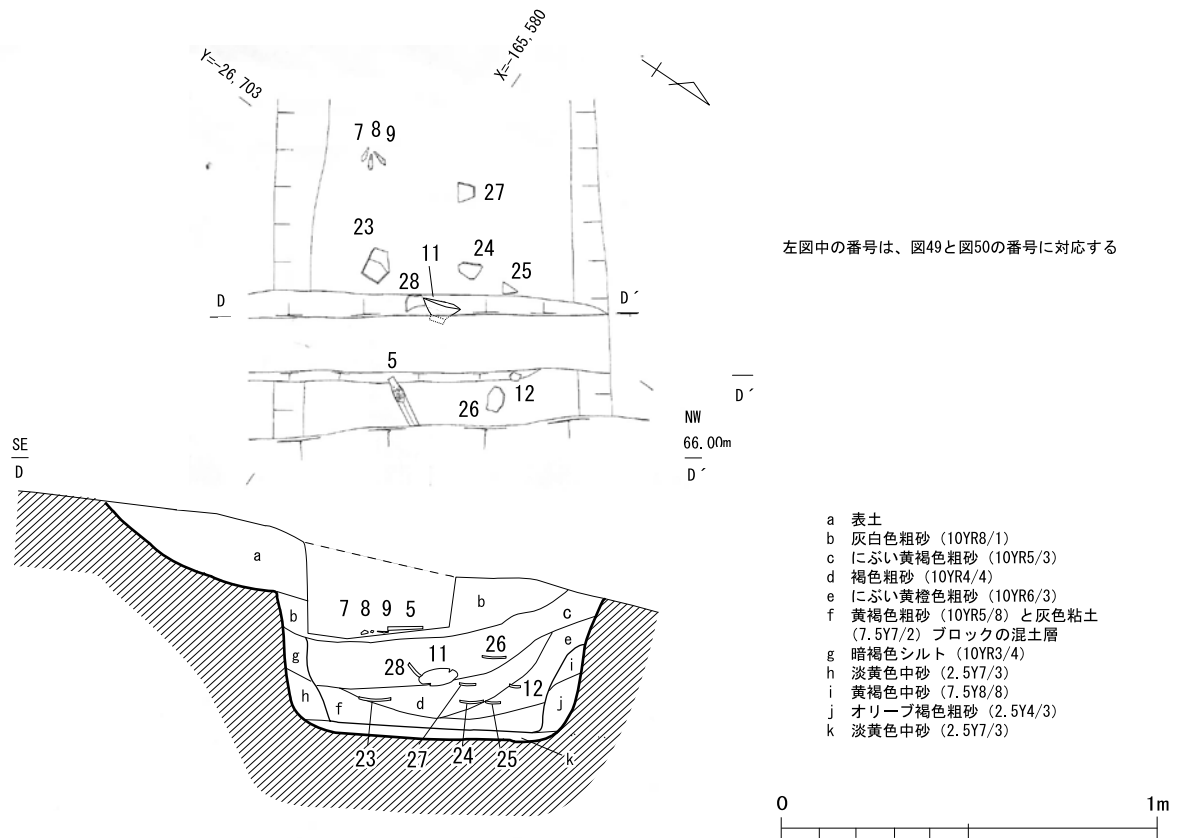


図44 3号墳第1埋葬施設遺物出土状況・断面図 (1/20)

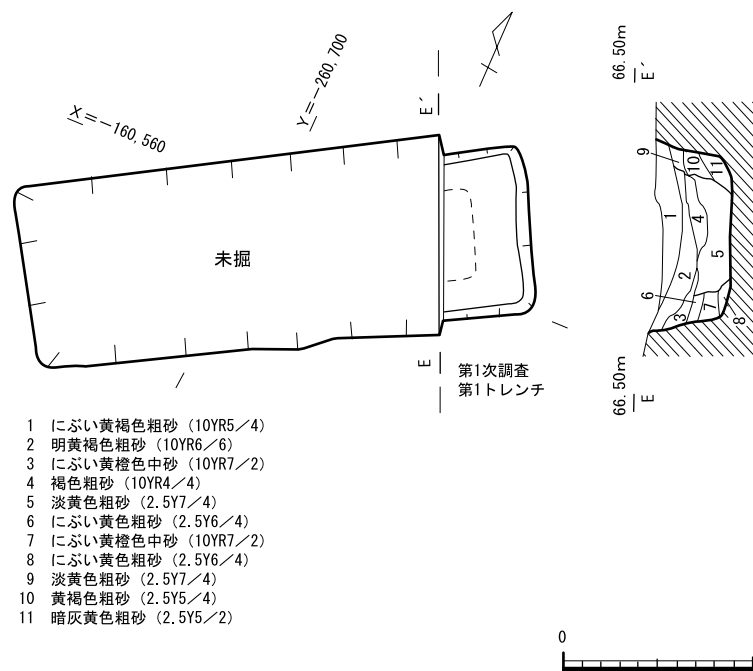


図45 3号墳第2埋葬施設 (1/40)

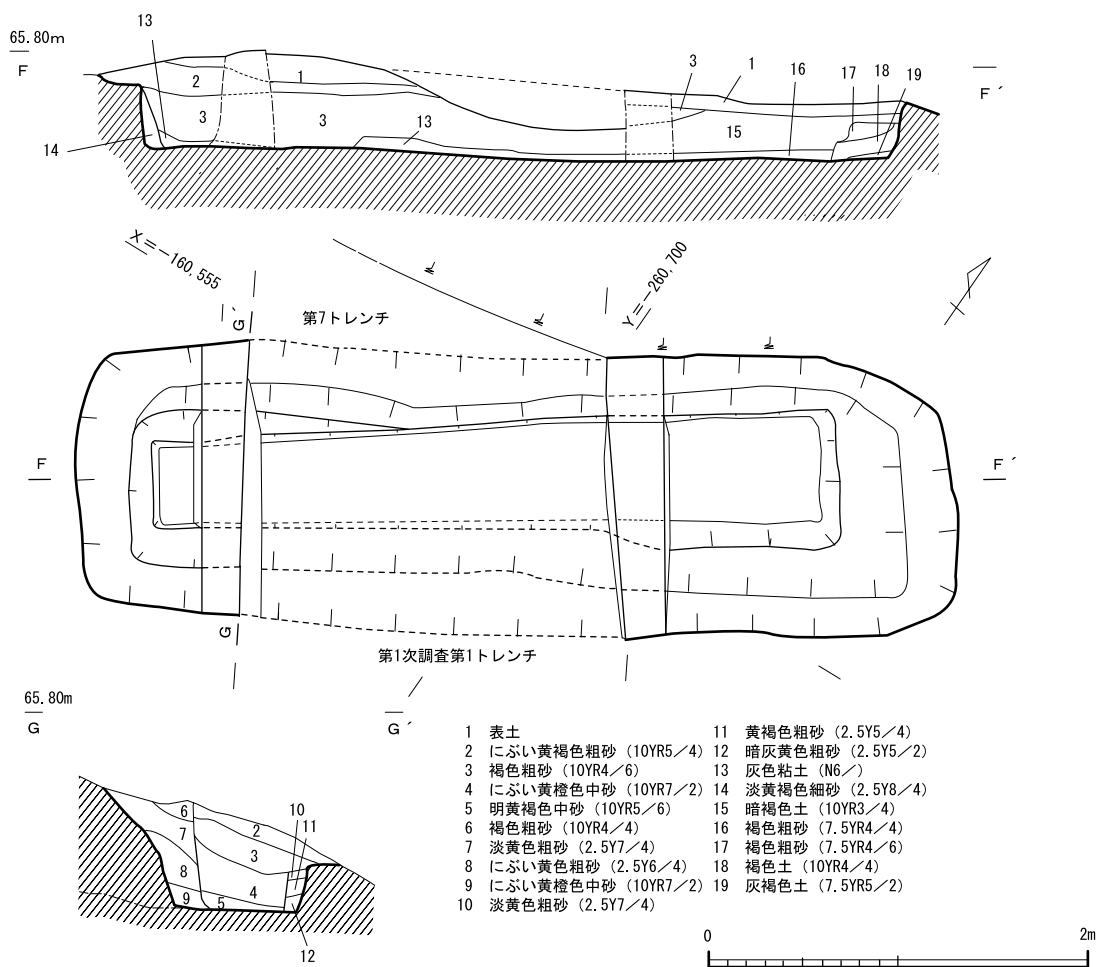


図46 3号墳第3埋葬施設 (1/40)

あるが大部分の出土遺物は第1埋葬施設に伴う可能性が強いと判断した。

c) 第2埋葬施設

墳丘の南側に位置する。第1次調査第1トレンチによって、東端が破壊されていたが、墓壇底部が第1トレンチの底に残っており、復元すると墓壇は長軸約2.8m、短軸約1mの隅丸長方形である。第1トレンチ西側壁の土層を精査したところ、墓壇底付近で幅約0.5m、箱形とみられる木棺の腐朽痕跡を確認した。主軸はN-58°-Eである。壊されたのは、木棺の端とみられ、第1トレンチによって副葬品等が出土する状況ではないと考える。この埋葬施設は遺存状況が比較的良かったので、これ以上の掘削を伴う調査をせずに保存した。副葬品や土器類は出土していない。

d) 第3埋葬施設

第1次調査第1トレンチの北端にあたり、木棺痕跡のほぼ中央を大きく抉られた状態で、薄皮一枚を残して東西の分断を免れていた。そのため長軸の土層は見通しで復元的に作成している。トレンチ東西両壁面で、木棺直葬の痕跡を確認した。4号墳造営時に墓壇上面が大きく削られており、墓壇検出面は急な斜面となっており、特に墓壇中央から東側の遺存状況は良くない。結果として墓壇の北側ラインは削られてだいぶ内側に入っている。

墓壇平面は、長軸約4.8m、幅約1.4m、主軸はN-57-E°である。断面は南側にわずかに緩い段の痕跡があり、本来は南北の長側断面に段をもつ第1埋葬施設と同様の二段墓壇である。底面の平らな箱形の組み合わせ式木棺が収められていたとみられる。木棺痕跡の遺存状況は悪いが、復元すると長さ3.7m、小口幅は西が0.45m、東が0.6m、棺痕跡の東側の幅が広く、東小口の標高は64.67mで、西小口の標高は65.70mであり、東向き頭位とみられる。

埋葬施設の掘り下げを行ったが、鉄器等の副葬品は出土せず、土器の細片のみである。これは4号墳築造時に埋葬施設の上面を削られていることと、第1トレンチで木棺痕跡内の大部分が失われたことが原因とみられる。

(4) 出土遺物

3号墳からは、銅鏡1面と槍・剣類2点以上、鉄鏃4点と土器片が出土している。玉類は確認できていない。

1) 画文帯環状乳神獣鏡 (図47・48)

銅鏡は、直径14.2cmで、クリーニング後の重量が511.0g (小片195.5g、大片315.5g) である。大きく2つに割れているが、完形に復元できる。外区の一部が錆びて、文様の不明瞭な部分もあるが、遺存状況は比較的良好である。銅鏡の表面は黒色に近い部分が多いが、割れた破断面は白銀色で、本来の金属色を確認でき、副葬時には完形であったことがわかる。精良な白銅質で、文様は極めて精緻で、鋳上がりが良好な中国鏡である。鏡縁部外側の厚さは約5.5mm、内区神像付近は厚さ約2.2mmである。外区は約5.0mmの幅で連続する陰刻された雲文と、鋸歯文をもつ小さい圏線と細い圏線を挟んで幅約6.4mmの画文帯が組み合わされている。画文帯の図像は時計回りに配置されており、図示した銅鏡の上方に配された雲車とそれを曳く6匹の龍とともに、神仙がのる走獣、飛鳥、亀、が続き、その中に飛天が円形のものを捧げもつ図像が二つ、ほぼ対角の位置に描かれており、古代中国の神話の天の月日の運行を表現したものとみられる。

外区と半円方格帯との境には、幅広で頂部に沈線をもつ圏線があり、斜面に菱雲文を用いる。画文帯環状乳神獣鏡のこの圏線には鋸歯文を用いるのが通有であり、この銅鏡の文様上の大きな特徴をなす。菱形に区画された中に陰刻の渦文をもつ。半円方格帯には、12個の方格と半円をも



図47 画文帯環状乳神獸鏡 鏡背面・断面 三次元計測画像 (1/1)
JSPS科研費 25284161 (研究代表：水野敏典) の成果の一部である



図48 画文帯環状乳神獸鏡 鏡面 三次元計測画像・断面写真（1/1）

ち、その間を円文と珠文で埋めている。方格の大きさは下端で一辺7.7mm前後、上端で一辺6.1mm前後であり、「田」の字に区画した中に四文字の銘がある。一部錆により判読できない文字もあるが、合計48字の銘文をもつ。

「吾作明竟 幽涑三商 周刻無□ 配像萬昌 白牙□樂 衆神□容 天禽四首 銜持維岡
(社) (學) (見)

□從富貴 安樂子孫 番昌大吉 與師命長」

(是) (車崎正彦編『考古資料大観 銅鏡』小学館(2000年)参照)

半円は、下端で最大幅約12.2mmの大きさで、縁に5ないし6つの弧文をもち、その上面に半肉彫りの文様をもつ。上方に玄武とみられる亀形のほか、朱雀とみられる鳥形、獣形、獣面、鳳凰、膝まづいた神仙像、いわゆる熊人とみられる図像などが表現されている。その中で対角の位置に花文を二つ配している。花文は、円形の浮文に四つの花卉をもち、周囲に突線の渦文4つと弧線を組み合わせている。

内区との境には細い圈線がめぐり、有節弧までの主文の描かれる幅は19.5mm前後である。

主文は、8個の環状乳を配し、4体の細長く伸びた獣形の上に4組の神像を載せる図像である。上方に、琴をもつ伯牙に鐘子期と従者とされる伯牙弾琴の図像があり、左に玉勝が描かれている西王母、右に三つの山形の冠をもつ東王父とみられる神像を配している。それらの神像の背後にはそれぞれ異なる2体の神獣の上半が描かれている。さらに、西王母の左側の獣形は、横向きの小さな蛙形と向き合っており、東王父の左側の獣形は、横向きの鳥形と向き合っている。下方には黄帝とみられる神像があり、左には神像側を向く侍仙がおり、右には角をもつ獣形の上半と小さい跪いた仙人が向き合うように描かれている。神像の載る4体の獣形は、巨もしくは維綱を食んでいる。

鈕は、直径約24.5mmの半球形で、鈕孔は四角である。有節弧をもち、その外側の径は約35.4mmである。

本鏡は、画文帯環状乳神獣鏡の基本的な図像を省略せずに描いており、鋳上がりも良好であるが、鋳型段階での文様の崩れがいくつか確認できる。画文帯では、仙人の乗る2番目の亀、先頭



写真18 西王母



写真19 東王父

の龍、先頭の水鳥に鑄型の崩れが認められる。半円方格帯では、西王母付近の半円、方格そして間を充填する珠文に面的な崩れが認められる。それ以外にも、沈線状の傷が西王母上の神獣の左目付近から環状乳をへて半円方格帯そして画文帯の走獣付近まで確認できる。他に沈線状の傷は、時計回りにみると伯牙右の神獣の左目付近と有節弧と、右の環状乳下から尾の獣毛表現の上に沈線上の傷がある。さらに、黄帝左の神獣から下の半円にかけて延びている。

鏡面は、表面の大部分が錆びているが、部分的に光沢をもつ面を遺している。付着物は、鏡背面外区を中心に、赤色の顔料が付着しており、分析により水銀朱と判明している。

同一文様をもつ「同型鏡」に、大阪府の和泉黄金塚古墳東槨出土鏡がある。

2) 鉄製品

1. 剣・槍 (図49 1～6)

出土したのは8点の破片で、そのうちの4点が2つに接合し、図示したのは合計6点である。切先部分が2点出土しており、2個体以上があることがわかる。

1は、2点が接合して残存長約10.1cm、刃部最大幅が2.2cm、錆び歪んでいるが厚さ約0.5cmの両刃の刃部片である。重量は28.1gである。先端はふくらが強く、中央に鑄をもち、刃部断面形

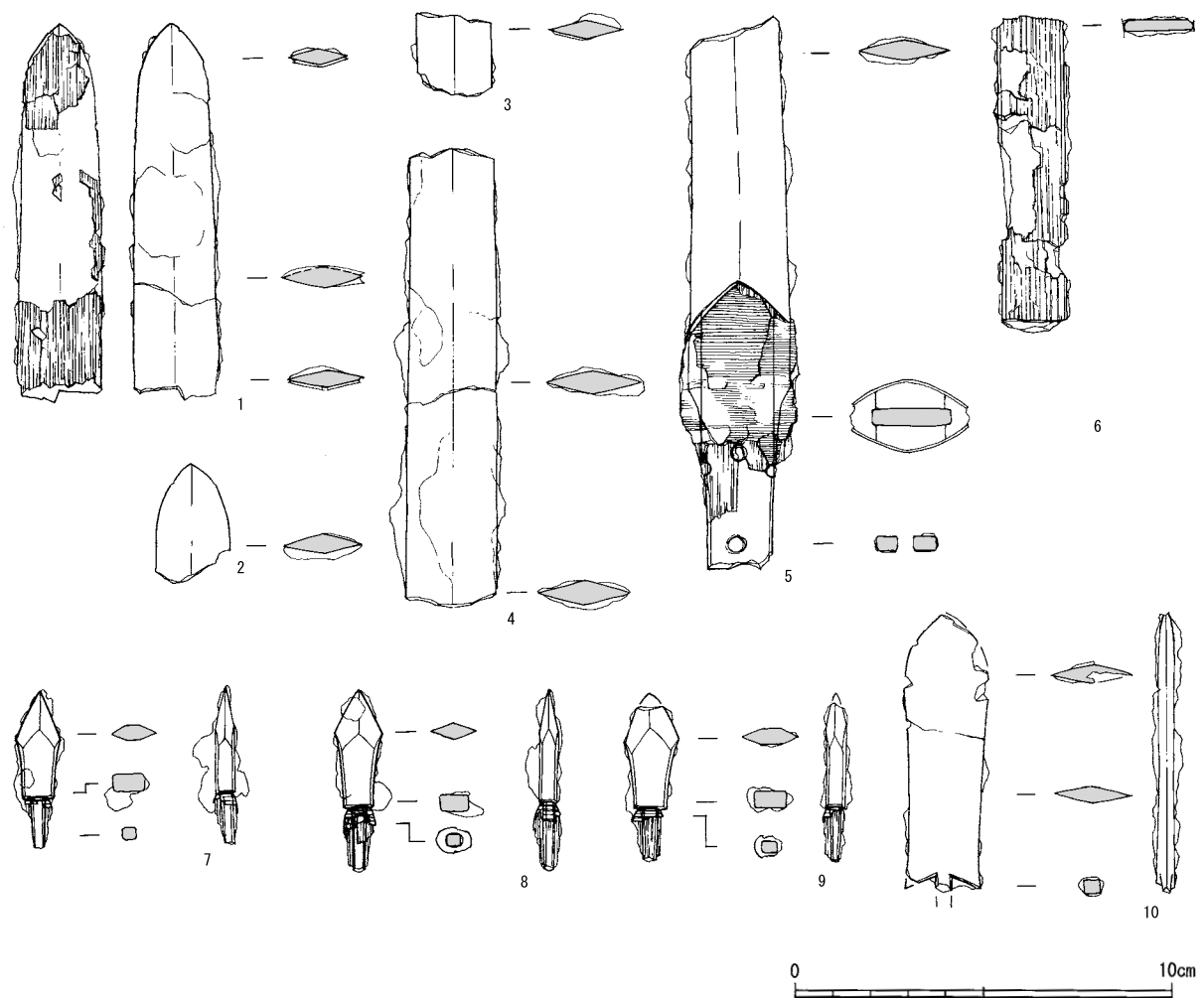


図49 3号墳出土鉄製品 (1/2)

は菱形である。片面のみに木質が付着していることから、付着木質は鞘材ではなく、木棺の木材痕跡である可能性が高い。樹種は不明である。

2は、切先部分で、残存長3.2cm、刃部最大幅約2.0cm、厚さ約0.6cmで、重量は6.9gである。鎬をもち切先部分の形状は、1に似る。木質、布などは付着していない。

3は、残存長2.2cm、厚さ約0.5cm、鎬をもち刃部片である。鉄鏃片の可能性もあるが10に鎬が認められず、槍か剣の可能性が高い。刃部の重量は4.6gである。付着物は確認できない。

4は、刃部片で、2点が接合して残存長12.3cm、刃部幅は、2.2～2.4cmで、重量は63.1gである。断面は菱形で鎬をもち。付着物は確認できなかった。

5は、槍の身から茎部にかけての破片である。両端が欠損しており残存長は14.8cm、刃部幅は2.4～2.6cm、重量は83.6gであり、刃部に鎬をもち。槍身と接する部分で4枚の板を組み合わせた山形の突出をもち木製装具が確認できる。山形の先端部は幅約2mm以上の面取りがされており、山形の先端まで漆で固められた糸巻が確認できる。X線写真において、茎部中央に直径約5mmの2つの目釘孔があり、有機質の目釘を使用したとみられる。それ以外にも、茎部の両端2か所に目釘状の穿孔の一部が確認できた。現在の刃部関は、緩いナデ関とみられるが、本来、刃関双孔であったものを、加工したものとみられる。茎部断面の幅は約1.7cm、厚さは3.5mmの板状である。

6は茎部片であり、両端が欠損している。残存長は、8.5cmで、幅は約1.8cm、厚さ約3mmの板状である。目釘孔はなく、ほぼ全面に木質が付着する。槍茎部として4枚の板材の貼り合わせの可能性はあるが確認できない。付着した木質が鉄器端部付近で直線的に途切れる部分があるが、剣の柄口痕跡もしくは工具柄等が想定できるが不明である。

刃部片への木質付着は1の片面のみであり、基本的に鞘は装着していないと考える。

2. 鉄鏃 (図49 7～10)

定角式3点と有茎の腸袂柳葉式1点の合計4点である。

7～9は、定角式である。鏃身長は2.9～3.1cm、全体に鏃身幅が狭く、最大厚は約5mmと扁平な両鎬造りで、鏃身関は明瞭である。処理前の重量は、付着物込みでそれぞれ5.4g、5.1g、5.4gである。茎部は、完形の7で長さ1.8cm、茎部断面はいずれもやや扁平な方形である。矢柄は、鏃身関に接する部分を、扁平な先細りに削り出している。8においては矢柄を削ったとみられる面を確認できる。その上に桜の樹皮とみられる口巻きで固定し、外表面に黒漆が塗られている。矢柄の直径は8mm前後である。

10は、有茎の腸袂柳葉式である。鏃身は、鏃身先端と腸袂先端と鏃身の一部が欠損しており、残存長が7.4cm、重量は14.3gである。鏃身の先端はふくらをもち、鏃身の側線は緩やかなS字状をなす。鏃身最大幅は2.2cmで、断面は鎬をもたない扁平なレンズ状である。腸袂が一番深いところで約4mmと浅いが、鏃身部と茎部との接点の屈曲は明瞭で、腸袂切断部分は明瞭な面をなす。茎部は長さ4mmほどで欠損し、断面形は約5×4mmとやや扁平な方形であることから、根ばさみを用いる短茎鏃ではなく、棒状の茎部をもつとみられる。銅鏃を模倣した型式である。

一見すると、鏃身関をもたない小型の圭頭式と見間違えるような扁平な定角式は、定角式の中でも古相であり、有茎の腸袂柳葉式も古墳時代前期でも古相にのみに知られる型式である。

なお、図49-6 (以下番号のみ表記) に一部に緑青とみられる変色があり、蛍光X線分析を行ったところ銅 (Cu) を検出した (IV章参照)。これは、副葬時に6に近接して銅鏡があった可能性を示しており、画文帯環状乳神獣鏡との共伴が想定される。ほかの鉄器表面に対しても分析

を行ったところ、図1から青銅製品に由来する銅（Cu）と鉛（Pb）を検出、水銀朱に由来するとみられる水銀（Hg）は、1、2、4、5、7、8、9、10から検出された。そのうちの5、7～9は、第1埋葬施設からの出土が確認できている。画文帯環状乳神獣鏡には明瞭に水銀朱が付着しており、水銀朱の使用は、第3埋葬施設からは確認できていないことから、銅鏡および鉄器類の多くは、第1埋葬施設に帰属する可能性が高いと考える。

4) 土器（図50・11～22）

第1埋葬施設棺内とそれ以外の出土品がある。11は第1埋葬施設棺内より出土した。形態からみて鉢ではなく、甕形土器の体部下半部であろう。長めの体部に突出する平底が付く。形態は若干非対称でやや粗製の感がある。体部外面には右上がりのタタキ目が残るが底部には及ばない。底部外面には整形時の指頭圧痕が残る。底径3.6cm、現存復元高10.5cm。橙色で砂粒を含み、かなり摩耗しており、内面の調整は不明。

12は最大径が口縁部にあるようで、頸部の屈曲が弱い甕か鉢であろう。口縁部の厚みに比して頸部は薄い。口縁端部には刻み目を加え、頸部外面には細いタタキ目が残る。

このほかは第1トレンチ3・4号墳の出土品がほとんどで、地点表示品以外はいずれも採集品である。壺は13・14・18で、17は小型の壺口縁部の可能性があるが不明。13は壺の頸部、14も壺頸部で形態・調整は長頸壺に近似する。外面には縦のヘラミガキが残る。18は中型壺の平底の底部で中央が微妙にくぼむ。体部外面にヘラ磨きが加えられている。

甕・15は第1地点表土直下で出土。甕と思われる口縁端部で、強い横ナデにより端面に凹線はわずかに立ち上がる。16も外反する甕口縁部。19は器壁が薄く丸底に近い底部の甕で、わずかに平たく小さな底部のあたりがあり、おそらく庄内系甕と思われる。内面にはケズリは見られない。21は第1トレンチ中央部表土出土で22と共に小型甕の底部。20は4号墳南東の表土直下より出土。底部だが器種は不明。

また、第1埋葬施設棺内では、11と同一個体の体部の破片が散在して出土した（23・24・26・28）。このほか壺の小片（25・27）も出土した（図43）。甕11は体部の上半を欠き、かなり破片化しているが、棺内出土のため、第1埋葬施設にともなうものと思われる。

以上の土器は小片が多く、時期が推定できるものは多くはないが、ほぼ弥生時代後期から庄内期の土器の特色を持っているといえよう。

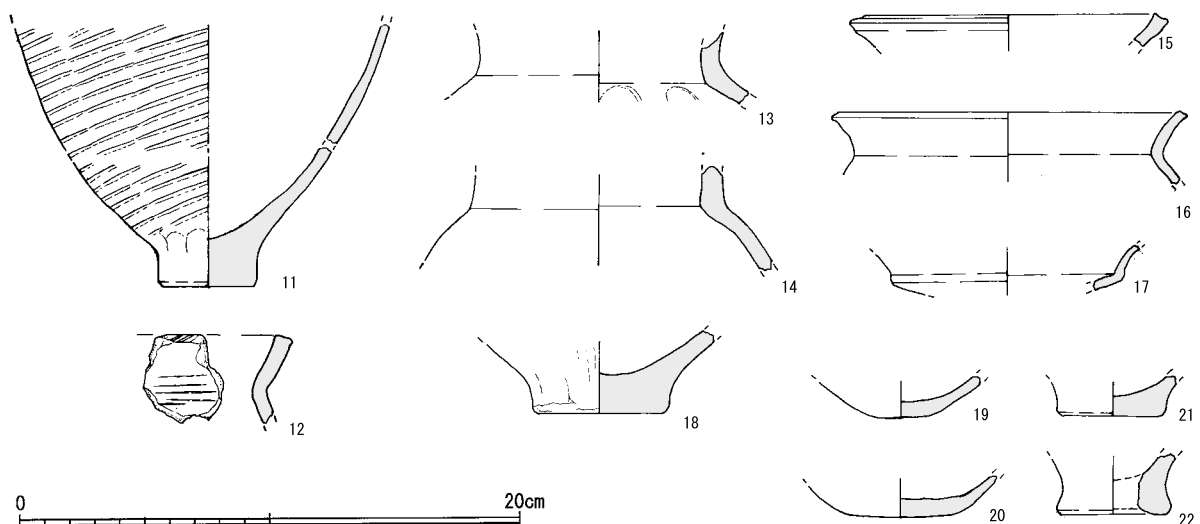


図50 3号墳棺内・周辺出土土器（1/3）

(5) 小結

本墳の規模は、一辺約15mの方形を基調とした墳丘とみられる。方墳である可能性とともに、北側に前方部を持つ全長20m前後の前方後方墳であった可能性は、後述する築造時期や広陵町黒石10号墓（前方後方墳？）などの類例からも考慮した方がよいと考える。

埋葬施設は、3基を確認したがいずれも木棺直葬である。第1埋葬施設から鉄槍、鉄鏃が出土しており、蛍光X線分析から銅や水銀の付着を検出したことから、第1次調査で出土状況が確認できなかった画文帯環状乳神獣鏡や鉄器の大部分について、断定はできないが、第1埋葬施設に伴う可能性が高いと判断した。

出土状況が確認できた鉄器は木棺床面から大きく浮いた状態で出土しており、叩き目をもつ甕片も木棺痕跡内に散らばって出土した。これは、鉄鏃、鉄槍、土器は、木棺蓋上等の木棺外の高い位置に副葬されたものが、木棺の腐朽に伴って、落ち込んだ可能性があるともみられる。

木棺直葬での木棺外への副葬は、弥生時代後期から古墳時代前期でも古相にみられる副葬状況であり、木棺直葬としては千葉県神門4号墳などに知られ、奈良県ホケノ山古墳、京都府園部黒田古墳、山口県国森古墳などの木槨系の埋葬施設の副葬品配置との関連が考えられる。

出土遺物から築造時期を考えてみる。有茎の腸袂柳葉式は、銅鏃を模倣した型式であり、山口県国森古墳などの古墳時代前期でも古相の古墳から出土する型式である。他に定角式が3点あるが、明確な両鎬造りでありながら全体に扁平であり、定角式の中でも古い形態をもつ。出土銅鏡は、画文帯環状乳神獣鏡であり、後漢鏡である。また、第1埋葬施設から破片で出土した叩き目をもつ甕片は、弥生時代後期から古墳時代初め頃とみられる。副葬品の出土状況の特徴と、副葬品の年代観からみて、本墳の築造年代は、古墳時代前期前半であり、3世紀中頃～後半頃と考える。

本墳は、小規模な古墳であるが、中国鏡と鉄製武器を副葬品に有する前期前半に遡る古墳であることが判明した。馬見丘陵一帯の奈良盆地西部では、馬見古墳群の本格的な造営が始まるまで、古墳造営の実態はほとんど不明であった。わずかに広陵町黒石10号墓などが知られるのみで、本墳は古墳時代前期前半の古墳分布の空白を埋める資料となる。前期前半の古墳が奈良盆地東南部に集中し、盆地内の他の地域にほとんどみられないという従来の理解に見直しを迫るものである。

また、本墳を特徴付ける画文帯環状乳神獣鏡は、大阪府和泉黄金塚古墳の東槨出土の銅鏡と「同型鏡」である。古墳時代前期に遡る「同型鏡」の出土は珍しい。和泉黄金塚古墳は、3つの埋葬施設をもつが同時埋葬とみられており、中央粘土槨の景初三年（239年）の銘をもつ画文帯神獣鏡をはじめとした古い遺物も出土する。しかし、長方板革綴短甲や鉄鏃等の出土から築造年代は古墳時代中期初め（4世紀後半～5世紀初め）であり、古墳の築造年代は銅鏡の製作年代と大きく乖離する。このように後漢鏡が新しい時期の古墳から出土することは多かったが、長期に伝世した場所については、中国大陸内なのか、日本列島内なのか、具体的に検討する材料がなかった。今回の2面の「同型鏡」は、異なる機会に日本列島内に持ち込まれたと考えるべきであろうか。時期を異にする古墳から「同型鏡」が出土したことで、2面の中国鏡が古墳時代前期前半の同じ機会に日本に持ち込まれ、そのうちの1面が長期に伝世したという、古墳時代前期における日本列島内での長期伝世の可能性を検討する材料を得たと考える。画文帯環状乳神獣鏡が、大型の前方後円墳が集中する奈良盆地の東南部ではなく、前期前半の古墳分布の希薄な奈良盆地西部において出土したことも大きな意味をもつと考える。

第4節 上牧久渡4号墳

(1) 立地

北にのびる丘陵尾根上に位置し、3号墳と墳丘を一部重複させ、古墳の中心は5.7mほど南側にずれて立地する。

第1次調査では古墳をほぼ南北に断ち割ってしまったが、埋葬施設の木棺設置面は深く、第1トレンチは表土から約1mを掘り下げていたが、墓壙の立ち上がり壊したものの木棺痕跡内は破壊を免れていた。トレンチ底は、二段墓壙の一段目までにあたり、木棺が腐朽して上部の土が落ち込んだ痕跡を第1トレンチ平面で確認した。棺痕跡の延長を検出するために、調査区を広げて墓壙を検出し、二段墓壙の一段目付近まで掘り下げを行い、木棺痕跡の一部を検出したところで調査は中止となっていた。また、4号墳の墳丘についての規模や墳形確認のための積極的な調査は進められていなかった。

そこで第2次調査では、墳丘については、第1次調査の不正形であった調査区を3号墳の調査と兼ねられるように拡張を行い、新たに第1トレンチを延長した第7トレンチと3・4号墳の横断形を確認できるように第6・8トレンチを設定して、墳形とその規模についての検討を行った。埋葬施設については、面的な精査とともに第1トレンチ東西壁面の土層精査を中心に行うことで、最小限の掘削で木棺構造と築造時期についての情報を得ることを目的とした。

(2) 墳丘

第1次調査のトレンチを精査したところ、第1トレンチの南側で幅約2.0m、深さ約0.2mの溝を検出し、第3トレンチの上端から約4.5mの部分に幅2.7m前後で地山に掘り込まれた浅い溝を確認した。また、第2次調査で設定した第6トレンチでも地山をカットした平坦面を確認してお

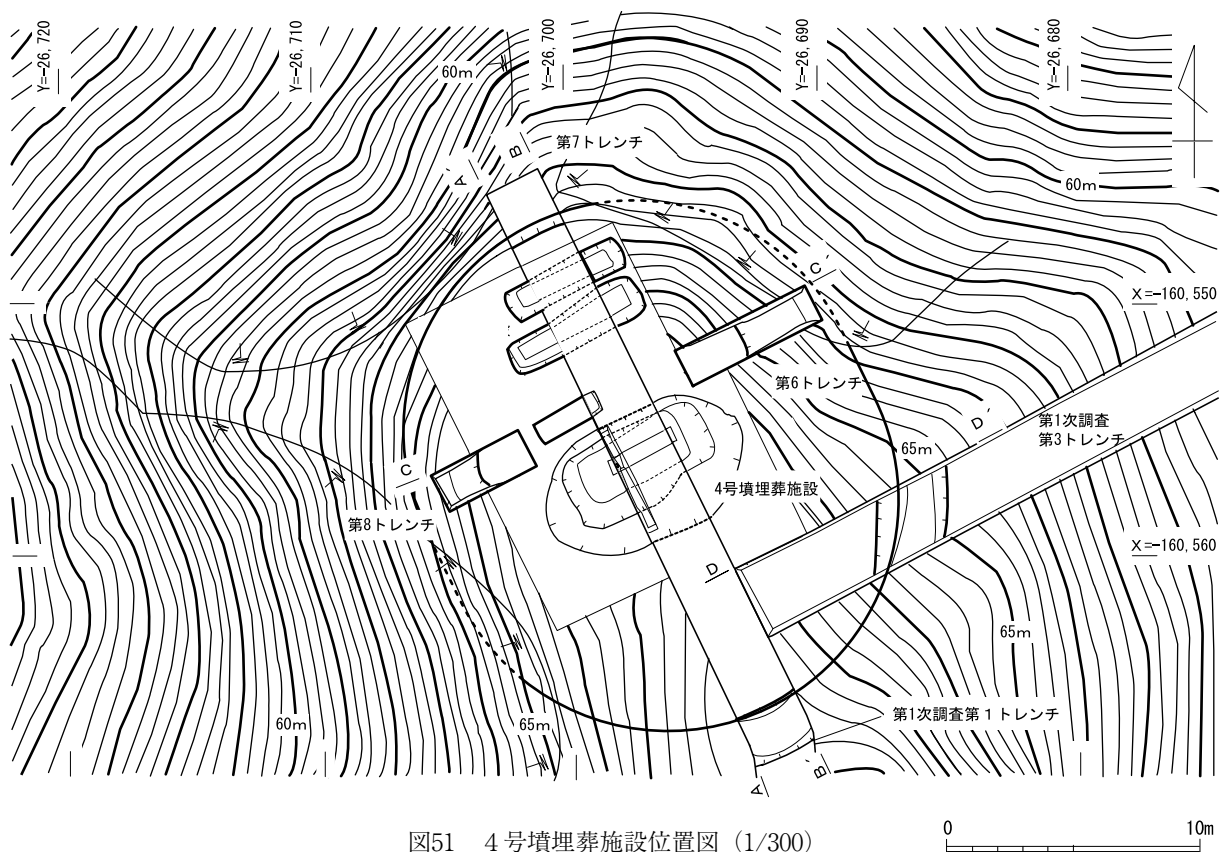


図51 4号墳埋葬施設位置図 (1/300)

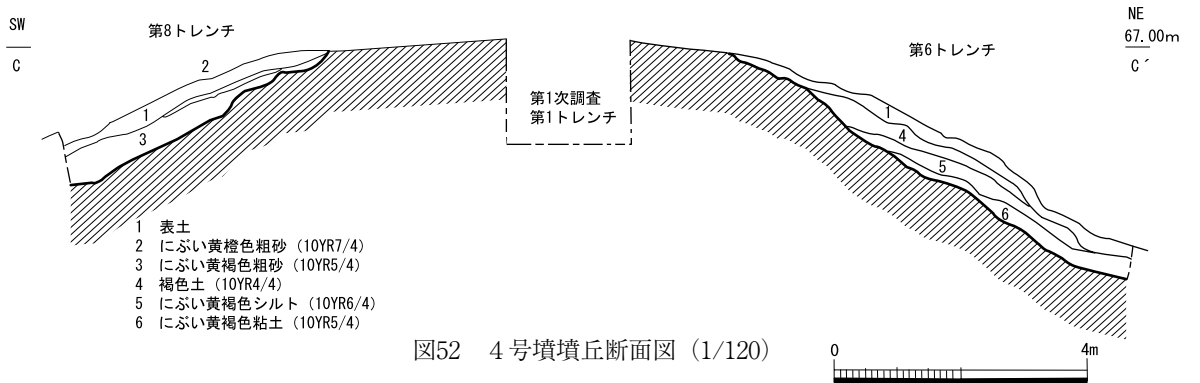


図52 4号墳墳丘断面図 (1/120)

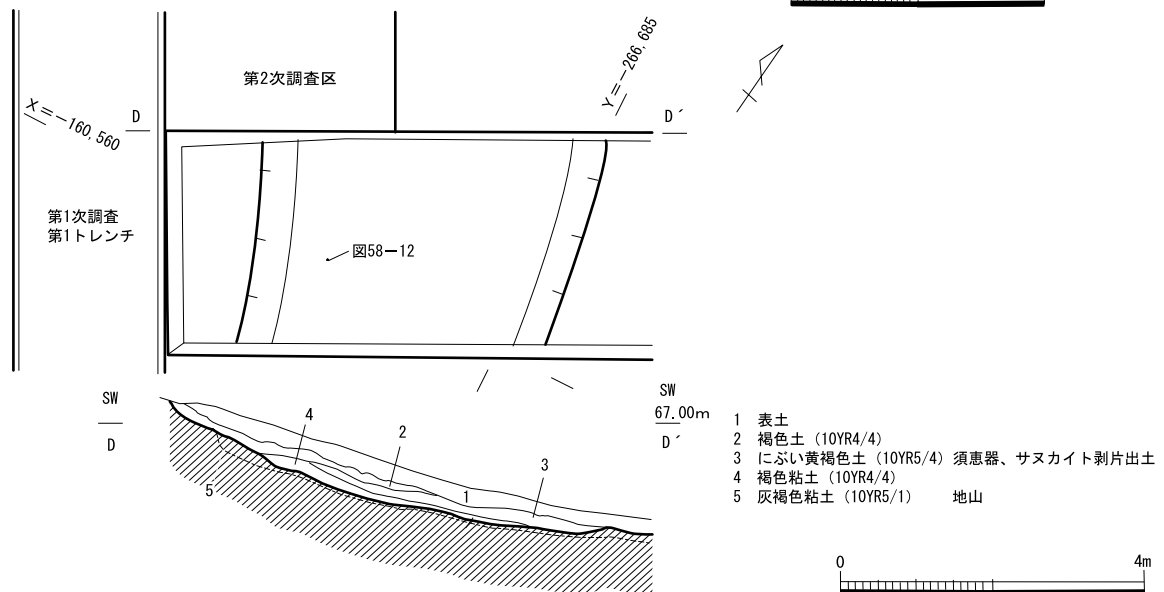


図53 4号墳第3トレンチ周溝 (1/100)

り、北側の第7トレンチでも表土付近であるが、地山を削り出した平坦面を確認した。西側は丘陵が崩れており、第8トレンチで墳端は確認できなかった。墳形は、やや歪んだ長径18m前後の円墳とみられる。古墳に伴う盛土は、確認できず、ほぼ丘陵地山を削り出すことで墳丘を造っていたとみられる。

(3) 埋葬施設

墳丘の中央に確認した。墓壇は、長軸約5.5m、短軸約3.0mの隅丸方形で、丘陵尾根に直行する位置にあり、墓壇断面は二段墓壇で、検出面から墓壇底までの深さは約1.2mと深い。木棺痕跡内の掘削は、第1トレンチ西側に側溝を拡張する形で幅0.4m、長さ約2mのサブトレンチを設定し、その中を掘り下げる形で遺構を保存し、調査は部分的なものに留めた。木棺の腐朽状況と土層の移動から木棺直葬とみられる。木棺痕跡は長さ約3.5m、棺の幅は東側約0.6m、西側約0.5mと東側の幅がわずかに広く、主軸方向はN-64°-Eで、東頭位を指向するとみられるが、基本的に尾根筋に対しての直交を意識したものとみられる。

木棺腐朽による墓壇埋め土の棺痕跡内への崩落は土層断面に良くあらわれていた。サブトレンチ内から完形の須恵器が6点出土し、木棺底の断面形は、U字形とみられたが、後述する墓壇底がそれよりも30cm下にあったため、棺床構造の詳細は不明である。掘り下げは、棺痕跡のラインを壊さぬように外側についてのみ行った結果、検出面から約1.2m、標高65.23m付近で墓壇底を確認した。墓壇底は、確認できた範囲では平坦で、5～10cmの円礫が敷かれていた。

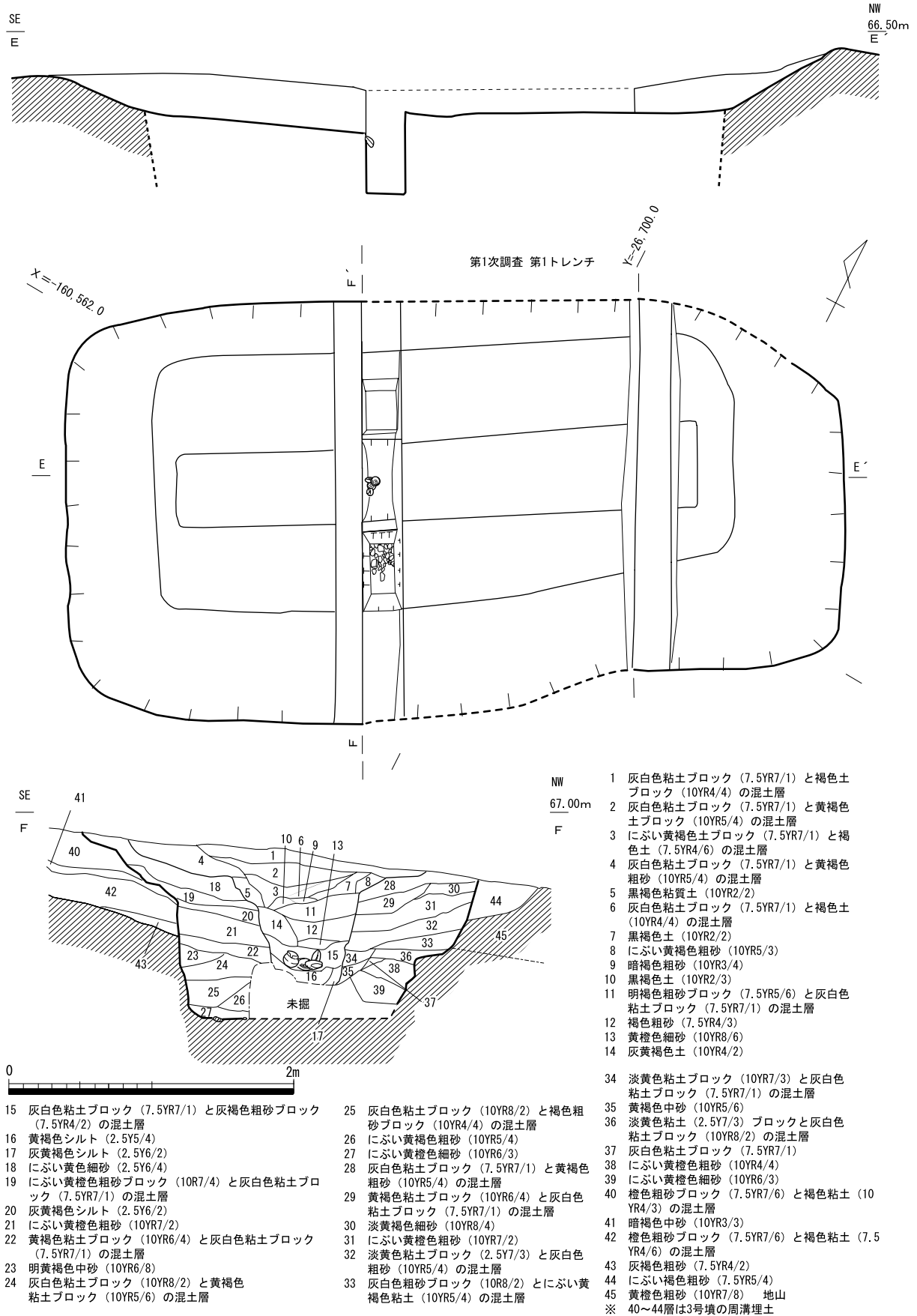


図54 4号墳埋葬施設 (1/40)

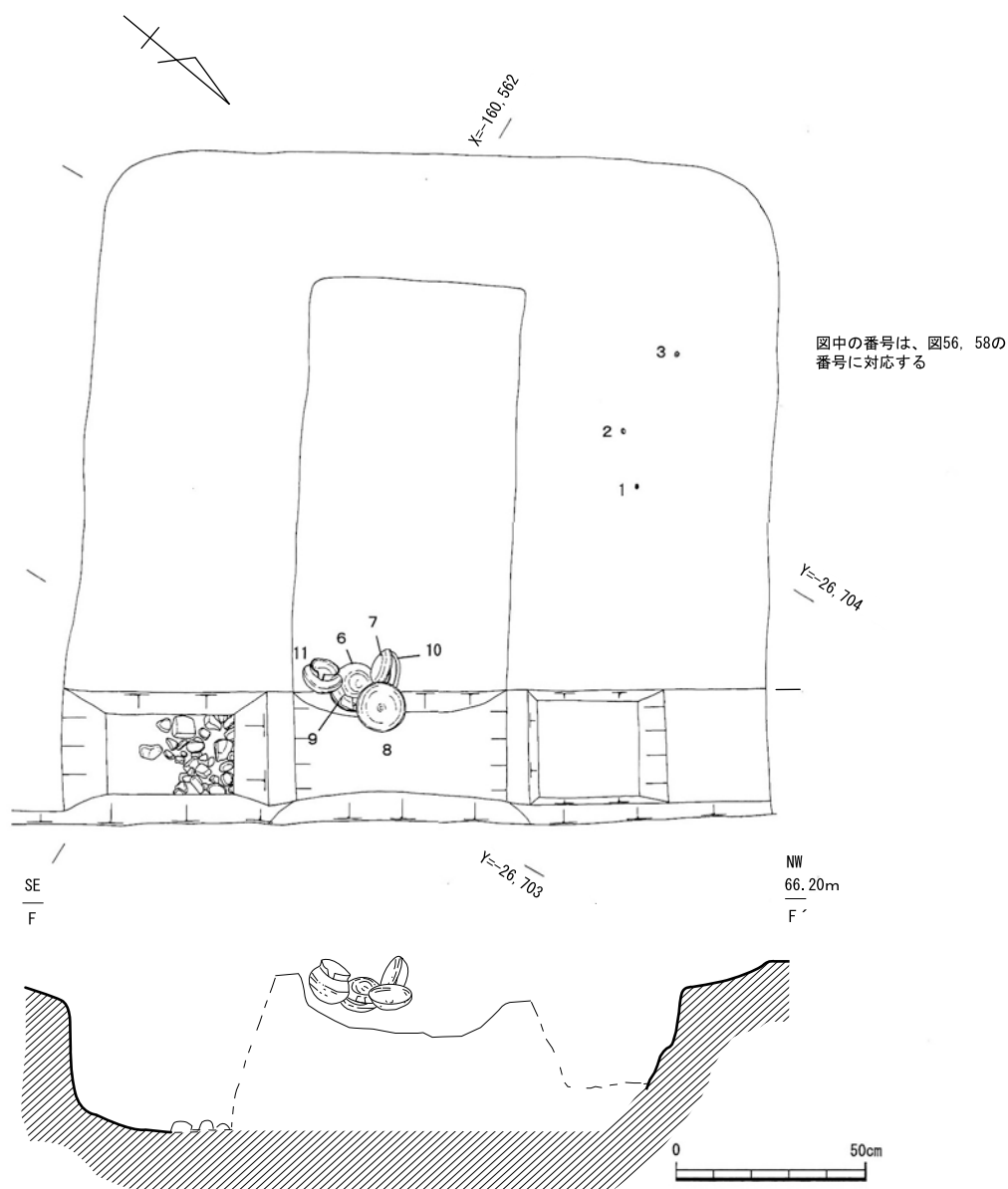


図55 4号墳埋葬施設遺物出土状況 (1/20)

2) 遺物の出土状況

墳丘 第1次調査において地山の直上から須恵器の蓋（13）が埋葬施設より南側約2.5m、標高66.41mから出土した。また、第3トレンチにおいて、地山斜面を削った周溝状の落ち込みから須恵器の短頸壺（12）が出土している。

墓壇内 第1次調査において既に二段墓壇の一段目まで掘り下げられた状態で、第2次調査を開始したが、木棺痕跡を平面精査するなかで、木棺痕跡北側で白玉5点を、糸で連なったような状態ではなくバラバラにはほぼ同一面（標高65.90m前後）で出土した。墓壇を埋め戻す過程で行われた祭祀行為にともなうものとみられる。

木棺痕跡内 第1トレンチ内のサブトレンチから、須恵器の坏身、坏蓋、小型の短頸壺がまわって6点が出土した。坏身と蓋は図58-6と9及び7と10が組み合わさっていた。棺痕跡内については、須恵器を取り上げるのに必要な部分だけの掘削を行った。須恵器以外の遺物は確認できなかった。

(4) 出土遺物

1) 玉類 (図56)

滑石製の白玉が5点出土した。1～3は棺外の墓墳内、4・5もその付近より検出された。やや大形の玉で、側面に稜、あるいは丸みを持つ。玉の径は揃うが、上・下面に粗形成形時の面が残るものがあり、高さには差異がみられる。

玉の側面には縦の粗い削痕がみられ、鉄製利器による整形痕が残るものもある。3の側面の一部と4の上面のみに研磨が加えられ、光沢を有する。灰白色で蠟石に近い軟質の滑石が用いられている。

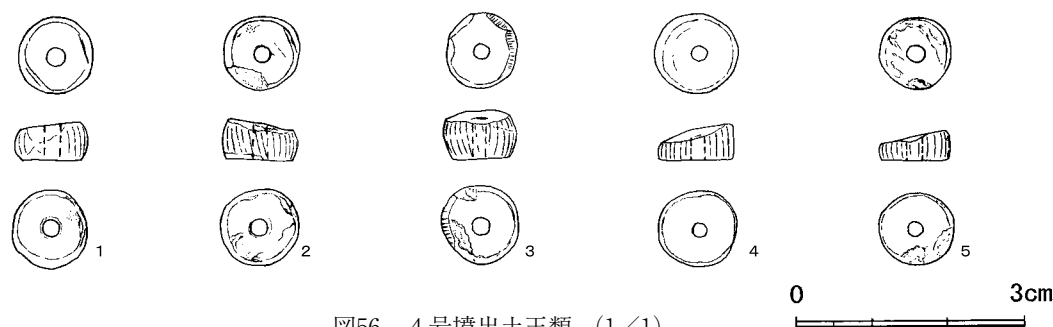


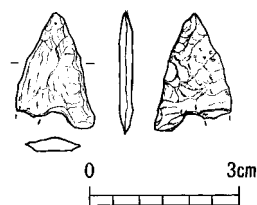
図56 4号墳出土玉類 (1/1)

表3 4号墳出土玉類計測表

番号	1	2	3	4	5
重量 (g)	0.71	0.76	0.98	0.75	0.37
高さ (mm)	4.2	4.8	6.7	4.8	3.3
幅 (mm)	10.2	10.3	10.3	10.5	9.2
孔径 (mm)	2.1	2.2	2.2	2.3	2.2

2) 土器 (図58)

須恵器 6～11は棺内痕跡出土品で、いずれもほぼ完形品である。12は4号墳南東周溝内とその付近、13は墳丘南西部、14は墳頂部より出土。6・9と7・10が蓋と身のセットで出土した。杯蓋(6～8)は、6・7の口縁端部外面には刻目が加えられ、7には歪みがみられ、端部内面には凹線が残る。7・8は天井部にヘラ記号を有する。7の口径14.0cm、器高4.2cm、焼成は灰色で堅緻。杯身(9・10)は口縁端部をかなり薄く仕上げる。10は底部にヘラ記号を有し、焼成は灰色で堅緻。口径は11.6cm、器高は4.9cm。11・12は短頸壺。11は完形品で、焼成は均質な灰色を呈し、堅い。器高9.0cm、口径10.2cm。12は肩が張り、口縁部は短く立ち上がる。肩部はカキ目で調整する。13は直口壺などの完形の蓋であるが、内部全面には灰が降着し、表面端には口径約12cmの須恵器の口縁端が融着して、逆転して同時焼成したことがうかがえる。焼成は灰色で堅緻。口径8.4cm、器高4.2cm。以上の須恵器の中で、杯の7・10は共に同じヘラ記号を持つほか、わずかに歪みがみられ、また杯端部の仕上げが薄い。胎土に鉄分が多く、製作手法や色調も異なる。これらは陶邑窯産ではなく、香芝市・平野窯の製品である可能性が高い。


 図57
4号墳採集土器 (2/3)

3) 石器 (図57)

石鏃 墳丘北東側の採集品。現存長2.21cm、現存幅1.54cm、厚さ0.28cm、重量0.84g。

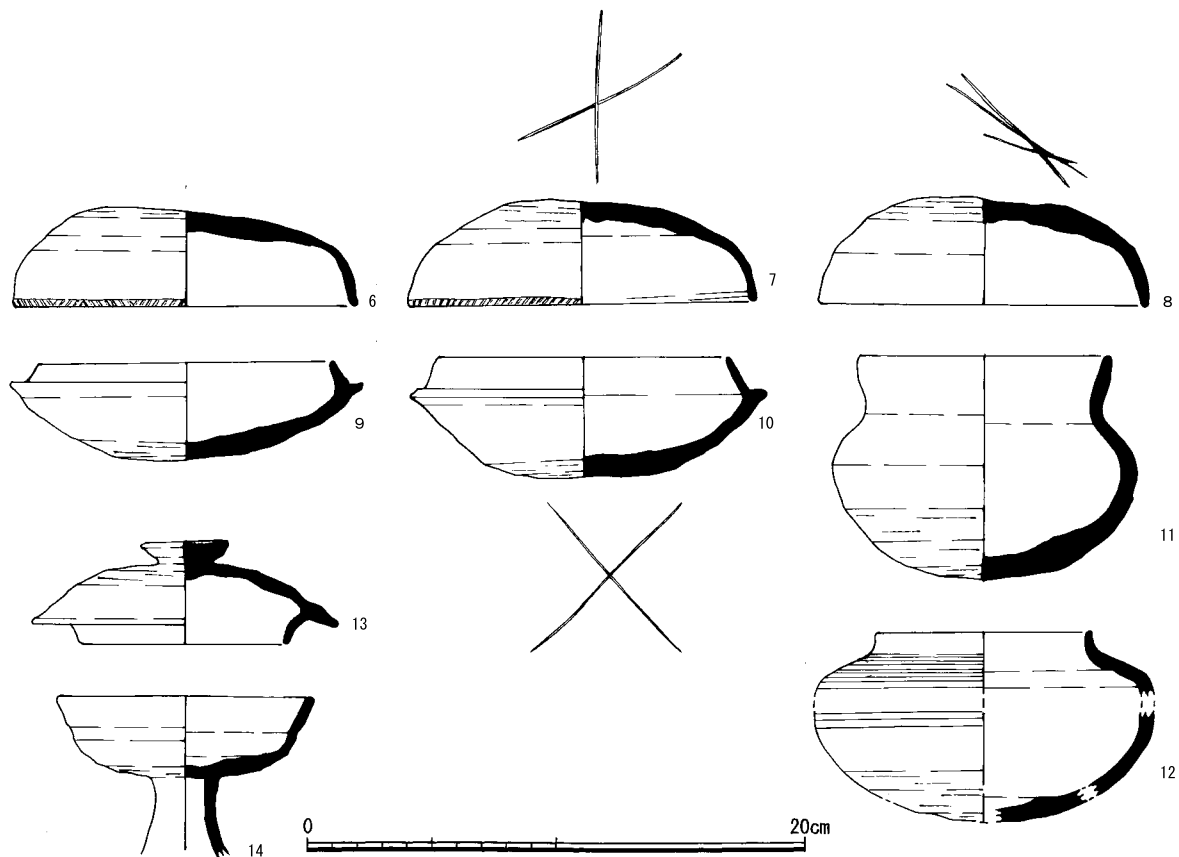


図58 4号墳出土土器 (1/3) 6～11. 棺内, 12～14. その他

(5) 小結

4号墳は、先行して築造された3号墳の墳丘を壊しており、各トレンチで周溝状の区画から復元すると、周溝各所の標高を揃えていないものの、平面形では長径約18mのやや歪んだ円墳となる。今回の調査では明確な盛土を確認できなかったことから、築造時から主に地山を削り出して墳丘を形成したものとみられる。埋葬施設は、北東頭位の木棺直葬である。出土した須恵器からTK43並行とみられ、築造時期は古墳時代後期である。

奈良盆地では多くの地域で古墳時代後期に横穴式石室を用いるが、4号墳では採用していない。その一方で、墓壙1段目での臼玉を使った祭祀行為や墓壙内での須恵器の副葬など、丁寧な祭祀行為が目につくため、単に簡易な埋葬として木棺直葬を用いたのではない可能性がある。第2次調査では、掘削調査を最小限にして遺構保存に努めたため、埋葬施設構造の全面的な解明に至らなかったが、墓壙が検出面から約1.2mと非常に深く、墓壙底面の少なくとも周囲には小礫を敷くなど古墳時代後期の木棺直葬として特異な形態をもつ。葛下川の東岸側丘陵において横穴式石室をもつ古墳は少ない。西岸でも近接する香芝市北今市2号墳では横穴式石室をもたない石棺直葬が確認されている。久渡古墳群に最も近接した調査例である上牧町松里園古墳群においても横穴式石室を確認できず、凝灰岩製の組み合わせ式石棺を直葬した可能性をもつ変則的な後期古墳が知られている。その中で本墳は、石棺をもたない木棺直葬の古墳であるが、横穴式石室を導入しない地域の変則的な埋葬施設である可能性があり、今後、周辺地域の古墳調査から位置づける必要がある。

第5節 上牧久渡5号墳

(1) 立地

上牧久渡5号墳は、古墳群が所在する丘陵の西側斜面に位置している。南北にのびる丘陵尾根に沿って築かれた北側の3・4号墳、南側の1号墳とは異なり、丘陵西側斜面より南西へのびる自然地形の張り出しを利用して造営されている。二上山方面の平地側から見上げると、丘陵中央、真正面に位置する古墳となる。墳丘北西の裾側が後世の土取りと崩れにより損なわれているほか、墳丘一帯にかつて果樹が植えられていたとのことから、残存状況は良好とはいえない。しかし盛土が流出しているものの、墳頂平坦部の形状は比較的良く残っている。

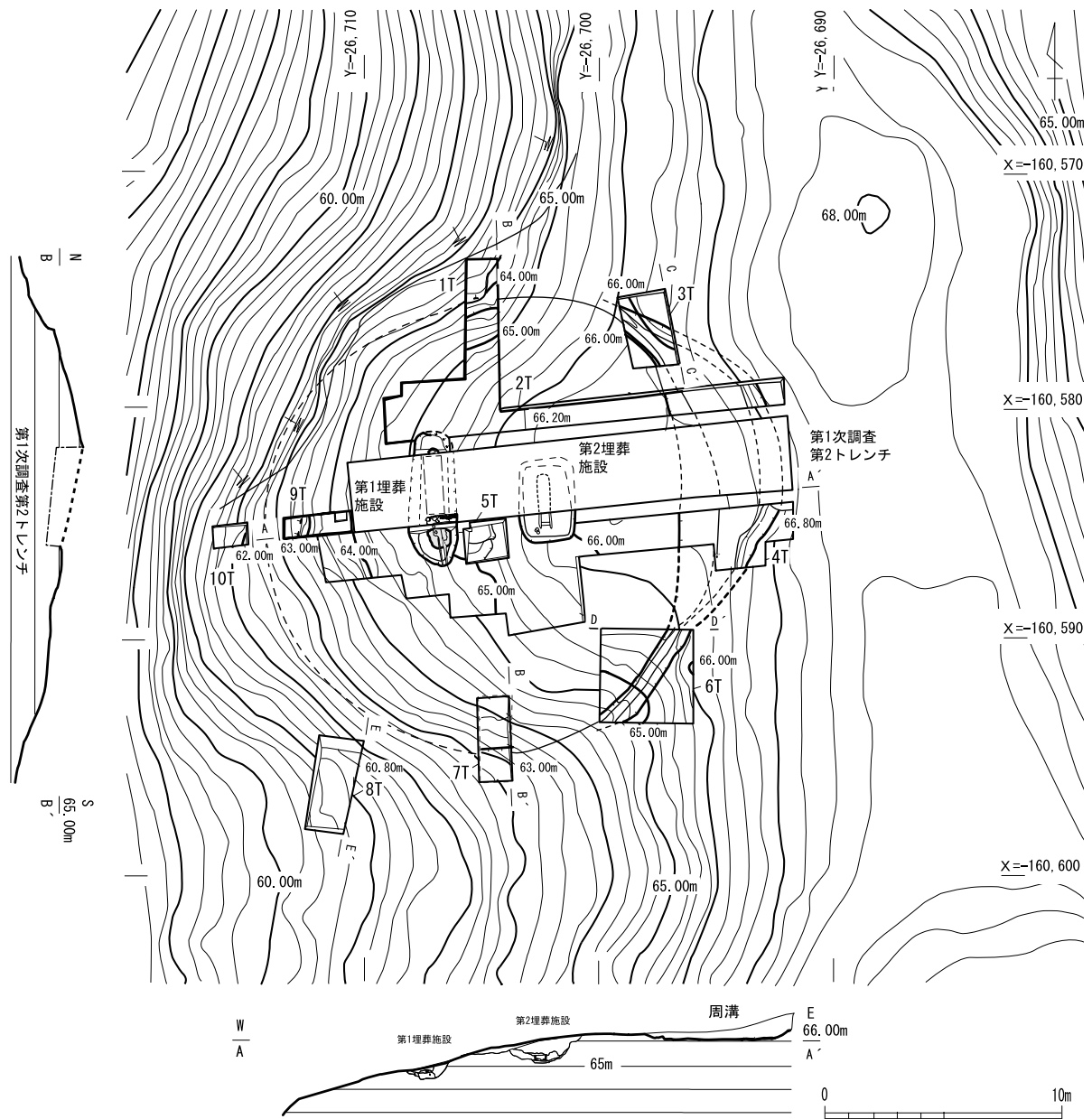
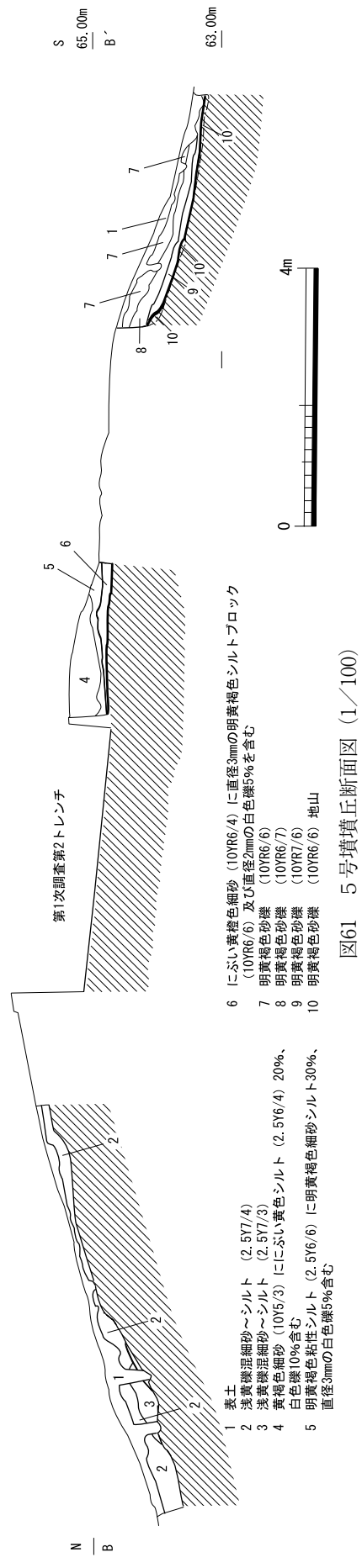
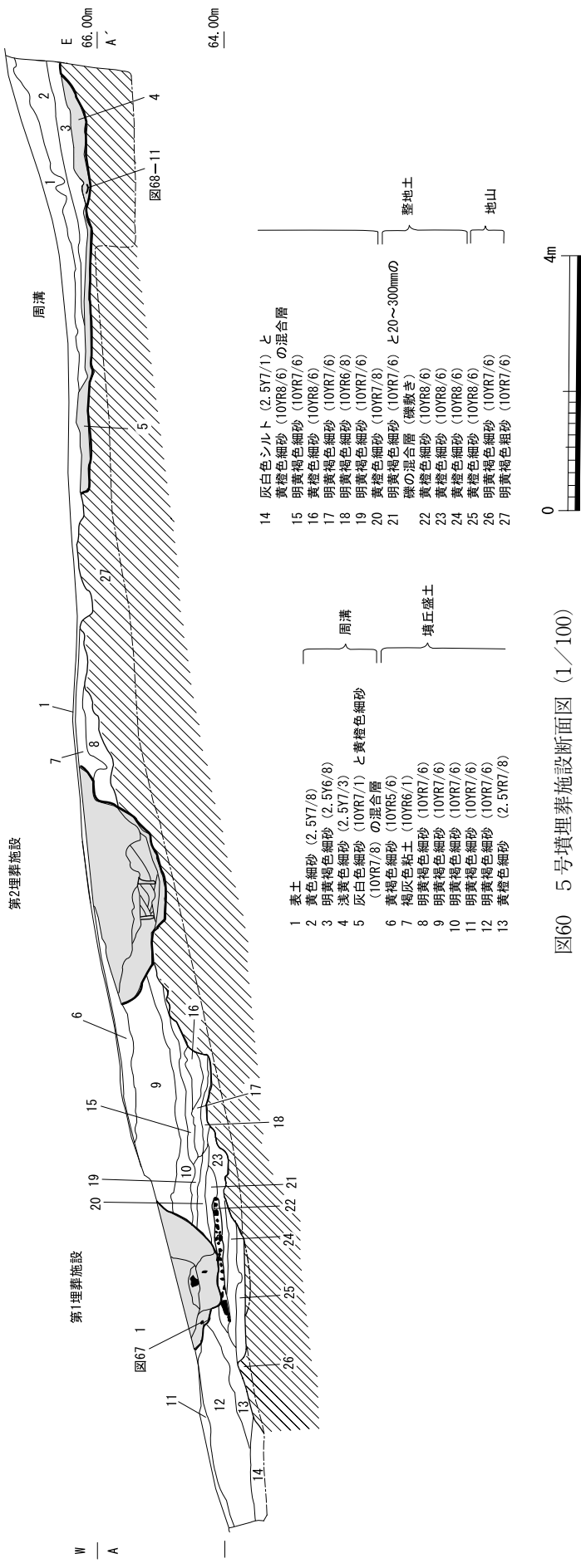


図59 5号墳埋葬施設位置図 (1/300)



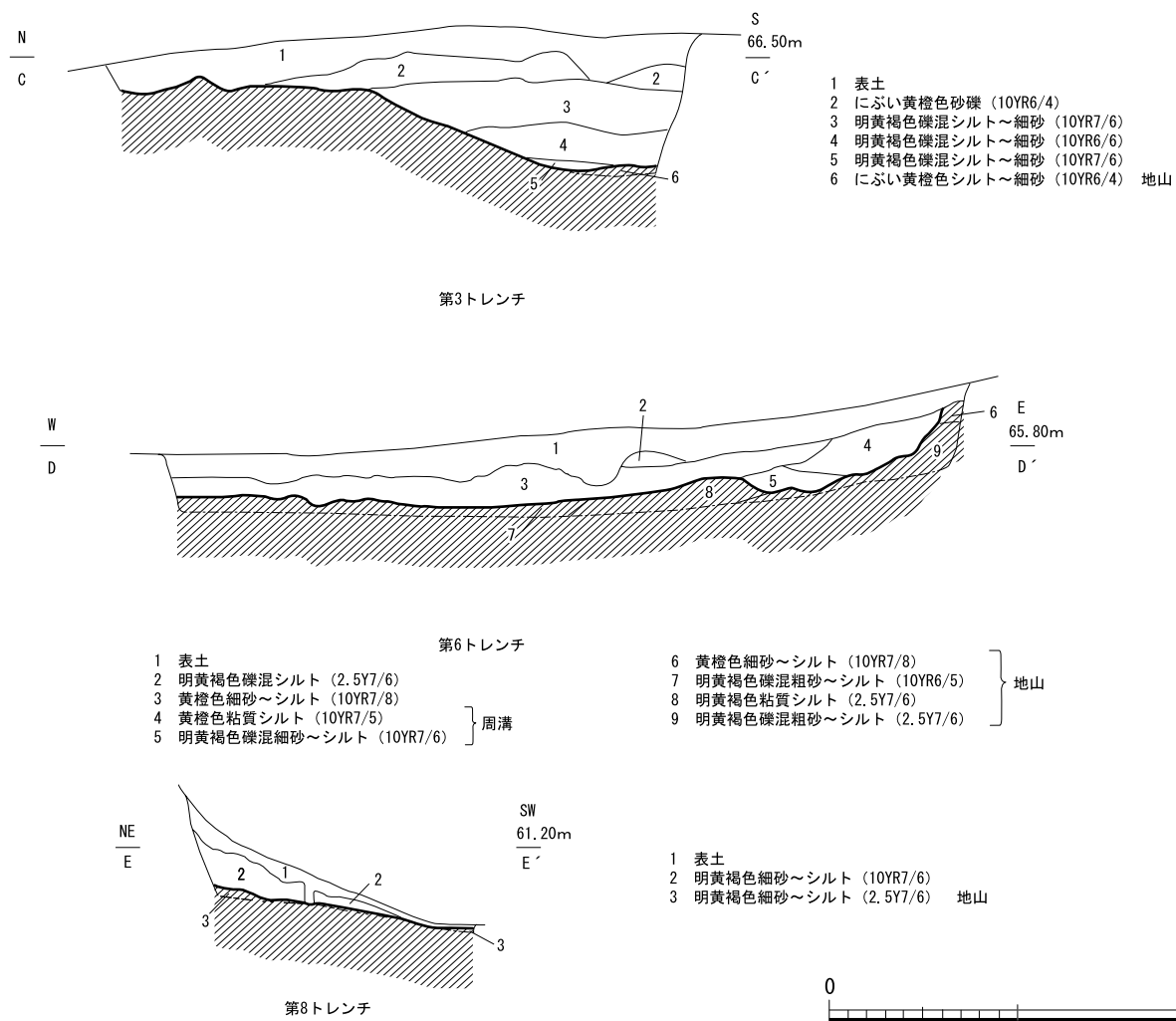


図62 5号墳第3・6・8トレンチ断面図 (1/40)

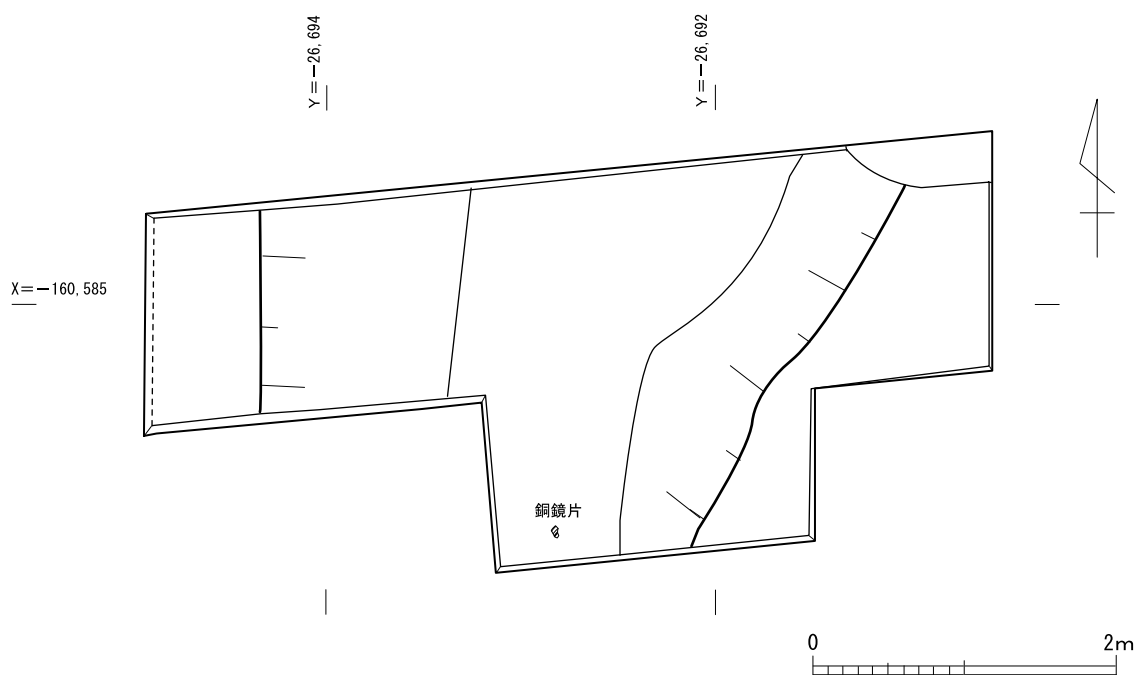


図63 5号墳第4トレンチ銅鏡片出土状況 (1/50)

(2) 墳丘施設

発掘調査前に実施した踏査とレーザー測量により、一辺約10m規模の円墳ないし方墳の可能性を想定していたが、その後の墳丘測量と発掘調査により現状で東西約18m、南北18.5mの円墳であることが判明した。第9・10トレンチでは、現地表面の標高63m付近で急傾斜により土が流れているため墳端の確定は困難であるが、等高線の読み取りより、第9・10トレンチ間を墳端部と想定している。

墳頂部の標高は現況で66m前後である。墳丘盛土はかなり流出しているとみられる。第1次調査第2トレンチの断面観察では、墳頂周辺から西側斜面にかけて地山上に最大0.5m程の厚さで盛土が認められる。尾根側および墳端付近は、地山を削りだして形成する。丘陵の張り出しと傾斜面を利用して墳丘を構築しているため、見た目の墳裾は西側斜面の裾側へ広がるように見える。

また、第1次調査第2トレンチの北壁・南壁の土層観察で尾根側で幅2.7m、深さ15cmの落ち込みを確認し、埋土に須恵器が含まれていることを確認していた。これが周溝である可能性から、墳形の確認を含め平面での検出を試みるため、墳裾に複数のトレンチを設定した。周溝は丘陵尾根との境界に当たる墳丘東側で最も広く、北西および南西へと伸びるに従い幅を狭め、墳丘北東側の第3トレンチでは幅0.3m、深さ0.5m、南東側の第6トレンチでは幅0.25m、深さ約0.2mになる。おおむね、尾根側が深く、傾斜面側が浅く残存している。第1トレンチおよび第7トレンチでは確認できず、墳丘西半にはまわらない。したがって、この周溝は丘陵尾根と墳丘部とを区画し、地山を削り盛土によって構築された墳丘を効果的に見せるための工夫であると考えられる。周溝内からは須恵器片のほか、第4トレンチでは銅鏡片が出土した。

(3) 埋葬施設

1) 第1埋葬施設

第1次調査第2トレンチの壁面観察時に南壁で幅0.65m、高さ0.4mの断面蒲鉾形の粘土塊、その下部に幅1m、厚さ5～15cm程度の複数の円礫・板石が敷かれている状況が明らかになった。そこで埋葬施設の存在を前提に第1次調査トレンチの南北で拡張区を設け、平面での墓壇検出を試みた。その結果、北端側で木根による攪乱があるものの、南北長6.3m（第1次調査第2トレンチ含む）、東西幅2m、深さ約0.4～0.7mの落ち込みを確認した。なお、中央部分は第1次調査第2トレンチにより南北幅3m分が地山まで掘削されている。

第1次調査第2トレンチをはさむ南北の墓壇状落ち込み内で粘土塊を検出した。ただし、墓壇状落ち込みの底面は粘土塊の下半分に達する程度であり、粘土塊の底面及び後述の礫敷きまで達していない。南側の粘土塊は長さ約1.4m、幅約0.65m、厚さ0.25m、北側では長さ約0.3m、幅約0.4m、厚さ約0.3mである。したがって粘土塊の南北端長は約4.7mとなる。木棺痕跡の有無の確認、遺物の回収を目的に粘土塊を半裁したが、南壁の粘土塊に刀子片を確認したほかは遺物はなかった。粘土塊に木棺痕跡も認められないことから、木棺の小口部分に置かれた粘土塊の一部が残存していた可能性が高い。このことから第1次調査第2トレンチにより完全に失われているが、木棺は長さ南北約3m弱、幅約0.6m以上であったと推定される。

また、第1次調査第2トレンチの南壁と北壁の一部で、粘土塊の底部に丸石・板石が存在することが確認された。3次調査において南北の粘土塊を断ち割ったが、粘土塊の直下には存在しなかった。しかし、第1次調査時の重機掘削排土より同種の礫を約4000点回収していることから、木棺下面に敷かれていたものと推定される。これらの礫は第1次調査第2トレンチの壁面のわ

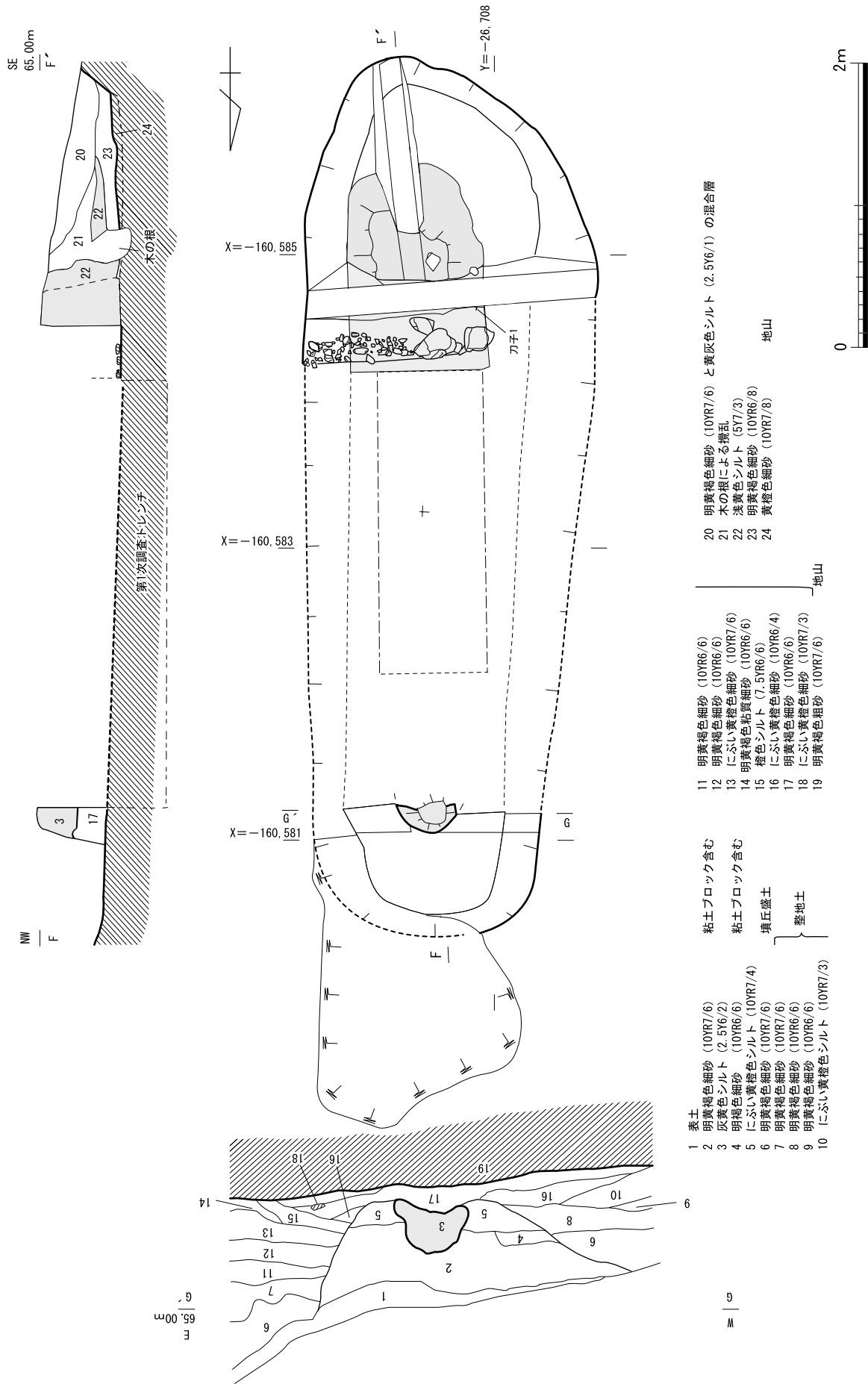


図64 5号墳第1埋葬施設 (1/40)

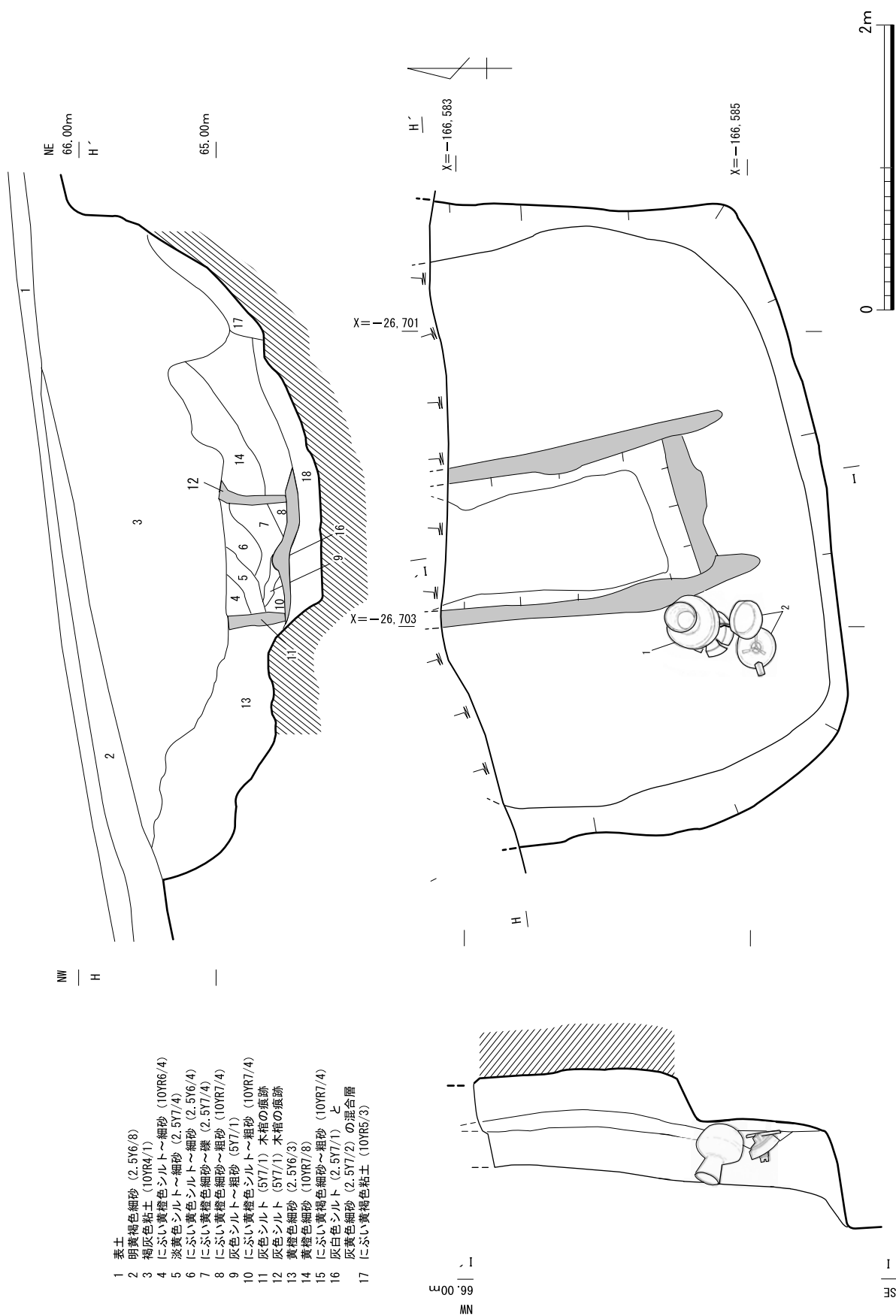


図65 5号墳第2埋葬施設 (1/40)

ずかな間隙で収束しており、礫敷きは木棺下部を中心に敷かれ、小口に置かれた粘土塊下にはほとんど敷かれていなかったと考えられる。

なお、この礫敷き構築に伴う墓壇掘込みの立ち上がりは認められなかった。第1埋葬施設東側の南北壁面で人為的に地山を切り込む傾斜を確認したが、この切り込みは第1埋葬施設に伴う墳丘盛土に被覆されている。この地山切り込みから礫敷きにかけて標高64.0～64.1mで水平面を形成する土層を確認できた。墳丘築造及び第1埋葬施設の礫敷き以前に、地山削り出しのうえ、木棺設置のための整地が行われていたと推定される。従って、墳丘の構築順序としては、①第1埋葬施設位置において、地山を平坦に削平、整地する。②木棺位置に礫を敷き詰め、小口を粘土でおさえた木棺を設置したのち、木棺上部を開口したまま周囲を盛土を積む。③被葬者を棺に納め蓋をしてから最終的に盛土する、という順序が想定される。

2) 第2埋葬施設

第2埋葬施設は、5号墳墳頂平坦部の丘陵尾根側寄りに位置し、第1埋葬施設の東側約3mの地点で検出した。第1埋葬施設封土にあたる墳丘盛土を切り込み、方形の墓壇を掘りこんでいる。墓壇の残存規模は東西4.6m、南北2.8m、組合式木棺の検出面までの深さ0.6～0.7mである。墓壇内には、木質が粘土に置換した木棺痕跡が残存しており、第1埋葬施設と同様に南北方向を主軸とする組合式木棺が設置されていたことが確認できる。木棺残存長は1.15m、幅0.6m、高さ0.3mを測る。墓壇及び木棺の北側半分以上は第1次調査第2トレンチにより破壊されているため、埋葬施設の全長、木棺の長さ、埋葬頭位等の情報は不明である。ただし1次調査第2トレンチ北壁には、墓壇および木棺の痕跡は確認できず、第1次調査第2トレンチ内で墓壇は収束すると判断できる。最大に見積もっても、墓壇は南北5.8m以下、木棺も長さ5m以下である。

墓壇内では、南西隅に棺外遺物として須恵器2点（長脚二段透無蓋高坏・台付長頸壺）が出土した。組合式木棺検出面のレベルに据えられており、木棺を墓壇内に設置し、木棺蓋近くまで埋設した時点で副葬されたものである。棺内遺物は確認できない。

なお、第2埋葬施設設置後、あらたに墳丘盛土を積み上げた可能性は残されており、この場合は第1埋葬施設と別古墳として扱える可能性もある。しかし、第2埋葬施設直上の盛土の多くは流れてしまっており、積極的な根拠を見いだせないため、現状では同一古墳として扱いたい。



写真20 第1埋葬施設北壁断面（南より）



写真21 第2埋葬施設南壁断面（北より）

(4) 出土遺物

1) 金属製品 (図66・67)

銅鏡 1 墳丘西側の周溝落ち込み内より出土した。2.5×2.0cmほどの鏡縁部の小片である。鏡縁の厚さ5.6mm、鏡胎厚さ1.9-1.0mmで、縁部の曲線から復元される鏡径は15cm前後である。鏡縁形は斜縁を呈し、外区部分はやや肉厚で鏡縁側より鋸歯文、複線波文、鋸歯文が施され、内区は一段薄くなり櫛歯文が施されている。銅質は黒色を呈し、銹も見られず精良である。

銅鏡 2 第1次調査排土のふるい作業により確認された遺物である。鏡縁の厚さ5.3mm、鏡胎厚さ2.0-0.8mmで、縁部の曲線から復元される鏡径は15cm前後である。銅鏡片は鏡縁部にあたり、全体的に錆び付いて緑青に覆われ、または剥落するなど風化が激しい。鏡縁形は斜縁を呈し、文様は僅かに鏡縁側より鋸歯文-複線波文-鋸歯文の外区部分のみを観察することができる。

刀子 1 (図67-1) 鉄製刀子で刃部切先から刃部元部まで、そして関から茎部までの2片の破片資料からなる。このうち刃部側の部分は残存長5.8cmで第一埋葬施設南側の粘土塊付近より出土している。茎を含む一片は、残存長4.6cmで第一次調査の排土より発見した。接合面は無いが、同一個体の可能性が極めて高く、復原すると10.4cm以上となる。刃部はフクラ切先で背側で厚さ0.4cm、元幅は1.35cmである。断面形は二等辺三角形で鑄が認められない平造りである。茎は両関で、茎残存長3.75cm、茎幅は柄尻で0.65cm、茎厚は0.28cmである。茎全体に柄木の本質痕跡がのこるほか、関部には3の鉤が接合する。

刀子 2 (図67-2) 鉄製刀子片である。第一埋葬施設北側粘土塊を毀損する樹木根攪乱土の底から出土した。刃部は大部分を失っており、残存長は3.7cmである。刃部の幅は関の部分で幅1.6cm、厚さは背部分で0.4cmである。刃部の断面形は二等辺三角形で鑄はみとめられない平造りである。関部は両関で、茎は柄木の本質痕跡があり、柄頭部側を欠損している。幅0.9cm、厚さ0.25cmである。刀子1とはほぼ同形同大の製品と認められる。

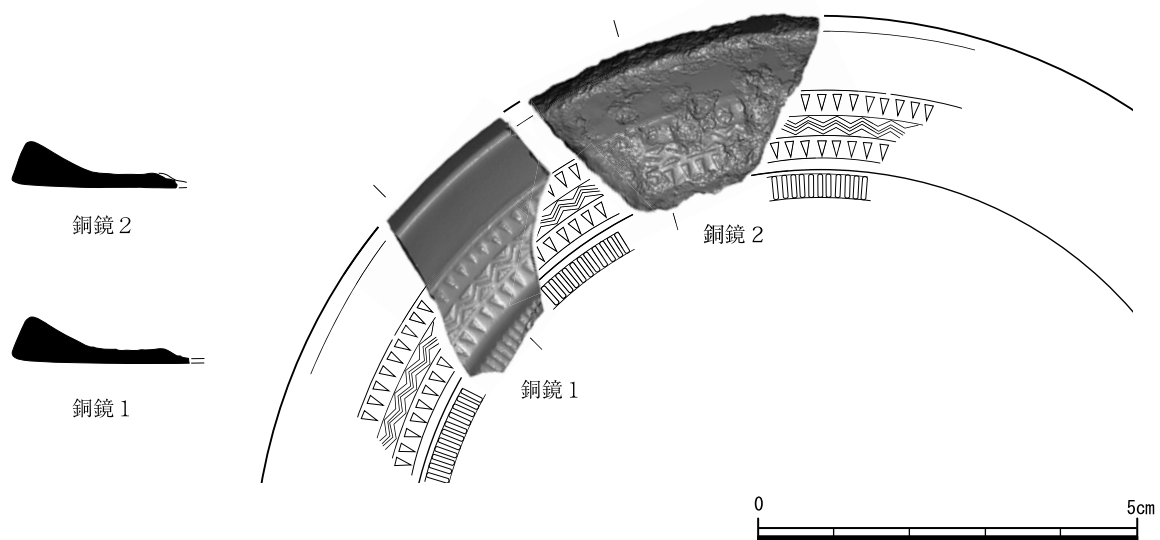


図66 5号墳出土鏡三次元計測画像・復元図 (1/1)

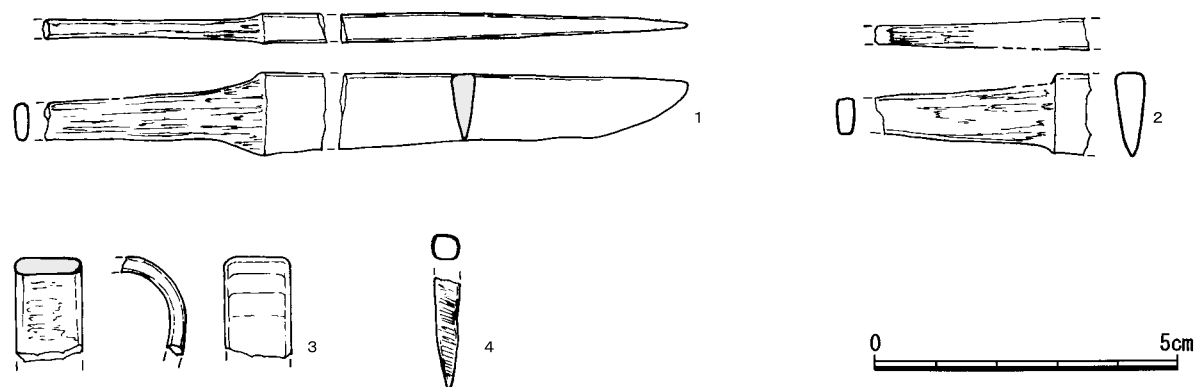


図67 5号墳出土鉄製品 (4/5)

鋤 (図67-3) 幅1.1cm、厚さ2.5cm、全体の1/3程度残存している。復元すると楕円形ないし杏仁形の鉄製筒状金具である。内側に茎部を覆う木質と関部の痕跡が残存しており、刀子1の鋤から茎部に接合することがわかる。したがって第1埋葬施設の南側粘土塊付近に副葬されていた可能性が高い。

鉄鏃 (図67-4) 残存長1.8cm、直径0.4cmの断面隅方形を呈する棒状の鉄片で、一端が尖り、一端は欠損している。ほぼ全体には繊維を巻いた痕跡が残る。鉄鏃の茎の先端部である可能性が高いが型式は不明である。鏃身をはじめ他の個体の出土は認められない。

2) 土器 (図68)

須恵器 7は完形の台付長頸壺で口縁端部はカットにより平坦面を有する。肩部に灰・窯滓が付着。青灰色で焼成は堅緻。器高24.8cm、口径9.4cm、底径14.0cm。8は完形の長脚2段透かしの無蓋高杯。杯部はやや傾くが、突帯・凹線の表出は明確で、製作は良好である。焼成は青灰色で均質。器高16.8cm、口径12.0。底径10.6cm。9は墳丘表土下、11は周溝内出土。10・12・13は採集品。9は杯身、11・12は杯蓋で、13は台付長頸壺の脚部片。

土師器 墳丘土中より古墳時代前期の高杯片が出土している (図版46-14・15)。

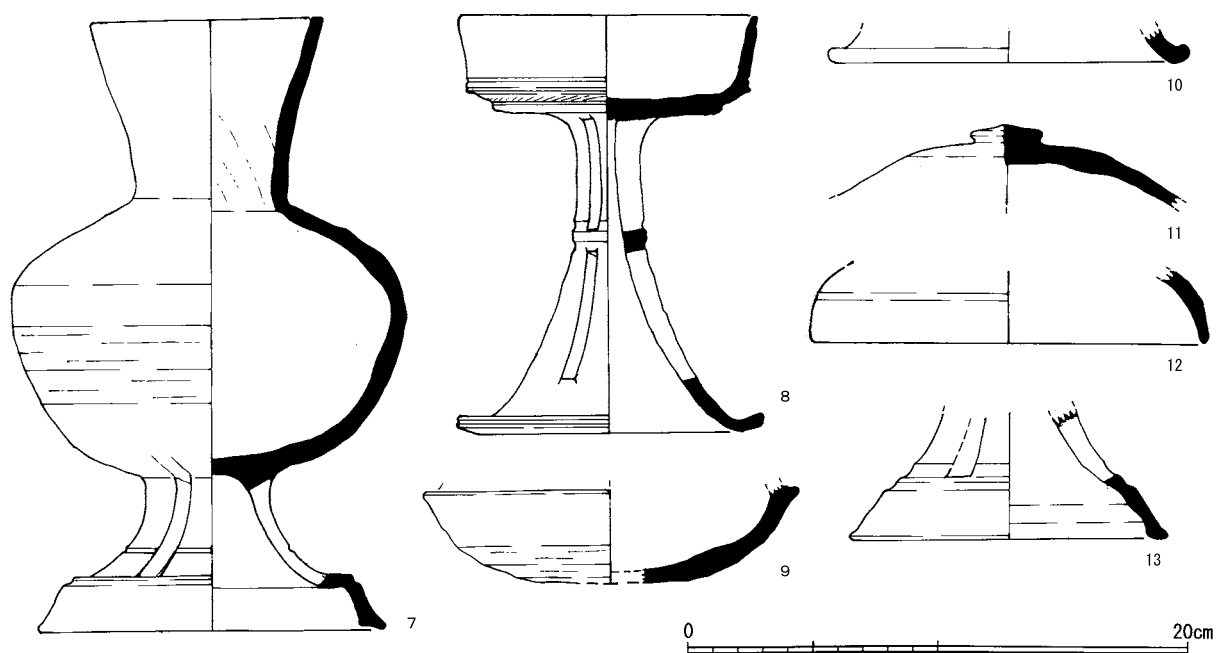


図68 5号墳出土土器 (1/3) 7・8. 第2埋葬施設, 9~13. その他

(5) 小結

3次調査までの成果を総合すると、久渡5号墳は南北方向を主軸とする2基の埋葬施設を備えた18m×18.5m前後の円墳であることが明らかになった。丘陵傾斜を利用し盛土と周溝により墳丘を効果的に見せる工夫をしており、実際には数値以上の規模に見える。第1次調査トレンチの掘削により、埋葬施設に関する情報が大きく損なわれたが、復元すると以下のようにまとめることができる。

第1埋葬施設は、南北方向を主軸とした木棺直葬とみられる。第1次調査第2トレンチ南北壁には粘土塊の痕跡がある。粘土には木棺痕跡は確認できず、組合式木棺の小口板の固定、または小口の閉塞に用いられた粘土の可能性もある。この南北の粘土塊より、各1点の鉄製刀子が出土している。木棺上から小口側の粘土塊にかけて、刀子をはじめとした遺物が並べられていた可能性がある。また、粘土塊の下にはわずかに礫が敷かれており、木棺直下の墓壇床面には礫敷き、または排水施設が存在したと考えられる。時期を特定できる遺物として、南側の粘土塊より鉄製鉏を備えた刀子が出土しており6世紀後半以降の年代を想定できる。また、第2埋葬施設に先行していることからTK209型式期より以前の築造となり、築造年代が絞られてくる。なお、第1次調査第2トレンチ南北壁面の土層観察より、第1埋葬施設は墳丘構築と併行して設置されていると判断した。

第2埋葬施設は第1埋葬施設の墓壇埋戻し後に墓壇を掘り込み、組合式木棺を設置する。墓壇内に須恵器を副葬しており、埋葬時期は須恵器からTK209型式期、6世紀末から7世紀初頭の時期と考えられる。第1埋葬施設と異なり、墓壇床面に礫敷きは存在しない。

特筆される遺物として、第1次調査第2トレンチの掘削排土と周溝埋土から出土した銅鏡がある。2点の銅鏡片は遺存状態に大きな差違が認められるが、鏡縁形、外区文様やその表現、復元径などに共通点がみられる。同一鏡の可能性が高いが、別個体であることも否定できない。斜縁に鋸歯文－複線波文－鋸歯文（斜縁鋸歯鋸文）の外区文様を施す鏡は、斜縁神獣鏡をはじめとした後漢鏡に一般的にみられる。また、古墳時代前期の倭鏡にも斜縁鋸歯鋸文鏡はあるが、中期になると外区の厚みが薄くなり、波文が複線から三重以上となる変形鋸歯鋸文へと変化する（森下2002）。出土した銅鏡片は、典型的な斜縁鋸歯鋸文であるが、内区との境にやや突出がみられ、外区と内区との厚さの差異がある。小片のため漢鏡・倭鏡ともに決めがたいが、いずれにしても前期古墳を中心に出土する鏡の特徴を示している。

これらの銅鏡片は第1・第2埋葬施設を含む第1次調査第2トレンチ掘削土だけでなく、周溝埋土より出土している。5号墳からの出土を想定するならば、第2埋葬施設構築の際に、副葬品ともども第1埋葬施設を破壊した可能性、第2埋葬施設が後世に破壊された可能性などが考えられる。しかし、第1・2埋葬施設残存部では後世の損壊は認められず、5号墳以外の古墳に副葬された鏡であった可能性も高い。第1次調査前のレーザー測定の成果では、5号墳の北東にあたる尾根上に「第1地点」とする高まりが確認されており、古墳墳丘であった可能性がある。5号墳造営後、尾根上に存在した古墳が破壊され、副葬品の断片を含む流土が、周溝に流れ込んだとも想定できる。鏡の年代が、6世紀後半の築造と想定される5号墳とは齟齬をきたしており、1世紀以上の伝世期間を想定しない限り、5号墳以外の古墳出土鏡とすることが妥当であろう。少なくとも画文帯神獣鏡を持つ3号墳以外にも、舶載鏡の可能性のある銅鏡を副葬する首長墓級の古墳が、この丘陵上に営まれていたことが示された点は重要である。

第Ⅳ章 自然科学分析

第1節 上牧久渡古墳群出土石材・土器の同定

奈良県立橿原考古学研究所特別指導研究員 奥田 尚

(1) 2号墳出土石材

石材は、石室に残存する壁石2基と床に敷かれた火山礫凝灰岩碎片、出土した輝石安山岩片、加工面や加工痕がある凝灰岩破片である。また、奥壁部にある石室材と推定される大きな石も輝石安山岩である。

1) 石材の使用個所と石種

当古墳が築造されている付近は洪積世の砂層からなり、小指大以上の石も見られない地である。出土している石材は全て他地から運ばれたものである。

壁石：玄室の西北部で、2石が観察される。この石材は共に輝石安山岩で、岩相的に酷似し、やや板状の節理面がみられる。

床の礫敷：床には拳大以下の火山礫凝灰岩の碎片が敷かれてあり、所々に輝石安山岩の碎片がみられる。輝石安山岩片は玄室壁石の輝石安山岩と岩相的に酷似している。

出土石材：鋭い角が残る割った破片が多量に出土しており、これらは輝石安山岩である。僅かであるが火山礫凝灰岩の破片には加工面を残すものと割ったのみのものがあり、これらは岩相的に酷似している。輝石安山岩の破片は壁石や奥壁部に残る石と岩相的に酷似している。また、加工面を残す火山礫凝灰岩は床に敷かれている火山礫凝灰岩と岩相的に酷似している。

2) 石種の特徴と石材の採取地

石種の同定は肉眼観察により行い、石材の採取地については当古墳に近い場所で、同質の石材が採取できる地とした。出土した玄室北西部の壁石を資料1、稜線がある加工石片を資料2、平鑿の痕跡がみられる破片を資料3、平坦な加工面が残る破片を資料4、奥壁付近にある大きな石を資料5とした。敷石については岩相的に資料2・3・4の何れかに相当し、構成礫種において異なるようなものを検出していない。

資料1：やや板状の節理がみられる輝石安山岩である。

輝石安山岩：色は黄灰色で、斑晶鉱物が長石と輝石である。長石は無色透明、短柱状で、粒径が0.1～0.2mm、量がごく僅かである。輝石は褐色透明、短柱状で、粒径が0.2～0.3mm、量が僅かである。稀に2mmに及ぶものもある。石基はやや粒状、ガラス質で、微粒の長石が非常に多い。

石材によってはガラス質岩や花崗岩などの捕獲岩、石英などの捕獲晶が含まれるものもある。

このような岩相の石は王寺町の明神山付近に分布する輝石安山岩の岩相の一部に似ており、節理の様子も似ている。明神山付近では山体の下部に古期の領家花崗岩類、上部に明神山火山岩の岩体が分布する。当古墳にみられる石材は使用時の原形を留めていない為、山地に転在する石を採石したか、露岩を剥がして採石しているのかについては推測しがたい。

資料2：加工面を二面もつ石材破片で、これらの面は直角よりも少し大きい角で交わる。石種は流紋岩質火山礫凝灰岩である。加工面には赤色顔料がみられる。

流紋岩質火山礫凝灰岩；色は灰白色で、構成礫種が流紋岩質ガラス質凝灰岩、軽石、流紋岩、安山岩、輝石安山岩である。流紋岩質ガラス質凝灰岩は、色が黒色、粒形が角、粒径が1～2mm、量ごく僅かである。軽石は灰白色で、粒形が垂円、粒径が3～10mm、量が僅かである。流紋岩は灰色と灰白色のものがある。灰色の流紋岩は、粒形が角で、粒径が0.5～7mm、量が多く、石基がややガラス質である。灰白色の流紋岩は、粒形が垂角、粒径が0.5～8mm、量が多く、石基がややガラス質である。安山岩は赤褐色で、粒形が角、粒径が0.5～2mm、量ごく僅かで、石基がややガラス質である。輝石安山岩は暗灰色で、粒形が角、粒径が1～8mm、量が僅かで、石基がガラス質である。基質は灰色、緻密である。

このような岩相を示す石は二上層群上部ドンズルボー層の凝灰岩の岩相の一部に似ている。採石地としては香芝市の高山石切場跡付近が推定される。

資料3：この破片には層理面とほぼ並行する平坦面があり、この面に直交するように幅が約17mmの平鑿で削った跡が並ぶ。石種が流紋岩質火山礫凝灰岩である。

流紋岩質火山礫凝灰岩；色は灰白色で、層理がみられる。構成礫種は軽石と流紋岩である。軽石は、色が灰白色、粒形が垂角～円、粒径が0.5～3mm、量中である。流紋岩は、色が灰白色、粒形が角、粒径が0.5～8mm、量が僅かで、石基がややガラス質である。基質は灰白色で、緻密である。

このような岩相を示す石は上部ドンズルボー層の凝灰岩の岩相の一部に似ている。採石地としては香芝市の高山石切場跡付近が推定される。

資料4：平坦な加工面がみられる破片で、石種が流紋岩質火山礫凝灰岩である。

流紋岩質火山礫凝灰岩；色は灰白色で、構成礫種が流紋岩質ガラス質凝灰岩、流紋岩である。流紋岩質ガラス質凝灰岩は、色が黒色、粒形が角、粒径が1～20mm、量が僅かである。流紋岩は、粒形が角で、色が灰白色、灰色、暗灰色である。灰白色の流紋岩は、粒径が1～5mm、量中、石基がややガラス質である。灰色の流紋岩は、粒径が0.5～5mm、量が多い、石基がややガラス質である。暗灰色の流紋岩は、粒径が1～20mm、量が僅か、石基がややガラス質である。基質は灰白色で、緻密である。

このような岩相を示す石は上部ドンズルボー層の凝灰岩の岩相の一部に似ている。採石地としては香芝市の高山石切場跡付近が推定される。

資料5：やや板状の節理がみられる輝石安山岩である。表面は加工されて、自然面が認められない。

輝石安山岩；色は淡黄灰色で、斑晶鉱物が長石と輝石である。長石は無色透明、短柱状で、粒径が0.1～0.2mm、量ごく僅かである。輝石は黒色、柱状で、粒径が0.5～1mm、量が僅かである。石基はやや粒状で、微粒の長石が非常に多い。

このような岩相の石は王寺町の明神山付近に分布する輝石安山岩の岩相の一部に似ている。当古墳にみられる石材は使用時の原形を留めていない為、山地に転在する石を採石したか、露岩を剥がして採石しているのかについては推測しがたい。

3) おわりに

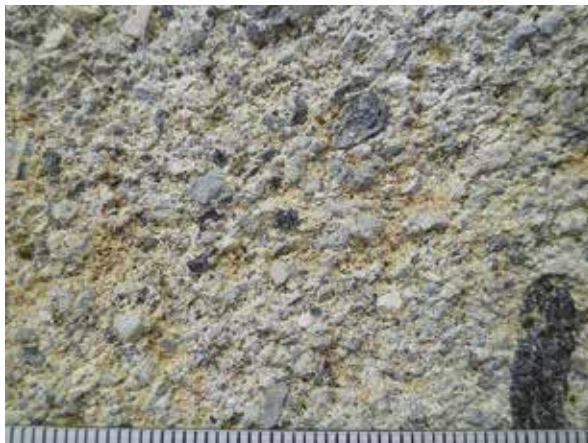
久渡2号墳は馬見丘陵を形成している砂層を掘削し、石室が構築されている。この砂層は大阪層群下部層に相当し、北方の河合町闇穴付近では110万年前頃に棲息していたシガゾウの門歯（象牙）やシフゾウの角が出土している。砂層の砂礫は花崗岩起源の砂礫を主とし、ガラス質流紋岩や片岩の粒がごく僅かに含まれる。



資料1 大きな上げ石 輝石安山岩 明神山付近の石



資料2 稜線をもつ加工石片 流紋岩質火山礫凝灰岩
上部ドンズルボー層の凝灰岩 高山石切場跡付近の石



資料4 加工面が残る石片流 流紋岩質火山礫凝灰岩
上部ドンズルボー層の凝灰岩 高山石切場跡付近の石



資料4 加工面が残る石片流 流紋岩質火山礫凝灰岩
上部ドンズルボー層の凝灰岩 高山石切場跡付近の石



資料4 鑿跡が残る石片 流紋岩質火山礫凝灰岩
上部ドンズルボー層の凝灰岩 高山石切場跡付近の石



資料4 平鑿で削った跡がみられる 左の鑿跡では敲
いた跡が少なくとも4回みられる

写真22 2号墳出土石材拡大写真

「馬見一里は石無し一里」の言葉のように拳大以上の塊といえば化石ぐらいである。石室に使用されている石材、石室に使用されていたと推定される石材は、全て、用途に合わせて他地から運ばれてきたものである。石室の壁に使用されている輝石安山岩や壁石あるいは天井石に使用されていたと推定される輝石安山岩はほぼ同質の石種で、王寺町の明神山付近に分布する輝石安山岩（明神山火山岩）の岩相に酷似している。また、石室の床に敷かれている流紋岩質火山礫凝灰岩や出土した加工面をもつ流紋岩質火山礫凝灰岩はほぼ同質の石種で、岩相的に、二上層群上部ドンズルボー層の高山石切場跡付近の流紋岩質火山礫凝灰岩の岩相の一部に似ている。この付近の石材を使用した石棺には、松里園の石棺や北今市古墳群の石棺がある。高山石切場跡では中世石造物の加工破片も出土しており、古墳時代後期や中世に石材が採石されていたようである。明神山付近の輝石安山岩は王寺町明神にある明神山古墳の石室材に使用されており、今回の調査で石室に使用されているのが2例目である。

上牧久渡2号墳から明神山まで約4km、香芝西中学校の東側にあった高山石切場跡付近まで約3kmである。牧野古墳の場合であれば、寺山の石英安山岩、春日山の輝石安山岩なども使用されており、採石地までの距離が約7kmである。また、巢山古墳の葺石の場合であれば、逢坂川の上流や春日山付近が採石地と推定され、約8kmの距離で採石されている。久渡2号墳の場合、近距離で適材となる石材を運んでいるといえる。

（2）5号墳出土石材

上牧久渡5号墳の第1埋葬施設の木棺下部には礫・板石が敷かれていた。礫は表面が滑らかな川原石様の石で、粒形が角、亜角である。石種はアプライト（2個）、ペグマタイト（1個）、黒雲母花崗岩（1個）、流紋岩（22個）、柘榴石流紋岩（8個）、流紋岩質火山礫凝灰岩（11個）、柘榴石黒雲母安山岩（17個）、輝石安山岩（8個）、玄武岩（1個）である。板石は輝石安山岩1石で長径が43cmに及ぶが、他の石は2～9cmの径である。

当古墳が位置する馬見丘陵はシガゾウ化石等が産する110万年前頃に堆積した地層で、主として砂層からなり、礫を産するような礫層が分布しない。出土した礫は全て他地から運ばれてきたものである。近隣地で同様の岩相を示す石を求めれば、流紋岩・柘榴石流紋岩・流紋岩質火山礫凝灰岩は香芝市の二上山の雌岳^{めだけ}付近に分布する雌岳火山岩、柘榴石黒雲母花崗岩は雌岳の西麓に分布する石切場火山岩、玄武岩は石切場火山岩を貫く岩脈の玄武岩、輝石安山岩は王寺町の明神山に分布する明神山の岩相の一部にそれぞれ似ている。石材は川原石様で、粒形が角、亜角であることから、川原石を採石したと推定される。粒形を考慮して、このような石が採石される地として、流紋岩、柘榴石流紋岩、流紋岩質火山礫凝灰岩、柘榴石黒雲母安山岩、玄武岩は葛下川流域の穴虫付近、輝石安山岩は畠田付近が推定される。葛下川の川原石にはアプライト、ペグマタイト、黒雲母花崗岩の礫が畠田付近で見られることから当付近でこれらの石を採取されたと推定される。

このようなこのような石材の使用傾向は巢山古墳の葺石材の使用傾向と似ている。

（3）上牧久渡3号墳第1埋葬施設棺内出土土器

棺内出土土器の甕形土器（11）に含まれる砂礫は、石英・長石を主とし、黒雲母や角閃石をわずかに含む角ばったものからなる。このような砂礫構成の砂礫を近距離で求めれば、天理市から桜井市にかけての山麓の河川に分布する砂礫と推定される。

第2節 上牧久渡古墳群出土金属製品・玉類の理化学的分析

奈良県立橿原考古学研究所

奥山誠義 柳田明進

(1) 上牧久渡3号墳出土画文帯環状乳神獣鏡と鉄製品の蛍光X線分析

1) はじめに

上牧久渡3号墳は、平成23(2011)年に確認され、翌年にかけて調査が行われた。3号墳は1辺15m前後の方形を基本とした方墳もしくは前方後方墳とみられ、3基の埋葬施設が確認されている。3号墳では、直径14.2cmを測る画文帯神獣鏡とともに鉄剣や鉄槍、鉄鏃といった鉄製武器が出土した。画文帯神獣鏡および鉄製品は、上牧町教育委員会の依頼により、出土直後より当研究所保存科学研究室において保管・管理し、保存処理をおこなった。

画文帯神獣鏡は二分割した状態で発見され、その破断面を除き、ほぼ全面を埋土である黄褐色の土に覆われていた。そのため、出土直後は木材や織物、顔料など副葬状態に関する情報を示す付着物の情報は容易に得られない状況であった。画文帯神獣鏡の付着物は、保存処理における土を取り除くクリーニング作業により明らかになった。画文帯神獣鏡には、木材や織物は認められなかったが、赤色顔料らしき付着物(以下、赤色付着物)が認められた(図69)。一方、画文帯神獣鏡の破断面は、鏡の表面から0.5~1.0mmに腐食層と考えられる緑青色の層が存在した(図70)が、中央部は銀光沢を呈し、腐食の影響を受けていないように見受けられた。

鉄製品は、ほぼ全面を錆や土に覆われ、一見して内部状況をうかがい知ることは困難であった。3号墳では、複数の埋葬施設が確認されているが、画文帯神獣鏡および鉄製品がいずれの埋葬施設に副葬されていたか明らかではない。特に鉄製品は、画文帯神獣鏡との関連性を評価する必要があった。その点について、保存処理後の鉄製品を評価し、両者の関係を検討することとなった。

本分析は、保存処理の過程で明らかとなった調査の成果である。

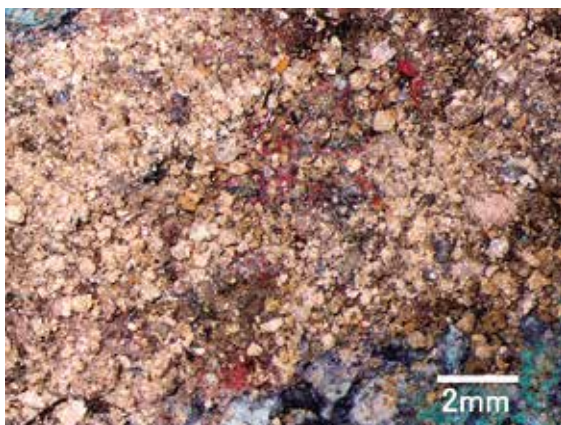


図69 画文帯神獣鏡外区で確認された赤色付着物



図70 画文帯神獣鏡の破断面(外区)

2) 資料

本分析の資料は、3号墳において出土した画文帯神獣鏡と鉄製品である。画文帯神獣鏡は、その材料を知る手がかりを得るため、腐食の影響が小さいと考えられる破断面の蛍光X線分析を実施した。また、保存処理の過程で確認された赤色付着物の素性を明らかにするため、蛍光X線分

析を実施した。

鉄製品は、画文帯神獸鏡とともに出土した破片を含む11点を分析対象とした。鉄製品は、画文帯神獸鏡との関連性を評価する必要性から、鉄製品表面における銅（Cu）および鉛（Pb）、水銀（Hg）の存在確認調査を主眼として、蛍光X線分析をおこなった。

3) 方法

画文帯神獸鏡の破断面は、実体顕微鏡及びデジタルマイクロスコープによる観察をおこない、観察記録はデジタルデータとして記録保存した。観察の後、蛍光X線分析をおこなった。蛍光X線分析は、JEOL JSX-3100R IIを用いて、定性分析及び半定量分析をおこなった。半定量分析は、分析装置に付属する制御ソフトのファンダメンタルパラメータ法（FP法）を用いておこなった。本法は標準試料を用いない理論計算値に基づく定量計算法であり、定量する元素を指定して算出されるため、必ずしも測定試料の本来の定量値を示しているとは限らない。そのため、本稿において掲載する数値は理論計算値であり、参考値として示すことをあらかじめご了解いただきたい。

赤色付着物の分析は、卓上蛍光X線分析装置SPECTRO MIDEX IIを用いた定性分析をおこなった。古墳時代に利用された赤色顔料には、主として酸化鉄由来のベンガラ（主に Fe_2O_3 ）のほか、水銀（Hg）と硫黄（S）の化合物である辰砂（ HgS ：硫化水銀）からなる朱がある。本件では蛍光X線分析によって、鉄（Fe）及び水銀（Hg）の検出結果を総合的に判断し、顔料の特定を試みた。

鉄製品は、顕微鏡観察の後、蛍光X線分析による定性分析をおこない、鉄製品表面における銅（Cu）および鉛（Pb）、水銀（Hg）の検出強度を検討し、それらの存在確認をおこなった。蛍光X線分析には、JEOL JSX-3100R IIを用いた。

4) 結果

1. 画文帯神獸鏡破断面の分析

画文帯神獸鏡の破断面の中央部分をデジタルマイクロスコープで観察した。観察した結果を図71に示す。画像中に見られる金属組織は、茶色の長い芋虫状の組織が α 相、色の濃い丸い組織がPb相、そして、大部分を占める白色の部分が共析と考えられる〔1〕。

続いて、蛍光X線分析をおこなった。蛍光X線分析は、JEOL JSX-3100R IIを用いて直径1 mmの分析径で、二分割された鏡片のうち小片の外区に対し、3点おこなった。分析箇所は、①腐食の影響を受けていないと考えられる破断面中央部分（以下、地金部と称す。図72-A）、②腐食の影響を受けていると考えられる鏡表面に近い部分（以下、腐食層部と称す。図72-B）、③一様に見える破断面の中で異なる色調を呈する部分（以下、変色部と称す。図72-C）の計3点であった。

地金部の分析結果を図73に示す。地金部は、銅（Cu）、錫（Sn）、鉛（Pb）を顕著に検出し、鉄（Fe）、ニッケル（Ni）、ヒ素（As）をわずかに検出した。腐食層部の分析結果を図74に示す。腐食層部は、銅（Cu）、錫（Sn）、鉛（Pb）を顕著に検出し、鉄（Fe）、ニッケル（Ni）、ヒ素（As）、アンチモン（Sb）をわずかに検出した。変色部の分析結果を図75に示す。変色部は、銅（Cu）、錫（Sn）、鉛（Pb）を顕著に検出し、鉄（Fe）をわずかに検出した。測定した3カ所の半定量値を表1に示した。地金部分は、半定量値で68.7wt%のCuと23.8wt%のSn、2.4wt%のPbを含んでいると見なされた。この結果は、先述のデジタルマイクロスコープ観察像に見られた金属組織から推定される金属配合比とおおむね整合がとれている〔1〕。この地金部分が、腐

食の影響を受けていないと仮定した場合、3号墳出土の画文帯神獣鏡は上記のような組成であった可能性が考えられる。

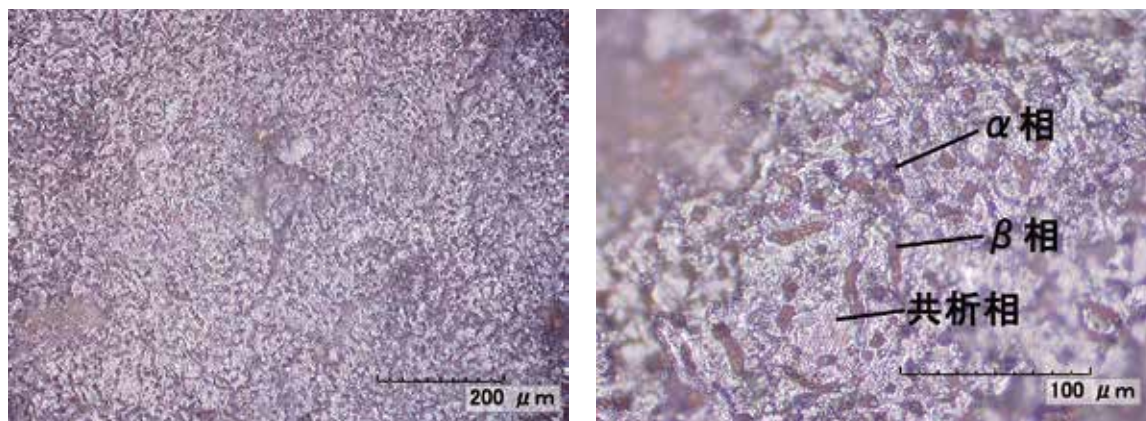


図71 鏡破断面のデジタルマイクロスコップ観察像（左：350倍、右：1,050倍）



図72 破断面の蛍光X線分析箇所

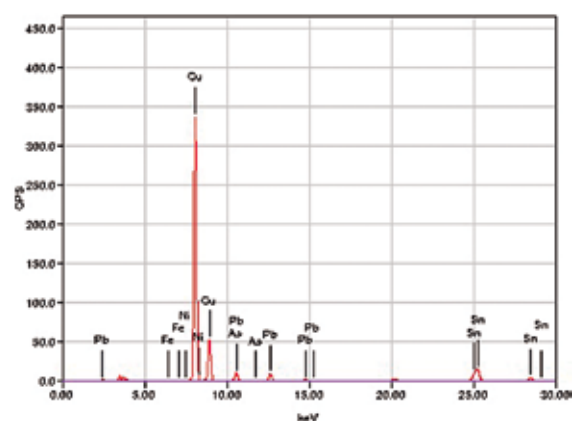


図73 Aの蛍光X線スペクトル

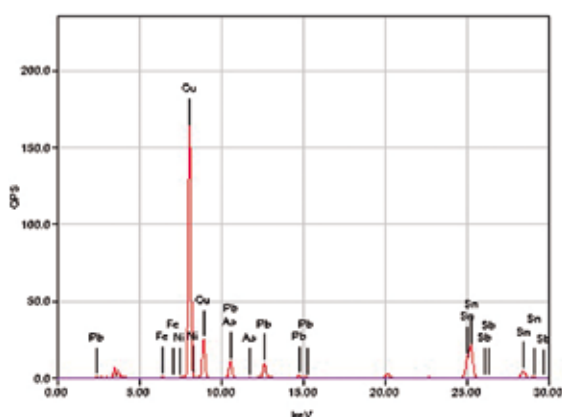


図74 Bの蛍光X線スペクトル

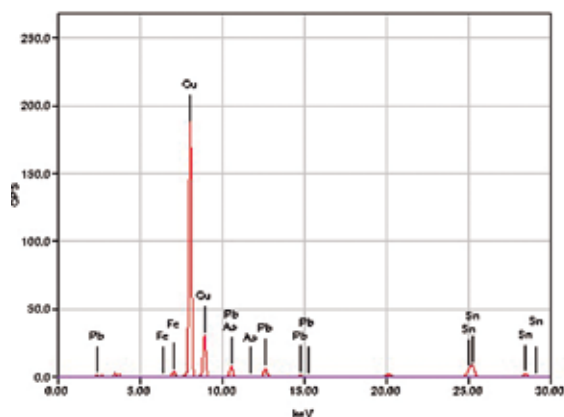


図75 Cの蛍光X線スペクトル

表4 画文帯神獸鏡の破断面の蛍光X線分析 半定量分析結果 (wt%)

	Cu	Sn	Pb	Fe	Ni	As	Sb
地金部 (図72-A)	68.7	23.8	2.4	0.1	0.4	0.3	—
腐食層部 (図72-B)	47.1	43.5	7.5	0.4	0.3	0.6	0.6
変色部 (図72-C)	66.2	25.0	8.1	0.3	—	—	—

—：検出限界値以下

2. 赤色付着物の分析

赤色付着物の蛍光X線分析の結果を図76に示す。測定の結果、水銀 (Hg) を顕著に検出しており、この赤色顔料はHgを主成分とする辰砂 (HgS：硫化水銀)、いわゆる「朱」によるものと考えられる。

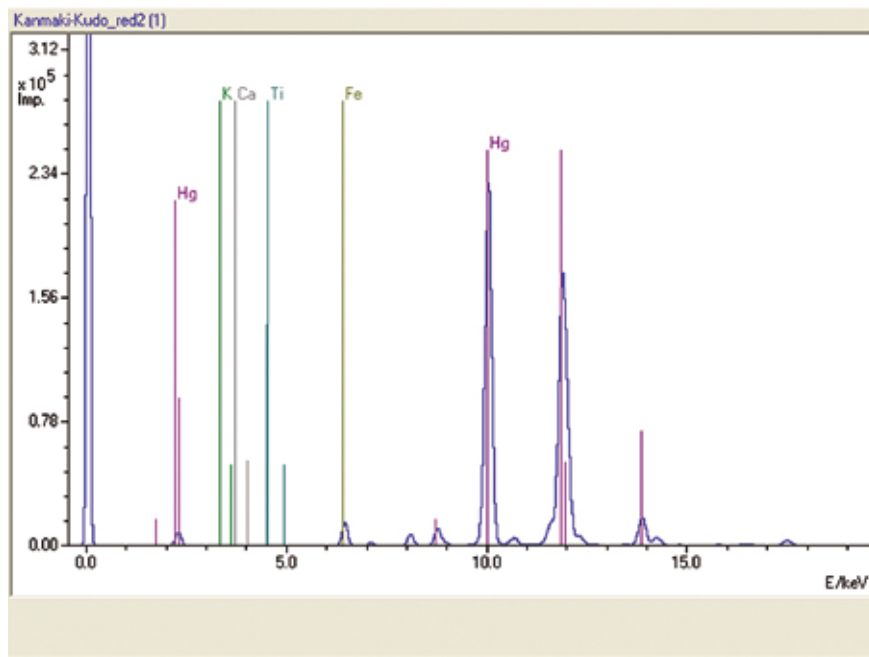


図76 赤色付着物の蛍光X線スペクトル
Hgを検出しており辰砂（水銀朱）と考えられる

3. 鉄製品表面における銅 (Cu) および鉛 (Pb)、水銀 (Hg) の存在確認調査

鉄剣や鉄槍、鉄鏃等の鉄製品の破片11点について蛍光X線分析した結果を表5に示す。また、一部の出土品の蛍光X線スペクトルを図77～80に示す。資料番号は、本報告書図49の番号に対応する。

1・上（本報告書69P 図49・1の上）および1・下（本報告書69P 図49・1の下）において、銅 (Cu) および鉛 (Pb) を検出した。これらの鉄製品は、透過X線画像観察によって、鉄以外の素材は使用されていないことが確認されていた。本資料からの銅 (Cu) および鉛 (Pb) の検出は、本資料埋蔵中、近傍に青銅製品が存在し、青銅製品が腐食する過程で青銅の成分が地中へ溶出し、その溶出成分が本資料に接触した可能性を示唆している。第Ⅲ章第3節でも指摘しているように、この資料は2点で1個体となることが明らかとなっており、この鉄製品が何らかの青銅製品の近傍にあった可能性が考えられる。さらには、3号墳からは画文帯神獸鏡以外の青銅製品が確認されていないため、本製品は画文帯神獸鏡とともに副葬されていた可能性が考えられる。

一方、水銀 (Hg) は、1・上、2、4・下、5、7、8、9、10の8点で検出された。水銀

表5 鉄製品における銅（Cu）および鉛（Pb）、水銀（Hg）の有無

資料番号	Cu	Pb	Hg
4の下	－	－	＋
5	－	－	＋
1の上	＋	＋	＋
1の下	＋	＋	－
2	－	－	＋
10	－	－	＋
7	－	－	＋
3	－	－	－
8	－	－	＋
9	－	－	＋
4の上	－	－	－

＋：検出、－：未検出

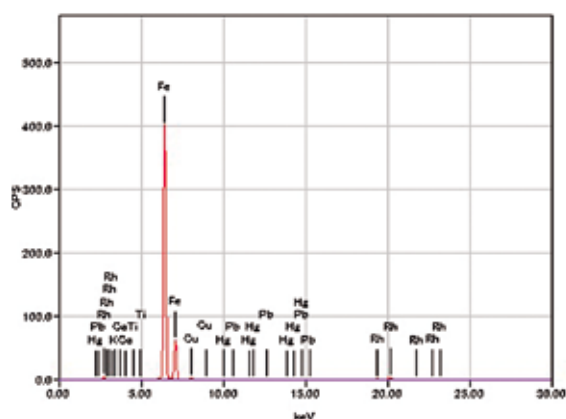
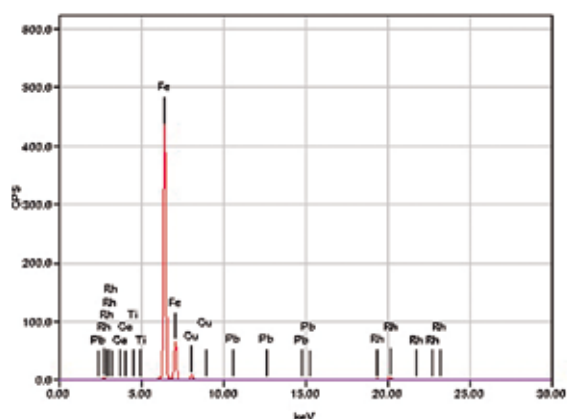
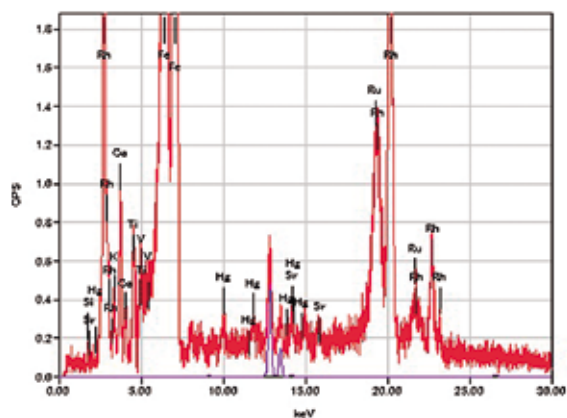
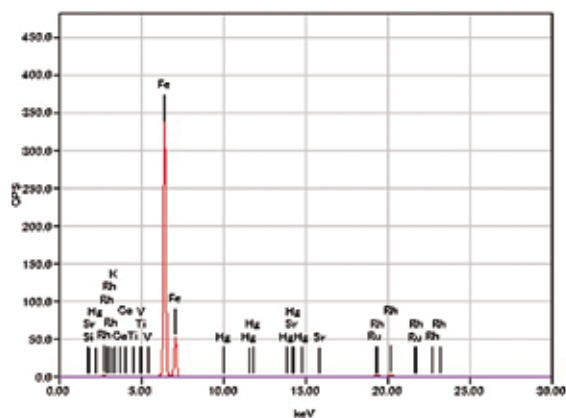
図77 資料1・上の蛍光X線スペクトル
(本報告書69P 図49・1の上)図78 資料1・下の蛍光X線スペクトル
(本報告書69P 図49・1の下)

図79 資料5 (本報告書69P 図49・5の上) 蛍光X線スペクトル (右は、左図の部分拡大)

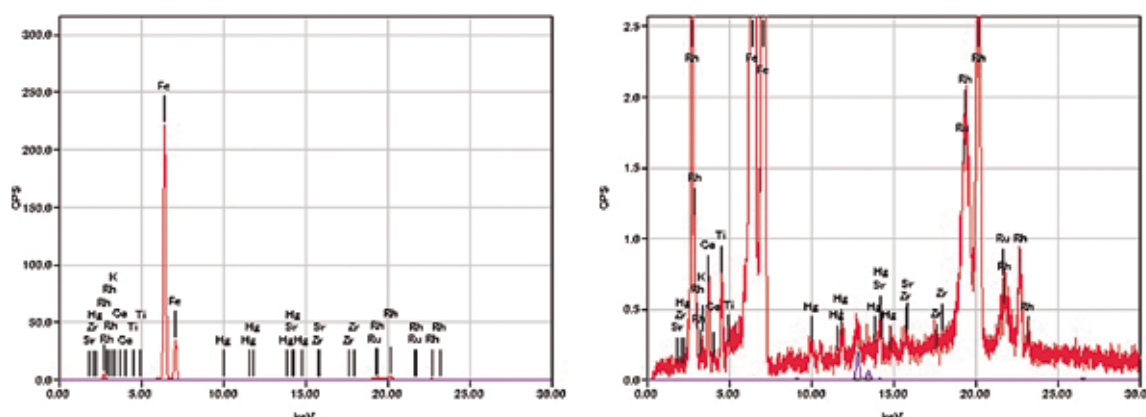


図 80 (本報告書 69P 資料 9) の蛍光 X 線スペクトル (右は、左図の部分拡大)

(Hg) は、銅 (Cu) や鉛 (Pb) と異なり埋蔵環境中で溶出することはほとんど無い。そのため、鉄製品における Hg の検出は、鉄製品に Hg が付着していることを意味する。つまり、Hg が存在する空間に鉄製品が存在していたことを示唆する。これら Hg を検出した 8 点は、Hg が存在した埋葬施設に存在していた可能性が高い。

5) おわりに

本分析では、3 号墳より出土した画文帯神獣鏡およびその付着物と鉄製品について、保存処理過程で材料調査した結果を示した。分析の結果、画文帯神獣鏡は高錫青銅に相当する青銅で铸造されている可能性が示唆された。また、画文帯神獣鏡の付着した赤い物質は Hg を主成分とする辰砂 (HgS: 硫化水銀)、いわゆる「朱」である可能性が示唆された。鉄製品は 11 点中 2 点から Cu および Pb の存在が確認され画文帯神獣鏡の近傍に存在していたこと、さらに 8 点からは Hg の存在が確認され、朱が存在する空間に存在していたことが示唆された。

謝辞

本分析をおこなうにあたり、画文帯神獣鏡の金属組織観察について、富山大学 長柄毅一教授より貴重なご助言を賜った。ここに記して深謝いたします。

(2) 上牧久渡 2 号墳出土琥珀製棗玉の赤外分光分析

1) はじめに

上牧久渡 2 号墳は、上牧久渡古墳群を構成する古墳の一つである。2 号墳は、平成 23 (2011) 年春に行われた踏査によって、初めてその存在が確認された古墳である。平成 25 (2013) 年に、上牧町教育委員会によって発掘調査された。

2 号墳は径約 16m、高さ約 3m の円墳で、古墳の背後にあたる北側には、東西幅約 35m の大きな周溝が明瞭に残っていた。発掘調査では、大刀・刀装具の破片等の鉄製品とともに琥珀製の棗玉が出土した。上牧久渡古墳群では複数基の古墳の発掘調査がなされ、出土品も多数確認されているが、琥珀製品の出土は、この 2 号墳の棗玉が今のところ唯一の出土である。

本稿では、赤外分光分析法により、琥珀の材料学的検討を行ったので、その成果を報告する。

2) 資料

資料は先述の 2 号墳出土琥珀製棗玉の微小片 (写真 23) である。2 号墳出土琥珀製棗玉の小片

は $1.2\text{mm} \times 0.5\text{mm} \times 0.5\text{mm}$ ほどの均質な鉛色を呈する資料であった。内部に極めて小さな気泡を含んでいた（写真24）。赤外スペクトルの比較のための資料として、曾我遺跡出土の琥珀微小片を用いた。

3) 方法

2号墳出土琥珀製棗玉の構成物の情報を得るため赤外分光分析法を用いた。琥珀は、太古の昔に繁茂していた樹木の樹液が、化石化したものの総称である。一般的に、琥珀はコハク酸を主成分とした非晶質で、高分子から成る有機物の一つである。

赤外分光分析は、漆や繊維などの有機物からなる文化財の材質調査において、これまでも広く利用されている分析方法である。有機物を形成する各種原子間の結合様式は、それぞれ固有であり、赤外線領域の光が照射されると、特定の原子間結合は特定のエネルギーの赤外光を吸収する。その吸収の波数依存性（赤外スペクトル）を観測することにより、材質の判定が可能である。

赤外分光分析法には、測定条件によって、いくつかの測定方法がある。本稿における分析では、2号墳出土琥珀製棗玉に対しては全反射法（Attenuated Total Reflection measurement, 以下、ATR法）を用い、比較試料とした曾我遺跡出土琥珀小片は、光音響赤外分光法（Fourier Transform Infrared Photoacoustic Spectroscopy, 以下 PAS）を用いた。ATR法は、試料表面で全反射する光を測定し、試料表面の吸収スペクトルを得る方法である。固体試料を測定する場合、試料をプリズムに押し付ける必要があり、この押し付ける力によって、スペクトルが変化することがある。一方、PASは、連続した光を物質に照射するとその光と同じ波数の光が物質から発生する現象、いわゆる音響効果を応用した測定法である。PASは、理論上、一切の試料の損傷を伴わず、同一試料の繰り返し測定が容易である特長をもち、文化財への利用が有効と考えられる手法である。

4) 結果

上牧久渡2号墳出土の琥珀製棗玉の赤外分光分析の結果を図81（a）に示す。図81（b）は、比較資料の曾我遺跡出土琥珀のIRスペクトルである。2号墳出土琥珀製棗玉と曾我遺跡出土琥珀のIRスペクトルを比較すると、スペクトル形状が著しく異なるように見える。しかし、ピークを一つ一つ拾い上げると大きな差異はないことがわかる。共通するのは、OH伸縮振動に帰属される 3425cm^{-1} 、CH伸縮振動に帰属される 2931cm^{-1} および 2870cm^{-1} 、飽和脂肪酸エステル $\text{C}-\text{O}$ に帰属される 1171cm^{-1} 、帰属不明な 1261cm^{-1} 、 1381cm^{-1} 、 102cm^{-1} 付近の吸収ピークである。久渡2号墳出土琥珀製棗玉に特徴的な吸収ピークとして、 911cm^{-1} 、 796cm^{-1} 、 693cm^{-1} 、 532cm^{-1} が



写真23 琥珀製棗玉の小片

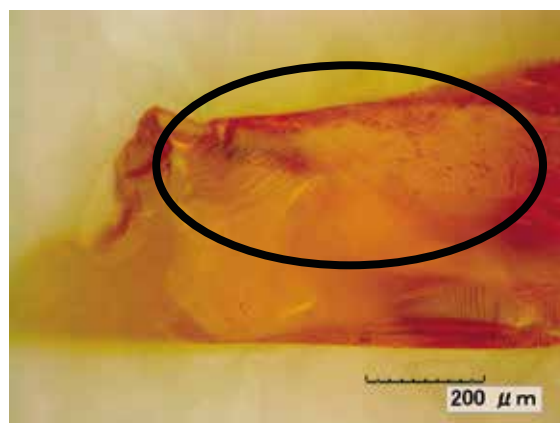


写真24 写真23の部分拡大。枠内に気泡が見える。

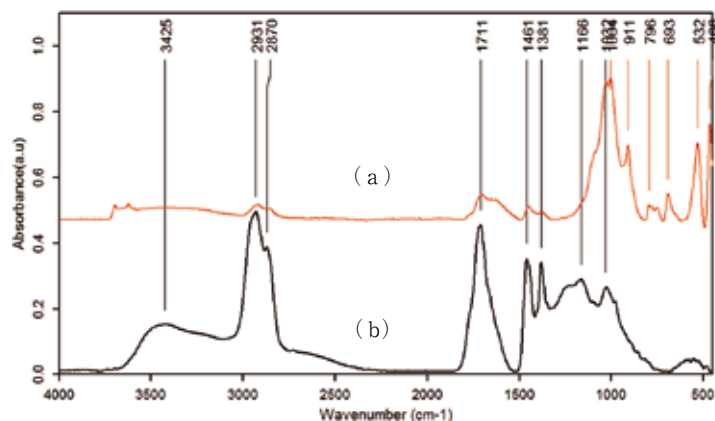


図81 琥珀のIRスペクトル。a:上牧久渡2号墳出土琥珀製棗玉(ATR法)、b:曾我遺跡出土琥珀(PAS)。

挙げられる。久渡2号墳出土琥珀製棗玉は、低波数側の吸収ピークが顕著に現れているが、検出ピークはほぼ琥珀に一致しており、琥珀製と考えてよい。

低波数側の吸収ピークが際立った原因は、現時点では明確には指摘できないが、琥珀の劣化による低分子化が進んでいる可能性、あるいは、ATR法によるプリズムへの圧着強度の強弱によるIRスペクトルの変化などが考えられる。

5) おわりに

本分析より、2号墳出土琥珀製棗玉は、琥珀製であることが確認できた。久渡2号墳出土琥珀製棗玉は、出土琥珀にみられるIRスペクトル形状と異なる点を確認できることから、測定法による差異、あるいは分子情報の差異が生じているものと考えられる。

謝辞

本分析を行うにあたり、(株)エス・ティ・ジャパンおよび(株)パーキンエルマージャパンに技術協力ならびに助言をいただいた、ここに記して感謝の意を表します。

第Ⅴ章 上牧久渡古墳群をめぐる諸問題

第1節 上牧久渡古墳群の調査成果の語るもの

白石太一郎

平成23年6月の測量調査に始まり、同年11月の第1次調査から平成26年の第5次調査に至る上牧久渡古墳群の調査の成果については、前章までの各章で調査を担当された方々が詳しく報告されているとおりである。ここではこの調査の結果明らかにされた上牧久渡古墳群の性格とその歴史的な意味について、若干の私見を述べておきたい。

(1) 上牧久渡古墳群の展開過程

上牧久渡古墳群では、現在のところ7基ほどの古墳が確認されている。このうち3号墳は、後述するように定型化した大型前方後円墳出現以前の時期に遡る可能性も大きい。研究者の中には古墳以前の墳丘墓と理解する人も少なくないと思われるが、ここでは煩雑になるのを避け、区別せずに古墳と呼んでおきたい。

上牧久渡古墳群で最初に営まれた古墳は3号墳である。1辺15m程度の方墳と想定されており、いずれも頭部を東に配した東西に主軸をおく組合式木棺を直葬した埋葬施設が3基確認されている。このうち中央の第1埋葬施設からは、大阪府和泉市和泉黄金塚古墳出土鏡と同型鏡である画文帯環状乳神獣鏡が、鉄槍、鉄剣ないし鉄槍、鉄鏃などの鉄製武器や庄内式期の甕などとともに出土している。和泉黄金塚古墳は古墳時代前期でも後半の古墳であるが、3号墳の第1埋葬施設に伴う土器はいずれも布留0式以前のものであると思われ、その他の遺物もこの古墳が庄内式期に遡るものであることを否定するものではない。

上牧久渡3号墳ではこの第1埋葬施設以外にも第2、第3埋葬施設が検出されているが、いずれも組合式木棺を直葬したもので、割竹形木棺がみられないことが注目される。奈良盆地ではこの時期の古墳ないし墳丘墓の実態については不明なところが多いが、その墳丘が方形の平面形を示すこと、埋葬施設が東に頭部を置く組合式木棺の直葬であることは興味深い。

3号墳が営まれた後、その後古墳時代前期から中期にかけての4・5世紀の上牧久渡古墳群の状況はよくわからない。古墳群で最高所に位置する1号墳については、発掘調査以前には墳丘長60m前後の東南東に前方部を配する前方後円墳の可能性が考えられていた。調査の結果、墳丘・埋葬施設部分ともに後世の著しい変形を受けていて、本来の墳丘形態、埋葬施設、副葬品、さらにその造営時期については明らかにされていない。1号墳は、その立地からも比較的大規模な古墳であったと想定されるが、その実態については不明確なところが多い。

その後、確実に古墳の造営時期が判るのは後期でも比較的新しい時期の4号墳と5号墳である。4号墳は、3世紀の古墳である3号墳の場所に重複して営まれた径18mほどの円墳で、墳丘の中央に割竹形木棺を直葬した東西軸の埋葬施設が認められている。TK43型式の須恵器や白玉が出土しており、6世紀の第3四半期のものと想定される。

4号墳が3号墳の真上に完全に重複して営まれていることは興味深い。それは4号墳の営まれた6世紀後半の段階では、3号墳の存在はまったく忘れ去られており、その墳丘も目に付く形で

は遺存していなかったことを示すものであろう。このことは3号墳が本来あまり高い墳丘を持たない低墳丘墓に近いものであった可能性が大きいことを示すものであろう。ただ、その同じ場所に4号墳が造営されたのは、丘陵先端部の好立地であることに加えて、何がしかの高まりがなお遺存していたからであろう。

さらにこの4号墳にすぐ後続して、北方へ延びる脊梁部から西側へやや張り出した部分に5号墳が営まれている。5号墳は、径18m前後の円墳で、東西に並列する2基の木棺直葬の埋葬施設をもつ。西側の第1埋葬施設は、墓壇底に礫を敷き、木棺の両端を粘土塊で押えたと想定される木棺直葬の施設である。刀子など鉄器の副葬が明らかにされているが、棺の構造は不明である。第2埋葬施設は、組合式木棺を直葬したもので、墓壇内の棺外部分からTK209型式の古い段階の須恵器が出土している。6世紀末葉ないし7世紀初頭のものであろう。

なお、きわめて注目されるのは5号墳の付近からも斜縁の銅鏡の破片が出土していることである。三角縁神獣鏡と共通する文様の外縁部を持つもので、想定される銅鏡年代からも、6世紀末ないし7世紀初頭の5号墳のものとは考え難く、また出土位置から3号墳に関連する遺物と考えるのも困難である。5号墳の位置ないしその近くに3号墳に近い時期の低い墳丘を持つ小古墳が

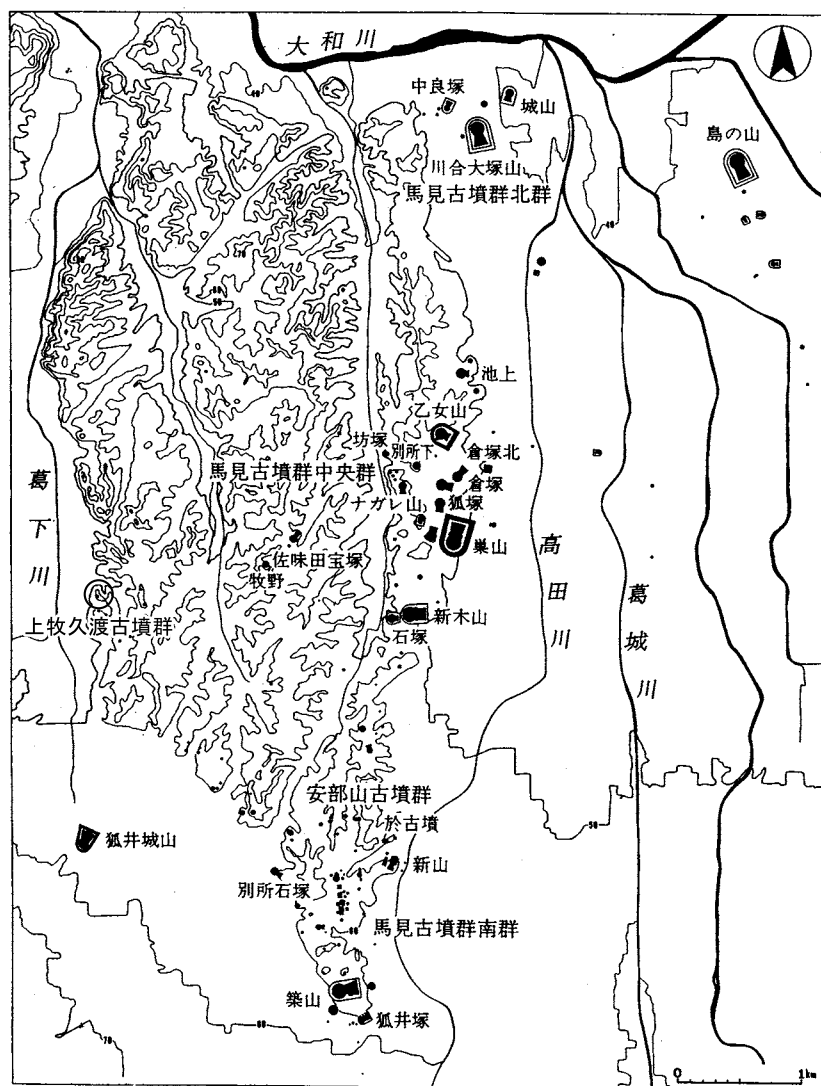


図82 葛城北部における古墳分布

存在した可能性が大きいと考えられよう。

4号墳、5号墳に次いで営まれたと考えられるのは、丘陵の南斜面に営まれた2号墳である。この古墳は墳丘の背後を大きく掘鉢状に削った大規模な周溝をめぐらす径約16mの円墳で、周溝外側の東西幅は約35mに及ぶ。いわゆる「山寄せ形式」と呼ばれる古墳時代終末期によくみられる立地である。

埋葬施設は墳丘の中心よりやや西寄りに営まれた南に開口する横穴式石室で、北方の王寺町明神山山塊の輝石安山岩を用いたものである。用材の多くは後世の石材採取のために失われていたが、発掘調査の結果両袖式の石室であったと想定されている。その床面には凝灰岩の小片やその粉末化したものを敷き詰めていたようである。付近の香芝市平野古墳群の平野2号墳の横穴式石室では、土と凝灰岩の粉砕片を突き固めて棺台に利用していた例が知られている（香芝市2005）。

2号墳の中心的な埋葬施設であるこの横穴式石室の東側の墳丘東斜面では、箱式石棺と考えられる施設が検出されている。保存のために内部の調査は行われていないが、天井石には扁平に加工された凝灰岩が用いられている。

横穴式石室内からの出土品には、須恵器・土師器、琥珀製棗玉、それに鉄刀、鉄鏃などの破片がある。そのほか飛鳥期の平瓦片が二十数片もあり、床面などに利用されていたものらしい。出土している須恵器は、いずれも奈良文化財研究所の飛鳥編年では飛鳥Ⅱ期の新しい段階のもので、7世紀中葉頃に造営された古墳であることが知られる。

このように2号墳は、墳丘径は16mであるが、その背後に大きな掘鉢状の掘割りをともなう立派な周溝を持つもので、通常の後期から終末期の群集墳にみられる単なる円墳とは明らかに異なった様相を呈している。その評価は、上牧久渡古墳群それ自体の性格を考えるうえからも重要である。

上牧久渡古墳群で発掘をともなう調査が行われた古墳は以上であるが、それ以外にも2号墳の西方に、よく似た立地の6号墳があり、やはり古墳時代終末期のものである可能性が考えられる。さらにその西南方の低い位置にも7号墳が存在する。

このように上牧久渡古墳群は、画文帯環状乳神獣鏡をともなうおそらく3世紀前半頃の小方墳である3号墳から始まり、造営時期未詳の1号墳、6世紀後半から7世紀初頭頃の4号墳、5号墳を経て、7世紀の中葉頃には2号墳という特異な立地と様相を示す終末期古墳が認められる。丘陵頂部に立地する1号墳の確かな造営時期が不明であり、さらにすでに墳丘の流失などにより失われた古墳、あるいは未発見の古墳があることも予想される。このため上牧久渡古墳群の形成過程については、これらを3世紀から7世紀まで継続して営まれた古墳群とみるか、3世紀の初期古墳と後期～終末期の古墳が重複したものとみるかは、残された大きな課題である。さらに2号墳の評価によってはより複雑な古墳群形成が想定される。

次節では上牧久渡古墳群を葛城地域における古墳や古墳群の中に位置づけることによって、その性格や歴史遺産としての意味を考えてみたい。

2. 葛城地域における上牧久渡古墳群の位置付け

上牧久渡古墳群の位置する葛城北部の馬見丘陵には、4世紀後半から5世紀代の大型前方後円墳が数多く営まれた馬見古墳群が存在する。馬見丘陵の主として東斜面から東麓に営まれたこの馬見古墳群は、河合町川合大塚山古墳（墳丘長200m）を中心とする馬見古墳群北群、広陵町巢山古墳（220m）や新木山古墳（210m）を中心とする馬見古墳群中央群、さらに大和高田市の築

山古墳（220m）を中心とする馬見古墳群南群の三大古墳群を中心に大型や中型の前方後円墳が多数造営されている。ただそれらの各古墳群では、墳丘長200m以上の大型前方後円墳はそれぞれ1基ないし2基が認められるにとどまる。

さらに葛城南部にも、新庄屋敷山（約150m）を中心とする葛城市新庄古墳群や御所市室宮山古墳（240m）と掖上鑑子塚古墳（160m）を中心とする室・国見山古墳群があり、やはり各群に1、2基の大型古墳がある。興味深いのは、これら葛城各地の5つほどの大型古墳群にそれぞれ1～2基ずつ認められる大型前方後円墳は、いずれもその造営時期を少しずつ異にしていることである。筆者はこうした大型古墳のあり方から、4世紀中葉過ぎから5世紀後半までの葛城地域では、4ないし5つほどの有力在地集団が政治的に連合して「葛城政権」とでも呼ぶべき地域的な政治連合を形成し、これらの有力在地集団の長が交代で連合の盟主の地位に就いていたものと捉えている。文献史料から想定されている「葛城氏」の実態は、こうした葛城地域の地域的首長連合にほかならなかったのではなかろうか（白石2000）。

古墳時代の葛城地域には、こうした馬見古墳群の北・中央・南の各古墳群に代表されるような有力地域集団以外にも、多くの中小地域集団が存在したことは疑いない。上牧久渡古墳群を形成した集団もその一つと考えて差し支えなかろう。この古墳群では、すでに3世紀段階から3号墳のような低墳丘の小型の方墳を営み、そこには画文帯環状乳神獣鏡を副葬しているのである。さらに5号墳出土の銅鏡片は、3号墳に続く時期にもこうした銅鏡を副葬するような小古墳が複数営まれた可能性を強く示唆するものである。

馬見古墳群南群に前方後方墳で多数の銅鏡を副葬していた広陵町新山古墳（墳丘長130m）が造営される以前には、なぜか葛城地域では前方後円墳など顕著な古墳は営まれていない。ただこの地域の諸集団が少なくない中国製や倭製の銅鏡を保有していたことは、新山古墳や河合町佐味田宝塚古墳（梅原1921）、さらに御所市鴨都波1号墳（御所市2001）の副葬鏡群から伺うことができる。3号墳の画文帯環状乳神獣鏡の出土は、それが3世紀前半まで遡ることを示すもので、

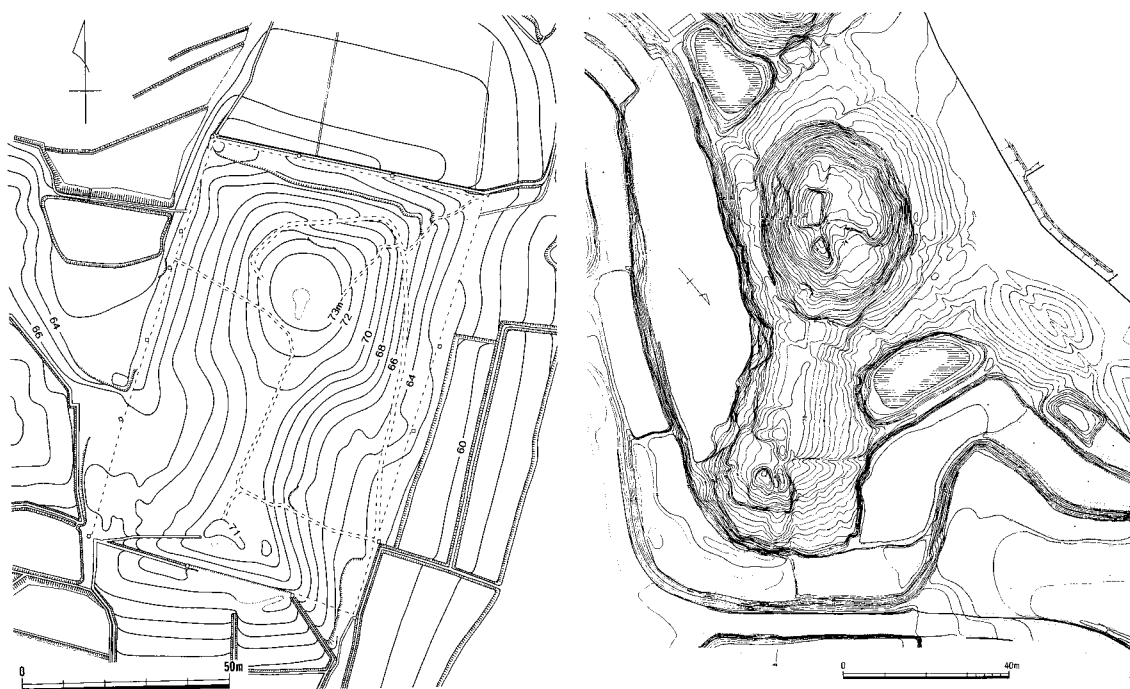


図83 新山古墳（左）と佐味田宝塚古墳（右）

初期ヤマト王権形成期における奈良盆地東南部の“やまと”と盆地西南部の“葛城”と相違や両者の関係を明らかにする上にきわめて重要な素材となるものであろう。

4世紀中葉頃になって葛城各地の4ないし5つほどの有力集団によって葛城地域連合が形成されるようになると、有力集団以外の集団では、基本的に顕著な古墳の造営は認められなくなる。それは上牧久渡古墳群だけの現象ではなく、それ以外の葛城各地でもこの時期の顕著な古墳はほとんどみられないのである。

葛城各地で、中小規模の古墳の造営が盛んになるのは、5世紀後半になって葛城地域連合が解体して以降のことと考えられる。この葛城連合の解体は、おそらく文献史料にみられる雄略朝における葛城氏の滅亡に関連するものであろう。葛城南部では御所市石光山古墳群（樫考研1976）に代表される多くの群集墳が成立する。上牧久渡古墳群に近い葛城北部でも、馬見古墳群南群の北方に安部山古墳群のような6世紀の小前方後円墳を中心とする小古墳群が成立する（樫考研1974）。4号墳や5号墳など、上牧久渡古墳群における古墳造営の復活もこの動きと軌を一にする出来事であろう。良好な石材のえられない馬見丘陵やその周辺では、6世紀にはもっぱら木棺直葬の埋葬施設を持つ後期古墳が営まれる。安部山古墳群などとともに、4・5号墳はその典型的な事例であろう。

古墳時代終末期の7世紀に営まれた2号墳が、後期の4号墳・5号墳から系譜的につながる古墳として造営されたものかどうかは大きな問題である。2号墳が背後に播鉢状の大規模な周溝を

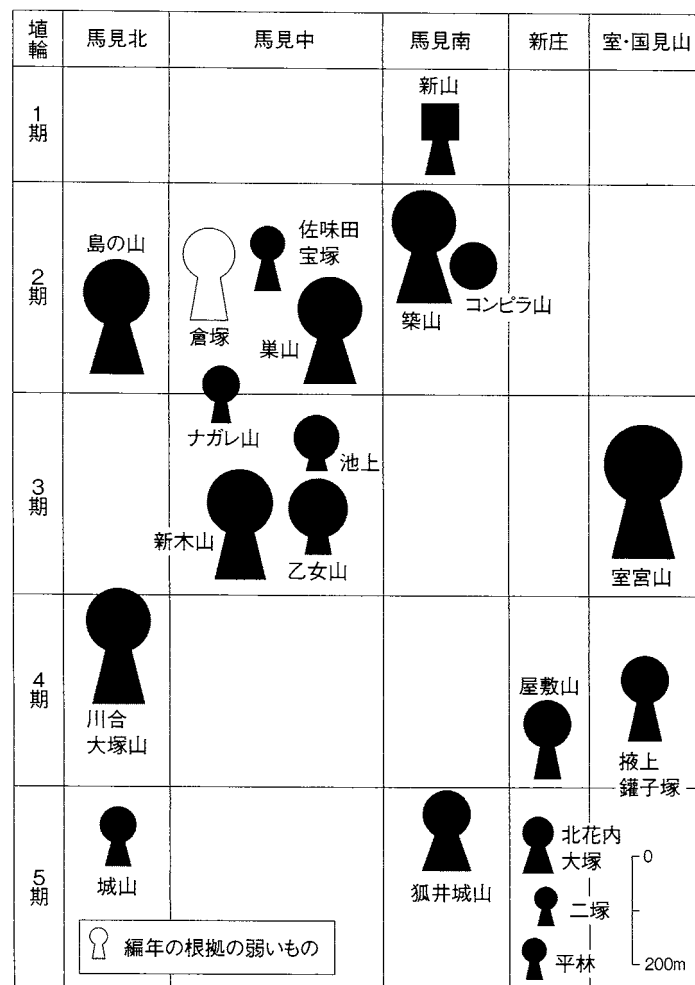


図84 葛城地方における大型古墳の編年

持つ特異な形状の古墳であること、4・5号墳とは異なり横穴式石室を採用していることなどから、これを近くの広陵町牧野古墳や香芝市平野塚穴山古墳のように敏達系の王族かそれに関係する氏族の古墳と考える説が提起されている（本書所収の塚口論文参照）。興味深く教えられるところの多い意見である。

しかし『延喜式』にみられる押坂彦人大兄皇子の「成相墓」である可能性が大きい牧野古墳（広陵町1987）は奈良盆地でも有数の大型横穴式石室を持ち、やはり『延喜式』にみられる彦人大兄の子の茅渟王の「片岡葦田墓」である可能性が指摘されている平野塚穴山古墳（塚口1991）は凝灰岩を用いた立派な石室系横穴式石槨を採用している。それに対して2号墳は、その横穴式石室のあり方などからも特にこれを敏達系王族につながる古墳と積極的に考える考古学的な材料は今のところ見出し難い。

ただ2号墳の特異な墳丘形態や飛鳥期の平瓦片などが多数検出されていることから、上牧久渡古墳群を営んだ集団がこの地域と特別の関係を保持していた敏達系王族と密接な関係を持っていたことは十分想定できよう。この点は、上牧久渡古墳群の西北約2kmに所在し、平野塚穴山古墳を群中を含む香芝市平野古墳群についても指摘できることである。

いずれにしても上牧久渡古墳群は、葛城北部の馬見丘陵西側を北流する葛下川流域の小集団が営んだ小古墳群である。そこでは3世紀前半段階には、奈良盆地ではあまり類例が知られていない小型で方形の低墳丘の古墳が造営され、画文帯環状乳神獣鏡が副葬されている。これは初期ヤマト王権形成期における“葛城”地域の占めた位置やその役割を考えるうえにもきわめて重要な資料となるものである。

その後4世紀中葉以降になると馬見古墳群に大型前方後円墳が相次いで造営されるようになるが、この段階になると4～5ヵ所の大古墳群造営地以外の葛城各地と同じように、上牧久渡古墳群でも古墳の造営は認められなくなる。これは葛城の地域的首長連合を構成していた有力集団以外では顕著な古墳は造営できなかったことを示すものではなかろうか。

ところが馬見古墳群での大型古墳の造営が終息する5世紀中葉から後半になると、それまで顕著な古墳が営まれていなかった葛城各地で古墳の造営が再開ないし開始される。上牧久渡古墳群でも6世紀後半以降になると4・5号墳が造営されるのである。7世紀中葉の2号墳のような山寄タイプの特異な内容を持つ相当規模の古墳が営まれるが、これは上牧久渡古墳群を営んだ集団がこの地に特別の関係を持つようになった敏達系王家と特別の関係を持つようになったことと関係することを示唆するものかもしれない。

いずれにしても上牧久渡古墳群は、短くない中断期があるとはいえ、3世紀から7世紀に至る古墳群の展開過程が知られる葛城地域でもまれな古墳群である。前述のように、その中断それ自体に大きな歴史的意味があるものと、筆者は考えている。上牧久渡古墳群こそは、葛城北部では馬見北・中央・南の各古墳群を営んだ有力集団の陰に隠れてその実態がよくわからないこの地域の在地小集団の動向を物語る貴重な存在にはかならない。馬見北・中央・南の各古墳群など葛城地域の大型古墳群の正しい評価のためにも、逸することのできない重要な古墳群といえよう。馬見古墳群と相まって、古墳時代とその前後の時代における葛城北部の在地集団の動向を物語る重要な歴史遺産であることは疑いなかろう。

第2節 文献史学からみた上牧久渡古墳群 – 2号墳を中心に –

塚口 義信

はじめに

上牧久渡古墳群は7基ほどの古墳から成ると推定されているが、これらは一系統ではなく、少なくとも二系統以上の政治集団によって築造された可能性が大きい。このことは、3世紀に築造された3号墳に重ねたかたちで4号墳（6世紀後半）を築造していること、古墳時代前期から終末期に至る約400年間に7基しか築造されていないこと、また途中に空白期間があることなどが

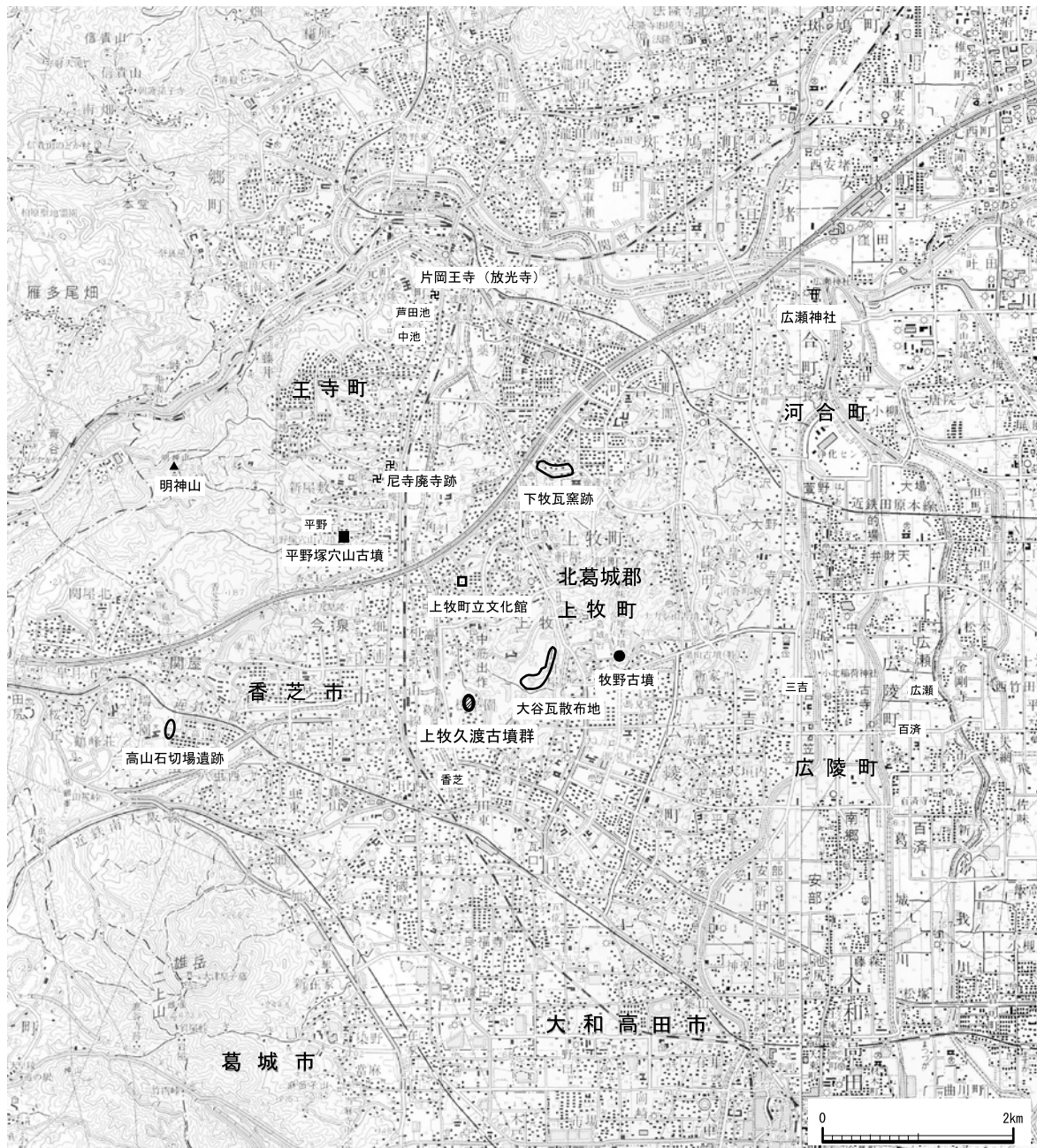


図85 敏達天皇系の王族関係図

ら容易に推測できる。以下、このことを念頭に置いて、発掘調査によって比較的その内容が明らかになっている2号墳の被葬者像について、文献史学の視点から少しく考察してみたい。

(1) 上牧久渡2号墳の留意点と考察の視点

われわれに与えられている2号墳のデータの中で、特にその被葬者像を考えるに当たって留意したいのは、以下の点である。

- ①奈良県北葛城郡上牧町久渡に所在すること。この地は律令時代には大和国葛下郡に属し、広瀬郡に近接していたと考えられる。ただし、時代によっては広瀬郡に属していた可能性もある。
- ②墳丘の北側に東西幅約30mの背面カットを有する直径約16m、高さ約3mの円墳で、埋葬施設が南に開口する両袖式の横穴式石室であること。なお、石室中軸線の東約5.4mの墳丘斜面にも小型の箱式石棺（推定）が構築されていた。
- ③須恵器の年代より7世紀中葉の築造と推定されること。
- ④石室・排水溝の石材として用いられた輝石安山岩が北西約4kmに位置する明神山（奈良県北葛城郡王寺町）付近で、また石室床面の凝灰岩片が西約3kmに位置する高山石切場遺跡（奈良県香芝市）付近でそれぞれ産出するものと推定されること。

以上のデータからこの古墳の被葬者は、7世紀前半を中心とした時期に、明神山・高山付近の諸集団と良好な関係を保ちつつ久渡付近一帯を勢力基盤として活動していた、上位の支配者層に属する首長クラスの人物であったことが推測される。では、文字資料からはどのような被葬者像が浮かび上がってくるであろうか。そこで着目されるのが、複数の敏達天皇系王族がこの古墳群の近隣の地域と深い関わりを有していたことである。その場合、考察の定点となり得る人物が4名存在する。それは①押坂彦人大兄皇子、②茅渟王、③高市皇子、④長屋王である。以下、この4名について具体的にみていきたい。

(2) 忍坂王家系の王族

①押坂彦人大兄皇子

『日本書紀』（以下『紀』と略す）によると、敏達天皇とその皇后広姫（息長真手王の娘）との間に生まれたこの皇子は、7世紀代の天皇家にとって極めて重要な人物として認識されていた。「皇祖大兄」の尊称をもつとともに、『紀』用明天皇2年（587）夏4月乙巳朔丙午（2日）条に「太子彦人皇子」と記されている。のみならず、『古事記』（以下『記』と略す）敏達天皇の段にも「忍坂日子人太子」とあり、6世紀後半における王族の中では最有力の皇位継承候補者の一人であったとみられる。

この皇子は、その名から知られるように、奈良県桜井市忍阪の地と深い関わりを有していた。このことは、子息の舒明天皇（息長足日額天皇）の陵墓が「押坂内陵」（『延喜式』）と称され、当地に営まれていることからみて明らかである。このような点から考えて、忍阪は押坂彦人大兄皇子系一族の本拠地と称してもよい地であった。そこで筆者は、敏達天皇系王族の中でも、特にこの系統の一族を“忍坂王家”と仮称している。

ところが、この皇子は忍阪のほかに、前記の『紀』の記事によると、「水派宮」を営んでいた。宮号の水派は地名であり、『紀』武烈天皇3年11月条に「詔大伴室屋大連、発信濃国男丁、作城像於水派邑。仍曰城上也」と記されているように、城上ともいわれていた。キノへの地名は各地に存在するが、この記事にみえるキノへ（水派邑）は大和国広瀬郡城戸郷、すなわちキノへの地名（木へ・木へ田など）が散見する広陵町百済付近（談山神社蔵『百済庄差図』による）であったと考えるのが妥当である。なぜなら『延喜式』によると、広瀬郡に押

坂彦人大兄皇子の奥津城が造営されているからである。すなわち同諸陵寮に「成相墓 押坂彦人大兄皇子 在二大和国広瀬郡一 兆域東西十五町。南北廿町。守戸五烟。」とみえている。そしてこの成相墓が所在地、造営年代、規模などの点から考えて広陵町馬見北8丁目に所在する牧野古墳（円墳・径約60m・6世紀末～7世紀初頭）を指していることは、現在の歴史・考古学界ではほぼ共通認識となっている。

また後述するように、忍坂王家の家産を承継した長屋王は、葛城北部（葛下郡北部と広瀬郡）に所有していた御園などを管理する家政機関として「片岡司」を設けていた。この名称が葛城北部の地名に由来していることは史学的研究のみならず遺跡や遺物によっても確認されている。長屋王はこのほかにも「木上司」と称する家政機関を置いていたが、これも広瀬郡のキノへの地名に由来している可能性の大きいことが指摘されている（後述参照）。

広瀬郡が彦人大兄皇子の勢力下に置かれていたことは、次のことからいえる。『記』用明天皇2年（587）夏4月乙巳朔丙午（2日）条によると、天皇が仏教に帰依することについての是非をめぐる協議が紛糾したとき、押坂部史毛屎が急いでやってきて、物部守屋大連に「今群臣図レ卿、復将レ断レ路」と耳打ちし、守屋に危険が迫っていることを知らせたという。毛屎は押坂彦人大兄皇子の経済的基盤となっていた押坂部（刑部）の管掌者であるから、この記事によって当時、彦人大兄皇子と守屋がかなり近い関係にあったことがわかる。そしてその3ヶ月後、いわゆる蘇我・物部戦争（丁未の変）が勃発し、戦いに敗れた物部の軍兵は早衣（黒衣）を着て、「広瀬の^{まがりの}勾原」で狩猟をして逃げ散ったという。広瀬の勾原とは広瀬郡下勾郷付近の地であるが、なぜ敗走した守屋の軍兵はここで逃げ散ったのであろうか。それは当地が守屋と近い関係にあった非蘇我系の王族、押坂彦人大兄皇子の勢力圏であったからにほかならない。

以上を要するに、6世紀末～7世紀初頭前後における忍坂王家は水派宮を拠点として、広瀬郡一帯に勢力を扶植していたことが知られるのである。

②茅渟王

茅渟王は押坂彦人大兄皇子の子息で、舒明天皇の異母兄弟に当たる。吉備姫王を妻とし、のちに皇極（再祚して斉明）天皇・孝徳天皇として登極する宝皇女と軽皇子を儲けている。また天智・天武両天皇の母は皇極天皇であるから、両天皇にとっては外祖父に当たる。このように茅渟王は7世紀代の天皇家にとって、系譜上、極めて重要な位置にあった。そしてこの茅渟王が、広瀬郡に隣接する葛下郡北部の地域と深い関係を有したことが近年の研究で明らかになりつつある。

『延喜式』によると、茅渟王の奥津城は「片岡葦田墓 茅渟皇子。在二大和国葛下郡一。兆域東西五町。南北五町。無二守戸一。」と記され、片岡の葦田に所在するという。片岡は王寺町から河合町西部、上牧町、香芝市にかけての広域地名であり、葦田はその片岡の中の、王寺町の葦田池から香芝市北東部を経て上牧町の葦田（葦田池・葦田原、現在の上牧町立文化館付近）に至る地域を指す地名と考えられる。では、その葦田の中のどの古墳が茅渟王の奥津城であろうか。実は香芝市平野に所在する平野古墳群の中に、所在地・築造時期・規模・棺・副葬品などの点において、茅渟王の奥津城としてふさわしい古墳が1基だけ存在する。それは平野塚穴山古墳である。

この古墳は墳丘の北側に背面カットを有する一辺約18m、高さ約4mほどの方墳であったと推定され、その築造年代は7世紀中葉と考えられる。内部構造は例外的に大きい横口式石槨で、床面には21枚の凝灰岩切石が敷き詰められていた。遺物としては、200点余りにのぼる夾紵片・藍胎片、金環1、中空玉1、銅製品片（銅椀らしい）などが検出されている。特にこの古墳で注目

されるのは、棺が夾紵棺であったことと、玄室部の規模が大化2年（646）3月甲申（22日）に出された詔（いわゆる大化薄葬令）の規定を大きく上回っていたことである。

これらの事実は、この古墳の被葬者が漆塗棺を用いることのできる身分であったことを示すとともに、玄室部の規模が大化薄葬令の規制を受けない特別な地位にあったことを示している。いわば大王（天皇）に準ずるような立場の人物であったことを示唆しているのである。してみると、この古墳はその所在地と築造時期から考えて、茅渟王の片岡葦田墓である可能性が極めて大きいといえる。この古墳が父の彦人大兄皇子の奥津城とみられる牧野古墳と直接距離にして3kmぐらしか離れていないことも、その傍証となる。また、この古墳の北方1km弱に所在する尼寺廃寺（香芝市尼寺）や王寺町の片岡王寺（のちの放光寺）の創建に茅渟王ないし茅渟王系の一族が檀越として深く関わっていたとする説が近年有力化しつつあることも、この推定を助けるであろう。

以上によって、上牧久渡古墳群が所在する7世紀代の葛下郡北部の地域は、茅渟王を中心とした忍坂王家の王族たちと極めて深い関係にあったことが理解されるのである。

③高市皇子

天武天皇と胸形君徳善との間に生まれた高市皇子の奥津城も、曾祖父の押坂彦人大兄皇子と同様、広瀬郡に営まれている。『延喜式』に「三立岡墓 高市皇子。在_二大和国広瀬郡_一 兆域東西六町。南北四町。無_二守戸_一。」とみえる。三立岡は広陵町三吉字見立山付近に比定されており、牧野古墳と指呼の距離にある。のみならず、『萬葉集』の高市皇子の殯宮挽歌にみえる「木上宮（城上殯宮）」も広陵町内に比定する説があり、支持者も多い（後述参照）。とすると、押坂彦人大兄皇子が広瀬郡に所有していた所領は、その子息の舒明天皇から孫の天武天皇へ、そしてさらに天武天皇の子息の高市皇子へと伝領されていったことが推測されるのである。『紀』天武天皇10年（681年）10月是月条にみえる「広瀬野」の行宮も、忍坂王家有縁の広瀬郡の地に造営されていたであろう。

④長屋王

近年、高市皇子の子息の長屋王もまた、片岡の地域と深い関わりを有していたことが明らかになっている。平城京の長屋王邸宅跡から出土した木簡に「片岡進上蓮葉卅枚 持人都夫良女・御蘭作人功事急々受給 六月二日真人」、「片岡進上菁三斛束四尺束 駄二匹」と書かれたものがある。長屋王は片岡に「御蘭」などの所領を有し、それらの管理機構として「片岡司」を設置していたのである。片岡が王寺町から河合町西部、上牧町、香芝市に至る地域の名称であることについては前述したが、実際に河合町から長屋王邸宅跡出土瓦と同型式の瓦が出土している。薬井瀧ノ北遺跡から出土した6644C（型式番号）および6644Aの軒丸瓦、6272Aおよび6272Bの軒丸瓦がそれである。のみならず、丸瓦や熨斗瓦等においても長屋王邸宅跡出土瓦と共通する技法で製作されているものの多いことが指摘されている。さらにその近隣の上牧町下牧瓦窯でも長屋王邸宅跡出土瓦と共通する6644Bの軒平瓦が出土しており、両者の深い関わりが注目される。

広瀬郡についても長屋王との関わりを推測させる史料がある。やはり長屋王邸宅跡から「木上^{きのへ}司等十一月日数進」（下略）、「木上御馬司□」（下略）などと書かれた木簡が出土しており、広瀬郡城戸郷との関係に関心が寄せられている。

ただ、この「木上^{きのへ}司」については近年、桜井市外山^{とび}に鎮座する宗像神社付近、同橋本に所在する青木廃寺付近、「木部」の小字名が存在する同上之庄もしくは東新堂付近などに求める説も注目されつつある。青木廃寺は宗像神社の南西約2.5kmの地に所在するが、その瓦の中に高市皇子

の後裔の高階氏に関わる「延喜六年造檀越高階茂生」銘の瓦や長屋王邸宅跡出土瓦と同範の瓦（軒丸瓦6644A）があること、当時の慣習に従って高市皇子は生母胸形君の邸宅で養育された可能性が強いが、その高市皇子の子息が長屋王であること、青木廃寺の北西約900mの地に長屋王の曾祖父の舒明天皇によって建立された百済大寺と推定されている吉備池廃寺が所在すること、などがそれらの説の主要な根拠となっている。木上の具体的な比定地についてはそれぞれ異なるが、いずれも広瀬郡説を否定し、桜井市に求めている点で共通している。そしてさらに、高市皇子の「城上（木上）の殯宮」や彦人大兄皇子の「水派宮」についても桜井市域に所在していた可能性が強いことを論述している。

忍壁皇子薨時に作られたと考定されている『萬葉集』の挽歌（巻13-3324・3325・3326）と高市皇子に関わる挽歌（同巻2-199・201・202）にみえる「木上の宮」を同じ木上の地と理解して立論しているのをはじめ、いくつか気がかりな点もあるが、上掲の根拠には説得力があり、桜井市説は魅力的な仮説といえる。

だが、一方において、これらの説が考察の対象とした彦人大兄皇子や高市皇子、長屋王らが広瀬郡を中心とした葛城北部の地域と深い関わりを有していたことについては、いくつもの確証がある。上述したとおり、彦人大兄皇子と高市皇子の奥津城は広瀬郡（広陵町）に築造されていた

表6 殯関係記事一覧表

天皇	欽明	敏達	推古	舒明	孝徳	斉明	天智	天武	持統	文武
天皇の主たる宮居	磯城嶋金刺宮	百濟大井宮	豐浦宮	岡本宮	難波長柄豊碕宮	飛鳥板蓋宮 飛鳥川原宮 後飛鳥岡本宮	近江宮	飛鳥浄御原宮	藤原宮	藤原宮
崩御の年・月	欽明 32・4	敏達 14・8	推古 36・3	舒明 13・10	白雉 5・10	斉明 7・7	天智 10・12	朱鳥 1・9	大宝 2・12	慶雲 4・6
崩御の場所	磯城嶋金刺宮	百濟大井宮？ 譯語田幸玉宮？	小墾田宮	百濟宮	難波長柄豊碕宮	朝倉橋広庭宮	近江宮	飛鳥浄御原宮	藤原宮	藤原宮
殯宮を起こした年・月	欽明 32・5	敏達 14・8	推古 36・8	舒明 13・10	白雉 5・10	斉明 7・11	天智 10・12	朱鳥 1・9	大宝 2・12	慶雲 4・6
殯宮を起こした場所	河内古市	広瀬	南庭	宮北	南庭	飛鳥川原	新宮	南庭	西殿	不明
埋葬の年・月	欽明 32・9	崇峻 4・4 (改葬)	推古 36・9	皇極 1・12 皇極 2・9 (改葬)	白雉 5・12	天智 6・2	不明	持統 2・11	大宝 3・12	慶雲 4・11
埋葬地	檜隈坂合陵	磯長陵	竹田皇子陵	滑谷岡 押坂陵	大坂磯長陵	小市岡上陵	山科陵	大内陵	大内陵	檜隈安古山陵

図86 古代天皇関係系図（5世紀末～8世紀初頭）

し、長屋王邸宅跡出土木簡にみえる「片岡司」も葛城北部に設けられていた。のみならず、長屋王邸宅跡出土瓦と同型の瓦が河合町や上牧町からも出土している。また高階真人氏についても「成相王」（『日本三代実録』貞観15年7月条）系のそれは「成相墓」（彦人大兄皇子の奥津城）が所在する広瀬郡と密接な関係を有していたと考えられるし、その郡内に「キノヘ」の地名が存在していたことも古代・中世史料によって証明されている。さらにいえば、「木上御馬司」も上牧町（上牧・下牧）の地名由来となった牧との関わりを示唆しており、これを葛城北部との関連で捉えることも不可能ではない。このようにみえてくると、ここでは問題の多い木上司は措くとしても、彦人大兄皇子をはじめとする忍坂王家の王族（皇族）たちが葛城北部と深い関わりを有していたことはほとんど疑う余地がないのである。

これを要するに、長屋王は葛城北部の地域に所領を有していたのであるが、それは長屋王が父の高市皇子から忍坂王家の家産を受け継いでいたことを示しているのである。

なお、上記の下牧瓦窯跡の南方2kmの地に大谷瓦散布地があり、川原寺出土瓦と同様の重弧文軒丸瓦・平瓦や須恵器が採集されている。これによって当地が『正倉院文書』から知られる川原寺瓦窯の一つである可能性が大きくなったが、川原寺が忍坂王家に属する斉明天皇の飛鳥川原宮を同天皇崩御後に寺に造り替えられたものであったと推定されていることも注意されてよい。長屋王は斉明天皇の曾孫に当たるから、同天皇の所領が天武天皇・高市皇子を経て長屋王に伝えられた可能性が強いからである。

（3）春日系の王族

敏達天皇には広姫所生の皇子女以外に、春日臣仲君の娘・老女子所生の皇子女たちがいた。難波皇子、春日皇子、桑田皇女、大派皇子である。このうち難波皇子と春日皇子が葛城北部と深い関わりを持っていたことを示す文献史料があるので、以下簡単にみておきたい。

①難波皇子

『新撰姓氏録』によると、この皇子の後裔氏族として、成相真人^{ひきそう}氏がいる。成相は広瀬郡疋相村（現在の広陵町疋相・馬見北・馬見中近辺）付近の地名であるが、前述したように、ここには押坂彦人大兄皇子の成相墓がある。そうすると、彦人大兄皇子と難波皇子はともに敏達天皇の皇子であるから、二人は広瀬郡成相の地を介して近しい関係にあった可能性が大きい。ただし、二人はともに血縁的には非蘇我系の皇子であるが、難波皇子は弟の春日皇子や春日臣とともに、587年に起こったいわゆる蘇我・物部戦争で蘇我氏側の陣営に加わっている。したがって二人はともに敏達天皇系王族として近しい関係にはあったが、母系親族の関係で蘇我氏に対する遠近関係に立場の違いがあったように思われる。

②春日皇子

敏達天皇の皇子で、難波皇子の同母弟である。この皇子で注意されるのは、その後裔氏族に葛下郡高^{たかぬか}額郷の郷名を負う高額真人がいることである。高額郷の郷域については諸説があつていまだ確定できない状況にあるが、兄の動静から察するに、葛城北部の地を介してこの皇子もまた忍坂王家と一定の関係で結ばれていたことが推測される。

（4）敏達天皇と葛城北部との関わり

これまで述べてきたように、敏達天皇系に属する王族たちの中には、葛城北部を拠点として活動しているものが少なくなかった。では、こうした状況はいかなる事情によって生み出されてきたのであろうか。これを明らかにするには敏達天皇その人に目を向ける必要がある。そして大王宮や皇子宮が天皇家（大王家）の家産としてその子孫に伝領されていくという事実に着目するな

らば、ここでどうしても敏達天皇の宮居の所在地の問題に焦点を合わせざるを得なくなる。そこで以下、この点について若干の考察を試みてみたい。

敏達天皇は572年4月に父の欽明天皇のあとを承けて即位し、同月、百済の大井に宮を造営する。『紀』敏達天皇元年是月条に「宮_二于百済大井_一」とある。さらに天皇はその3年後、譯語田に幸玉宮を造営し、崩御する14年（585年）8月まで、ほとんどこの宮で起居していたと考えられる。それゆえ敏達天皇は、譯語田淳中倉太珠敷尊・譯語田天皇（『紀』）、他田朝御宇敏達天皇（『続日本紀』延暦9年7月条）などと呼ばれるようになったのである。そして、この宮は「磐余譯語田宮」（『日本霊異記』『扶桑略記』『太子伝玉林抄』など）とも称されていたことや、のちの他田庄^{おさだ}の所在地などからみて、桜井市戒重付近に造営されていた可能性が強いとされている。

宮が譯語田に造営された翌年（576年）の3月、敏達天皇は豊御食炊屋姫尊^{とよみけかしきやひめのみこと}（のちの推古天皇）を立てて皇后としているので、この宮はおそらく炊屋姫の立后との関わりで造営されたものであったと考えられる。そうすると、百済大井宮の方は前の皇后、広姫との関係が推測される。広姫は息長真手王の娘で、敏達天皇との間に一男二女を儲け、敏達4年（575年）正月に皇后となるが、その年の11月に薨去する。したがってこの宮が公式の皇居として利用されたのは、ほんの四年足らずということになる。

しかし、この宮は当時、政界の一大派閥とでもいうべき広姫－押坂彦人大兄皇子系の王族たちにとっては、極めて重要な宮であった。すなわち当時の王族たちは血統からみると、大きく蘇我系と非蘇我系の二つの系統に分けることができるが、この宮は後者の勢威を示す象徴的な存在であったと理解することができるのである。

さて、いままで先学はこの百済大井宮の所在地について、どのように考えてこられたのであろうか。既往の主要な説を整理すると、大略、次のように分類することができる。

- （1）大阪府河内長野市太井説^{おおい} （2）大阪府南河内郡太子町畑説 （3）大阪府富田林市説
（4）奈良県北葛城郡広陵町百済説 （5）奈良県橿原市（香具山北西麓）説 （6）奈良県桜井市吉備説 （7）奈良県橿原市（十市町付近）説

しかしながら、いずれの説も決め手となる根拠に欠け、いまだ学界の定論といえるほどの説にはなっていない。吉備池廃寺を舒明天皇勅願の百済大寺と考定し、これに依拠して同所の地名が百済であったと想定するとともに百済大井宮もまた同所に所在したに違いないとする（6）にしても、その挙証が堅固で容喙を許さない手堅さがあるようにみえるが、やはり確証に欠けている。彦人大兄皇子の成相墓が広瀬郡に造営されていることを根拠に、母の広姫と深い関わりを持つ百済大井宮もまた広瀬郡に造営されていたと割決する（4）のように考えることも可能であるからである。しかもこの（4）の場合、他の説とは異なり、同郡に存在する百済の地名が中世史料（談山神社蔵『百済庄差図』）に記されているという強みも持っている。だが、一方、こうした根拠もそれだけでは百済大井宮を同所と断定する決定的な根拠とはなり得ないとする批判もある。百済大井宮の所在地については以上のような状況であるから、われわれは今一度原点に立ち戻り、別の視点から関係史料を分析し直してみる必要がある。

百済大井宮関係の史料は、ごくわずかしが残されていない。これが研究を困難にしている最大の理由だが、しかし、その所在地を考えるに当たって見逃すことのできない史料が存在する。それは『紀』敏達天皇14年（585）秋8月乙酉朔己亥（15日）条の記事である。これによると、敏達天皇の殯宮は「広瀬」に営まれたという。すなわち「天皇病弥留、崩_二于大殿_一。是時起_二殯宮於広瀬_一」とある。では、広瀬とはどこか。これを知る手がかりは、表6の「殯関係記事一

覧表」の中にある。この表から知られるように、殯宮は敏達天皇の次の推古天皇以降、宮居のすぐ近くに営まれるのが原則となっている。この原則を敏達天皇の場合に当てはめると、どのようなことになるであろうか。ただし、この場合、宮居を百済大井宮とみるか、譯語田幸玉宮とみるか、この点は全く不明であることから、これまで唱えられてきた百済大井宮と譯語田幸玉宮の比定地のすべてについて、その近くに「広瀬」というところがあるかどうかを点検してみなければならない。勿論、この場合の広瀬は特定の地域を指す固有名詞としての広瀬であって、単に「広い瀬のある所」というような普通名詞ではない。

そこで、あらためて精査してみると、それに該当する地は一ヶ所しか見出すことができなかった。それは広陵町の広瀬である。江戸時代には広瀬村といい、多武峰領となっていたが、敏達天皇の宮居の比定地に隣接して「広瀬」があると確実にいえるところはここしかないのである。そうだとすると、敏達天皇の殯宮がどちらの宮居の近くで営まれていたのか、また、その宮居はどこに所在していたのかといった問題が一挙に解決する。すなわち、殯宮が営まれていたのは広陵町広瀬であり、宮居は広瀬に南接する広陵町百済付近に造営されていた百済大井宮であった可能性が強いのである。既に指摘されている上記（４）の論拠にこの論拠を加えてみると、百済大井宮の所在地を広陵町に求める説は極めて説得力のある説となるであろう。のちに敏達天皇の長子の彦人大兄皇子がこの地に水派宮を営み、その近隣の成相の地に奥津城を造営したのも単なる偶然ではなかったのである。

むすび－久渡２号墳の被葬者像－

以上のようにみてくると、葛城北部に敏達天皇系の王族たちが盤踞することとなった直接の契機は、敏達天皇が広瀬郡に百済大井宮を造営したことにあつたと考えられる。爾来、この地はその子孫に伝領され、８世紀初頭の長屋王の時代には葛城北部の各地に敏達天皇系の王族や氏族が所領を有し、ある者は居住して奥津城や寺院まで造営していたのである。してみると、上牧久渡２号墳の被葬者についても、敏達天皇系の王族か、あるいは敏達天皇系の王族と深い関わりを有していた氏族の有力者であった可能性が大きいとみるのが自然であろう。この古墳は、７世紀中葉における敏達天皇系王族やその系列の政治集団の動静を示すものとしてすこぶる注目されるのである。

第3節 上牧久渡3号墳出土の画文帯環状乳神獣鏡について

樋口 隆康

この鏡は「画文帯環状乳神獣鏡」と言って、中国後漢時代から三国、南北朝まで続いた鏡である。径は14.2cm、重さが511gの小型であり、鏡面は平滑だが、約2mmの面反りがあり、裏面は中央の鈕の周りに数個の文様帯が巡っている。

内区は薄く、厚さが2mm程度である。鈕のすぐ外を楕円と連跨文が巡っており、その外に、主文帯が幅2cmで巡っている。右に頭を置いた細長い獣の肩と腰の部分に環状乳があり、その胴上に、1組の神像を乗せている。これが4組めぐっている。4組の神像は東王父、西王母、伯牙彈琴、黄帝などであろう。

主文帯の外に半円と方格帯が12個ずつあり、方格の内部を四等分して、4字句の銘がある。

吾作明鏡 幽涑三商 周刻無□ 配像萬昌 白牙□樂 衆神□容 天禽四首 銜持維岡
□從富貴 安樂子孫 番昌大吉 與師命長

半円にはいろいろの獣文や四花文などが一個ずつある。

外区は、平縁で、巾は1.3cm、厚さは7～8mmあり、表面が2帯に分かれており、その中央に小さな三角形の鋸歯文帯があり、外側に、波状渦文帯、内側に画文帯がある。外区の最内部には、一本の沈線を持つ環帯がある。

外区から内区に向かって斜めに下がる文様帯があり、菱形渦文帯が施されている。これはユニークなもので、他の多くの画文帯環状乳神獣鏡には、短い鋸歯文帯（三角形の列）が斜め文様帯に置かれている。本鏡と同じ菱形渦紋帯が有るのは、和泉黄金塚古墳から出土している第2の画文帯環状乳神獣鏡だけである。

画文帯環状乳神獣鏡は中国製品であるが、華北から出るのは少なく、大半は華南の安徽省、江蘇省、浙江省から出る物が多く、年代も、2世紀後半から3世紀初めの作品が多い。日本の古墳からの出土品の方が、中国出土品よりも多い。

樋口の著作『古鏡』（昭和54年印刷）によれば、画文帯環状乳神獣鏡は、出土品の中国が20面、日本が36面あり、殆どが中国製品で、文様も共通している。径が17cm～15cmのものも、日本から出土しているが、中国出土品は径14cm程度が多い。現在はもっと数が増えているであろう。

外区には二つの文帯があり、外の小文帯に渦連文があり、内側の文帯に画文帯か銘帯がある。画文帯では、丸い円形物を捧げる神仙像が二つ円圏の対抗する位置にあり、そのうちの一つでは、しゃがんだ神仙が円形物を抱え、その後ろに乗獣の神人らが続き、数人が乗った船がある。これが太陽であり、もう一つのほうは騎獣や乗鶴や乗亀などの神仙が多く、これが月と見られる。

外区から内区へ下がる小形斜面には鋸歯文帯がある。

内区の内側に主文があり、4匹の長獣は右向きが多く、左向きもあり、その獣の肩と腰に環状乳があり、その間に4個の神仙像が長獣に乗っている。主文の大半は環状乳8個の四神四獣鏡が多いが、環状乳6個の三神三獣鏡もある。

主文の外に、半円方格帯が巡っている。半円には動物文や四葉文、円文などがあり、方格には、4字か1字の銘がある。

以上が上牧久渡3号墳画文帯環状乳神獣鏡の概論である。



写真25 同型の画文帯環状乳神獸鏡
上・上牧久渡3号鏡 下・和泉黄金塚鏡（東京国立博物館蔵）

第Ⅵ章 総 括

第1節 上牧久渡古墳群出現前後の考古学的環境

(1) 古墳群の認識

上牧久渡古墳群の所在する丘陵において古墳が存在することは、これまで1号墳が「久渡古墳」の名称で周知の遺跡として知られているのみであった。古墳群の中で最も墳丘形状が明瞭である2号墳についても、これまで大和の主要な古墳を網羅している『大和国古墳墓取調書』(1893)や『奈良県史跡勝地調査会報告書第八回』(1925)においては記載がみられない。また、『上牧町史』(1977)編纂時において行われた分布調査においても、そのほかの古墳を含め、明らかにされることはなかった。

上牧久渡古墳群の所在する馬見丘陵南西部は、馬見古墳群の主な分布範囲からはやや離れるところである。また、上牧町域においては、これまで行われた本格的な古墳の調査は松里園古墳群のみであり、古墳の分布は基本的に希薄な地域という認識であった。このような状況の中で、今回行った踏査と確認調査により、上牧久渡2・3号墳という重要な古墳を含む、少なくとも7基の古墳より構成される古墳群の存在が初めて明らかになったことは大きな成果であるといえよう。

(2) 上牧久渡古墳群と久渡遺跡

上牧久渡遺跡の検出 1号墳の調査において、墳丘下に遺物包含層が存在し、溝と思われる遺構も存在した。この包含層よりサヌカイト製の石鏃・剥片や、多くの土器細片が出土した。出土土器は、土壌化した大阪層群中に含まれ、遺存状態がきわめて悪かったが、わずかに形態が判明した土器は庄内期に属する時期と思われる。また、石器類の存在も弥生時代を含む時期であることを示している。

また2～5号墳の調査や丘陵の表層からも、弥生～古墳時代初め頃の土器片やサヌカイト製石鏃・剥片が出土しており、丘陵の尾根部分においては一定の遺跡の広がり認められるようである。このように、古墳群の下層には弥生から庄内期にかけての遺跡が存在し、「上牧久渡遺跡」と呼称されるものである。

高地性の上牧久渡遺跡 この遺跡は、東の馬見丘陵を背後にして、葛下川流域と生駒・葛城方面まで望む位置にある。眼下の葛下川付近からの比高は約24mあり、弥生時代を中心とした高地性遺跡と認められよう。そして、ここでは石鏃などの製作も行っていた。

上牧久渡古墳群が築かれる以前、この丘陵上に高地性遺跡が存在することは重要な意味を持っている。弥生時代の高地性遺跡は、奈良盆地においては南西部・南部に特に多く分布している。盆地西部で確認された遺跡は多くないが、上牧久渡遺跡に最も近い高地性遺跡としては、弥生時代後期に出現する王寺町の舟戸・西岡遺跡がある。この遺跡は上牧久渡遺跡の北方約4.5kmにあり、同じ馬見丘陵の北端に位置している。ここは葛下川下流にも近い大和川南岸の丘陵上で、时期的にも水系的にも上牧久渡遺跡とかなり近い関係にあるといえよう。舟戸・西岡遺跡はその所在位置から見て、大和川を通じた大和・河内間の経路上に関わる遺跡であることは明らかである。同じように河内に至る、逢坂・関屋と穴虫峠に面する上牧久渡遺跡とはその立地条件の共通

性が考えられるのである。

3号墳と上牧久渡遺跡 3号墳の時期は副葬品より古墳時代前期初頭とされるが、棺内より甕形土器が出土している。この甕を土器そのものとして見れば、その形態は、むしろ弥生時代後期の特色を留めており、3号墳は時期的に上牧久渡遺跡と大きく離れるとは思われない。そうであるならば、上牧久渡遺跡と3号墳は高地性遺跡と初期古墳が時間的に連続し、位置的にも近接する事例となろう。

(3) 上牧久渡古墳群と上牧銅鐸

観音山銅鐸出土地の特性 久渡古墳群の所在する「久渡山」の北側の丘陵は、かつて「観音山」と呼ばれ、ここから江戸時代の文化年間頃に銅鐸が出土している。これは梅原末治氏により「上牧銅鐸」として報告された外縁紐1式4区袈裟襷文銅鐸で弥生時代中期の製作と推定される。

上牧久渡古墳群の位置する大和の葛城郡においては、上牧銅鐸のほかは、葛上郡の御所市・名柄銅鐸しか知られていない。ここでは朝鮮半島製の多紐細文鏡と共に出土しているが、葛下郡において出土銅鐸は上牧銅鐸が今のところ唯一となる。

銅鐸出土地の性格の1つとして、地域の境界、あるいは交通の要地に沿う個所という事例がみられるが、観音山銅鐸出土地もこのような地理的条件で理解することができよう。御所市・名柄銅鐸出土地は奈良盆地南部から水越峠を越え、南河内へ抜ける経路に近いことが知られており、多紐細文鏡の出土も大和西部地域の西方指向がうかがえる。このような立地の特性は上牧久渡遺跡と関連するところがある。

近接する銅鐸出土地 観音山銅鐸出土地と久渡古墳群とは南北に隣接する尾根にあり、相対する位置関係にある。特に3号墳との距離は谷を挟んで、わずかに百数十mほどと推定される。このような極めて至近の位置にあることは、たんなる偶然として扱うことはできないと思われる。

上牧銅鐸は年代的には3号墳に先行するものであるが、この丘陵上には先に触れた上牧久渡遺跡が存在する。この遺跡では弥生後期以前の土器の出土は未確認明確であるが、石器製作も行っていることにより、この遺跡は年代的に上牧銅鐸の埋納時期とかなり近いものと思われる。

したがって、上牧久渡古墳群の地域では上牧銅鐸・上牧久渡遺跡—3号墳という連続した時間的系列関係がみられることになる。このため上牧久渡遺跡を介することにより、上牧銅鐸から画文帯神獸鏡を有する3号墳への関係を否定することはできないと思われる。

銅鐸から銅鏡へ このように3号墳と上牧銅鐸との関係は、高地性遺跡を介して、銅鐸から鏡へという弥生時代から古墳時代への動きを同一地域で実証できる事例になるかと思われる。

なお、上牧銅鐸の同範銅鐸としては、島根県・加茂岩倉17号銅鐸が知られている。製作は加茂岩倉鐸が先行するとされるが、銅鐸を通じた弥生時代の出雲と大和の関係をうかがわせるものである。この加茂岩倉遺跡から約1.5km離れたところには景初三年銘をもつ三角縁神獸鏡を出土した、出雲では最古級の古墳である神原神社古墳が存在している。ここでもやや距離はあるものの、銅鐸等の埋納遺跡が前期初頭の古墳と近接した関係にあるということができるとは思われる。

このように上牧久渡古墳群とその周辺は、銅鐸出土地と高地性遺跡が共に存在する地域である。このことは古墳時代に入り、この地に画文帯神獸鏡を有する久渡3号墳が築かれるような環境にあったとも考えられ、弥生時代から古墳時代初めにかけて、この地域一帯の重要性がうかがえよう。

第2節 上牧久渡3号墳と古墳時代初頭の様相

(1) 上牧久渡3号墳の埋葬施設と副葬品

古墳の認識 この古墳は、最初に行われた古墳群の踏査において、古墳状としての隆起が認められず、その後の試掘・確認調査により、その存在が明らかになったものである。すでに墳丘築成土は失われ、埋葬施設は地山上で確認された。また、古墳時代後期には4号墳が3号墳の墳丘をほぼ覆うかたちで築造され、すでに3号墳の墳丘が明確ではなかったことが考えられる。このように、本来的にこの古墳はかなり低墳丘であったことを示している。

墳丘と埋葬施設 3号墳の築造位置は尾根の頂部ではなく、かなり先端の斜面に築かれるという、やや不安定な立地にある。1辺が約15mの方形墳と思われ、あるいは北に突出部をもつ可能性も考えられている。そこに主軸をほぼ東西にそろえた東頭位の組合式木棺が3基確認された。

第1埋葬施設は墳丘中央部にあり、木棺規模も最大で築造当初の埋葬であろう。第2埋葬施設の規模はこれに次ぐもので第1埋葬施設にほぼ接するように並行して埋置されるが、立地はさらに北傾斜面側に寄っており、良好とはいいがたい。このため、棺底の高さを第3埋葬施設と比較すると1.2mも低い。第3埋葬施設は最も小型の棺で、第1・2の棺に随伴するような形にある。

3号墳の埋葬施設が複数で、いずれも刳拔式ではなく組合式木棺であること、また最長の第1埋葬施設は5m近い長大な木棺であることは埋葬施設の特色と言えよう。

副葬品の内容 3号墳第1埋葬施設においては、槍1点、定角式鉄鏃3点が原位置で確認され、すでに出土した中国製の画文帯環状乳神獣鏡と剣または槍や柳葉式鉄鏃も同様の副葬品であったことはほぼ確かである。さらに棺内より甕形土器片が出土している。原位置出土品については棺上などに置かれた副葬品と考えられ、これはホケノ山古墳などにみられるように、3号墳の副葬形態として重要である。

鉄製武器は槍及び槍または剣があり、複数本が存在することが明らかである。また鉄鏃も4本ではあるが、定角・柳葉式の2つの型式がある。古墳の規模からみると、中国鏡を保有し鉄製武器を備えた3号墳の副葬内容は、やはり隔絶しているものといえよう。

(2) 3号墳の築造時期

3号墳の時期を知る資料としては副葬品及び棺内出土土器がある。画文帯環状乳神獣鏡については、精巧な鏡背文様をもち、鋳出も良好な中国鏡である。鉄製品も前期古墳に通有なものであり、特にこの型式の鉄鏃は弥生時代の墳丘墓においてはみることはできず、前期古墳の古相に多いとされるのは重要である。

3号墳第1埋葬施設では棺内より甕形土器の破片が出土している。これは体部外面に叩き目を有し、突出する底部を持つ。近畿地方の弥生時代後期においては主体的な甕であるが、その後も継続して使用される。しかし、庄内期になると、体部最大径が中央部から下半部に移行すると共に、庄内甕の影響により底部も変容し、突出度が弱まるのが一般的である。3号墳出土のこの甕には、このような形態変化は見られず、弥生後期の甕と変わるところはない。

ただし、大和西部地域の特に庄内期における同種甕形土器の変遷がまだ十分に明確ではないところがあり、この甕形土器が時期的にどこまで下降するものか明らかではない。また周辺で出土した土器片は、小片ばかりであるが、時期がおおよそ推定できるものは弥生後期から庄内期にかけてのものがほとんどである。

このように、副葬品と共伴する甕形土器は、弥生後期の特色をよくとどめているが、1点に過ぎず、このほかには比較できる良好な土器はない。このため3号墳の築造時期は、中国鏡・鉄製武器が示すように古墳時代前期初頭の時期と考えられる。

(3) 3号墳と墳丘墓

3号墳墳丘の規模と形態は、明確な墳丘施設と一定の規模を有する前期古墳の内容とは異なるもので、むしろ墳丘墓の示す内容に近い。しかし、これまで奈良盆地においては、弥生から古墳時代初頭の平地における周溝墓は数多く知られているにもかかわらず、丘陵上に築かれた同時期の墳丘墓はきわめて少ないという著しい傾向がある。

盆地内の数少ない墳丘墓として、上牧久渡古墳群の南東約3kmの馬見丘陵南端に、弥生時代後期後半頃に築かれた広陵町・黒石10号墓がある。この墳丘墓は新山古墳に近接し、丘陵の最高所に位置する1辺10.4mの方形墓で、陸橋を有する周溝がめぐる。埋葬施設は2基の組合式木棺である。木棺の主軸は東西方向に向き、3号墳と同じ方位であり、立地を含め、その関連性については注意されるところである。

このほか、奈良盆地東部では弥生時代後期の高地性遺跡とされる天理市・豊田遺跡で1辺10mの方形墓が確認されている。ここでは高地性遺跡に含まれる墳丘墓として、立地的に上牧久渡遺跡・3号墳と近似するところがある。

奈良県における墳丘墓の多くは盆地を離れた東方の宇陀市域に集中し、南西方面の五條市域にもみられる。この地域では3号墳と近い規模の方形墳丘墓が丘陵上に接続して築かれるのが一般的なあり方である。大型前方後円墳の出現地とされる奈良盆地内においては、今のところそれに先立つ時期の墳丘墓はきわめて少なく、そこに大きな相違がみられるというのがこれまでの実態であった。このような中で、盆地内の、しかも西部地域において初めて3号墳の存在が明らかになったことは、大きな意義をもつものといえよう。

(4) 3号墳の画文帯環状乳神獣鏡とその出土例

和泉黄金塚古墳と画文帯神獣鏡 3号墳の副葬品の内容は前期古墳に通有なものであるが、画文帯環状乳神獣鏡は、その同型鏡は大阪府・和泉黄金塚古墳東槨出土品にみられる。

和泉黄金塚古墳は大阪府和泉市に所在する全長約90mの前方後円墳で、古墳の築造時期は前期末葉頃とされ、3号墳より时期的に下降する。この古墳では3基の粘土槨より6面の鏡が出土しているが、そのうちの4面を画文帯神獣鏡が占めているという特色がある。中央槨では景初三年銘の画文帯神獣鏡が出土したことで知られるが、同型鏡を出土したのは東槨で、ここでは三角縁盤龍鏡1面・画文帯神獣鏡1面と共に出土した。東槨においては、このほか武器・武具・石製品・玉類などがみられるが、この中に五銖銭・水晶製大型切子玉のような大陸・半島系の遺物が出土していることは、近畿地方の前期古墳の中ではかなり稀な事例であり、注目される。

画文帯環状乳神獣鏡の出土例 画文帯環状乳神獣鏡を出土する古墳は、出土状況が不明なものを含め約40基あるが、このうち古墳時代中・後期出土品を除く、前期古墳の出土例においては今のところ20基余りの古墳が知られている。

奈良県内においては、これまで衛門戸丸塚・新山・大和天神山・桜井茶臼山古墳の4基の古墳より出土している。このほか北和城南古墳とされる出土品中にあり、衛門戸丸塚古墳と共に佐紀古墳群中の古墳出土品の可能性もあるが明らかではない。この中で前期前半期にかかる古墳は大和天神山・桜井茶臼山古墳で、前期中葉では新山古墳がある。これらの古墳はいずれも大型前方後円墳あるいは前方後方墳で、しかも大型古墳群を構成する古墳がほとんどである。画文帯神獣

鏡全体を見ても出土古墳は黒塚古墳・小泉大塚古墳のほか、古市古墳のような中型規模の古墳がみられるが、いずれも定型的な前期古墳である。奈良県においては、むしろ画文帯同向式神獸鏡を出土したホケノ山古墳との比較が可能であるが、墳丘規模・施設について、そこに大きな差異が存在することは3号墳の特異性を示しているといえよう。

また、このほか他地域で前期を中心とした主な事例をみると、奈良県以東では、山梨県・大丸山古墳と丸山塚古墳で出土しているのみである。その間にはかなりの距離はあるものの、これらの古墳は東日本では最大級の前期古墳を有する東山古墳群中にあり、埋葬施設の構造や副葬品でも近畿の前期古墳とも深いつながりがみられるという重要性をもつ。

近畿における出土例は、大阪府で娛三堂・藤田山・玉手山6号・和泉黄金塚古墳、兵庫県では西求女塚・ヘボソ塚古墳、綾部山39号墓、京都府・山城地域では鳥居前・西車塚・芝山・内里古墳がある。近畿中部における分布が最も多く、奈良盆地、大阪湾・淀川流域を中心に広がりが認められる。

京都府・丹後地域では大田南2号・三ツ塚2号墳があり、大田南2号墳は青龍三年銘の方格規矩鏡を出土した大田南5号墳と同じ古墳群にあることは注目される。香川県では雨滝山奥14号墳で2面が出土している。この古墳にほど近い丸井古墳でも1面が出土し、地域的なまとまりをみせている。丸井古墳は香川県でも鶴尾神社4号墳と共に最古級とされている古墳である。広島県では宇那木山2号墳があり、九州では福岡・外之隈遺跡Ⅰ区1号墓のみである。

このように画文帯環状乳神獸鏡の分布域をみると、近畿中部において特に集中していることが明瞭である。しかも、その出土は通有の前期古墳ばかりで、それは各地においてもその多くを占めているのは同様である。西日本における出土は散在的で、特に北部九州においては墳丘墓で1例見られるのみで、定型的な前期古墳からの出土は知られていないことは注意されよう。

墳丘墓からの出土には、大田南2号墳、綾部山39号墓、外之隈Ⅰ区1号墓があり、徳島県・萩原1号墓でも画文帯同向式神獸鏡が出土している。

このような墳丘墓の規模や構造をみると、大田南2号墳・外之隈Ⅰ区1号墓は、その全長は20mを超えている。また綾部山39号墓は多角形に近い楕円形の墳丘墓で長径15mの規模であるが、木棺を収めた竪穴式石槨を有し、墳丘裾には列石を配している。3号墳はこのような墳丘墓などと比較しても、最も小規模な類型に含まれるといえよう。

(5) 3号墳の特性

近畿中部における初期古墳 近畿中部においては、古墳時代前期初頭前後の鏡を出土する小型古墳や墳丘墓がいくつか知られている。京都府芝ヶ原古墳は前方後方形とされ、副葬品として四獣鏡のほか銅釧・玉類・鉈などがある。大阪府・安満宮山古墳は復元長21mの長方形墳で、出土鏡が5面と多いが三角縁神獸鏡を含み、3号墳より時期的に下降しよう。副葬の鉄製品は工具が多く、武器は大刀1振のみである。京都府・園部黒田古墳は墳長52mの前方後円形の木槨墳で3号墳とは墳丘規模・埋葬施設に大きな差がある。ここでは双頭龍文鏡のほか、玉

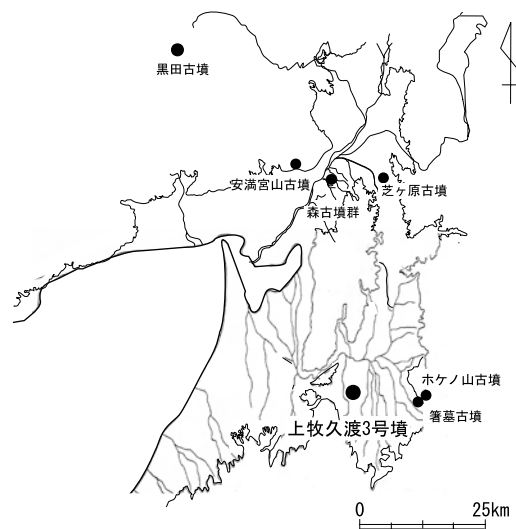


図87 近畿中部の初期古墳

類・鉄鏃などが出土している。これらと比較しても、画文帯神獸鏡・鉄製武器を有するという3号墳の副葬品組成は、卓越したものであることは明らかである。

近畿各地のこのような初期古墳が多様な内容をもつことは、各地域における古墳出現期の様相を示すと同時に、それぞれの出現契機と古墳の内容に大型前方後円墳出現地域との地域的な関係をうかがうことも可能であろうと思われる。このため、3号墳はこれまで奈良盆地内の東南部以外の地域において、系列的につながりうるような内容をもった古墳がようやく明らかになったということに、その重要性が見いだされよう。

葛城地域の動向 3号墳の特性を考える上で、その所在する地域も重要であると思われる。古墳群の位置する葛下川流域に面した馬見丘陵西南部においては、これまで古墳時代後期以前の明確な古墳は知られていなかった。また、ここは葛城地域の北端にもあたるところである。葛城地域においては、中期初頭の室宮山古墳の出現までは大型古墳は存在せず、前期古墳自体の分布もかなり希薄な地域である。そこに前期初頭という、かけ離れた時期にさかのぼる3号墳が出現し、続いて1号墳が築造されることは、葛城地域全体の古墳の動向について再考をうながすものといえ、葛城北部を含めた奈良盆地西部において3号墳が確認できた意義は大きいといえよう。

(6) 上牧久渡古墳群における前期初頭の状況

5号墳出土鏡の帰属 5号墳の調査において、周溝とそれ以前の出土で鏡片が2点出土している。鏡片は同一鏡の可能性が高いと思われるが、斜縁で外区文様では鋸歯文と複線波文が認められるのみであるが、前期古墳出土鏡の特徴に近似し、古墳時代後期の5号墳にともなう可能性は少ない。この鏡片の出自については、1号墳あるいは古墳状隆起とされた第1地点など、5号墳の周辺にこの鏡を保有する古墳がかつて存在したことも考えられよう。また5号墳の調査では墳丘より古墳時代前期と思われる土器片が出土しており、この鏡片との関係も否定できないと思われる。

1号墳の位置づけ 1号墳については墳頂中央部が近代に大規模な掘削を受け、遺構が遺存しておらず、また、部分的な確認調査であったため、その築造時期については明確にはできなかった。墳丘については、これまで前方部が先端を開発で失われ、また頂部がおそらく2号墳周溝造営時において削平を受けて平坦化された可能性が高い。前方部はこのような改変を受けてはいるものの、前方後円墳としての可能性は高い。

1号墳の築造時期について類推すると、まず、立地は丘陵の頂部という古墳群の中でも最も良好な位置を占めていることがあげられる。そして後円部とされる円丘は、その形状が正円ではなく、明確に不整形な楕円形をなし、部分的には隅丸の長方形を呈している。

1号墳墳丘においては、後円部墳頂と前方部以外に改変は受けた形跡はほとんど見られない。このため、こうした正円を成さない円丘部は少なくとも古墳時代前期以降、定型化する古墳の墳丘としてはかなり変則的であると思われる。なお、このような楕円形あるいは変形した後円部形態は、馬見古墳群においては佐味田宝塚古墳の後円部、また京都府・黒田古墳や讃岐地域の前方後円墳を始め、庄内期から古墳時代前期の墳丘墓・古墳に例をみるものである。

墳頂攪乱土内や墳丘では須恵器片が出土しているが、1号墳が古墳時代後期の古墳とはまず考えがたく、古墳時代中期に関わる遺物もここでは全く出土していない。また、攪乱土中の古い土器は弥生・庄内系や布留甕破片1点であった。そして墳丘土の調査においては出土遺物の存在について、精査を行ったが、サヌカイト片・弥生・庄内系の土器細片が出土し、庄内期と思われる壺が出土し、ここでは確実に古墳時代前期初頭以降と思われる土器は確認できなかった。

以上のような状況の中では、1号墳の築造時期は、むしろ古墳時代前期を中心とした古墳群の中でも早い時期であることは確実であろうと思われる。

このように上牧久渡古墳群においては、古墳時代前期初頭の古墳は3号墳ばかりではなく、複数存在した可能性も考慮すべきものと思われる。

第3節 上牧久渡4・5号墳と古墳時代後期の様相

(1) 4・5号墳の築造

4号墳の築造 上牧久渡古墳群では6世紀後半に至り4号墳が築かれる。この古墳は長径約18mの円墳で1基の木棺を直葬するが、3号墳の墳丘にかかる形で築造されている。先行する古墳上に墳丘を築くことはあまり例がないことといえよう。古墳時代後期には3号墳の存在はかなり希薄になっていたようである。4号墳築造時には、適地には古墳がすでに存在していたか、3号墳があるにもかかわらず、あえて尾根の先端に占地することを優先したのかは不明である。しかし4号墳埋葬施設の位置は3号墳の木棺と重なることなく周溝内に築かれており、しかも相互の木棺はほぼ平行で、時期を隔てるが切り合う関係にはない。4号墳築造時にはある程度、古墳としての認識はなされていたようである。

4号墳は木棺直葬墳で墓壇底では礫敷が検出されている。棺上に須恵器が置かれ、棺内に落ち込んでいる。棺外より滑石製白玉が散在して出土し、埋葬時に撒かれたようである。このような滑石白玉が使用される古墳としては、斑鳩町・藤ノ木古墳と共に最も新しい事例となろう。

4号墳出土須恵器と平野窯 4号墳出土須恵器杯類の中で注意されるのは、杯類の中に大阪・陶邑産とやや異なる形態・胎土を持つものが含まれていることである。このような須恵器はおそらく地方窯の生産品であることが想定されるが、これらの須恵器は古墳群の北西約2kmにある香芝市・平野窯の製品である可能性が高い。

奈良県内では古墳時代の須恵器窯はきわめて少なく、わずかにこの平野窯と五條市・今井窯が知られている。最も古い須恵器窯は6世紀初めの今井窯であるが吉野川流域にあり、奈良盆地においてはこの平野窯が須恵器窯としては、今のところ最古となる。7世紀に入ると平野窯は三郷町・辻ノ垣内窯と並び瓦陶併焼の生産としてさらに継続する。

今井窯の須恵器の中に五條市・犬飼大師塚古墳出土須恵器と酷似するものがあり、おそらくこの古墳に供給されていたことと思われる。このように今井窯においては古墳の築造が須恵器窯の出現契機の1つとなったようである。平野窯の出現も4号墳を始め、この時期の葛下川流域の古墳の出現と関連を有していたことも考えられよう。

5号墳の築造 5号墳は2基の木棺を埋葬施設とする径約18mの円墳である。刀子や須恵器の副葬があり、4号墳と共に墓壇底に礫敷をともなっているのは特色と言えよう。この時期の古墳は横穴式石室墳が多いが、4号墳と共に木棺直葬墳であり、石材が産出しない馬見丘陵に位置するという条件によるものと思われる。5号墳の築造時期は6世紀の末葉頃で、4号墳とは継続している。この頃には古墳群東方において大型円墳の牧野古墳が出現し、築造時期が近接していることは注意されよう。5号墳は、飛鳥時代に入って出現する2号墳などとは、時期・立地的にはほぼ継続する関係にある。

（２）古墳時代後期の上牧久渡古墳群の性格

上牧久渡古墳群と松里園古墳群 古墳群南の丘陵上には古墳時代後期の松里園古墳群が存在する。この古墳群は６世紀の群集墳であるが、上牧久渡古墳群と最も近接しており、その関係は注意されるところである。これまで４基の古墳が知られているが、組合式家形石棺をもつ古墳が伝聞も含め、少なくとも３基は存在したようである。ここでは横穴式石室墳は確認できず、おそらく石棺直葬墳の可能性が高い。また埴輪の出土もみている。出土土器からみると松里園古墳群の築造時期は６世紀前半から中頃にかけてと思われる。

松里園古墳群の内容を上牧久渡古墳群に対応させると、まず、時期的には６世紀後半から末葉の４・５号墳より先行しているため、重複することはない。また埋葬施設は組合式家形石棺が多く、埴輪も出土するなど、上牧久渡古墳群とは異なるところがある。

４・５号墳の性格 このように、４・５号墳は松里園古墳群とは築造時期に差があり、同時性はない。後期の様相は、まず、後期前半に松里園古墳群が出現し、ここではこの時期に集中して古墳が築かれているようである。この時、いくつかの古墳では組合式家形石棺がその埋葬施設とされ、袋形須恵器のような特徴ある土器も知られている。そして後期後半になると松里園古墳群では今のところ古墳は知られていない。変わって、上牧久渡古墳群では木棺を埋葬施設とする４・５号墳が現れるという交代的な現象が見られる。いずれにしろ古墳時代後期の上牧久渡古墳群は、４号墳が平野窯より須恵器の供給を受けていたように、松里園古墳群と共になりに在地的な性格を有しているように思われる。おそらく本報告書白石論文で述べられているように馬見丘陵における古墳造影復活の動向に対応するものであろう。

第４節 上牧久渡古墳群と馬見古墳群

（１）馬見古墳群の動向

上牧久渡古墳群は馬見丘陵の南西端に位置する。馬見丘陵には近畿有数の大型古墳群である馬見古墳群の所在するところとしてよく知られている。上牧久渡古墳群を考えるにあたり、同じ馬見丘陵で近接した位置にある馬見古墳群の動きとの比較は必要となろう。

馬見古墳群は馬見丘陵の南辺から東辺に広がり、丘陵内部にも一群の古墳が分布している。古墳群の形成は、前期中葉において前方後方墳の新山古墳の出現をもって始まるとされる。前期後半には新山古墳周辺では大型古墳の築山古墳のほか、モエサシ３号墳・土山古墳など継続して古墳が築かれる。その一方で丘陵内部の佐味田宝塚古墳、また中央群では別所下古墳、ナガレ山北３号墳が現れる。中期に入ると、その前半には巢山古墳・新木山古墳を中心に中央群での古墳造営が集中し、馬見古墳群造営のピークとなる。中期後半には中央群では古墳の造営は急減し、北群の大塚山古墳群が中心となり、後期前半の城山古墳をもって大型古墳の造営は終わりを告げる。後期後半には南群において小規模古墳が造営されるが、大型古墳の築造は時期的に離れる６世紀末頃の牧野古墳に至るまで見られない。

（２）馬見古墳群との時期的対比

３号墳の出現する古墳時代初頭には、馬見古墳群では古墳は知られていない。古墳時代前期においても新山古墳は３号墳より後出するため、時期的に並行することはない。また、上牧久渡古墳群では古墳時代前期後半から後期前半までの古墳が見られないが、この時期は中期前半を中心

表7 上牧久渡古墳群と馬見古墳群の対比

時期 古墳群	前 期		中 期		後 期		飛鳥時代	
	前 半	後 半	前 半	後 半	前 半	後 半		
上牧久渡古墳群	3号墳					4号墳		5号墳
馬 見 古 墳 群	新山古墳		巢山古墳	大塚山古墳	城山古墳	牧野古墳		
			築山古墳	新木山古墳				

に馬見古墳群の分布域が最も拡大し、古墳の築造が盛行する時期である。このように、上牧久渡古墳群は基本的に馬見古墳群とは明確に時期的並行関係にはないことがわかる。このことは、基本的に上牧久渡古墳群は馬見古墳群の直接的な影響は受けた形跡は見られないものといえる。

しかし、上牧久渡古墳群周辺の古墳の分布状況をみると、古墳群の対岸にあたる葛下川左岸の地域には古墳時代後期以前の古墳は今のところ知られていない。このため、3号墳は、この流域の古墳とは結びつかず、むしろ、後続して古墳が出現する馬見丘陵南部の古墳との継起的な関係を考えるべきものかも知れない。

第5節 上牧久渡2号墳と飛鳥時代の様相

(1) 2号墳の築造時期と墳丘・埋葬施設

古墳の築造時期 2号墳では石室内より須恵器片がかなり出土している。この中で時期決定に有効な杯類は、破片が多く原位置を保つものは少ないが、一定量の出土があり、同一型式の範囲に入る。これらは古墳時代以来の杯Hの小型品がほとんどで、その最終段階の型式も含まれている。また、内面に返りをもつ杯Gの蓋もあるが、その数は杯Hと比較するとかなり少ない。また高杯も小型化して脚部には透かしはみられず、この中には低脚高杯も含まれる。このような出土須恵器の特徴より、2号墳の築造時期は7世紀の中頃と思われる。

また、出土の平瓦は、薄く焼成も堅緻なものが多く、凸面はすべて擦り消されており、飛鳥時代でも前半期の特色を持っている。このような平瓦の時期もほぼ、出土須恵器の時期とも異なるところはないといえよう。

墳丘とその築成 2号墳の墳丘断割り調査では、墳丘本体の下部においては予想に反し、旧地形の地山は確認されず、墳丘の多くは盛土によって築かれていたことが明らかになった。地形的に尾根の西南斜面において、大規模な背面カットを造成する中で、その掘削土を用いて墳丘の築成を行ったものと思われる。このように、2号墳の墳丘は尾根を利用せず、その多くを盛土で築いており、背面の周溝の整地事業も含めると、通常以上の労働力を要したものと思われる。このような墳丘の立地は2号墳の特性の1つといえよう。

横穴式石室とその特徴 埋葬施設は自然石で構築された横穴式石室であった。石材の産出しな馬見丘陵は、基本的に大型の横穴式石室が築かれるような条件をもたない地域である。2号墳は、馬見丘陵において牧野古墳以降に築かれた、きわめてまれな大型の横穴式石室墳といえよう。また7世紀中頃という築造時期を考えれば、石室に切石的な加工が見られても当然であるが、堅緻な石質のためか、そのような加工の痕跡は認められない。

玄室右側壁の基底石は3石で、この時期の大型石室の個数に合致している。しかし、奥壁は2

石で、断面形が三角形あるいは板状の石材を立てて使用している。また左側壁の基底石はやや小型で、おそらく右側壁とは対称形にはならず、飛鳥地域の大型横穴式石室の壁面構成とはやや異なるようである。

この石室に使用された石材は、北西約4kmの王寺町・明神山付近の輝石安山岩の岩相に酷似していると同定がなされている。この石材は6世紀後半の河合町・池部三ツ池1号墳、7世紀初頭の王寺町・畠田古墳に使用されている。畠田古墳は王寺町北部で7世紀に入って出現する有力な古墳であるが、2号墳の石室よりやや小規模で、使用石材も大型ではない。馬見丘陵南部周辺ではこの石材を使用した古墳は知られていない。2号墳はこの輝石安山岩を用いた、最も大型の横穴式石室といえよう。

一方、上牧久渡古墳群近辺の主な横穴式石室墳をみると、香芝市・平野古墳群の2号墳では王寺町南部の山中で産出する黒雲母花崗岩の大型石材を使用している。また広陵町・牧野古墳も黒雲母花崗閃緑岩などが主体で古墳群南西の二上山を中心とする地域の石材であるという。

2号墳の石室構築に際しては、石材産出地の地理的位置関係や運搬・加工を考えれば、これらの石材を使用するのが本来的には適当と思われる。それに対し、あえてこの輝石安山岩を使用した理由については、石材加工を要しない伝統的な横穴式石室の構築を目指したものかは明確ではないが、そこには選択の意思が働いているようにも思われる。

なお、この輝石安山岩は湿りを帯びると赤褐色を呈し、これは花崗岩を主体とする灰色系の石材を使用する大和の一般的な横穴式石室とはかなり異なる。あるいは後述する床面の凝灰岩層との色彩関係を意識し、この石材を採用した可能性も考えたい。また、2号墳の石室内に収められた棺についての手がかりは得られなかった。

凝灰岩敷の床面 2号墳の横穴式石室を特に特徴付けるものは、石室床面に全面に敷かれた凝灰岩碎石の存在であろう。これまでこの部分的な使用例平野2号墳などでみられたが、2号墳のように玄室・羨道全面に敷き詰められていたのは、これまで例を見ない。この碎石は西方約3kmの香芝市・高山石切場遺跡付近の岩相に類似するとの同定がなされた。凝灰岩片の中には、加工痕が残る石片が含まれており、これらは飛鳥時代の石切場より搬入されたものとみられる。

このようなやや特異な床面の敷設には、兵庫県・旭塚古墳で竜山石の碎石を遠方より搬入し、床に敷き詰めた例があり、特異な石室内床面敷として類似性がある。旭塚古墳は2号墳とほぼ同時期の築造で、兵庫県下では最大級の横穴式石室墳である。

2号墳の凝灰岩碎石敷はおそらく床面の装飾化を目的としたものと思われる。床敷内部には凝灰岩の塊石が見られたが、床の表面はおそらく粉末化した凝灰岩で覆われ、おそらく外見的には漆喰を張ったような状況であったと思われる。このような石室内床面を平滑化する整備の方法は、切石の横口式石槨墳である平野塚穴山古墳のような、石槨床面の凝灰岩切石敷にもつながる

表8 上牧久渡2号墳と周辺古墳の石室規模

単位m () は推定・残存長

古墳名	石室全長	玄室長	玄室幅	羨道長	羨道幅
牧野古墳	17.1	6.7	3.3	10.4	1.8
畠田古墳	5.9	3.2	2.0	2.7	1.2
平野1号墳	(9.2)	3.5	2.5	(5.7)	1.8
平野2号墳	(10.6)	3.8	2.5	(6.8)	2.0
上牧久渡2号墳	(9.0)	4.0	1.9	(5.0)	(1.2)

ものであろう。そして、この灰白色の床面は、石室の赤褐色に近い色調と対比できるような色彩の効果を生んだのではないかと推定され、これにより石室内の荘厳化が計られたのではないかとと思われる。

墳丘内の石棺 2号墳墳丘内において明らかになった箱式石棺はおそらく埋葬施設としての石棺であることは確かであると思われる。この蓋石の角には面取りが加えられ、石棺を意識した加工とみられる。石棺は主軸を石室と揃え、また平瓦の破片で蓋隙間を埋めており、2号墳墳丘築造の過程で埋置されたものである。石棺の被葬者は2号墳被葬者の近親にあたる若年の人物であろうか。飛鳥時代の主要古墳ではこのような埋葬例は今のところ知られていない。

横穴式石室内における複数埋葬形態は追葬あるいは合葬が主体的である。2号墳石棺被葬者の埋葬も、本来ならば石室内において追葬・合葬が行われるのが通例であろう。それがなされず、あえて墳丘内に別置し、墳丘内の石棺埋葬となったことは、かなり例外的な事例と思われる。石室内被葬者と石棺被葬者との間の特別な関係など、何らかの事情が考えられる。

平野古墳群との比較 上牧久渡古墳群の北西約2.2kmには奈良盆地西部では飛鳥時代有数の古墳群である、香芝市・平野古墳群が位置している。ここでは約6基の7世紀の前半から後半にかけての古墳が知られている。このうち7世紀前半には平野1号墳、中葉には平野2号墳、後半には平野塚穴山古墳が所在する。

こうした平野古墳群は7世紀を通じて継起的な築造を行っている。平野2号墳は横穴式石室墳でありながら、埴や土製の棺台を有するなど、飛鳥時代特有の特色をもっている。また平野塚穴山古墳は切石凝灰岩の横口式石槨内に漆棺を収めた著名な古墳である。平野古墳群に隣接して尼寺廃寺があり、平野窯でも尼寺廃寺に対する瓦生産が始まる。ここでは古墳群が継続性をもち、寺院・生産遺跡とかなり密接な関係にあるように、飛鳥時代を通じて地域的にかなり完結的な遺跡のありかたを示している。

一方、上牧久渡古墳群では6号墳を含めて、7世紀中葉以外の古墳は今のところ知られておらず、短期的な築造で継続性は見られないという相違点がある。

(2) 副葬品と遺物

副葬品の内容 横穴式石室は石室内の大規模な採石や攪乱により、失われていたが、わずかに残る遺物には琥珀製棗玉、大刀や銀装の刀装具があり、また長頸鏃も出土している。大刀はやや小型であるが、外装は銀貼りであり装飾性は高い。また、琥珀製玉類は明日香村・高松塚古墳などこの時期の主要古墳にみられる。このように、わずかな副葬品からも、内容的には飛鳥時代の主要古墳の副葬品とかなり近いものといえよう。鉄鏃については、その出土は飛鳥時代の主要古墳ではほとんど見られず、特徴的である。

平瓦の出土 上牧久渡古墳群の調査で出土した飛鳥時代の平瓦は、2号墳石室内・墳丘で27点が出土している。ほかには6号墳周溝出土の2点がある。これらの平瓦片はいずれも破片で、しかも個体差が多いのが特徴である。また原位置が不明なため、その使用方法是明らかではない。平瓦の搬入先は複数にまたがる可能性があるが明らかではない。

奈良県の飛鳥時代の古墳では、石室内や棺台に平瓦が使用される例は今のところ佐味田石塚1号墳と真弓テラノマエ古墳のみである。このほかは2号墳のように用途不明の破片が出土する例が多い。この中でも2号墳の出土量は最も多い。そして、その出土範囲は2号墳や、三ツ塚10・11号墳など奈良盆地の西部に多いという特色が認められる。飛鳥地域を始め盆地東南部の古墳では見られない傾向で地域的な特徴と思われる。

飛鳥時代の古墳において、瓦磚類が出土する例は近畿でも特に中河内で知られ、富田林市・お亀石古墳で新堂廃寺の平瓦が使用され、磚の使用例も多い。2号墳のような平瓦片の出土はこのような河内に近接する盆地西部の古墳という地域性を示しているのではないと思われる。

(3) 上牧久渡2号墳出現の背景

2号墳と牧野古墳 以上のように2号墳は飛鳥時代におけるかなり有力な古墳であることが明らかになったが、この古墳を考える上で最も重要な古墳は東方約1.3kmの広陵町・牧野古墳であろう。この古墳は径約50mに及ぶ大型円墳で大型横穴式石室を有し、6世紀末～7世紀初頭頃と推定されている。2号墳より半世紀ほど先行して築かれた古墳である。馬見丘陵においてはこれまで飛鳥時代には佐味田石塚1号墳など小規模な古墳しか知られていなかったため、牧野古墳は単独立地の大型円墳とされてきた。しかし、今回、2号墳の存在が明らかになったことにより、馬見丘陵における牧野古墳の存在も決して孤立したものではないことが知られるに至った。

牧野古墳は古墳の所在位置・内容とその築造時期から『延喜式』に記載されている押坂彦人大兄皇子の「成相墓」とされることが多い。そして、この2つの古墳の時期と近接する位置関係を見るならば、2号墳は牧野古墳と系列的関係を有していた可能性も考えられるのである。

葛下・広瀬郡の陵墓 『延喜式』によれば、上牧久渡古墳群が含まれる古代の大和国広瀬郡・葛下郡には押坂彦人大兄皇子「成相墓」や茅渟皇子の「片岡葦田墓」、高市皇子「三立岡墓」などの陵墓が記載されている。茅渟皇子墓・高市皇子墓の所在地は明らかではないが、「片岡葦田墓」はほぼ7世紀中頃と思われ、2号墳とも時期的にかなり近い。また「三立岡墓」は高市皇子の薨年より、7世紀の末葉であることが知られる。牧野古墳の位置からみると、馬見丘陵の一帯は、ほぼ飛鳥時代を通じて陵墓が築かれうるような地域であったことがうかがわれる。

陵墓域としての馬見丘陵 このように、2号墳が牧野古墳の系列につながるものとすれば、未確認の陵墓はあるが、牧野古墳－2号墳・「片岡葦田墓」そして7世紀末葉の「三立岡墓」と飛鳥時代のほぼ全時期を通じてこの馬見丘陵を中心とした地域に陵墓が営まれていたことが知られるのである。この中で特に、押坂彦人大兄皇子や高市皇子は皇位継承者かそれに近い位の皇子であり、飛鳥時代においては馬見丘陵一帯は高位の皇族の墓域であったことを示すものであろう。

2号墳の被葬者像 以上のような、馬見丘陵南西端に位置する上牧久渡古墳群をめぐる古代の歴史的環境は重要である。2号墳においては、その墳丘・石室形態や出土遺物より、被葬者は飛鳥時代のかかなりの有力者であることはうかがえる。副葬品の中にわずかではあるが鉄鏃が含まれていることは、被葬者が男性であることをうかがわせるものであろう。また墳丘内の石棺の存在は、埋葬が確実ならば、おそらく若年の近親者の可能性も考えられよう。

本報告書の塚口論文においても、本墳の被葬者をこの地域の敏達天皇系王族、あるいはそれと深い関係を持つ氏族を想定されており、近接する牧野古墳の存在を考えれば、2号墳の内容はそれにふさわしいものがあるといえよう。

2号墳と大谷瓦散布地 2号墳の東方約500mには大谷瓦散布地がある。ここで、近年飛鳥川原寺の重弧文軒平瓦などが採集された。遺跡の性格はまだ不明だが、おそらく川原寺瓦窯の可能性が高い。この瓦は川原寺の分類では五條市・荒坂瓦窯産の1群に対し、今までその想定はされながらも、生産地が不明であった2群に相当しよう。その時期は1群の瓦より若干時期的に下るとしても、瓦と共に採集された須恵器はほぼ7世紀の後半で2号墳よりやや新しいが、時期的に近い。そして、この散布地が文献で知られるような川原寺領内の瓦窯であるならば、2号墳はこのような川原寺の所領とかなり近接しているということになる。

飛鳥・奈良時代において、馬見丘陵とその周辺には文献や出土木簡に知られるように、王家にかかわる領地が広がっていた。敏達天皇以降、これらの地は高市皇子から長屋王に続く伝領されたものとされる。ここに川原寺の所領が存在したことは、このような関係によるものであろう。

大谷瓦散布地は、飛鳥時代の馬見丘陵が陵墓域であると共に、ここに飛鳥の政權に直結した寺領とその生産施設が存在することを一層明確にしたものといえ、この系譜は奈良時代の上牧町・下牧瓦窯や河合町・薬井瀧ノ北遺跡に続く継続性を持っていることが知られるのである。

(4) 上牧久渡6号墳の築造時期

1号墳の調査において、6号墳の周溝が検出され、その中層より飛鳥時代の平瓦・土師器が出土した。これまで飛鳥時代の平瓦・土器の出土は2号墳のみであった。2・6号墳間には約20mの距離があり、遺物の混入は考えがたいとすれば、6号墳は2号墳とほぼ同時期の飛鳥時代の古墳ということになる。6号墳は墳丘径約16mの円墳であり、2号墳とほぼ同規模である。未調査のため、埋葬施設については明らかではないが、墳頂の攪乱墳が南西に向けて開いており、この方向に開口する石室の可能性は高いと考えられる。

このように上牧久渡古墳群においては、飛鳥時代の古墳として2号墳が単独的に立地するのではなく、6号墳と共に同時期に築かれていることが判明した。2・6号墳は大規模な背後の周溝の有無や、古墳立地の高低、石室開口方向が異なるなどの大きな違いは見られるが、近接した位置にはほぼ同規模の円墳が築造されていることは、飛鳥時代の古墳にみられる双墓や隣接墳にもつながる共通性であろう。

また、2・6号墳の立地には異なるところが多い。2号墳は南面して大規模な背面カットの周溝を有するが、尾根の隆起から外れた斜面において、盛土主体の墳丘築成を行っている。これに対し、6号墳は尾根を利用して墳丘を築き、周溝も墳丘背面のみである。また、石室は南には開口せず尾根筋の南西に向けているという大きな違いが見られる。このことは墳丘が同規模であるにもかかわらず、2・6号墳には性格の違いがあったのか、また築造の時間的前後関係を表すものともいえよう。

このように2号墳と共に、6号墳もほぼ同時期の古墳として明らかになったことは、久渡古墳群における飛鳥時代の古墳が占める重要性がさらに高まることとなったといえよう。

第6節 上牧久渡古墳群の特性

3号墳と初期古墳の経路 3号墳が築造された古墳時代初頭、盆地東南部においては纏向遺跡の成立を基盤としてホケノ山古墳や箸墓古墳・西殿塚古墳などが築かれる。こうした、大型前方後円墳の出現の前提として、特に北部九州・瀬戸内方面など西日本地域との関連性が想定されているが、上牧久渡古墳群は馬見丘陵の南西部の逢坂・穴虫峠から寺山・二上山系を抜ける西方への門戸ともいえる位置に面しているという地理的な特徴がある。

大和・河内にまたがるこの丘陵を抜けて中河内に達すると、そこは前期有数の古墳群として知られる玉手山9号墳を最古とする玉手山古墳群が位置するところである。上牧久渡古墳群と玉手山古墳群までは8kmほどの距離にあるが、さらに古墳群の南東約3kmの馬見丘陵南部には黒石10号墓・新山古墳が所在する。新山古墳は馬見古墳群で最古の大型古墳で、時期的には3号墳に後続する。ここには馬見丘陵南端を通過し、盆地東南部と河内方面を結ぶ道路が存在したことは新

山古墳はじめ馬見古墳群の前期古墳がこの付近に集中することでも理解できよう。

そして盆地南部において注目される初源期の古墳は、新山古墳の東方約6kmに所在する葛本弁天塚古墳である。この古墳は特殊埴輪・特殊壺を出土した墳丘長約70mの前方後円墳である。この古墳は平地に位置するが、盆地南部における東西経路の中間的位置にある。そして、さらに東方約3.6kmには箸墓古墳があり、ホケノ山古墳も近い。3号墳はこの経路を通じこのような最古級の大型古墳へとつながることが考えられる。

このように、上牧久渡古墳群の位置は奈良盆地南部における初期古墳が位置する地点を結ぶ経路上に含まれていることがわかる。このことは3号墳が大和における大型前方後円墳出現前後の動向に深く関わるものであったことを示している。

飛鳥時代の上牧久渡古墳群 飛鳥時代には横大路の設置により竹内峠を通過する経路が重視されてことは磯長谷古墳群の出現からもうかがえるが、交通の利便性においては飛鳥時代においても変化はなく、このことは威奈大村墓などの奈良時代火葬墓の存在からも理解されよう。

この上牧久渡古墳群の地域一帯に直結する中河内は、特に古墳時代後半期以降、西文氏らの渡来系氏族が広範囲にわたって集住するところでもある。ここでは編戸がいち早く行われ、律令国家のモデル地域ともされた、畿内でも最も先進的な地域である。そして、さらにここからは難波宮に至るという経路にある。このような条件が飛鳥時代には敏達系王族の所領ともなり、そのことが上牧久渡2号墳・牧野古墳が立地し、大谷瓦散布地という古代の王権に直接つながる古墳や遺跡が存在する背景であったといえよう。

2号墳が築かれた7世紀の中頃は、大化の改新・孝徳朝難波宮造営の時期にあたり、飛鳥より中河内・難波へつながる主要経路に近い位置にあることもこうした動きとは無縁であったとは思われない。

以上のように、上牧久渡古墳群は近年、新たに見いだされた古墳時代初頭から飛鳥時代にかけて築造された、きわめて特徴的な奈良県でも例を見ない古墳群であるといえよう。

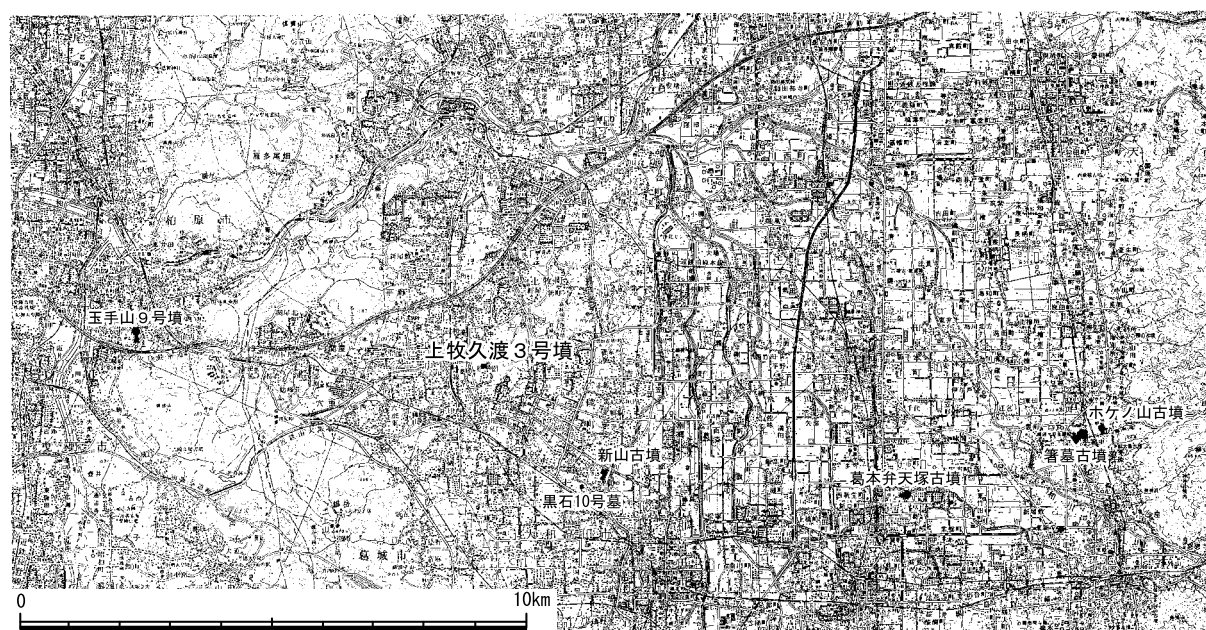


図88 上牧久渡3号墳と初期古墳の経路

参考文献

- 青木勘時2002「葛城地域における古式土師器の動向」『ふたがみ』10 香芝市二上山博物館
- 秋山日出雄1975「日本古代の道路と一步の制」『橿原考古学研究所論集』創立三十五周年記念
- 芦屋市教育委員会2009『旭塚古墳』芦屋市文化財調査報告第77集
- 網干善教1961「上代瓦窯に関する考察」『龍谷史壇』第49号 龍谷大学史学会
- 網干善教1962「北葛城郡上牧村下牧 瓦窯跡」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第15輯
奈良県教育委員会
- 池田末則・横田健一監修1981『奈良県の地名』平凡社
- 岩本次郎2001『長屋王家・二条大路木簡を読む』吉川弘文館
- 上田 誠1997『古代日本の文芸空間』雄山閣
- 上田 睦1997「河内妙見寺と敏達大王家」『太子町立竹内街道歴史資料館館報』第3号
- 梅原末治1921『佐味田及新山古墳研究』
- 梅原末治1927『銅鐸の研究』
- 王寺町2000『新訂王寺町史』本文編
- 王寺町教育委員会・(編) 奈良県立橿原考古学研究所1998『畠田古墳』王寺町文化財調査報告書
第1集
- 王寺町・奈良県立橿原考古学研究所2000「王寺町達磨寺古墳群発掘調査報告」『奈良県遺跡調査
概報』1999年度
- 大井重二郎1944『上代の帝都』立命館出版部
- 大脇 潔1993「忘れられた寺－青木廃寺と高市皇子」『翔古論聚』久保哲三先生追悼論文集
- 大脇 潔1999「尼寺廃寺考」『瓦衣千年』森郁夫先生還暦記念論文集刊行会
- 香芝市教育委員会1986『旭ヶ丘』Ⅰ
- 香芝市教育委員会2003『尼寺廃寺』Ⅰ
- 香芝市教育委員会2005『平野2号墳』香芝市文化財調査報告書第6集
- 香芝市教育委員会2011『下田東遺跡』香芝市文化財調査報告書第12集
- 香芝市二上山博物館1996『高山火葬墓・高山石切場遺跡』
- 香芝市二上山博物館1997「伝今泉出土銀装大刀復元品製作報告書」『ふたかみ』7
- 香芝町役場1976『香芝町史』
- 喜田貞吉1979『帝都』「喜田貞吉著作集第5巻」平凡社
- 河合町役場1981『河合町史』
- 河合町教育委員会1986『佐味田宝塚古墳』河合町文化財調査報告第1集
- 河合町教育委員会1988『史跡乙女山古墳付高山2号墳』河合町文化財調査報告第2集
- 河合町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所1990『長林寺』
- 河合町教育委員会1990『河合町遺跡詳細分布調査報告』河合町文化財調査報告第4集
- 河合町教育委員会2005『薬井瀧ノ北遺跡 舟戸・西岡遺跡』
- 河合町教育委員会2008「池部三ツ池古墳群」『2005・2006・2007年度埋蔵文化財発掘調査報告
書』
- 上牧町役場1889『葛下郡上牧村実測全図』
- 上牧町役場1977『上牧町史』

上牧町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所（編）2005『下牧瓦窯発掘調査報告』上牧町文化財調査報告第1集
 木下正史2005『飛鳥幻の寺、大官大寺の謎』角川書店
 広陵町役場1965『広陵町史』
 広陵町1975『寺戸遺跡発掘調査概要』
 広陵町教育委員会1987『史跡牧野古墳』広陵町文化財調査報告第1冊
 広陵町教育委員会2005『巢山古墳調査概報』学生社
 御所市教育委員会2001『鴨都波1号墳調査概報』学生社
 西光慎治編2012「真弓テラノマエ古墳の研究」『明日香村文化財調査研究紀要』第11号 明日香村教育委員会
 さぬき市教育委員会2013『津田古墳群調査報告書』さぬき市埋蔵文化財調査報告第11集
 三郷町教育委員会2014『勢野東遺跡の接合資料』
 三郷町役場1976『三郷町史』三郷町史編纂委員会
 城陽市教育委員会1987『芝ヶ原古墳』
 白石太一郎1978「広陵町寺戸廃寺とその屋瓦」『青陵』第37号
 白石太一郎2011『古墳と古墳時代の文化』塙書房
 白石太一郎2000「葛城地域における大型古墳の動向」『古墳と古墳群の研究』塙書房
 末永雅雄ほか1954『和泉黄金塚古墳』日本考古学報告第五冊
 清喜裕二2000「磐園陵墓参考地墳塋護岸工事区域の調査」書陵部紀要第52号
 関川尚功・石橋忠治「久渡2号墳」『大和を掘る32』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
 藺田香融1981「皇祖大兄御名入部について」『日本古代財政史の研究』塙書房
 園部町教育委員会1991『船阪・黒田工業団地予定地内遺跡群発掘調査概報』園部町文化財調査報告書 第8集
 高槻市教育委員会2000『安満宮山古墳』高槻市文化財調査報告書 第21冊
 高取町2012『与楽カンジョ古墳・与楽鐘子塚古墳発掘調査報告書』高取町文化財調査報告第39冊
 伊達宗泰1959「北葛城郡河合村大塚山古墳群」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』12
 田布勢町教育委員会1988『国森古墳』
 塚口義信1990「茅渟王伝考」『堺女子短期大学紀要』第25号 愛泉学会
 塚口義信1991「平野塚穴山古墳の被葬者について」『日本文化史論叢』有坂隆道先生古稀記念会
 塚口義信1992「奈良県香芝市藤山遺跡をめぐる二・三の臆説」『阡陵』関西大学博物館学過程創設三十周年記念特集
 塚口義信1995『ヤマト王権の謎をとく』学生社
 塚口義信1995「仇敵 物部氏と蘇我氏」『文化財記録集』4 八尾市文化財調査研究会
 塚口義信1995「大化の改新政府と横口式石槨墳」『古代学研究』第132号 古代学研究会
 塚口義信1997「香芝－古代史の謎を探る③尼寺廃寺北遺跡の謎を探る－」『香芝遊学』第6号 香芝市役所
 塚口義信1998「香芝－古代史の謎を探る④平野塚穴山古墳の謎（上）」『香芝遊学』第7号 香芝市役所
 塚口義信1999「香芝－古代史の謎を探る⑤平野塚穴山古墳の謎（下）」『香芝遊学』第7号 香

芝市役所

帝塚山大学考古学研究所1998『シンポジウム 吉備池廃寺をめぐって』

塚口義信2015「終末期古墳とその被葬者」『藤原鎌足と阿武山古墳』吉川弘文館

徳田誠志1998「磐園陵墓参考地堆積土除去区域の事前調査」『書陵部紀要』第49号

館野和己1992「長屋王家木簡の舞台」『日本史における国家と社会』思文閣出版

田中新史1977「市原市神門4号墳の出現とその系譜」『古代』第63号

長尾町教育委員会1991『川上・丸井古墳発掘調査報告書』

中田 昭1979「宇那木山2号墳」『広島県の主要古墳』芸備第9集

並河 永1987『大和志』臨川書店（復刻）

奈良市役所1968『奈良市史 考古編』

奈良県教育会1987『大和志料』臨川書店（復刻）

奈良県1925『奈良縣史蹟勝地調査會報告書』第8回

奈良県立橿原考古学研究所1974『馬見丘陵における古墳の調査』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第29冊

奈良県立橿原考古学研究所1975『佐味田坊塚古墳』奈良県文化財調査報告書第23集

奈良県立橿原考古学研究所1976『佐味田ナガレ山古墳』奈良県文化財調査報告書第26集

奈良県立橿原考古学研究所1976『葛城石光山古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第31冊

奈良県立橿原考古学研究所1977『竜田御坊山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第32冊

奈良県立橿原考古学研究所1982a『見田・大沢古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第44冊

奈良県立橿原考古学研究所1982b「広陵町新山古墳群」『奈良県遺跡調査概報』1980年度

奈良県立橿原考古学研究所1983a「上牧町松里園古墳発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』1981年度

奈良県立橿原考古学研究所1983b「北葛城郡香芝町平野窯跡群」『奈良県遺跡調査概報』1982年度

奈良県立橿原考古学研究所1985「穴闇」『奈良県遺跡調査概報』1984年度

奈良県立橿原考古学研究所1986「穴闇遺跡」『奈良県遺跡調査概報』1985年度

奈良県立橿原考古学研究所1989「佐味田・別所下古墳発掘調査報告」『奈良県遺跡調査概報』1986年度

奈良県立橿原考古学研究所1992「池上古墳発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』1991年度

奈良県立橿原考古学研究所1996『中山大塚古墳』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第82冊

奈良県立橿原考古学研究所1998a「岩才池北古墳」『奈良県遺跡調査概報』1997 1998

奈良県立橿原考古学研究所1998b「舟戸・西岡遺跡第1次調査概要」『奈良県遺跡調査概報』1997

奈良県立橿原考古学研究所1999『黒塚古墳調査概報』学生社

奈良県立橿原考古学研究所2001『大和前方後円墳集成』

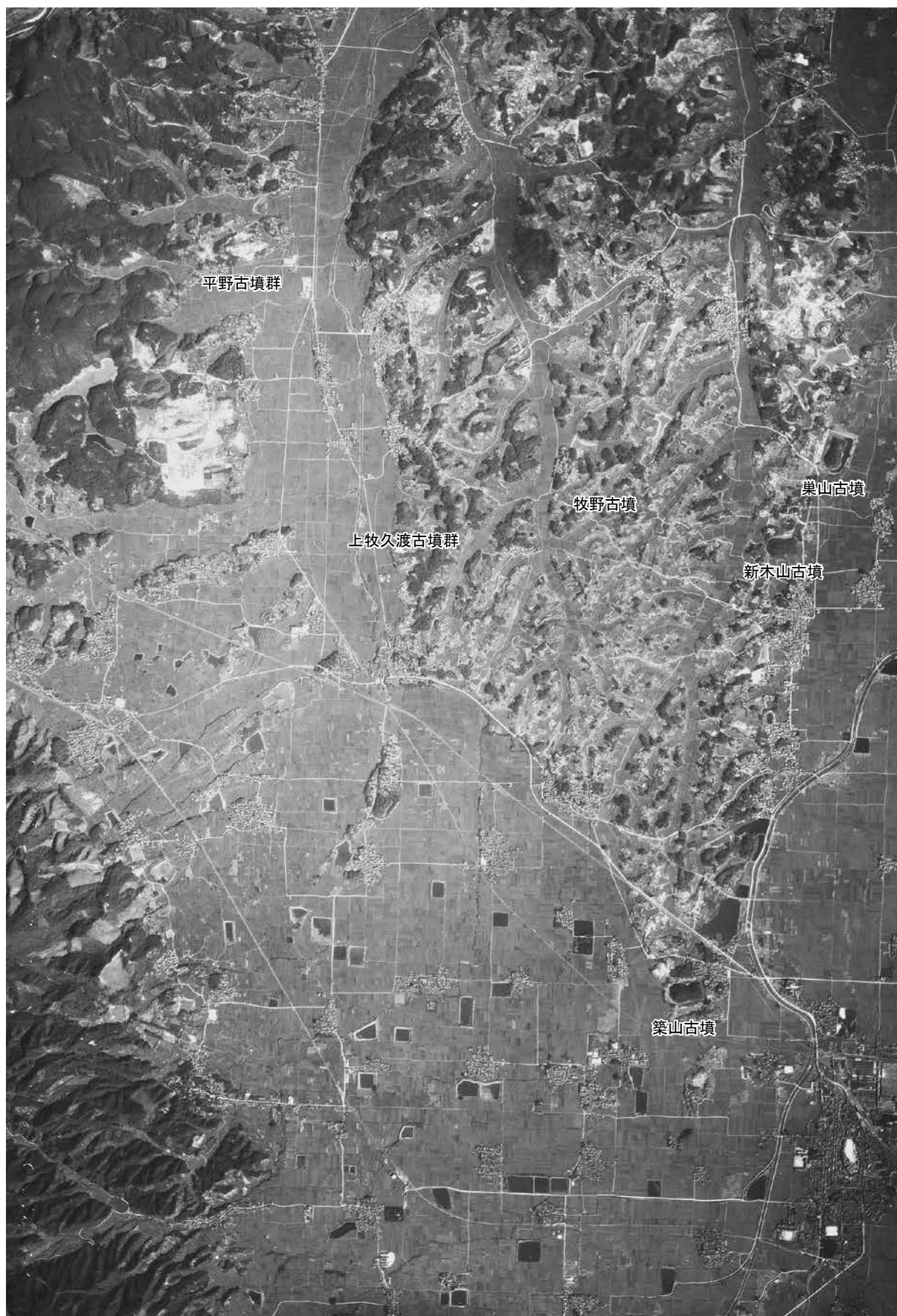
奈良県立橿原考古学研究所2002a『三塚古墳群』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第81冊

奈良県立橿原考古学研究所2002b『馬見古墳群の基礎資料』

奈良県立橿原考古学研究所2003『三吉2号墳・ダダオシ古墳』奈良県文化財調査報告書第97集

奈良県立橿原考古学研究所2006a『馬見二ノ谷遺跡』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第95冊

奈良県立橿原考古学研究所2006b『箸尾遺跡』Ⅰ 奈良県立橿原考古学研究所調査報告第97冊
 奈良県立橿原考古学研究所2006c「北今市古墳群」『奈良県遺跡調査概報』2005年度第二分冊
 奈良県立橿原考古学研究所編2008『ホケノ山古墳の研究』
 奈良県立橿原考古学研究所2010「遺物散布地（北葛城郡上牧町上牧地内）」『奈良県遺跡調査概報』2009年度
 奈良県立橿原考古学研究所2011『巢山古墳・寺戸遺跡』奈良県文化財調査報告書第142集
 奈良県立橿原考古学研究所2012a『馬見古墳群 一本松2号墳』奈良県文化財調査報告書第156集
 奈良県立橿原考古学研究所2012b「久渡古墳群踏査報告」『奈良県遺跡調査概報』2011年第1分冊
 奈良県立橿原考古学研究所2013『片岡王寺跡・達磨寺旧境内』奈良県文化財調査報告書第159集
 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館2000『特別陳列 王家の人々－広瀬・葛下地域の古代寺院－』
 奈良国立文化財研究所1991『平城京 長屋王邸宅と木簡』吉川弘文館
 奈良国立文化財研究所1995『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』奈良県教育委員会
 二上山博物館2002『二上山麓の終末期古墳と古代国家』香芝市教育委員会
 奈良文化財研究所2003『吉備池廃寺発掘調査報告』奈良文化財研究所
 野淵龍潜1893『大和國古墳墓取調書』
 福岡県教育委員会1995『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－35－』
 福原栄太郎1991「長屋王家形成についての基礎的考察」『続日本紀研究』第277号
 堀内義隆1957「奈良盆地馬見丘陵の溜池灌漑に関する研究」『地理学評論』第30巻10号
 平林章仁1987「敏達天皇系王統の広瀬郡進出について」『日本書紀研究』第14 塙書房
 平林章仁1999「城上殯宮城上郡所在説考」『日本歴史』第618号 吉川弘文館
 平林章仁2009「天皇の大寺考」『日本古代の宗教と伝承』勉誠出版
 前園実知雄1973「北葛城郡上牧町下牧瓦窯跡の調査」『遺跡調査室だより』NO.3 奈良県教育委員会遺跡調査室
 前田俊雄・絹畠歩・松吉祐希2013「北葛城郡上牧町久渡古墳群周辺における踏査の採集遺物について」『青陵』第139号
 御津町教育委員会2005『綾部山39号墓』
 森下章司2002「古墳時代倭鏡」『考古資料大観5 弥生・古墳時代 鏡』小学館
 弥栄町教育委員会1991『大田南古墳群』京都府弥栄町文化財調査報告第7集
 保井芳太郎1932『大和上代寺院志』
 保井芳太郎1937『大和王寺文化史論』
 大和高田市教育委員会1991『コンピラ山古墳』
 大和高田市教育委員会2001『奈良県大和高田市遺跡調査報告ダイジェスト 池田遺跡』
 大和高田市教育委員会2003『かん山古墳1次調査』
 吉村公男2003「馬見丘陵の古墳」『大和の古墳』Ⅰ 近畿日本鉄道株式会社
 和田 萃1984「百済宮再考」『季刊 明日香風』第12号 飛鳥保存財団
 和田 萃1995『日本古代の儀礼と祭祀・信仰』上 塙書房
 渡里恒信2008『日本古代の伝承と歴史』思文閣出版



古墳群周辺空中写真（上空より・1948）



1号墳全景（北東より）



1号墳全景（南より）



1号墳全景（北より）



1号墳全景（上空より・右上が北）



第1トレンチ立坑南・通路検出状況（北東より）



第1トレンチ立坑南検出状況（南より）



第1トレンチ立坑北検出状況（北より）



第1トレンチ墳丘下土器出土状況（西より）



第3トレンチ全景（東より）



第3トレンチ遺物出土状況（北東より）



1号墳第4トレンチ全景（南西より）



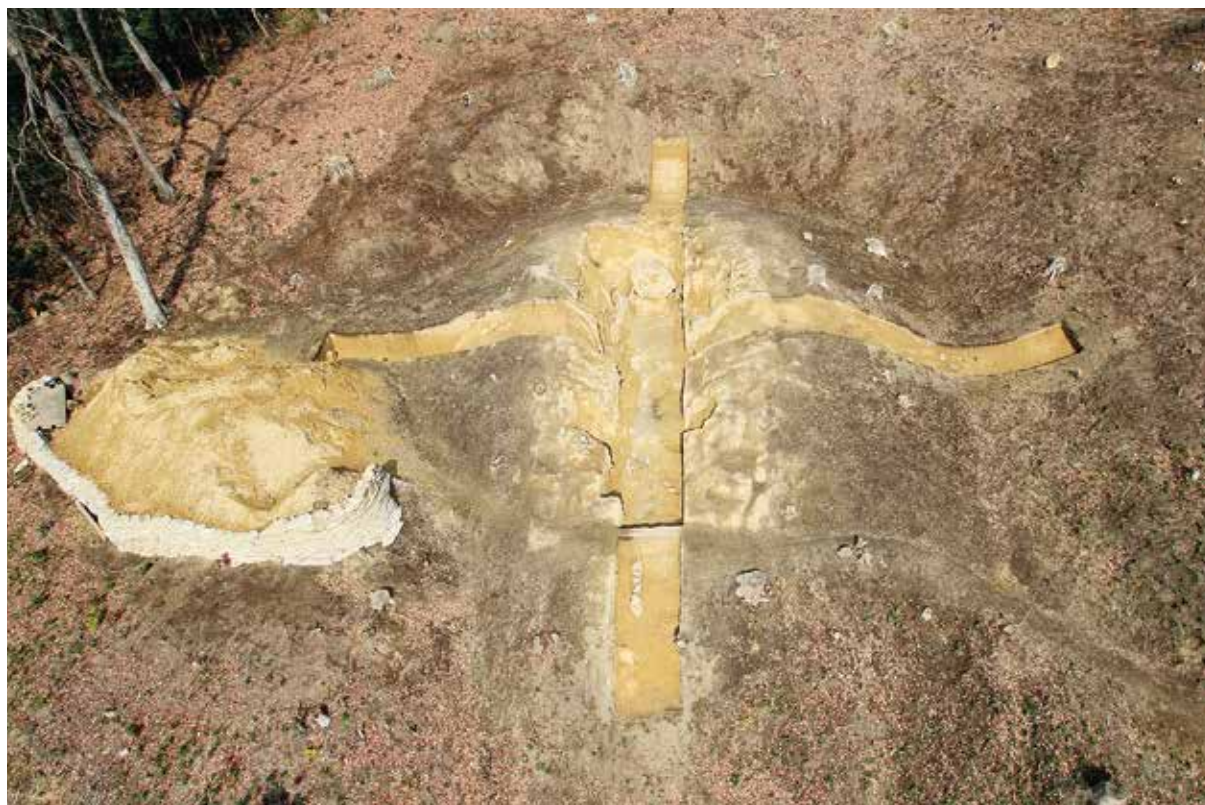
1号墳第4トレンチ6号墳周溝遺物出土状況（南西より）



2号墳全景（南東より）



2号墳全景（上空より）



2号墳埋葬施設全景（南より）



2号墳埋葬施設全景（上空より）



2号墳調査前全景（北東より）



2号墳調査前全景（北西より）



2号墳背面周溝（西より）



2号墳背面周溝（南東より）



2号墳石室全景（南より）



2号墳石室全景（北より）



2号墳玄室全景（南より）



2号墳羨道床面（東より）



2号墳玄室北西角（南より）



2号墳玄室北東角（南より）



天井石出土状況
(南西より)



右奥壁基底石の状況
(南西より)



右側壁基底石の基礎
(東より)



2号墳羨道床面南端遺物出土状況（南より）



2号墳羨道床面下（南東より）



2号墳排水溝全景（南より）



2号墳墳丘内石棺（南東より）



3・4号墳全景（上空より・北が上）



3・4号墳全景（北東より）



3・4号墳全景（北より）



3・4号墳全景（北より）



3・4号墳全景（西より）



3・4号墳全景（東より）



3・4号墳埋葬施設全景（上空より・北は右）



3・4号墳埋葬施設全景（南より）



3・4号墳埋葬施設全景（南東より）



3号墳第1・第3埋葬施設全景（北より）



3号墳第1・第3埋葬施設全景（北西より）



3号墳第1・第3埋葬施設全景（西より）



3号墳第1埋葬施設棺内遺物出土状況（西より）



3号墳埋葬施設内鉄製品出土状況（北より）



3号墳鉄槍出土状況（東より）



3号墳鉄鏃7～9出土状況（東より）



4号墳全埋葬施設全景（北東より）



4号墳埋葬施設全景（北西より）



4号墳棺内遺物出土状況（北東より）



4号墳白玉1（左）・2（右）出土状況（左が北）



5号墳全景（西より）



5号墳全景（東より）



5号墳第1埋葬施設全景（北東より）



5号墳第1埋葬施設全景（北より）



5号墳第2埋葬施設全景（南より）



5号墳第2埋葬施設内遺物出土状況（南西より）



5号墳第4トレンチ周溝（北東より）



5号墳第4トレンチ周溝内鏡片出土状況（東より）



3号墳出土画文帯環状乳神兽鏡(1) (約1/1)



3号墳出土画文帯環状乳神獸鏡（2）（約1/1）



伯牙 (图版32 上)



黄帝 (图版32 下)



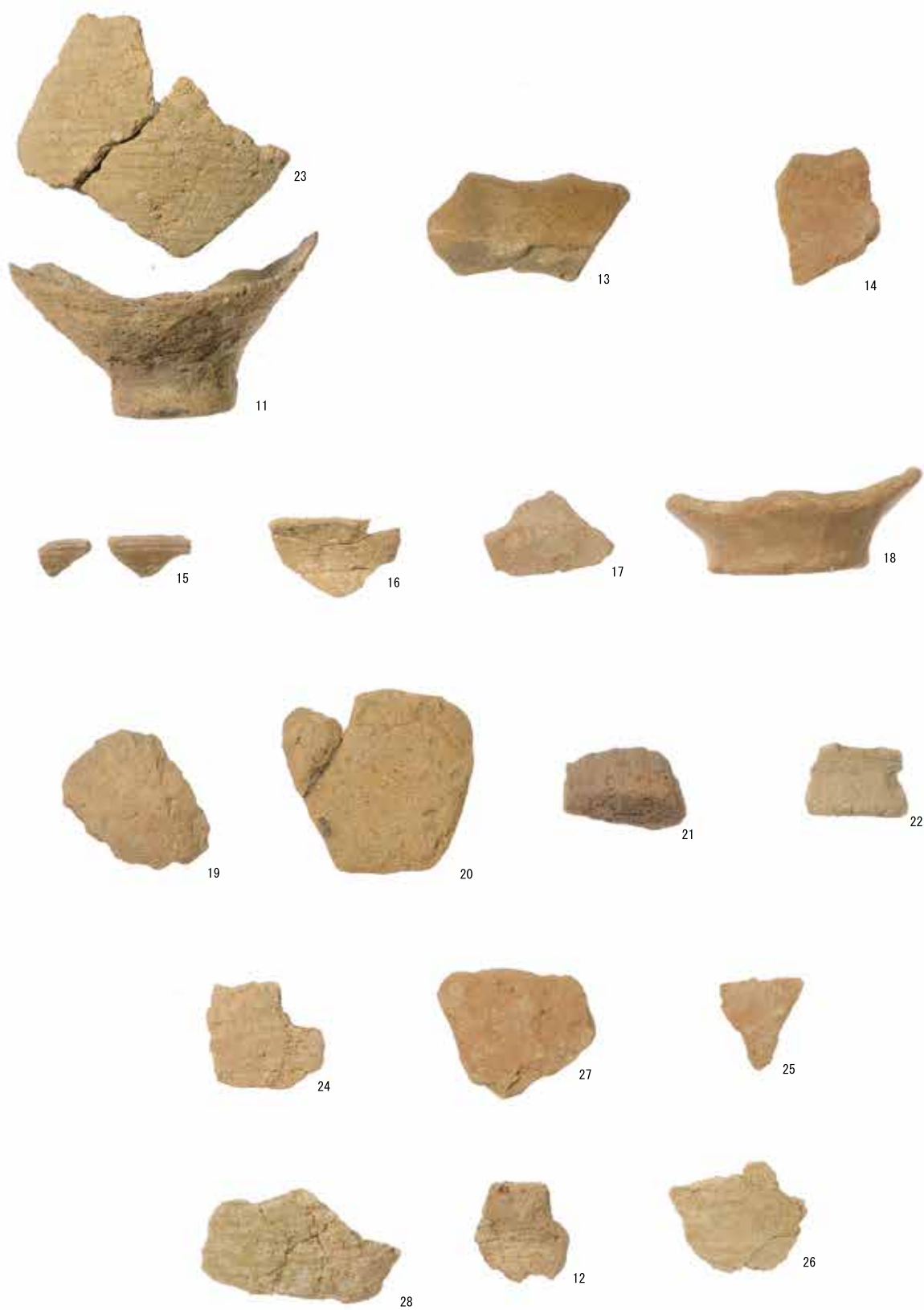
西王母（图版32 左）



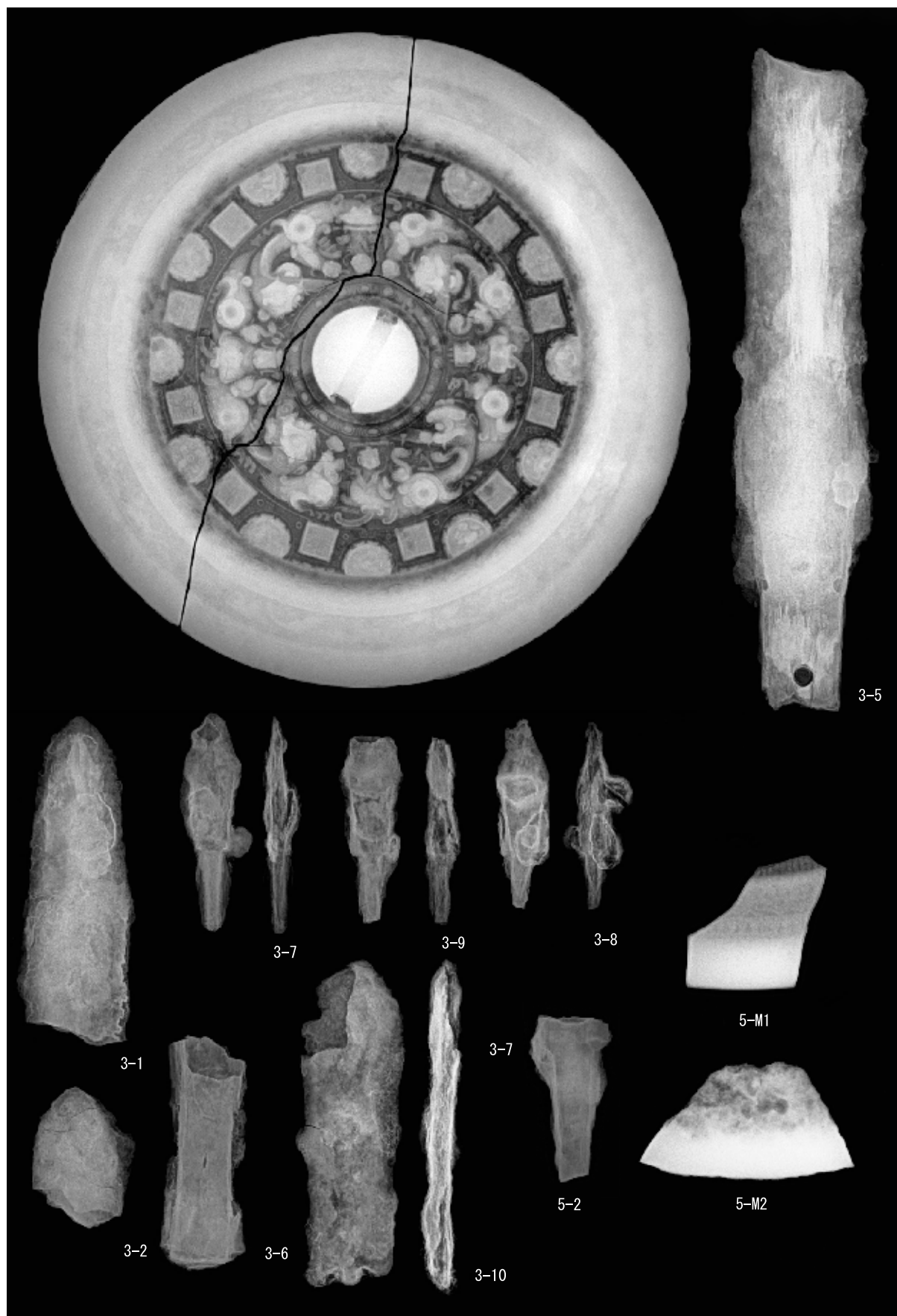
東王父（图版32 右）



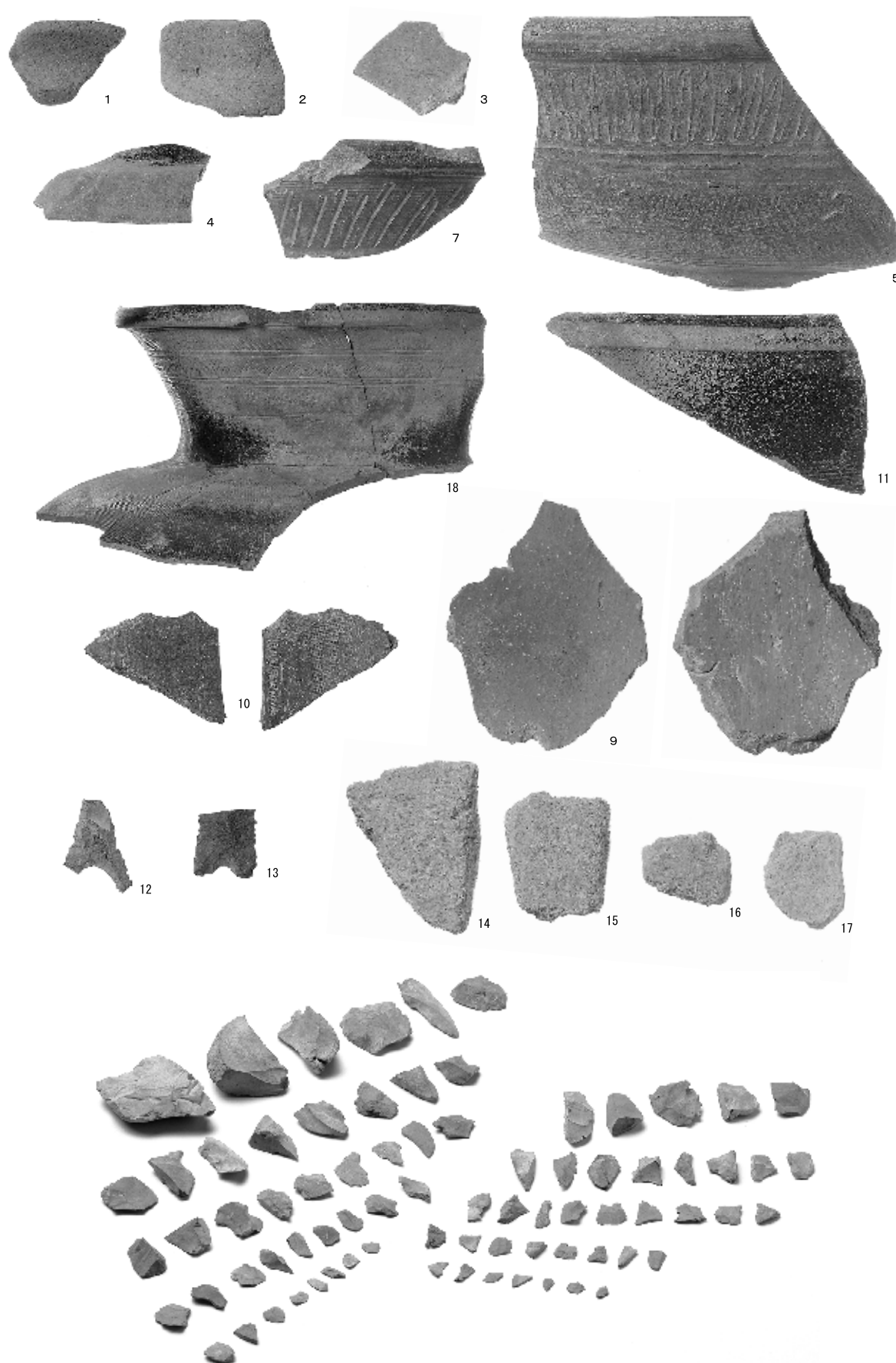
3号墳出土鉄製品（約1/2）



3号墳内・周辺出土土器（約1/2）



3・5号墳出土金属器X線写真（縮尺不同・右下3点は5号墳 その他は3号墳）



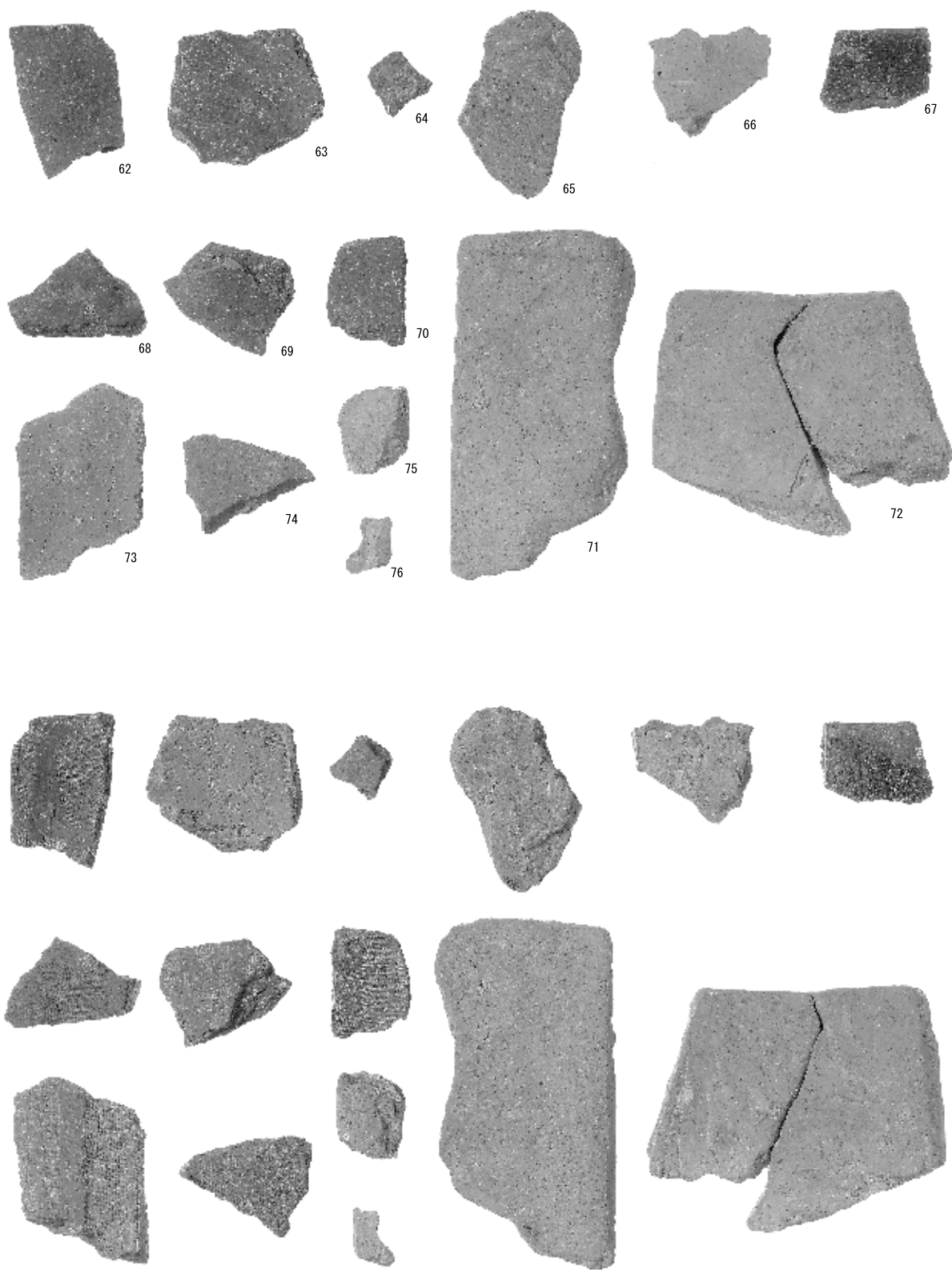
1号墳出土遺物1～7・9～11(約1/3)、12・13(約2/3)、14～17(約1/5)、18(約1/6) 下段 下層出土サヌカイト片



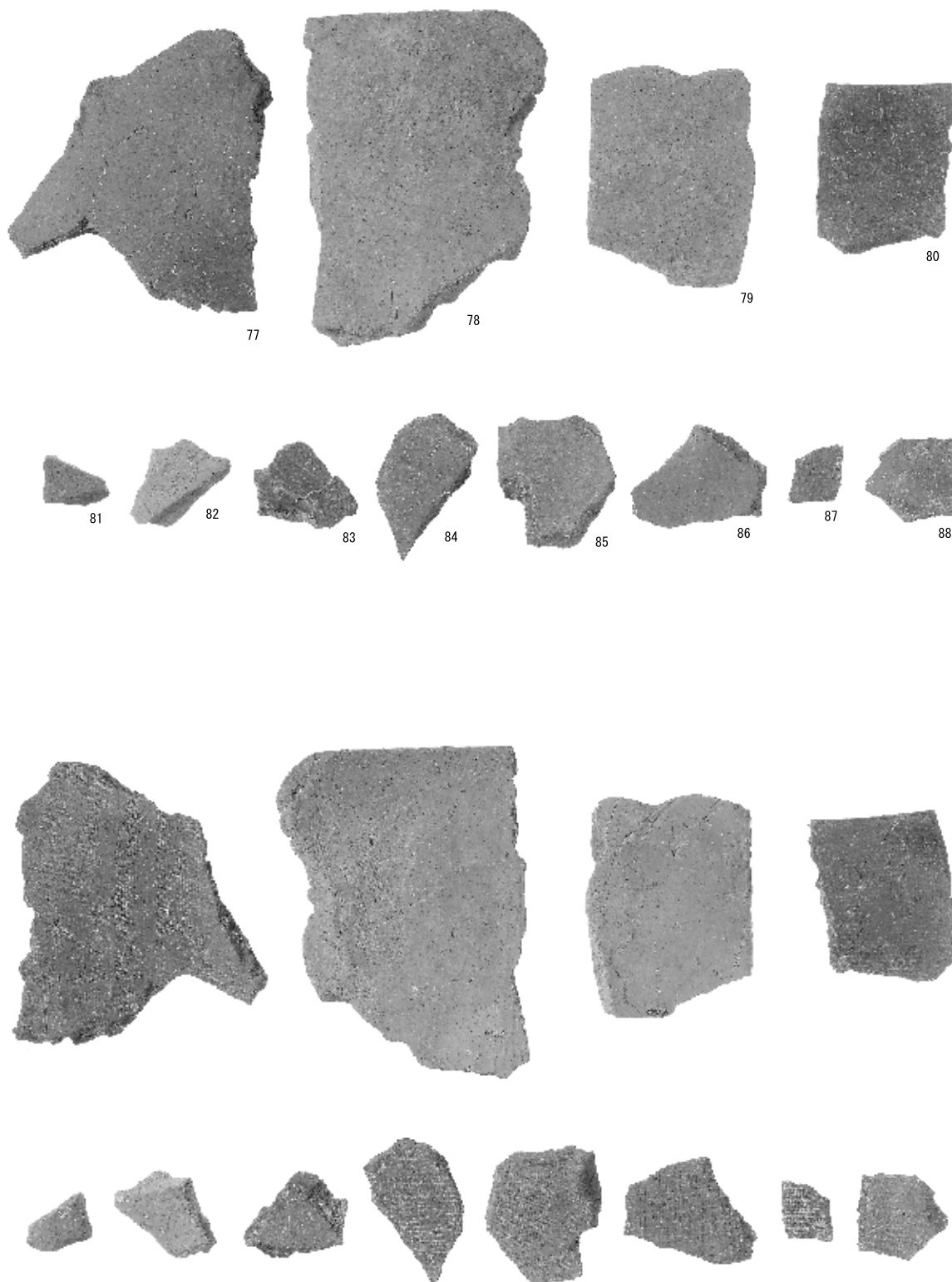
2号墳出土遺物 (1) 1～11 (約1/2)、12 (約1/1)、13～35 (約1/3)



2号墳出土遺物 (2) 42~53 (約1/3)、40 (約1/6)



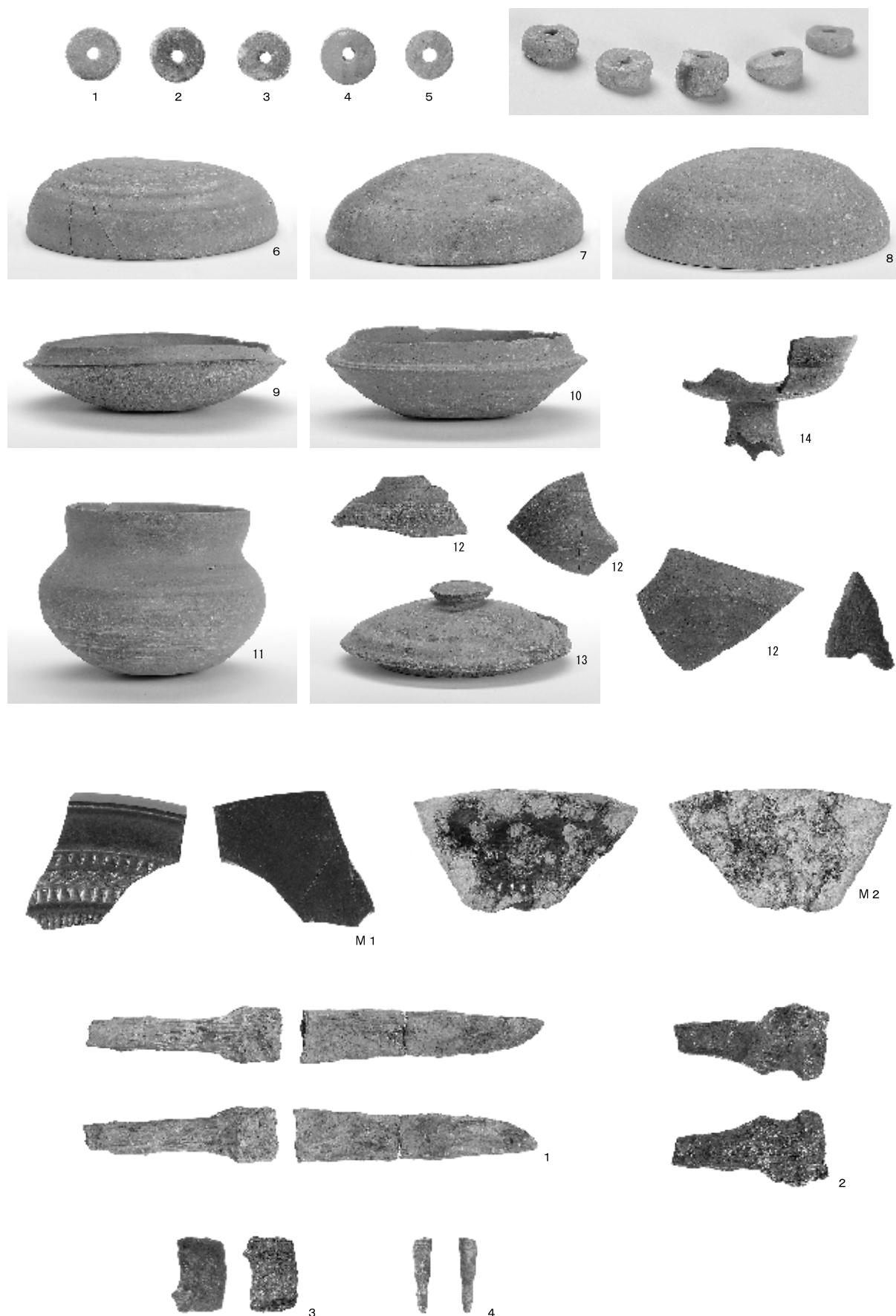
2号墳出土遺物 (3) (約1/3)



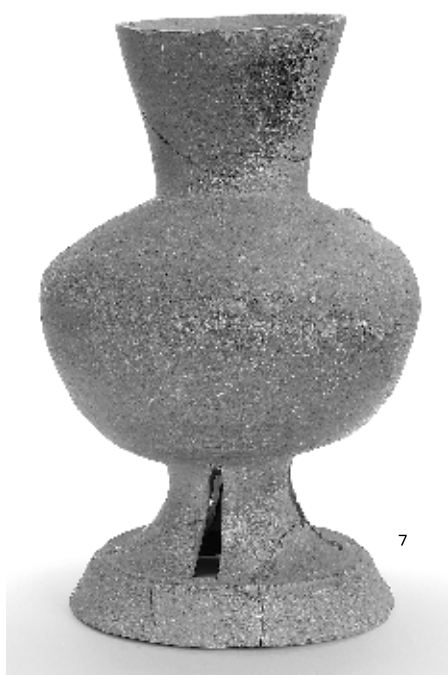
2号墳出土遺物（4）（約1/3）



2号墳出土遺物 (5) 89~99 (約2/3)、100~107 (約1/5)



4・5号墳出土遺物 4号墳. 1~5 (約 1/1)、6~12 (約 1/3)、石鏃 (約 2/3) 5号墳. M1・M2 (約 1/1)、1~4 (約 4/5)



7



8



9



10



11



12



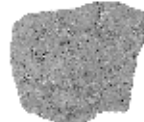
13



14



15



5号墳出土遺物 7・8 (約1/3)、9～15 (約1/25)

報 告 書 抄 録

ふ り が な	かんまきくどこふんぐんはっくつちようさほうこくしょ			
書 名	上牧久渡古墳群発掘調査報告書			
副 書 名				
巻 次				
シ リ ー ズ 名	上牧町文化財調査報告			
シリーズ番号	第2集			
編 著 者 名	樋口隆康・白石太一郎・塚口義信・奥田 尚・関川尚功・水野敏典・奥山誠義・柳田明進・持田大輔・石橋忠治			
編 集 機 関	上牧町教育委員会			
所 在 地	上牧町上牧3350番地 TEL.0745－76－1001			
発 行 年 月 日	2015年3月31日			
北緯 34° 33′ 4″ 5 東経 135° 44′ 27″ 5				
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	市町村番号	発 掘 期 間	
かんまきくどこいちごうふん 上牧久渡1号墳	かんまきちようおおあざかんまきあざくど 上牧町大字上牧字久渡	29424	2014年5月19日～2014年10月14日	
かんまきくどこにごうふん 上牧久渡2号墳			2013年8月21日～2014年3月27日	
かんまきくどさんごうふん 上牧久渡3号墳			2012年5月28日～8月11日	
かんまきくどよんごうふん 上牧久渡4号墳			2012年5月28日～8月11日	
かんまきくどこごうふん 上牧久渡5号墳			2012年12月17日～2013年3月18日	
所収遺跡名	種別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物
上牧久渡1号墳	古墳	古墳時代	墳丘	土師器、須恵器、平瓦、石鏃、サヌカイト製剥片
上牧久渡2号墳	古墳	飛鳥時代	墳丘 横穴式石室 石棺	橐玉、大刀、刀装具、鉄鏃、鉄釘、須恵器、土師器、平瓦、サヌカイト製石器
上牧久渡3号墳	古墳	古墳時代前期	墳丘 木棺	画文帯環状乳神獸鏡、鉄槍、鉄槍または鉄剣、鉄鏃、甕形土器
上牧久渡4号墳	古墳	古墳時代後期	墳丘 木棺	白玉、須恵器、石鏃
上牧久渡5号墳	古墳	古墳時代後期	墳丘 木棺	銅鏡片、刀子、鉄鏃、須恵器、土師器

上牧久渡古墳群発掘調査報告書

(上牧町文化財調査報告第2集)

平成27年3月31日

発行 上牧町教育委員会
奈良県北葛城郡上牧町上牧3350番地

印刷 東洋印刷株式会社
奈良県桜井市三輪371